THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附錄號

第廿二年 第十號

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士木村正辭先生
東宮侍講本居豐穎先生
文學博士井上頼圀先生 監修

文學博士上田萬年先生
文學博士萩野由之先生 總序

文學博士木村正辭先生
文學博士松本愛重先生 其他 諸大家 解題

畫伯中村不折先生 裝禎意匠

珍本秘本豫約出版

國文註釋全書

◀▶洋裝美本 全部貳拾冊
紙數約 壹萬八千頁
菊版 ▲定價金六拾圓也▲

本書掲出書目、解題、體裁見本及び豫約法は見本册子を看よ

●本全書は夙に學者の珍重する所の國文註釋書中にて容易に手に入ること能はざる珍本秘本の精華を普く網羅せしもの也故に苟も國文の精髓を味はんと欲するものは先つ必ず本書に據らざるべからず幸に御購讀を冀ふ

掲出書目

●平家物語抄●同考證●平義器談●五武器談●太平記抄●同年表●同音義●同賢愚抄●同系圖●源平盛衰記問答●同問答抄●河海抄●花鳥餘情●源氏年立●紫女七論●万葉集抄●詞林采要抄●和歌童蒙抄●細流抄●源註拾遺●源氏玉箒●枕草紙萬哉抄●同存疑●世諺問答考證●岷江入楚●徒然草野槌●同新說●狹衣下紐●方丈記泗說●同流水抄●古今餘材抄●古今顯昭註●新古今撰抄●尾張の家苞●をられぬ水●源氏評釋●源氏官職故實秘抄●源氏外傳●榮花物語抄●同事蹟考勘●榮花物語問答●增鏡問答●大鏡短觀抄●同裏書●同目錄●蜻蛉日記解環●土佐日記考證●紫式部日記解●十六夜日記殘月抄●大井河行幸和歌考證●伊勢物語集註●同新考●勢語臆斷●勢語僻說●多武峰少將物語●唐物語提要●四十二物語考證●大和物語虛靜抄●同錦繡抄●取かへばや物語考證●竹取物語抄●十課抄考證●鳴門物語考證●宇治拾遺私說●落窪物語證解●今昔物語訓●宇津保物語玉琴●同玉松●同二阿抄●神樂歌辨●催馬樂註秘抄●梁塵後抄●謠曲古抄●謠曲拾葉抄●鈴木重胤祝詞講義●等珍本は壹百種六百卷

豫約法

▲申込期限は本年十月三十日限り▲配本第一册本年十二月

豫約價（1）一時拂金貳拾八圓（2）三回拂金參拾圓也（3）每月拂金參拾貳圓▲送本料實費を申受く

見本進呈

往復はがきにて申込あれ送呈す

▶業務大擴張紀念出版◀

大景品

壹萬部に對し第一等（書籍券）五本を始め 金八千圓（書籍券） 贈呈

詳細の景品目錄及方法等は見本册子を看よ

●發行元豫約申込所●

◀▶東京市神田區三崎町三丁目（電話本局二千二百〇二番） 帝國書院（振替貯金口座第四三二〇番）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大好評を博す

夏目漱石著

○文學論

第參版

装訂美麗 全一册

正價金貳圓廿錢

郵税拾六錢

大町桂月著

◎新體書翰

第五版

洋装美製 全一册

正價金六拾錢

郵税金八錢

夏目漱石著

○我輩は猫である

洋装美麗 全三册

上卷（十一版）正價金九十五錢

中卷（六版）正價金九十錢

下卷（再版）正價金九拾錢

郵税各八錢

發行所 日本橋區通壹丁目 大倉書店

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割戻(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限内ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角 (電話七貳貳番) 京都本店
東京市京橋區南植町壹番地 (電話本局五壹八番) 東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番) 大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地 (電話七貳六番) 長崎出張所
廣島市紙屋町(秦 忠兵衛方) (電話六〇八番) 廣島出張所

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

天賞堂博覽會出品優賞受領謹告

本堂ハ東京勸業博覽會ノ開設セラルヽヤ首トシテ其擧ヲ賛シ特ニ貳拾餘萬圓ヲ支出シテ美術館、工業館、外國製品館等ノ數ケ所ニ涉リ多數ノ出品ヲ爲セリ其結果今回斯業中第一ノ優賞ヲ授與セラレ畏クモ　兩陛下並ニ皇太子殿下ヨリモ屢々御買下ノ恩命ヲ蒙レリ是レ實ニ本邦博覽會創設以來曾テ比類ナキノ榮譽ニシテ寔ニ愛顧紳董諸君ノ賜ナリ本堂益々進ミテ一層ノ擴張ヲ期セントス冀クハ倍舊ノ寵眷ヲ垂レ給ハランコトヲ

●名譽賞牌……青華日本晴花瓶……（美術館出品）

●名譽賞牌……貴金屬製品各種……（工業館出品）

●壹等賞牌……銀製紅蘿小禽花盛器……（美術館出品）

●壹等賞牌……木彫郭子儀置物……（美術館出品）

●壹等賞牌……木彫群羊額面……（美術館出品）

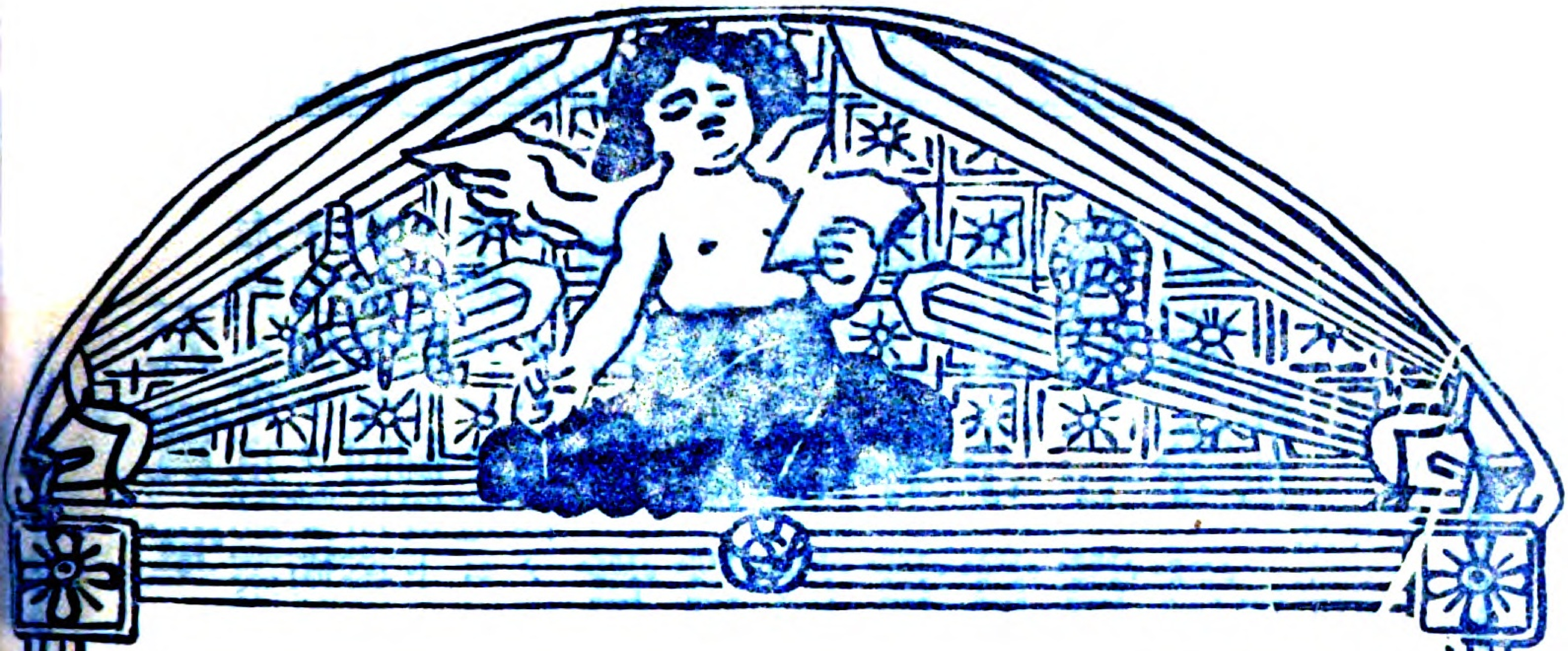
●壹等賞牌……闔家全慶彫刻花瓶……（美術館出品）

●壹等賞牌……裝身具各種……（工業館出品）

此他二等賞牌以下三十餘個

東京市京橋區
尾張町二丁目

天堂賞主　江澤金五郎



中央公論第二十二年第十號秋期大附録號目次



第十年第二十二號
（第二百二十三號）
秋期大附錄號

政界の新現象

（一）

『多數黨の暴横』なる一語は、實に政界に於ける一大警鐘なり、貴族院の多數は此の響きに鋭敏なる神經を衝動すると著るしく、伊藤公を首め在朝派も擧つて曾て之に戰慄し、今や山縣系專ら之に警戒する所あり、而して近時政界革新派の一味頻りに此の警鐘を亂打するに及びて、政界の分野を幾んど變ぜんとするが如き一新現象を生じたり

何ぞや、『多數黨の暴横』を豫防するを以て一大旗幟として、進步黨、大同俱樂部、猶興會及び政界革新會の人々相連衡して非政友派同盟を作りたると是れ也、彼等は來るべき總選擧に於て、政友會に絕對の多數を制せらるゝを憂惧して、必らず之を妨害せんとす、彼等の間必らずしも感情の融和するものあ

るに非ず、又素より主義政見の近似したるものあるにも非ず、單に各自の利害より來る、所謂吳越同舟なるものゝみ。

（二）

彼等聯合派の多數は必らずしも議會に絕對の多數黨あるを非とするものに非ざるべし、唯だ各自の立場に於て、政友會の多數黨たるに至るを好まざるのみ

山縣系の政客は、多くは天下三分を理想とし、一黨をして絕對に多數を占めしむるを欲せず、思ふに一黨多數を占むるときは、天下の事總て意のまゝなるに乘じ、往々私曲專恣に流るゝの弊ありとし、寧ろ三黨鼎立して互ひに相牽制し、以て公平、合理、穩正に歸着せしむるを可とするなるべし、二黨聯合して絕對に多數を占むるときは、其の專恣私曲に流るゝと必らずしも一の多數黨あるに異ならずと雖ども、聯合は破り易く解くに難からず、隨つて之を矯救するに於て、一の多數黨の暴橫なるより幾分か力を用ひ易からん、山縣系の政客の抱く所また一個の識見たりとするを妨げず

具體的にいへば、政友會と進步黨とは、其の主義政見に於て當に近接し、寧ろ聯合よりも合同するを以て當然とすべし、然れども今の政黨なるものには歷史あり、行掛あり、信用あるに於て容易に合同す可らず、英國の自由黨保守黨は、前世紀に於てこそ主義主張に截然區別は有りたれ、今に於てはまた斯の如きものあらず、保守黨と雖も今の英國に保護貿易主義を行はんとは期せず、現にチャムバーレン氏が關稅同盟を主張したるに對して、バルフォア氏の態度不即不離の間にありて、保守統一の兩黨玆に一

び離れたるは其の一證なり、自由黨と雖も依然日英同盟を尊重して熱心に之を主持すると保守黨に讓らず、外交問題が舊の如く兩黨係爭の主題たらざると亦其の一證たり、然るも此の兩黨相合同せず、更らに統一黨、愛耳蘭黨、社會黨等出でゝ、互ひに歷史、行掛、感情のために相分立し對抗す、愛耳蘭、社會黨等自由黨と聯合して、彼の保守黨統一黨の破綻に乘じて、玆にバンナマン內閣を建造したりと雖も、其の間曾て合同あらず、小黨分立して互ひに合縱し連衡するのみ、思ふに世界の大勢は、小黨分立、大小黨の合縱連衡にあり、議會に唯だ一黨を以て絕對の多數を制せんと欲するが如き、理想としては可也、否、一びは或は之を事實に睹ん、唯だ永く然る能はざるべきのみ。

政友會と進步黨とは、假令其の內より更に分離して數個の黨派を出さゞるまでも、二黨相合同するが如きとは到底事實に視るべからず、山縣系の政客も恐らくは斯く觀察せん、此の觀察より二黨をして互ひに絕對の多數を制せしめず、別に一黨派を立てゝ、之をして其の利便とする所のものに聯合せしめ、其の所謂公平、合理、穩當と倣す所のものに連衡せしめて以て其の縱縱を巧みにせんと欲するなるべし、大同俱樂部なるものは乃ち此の理想の事實に現はれたるもの也、大同俱樂部が『多數黨の暴橫』を制抑せんとする非政友派に加はりたる素より當然のみ。

（三）

進步黨は猶ほ政友會の如く、自から絕對的多數を占むるの志望を有す、唯だ勢ひ未だ然る能はざるのみ、則ち然る能はざるが故に敵黨をして多數黨たらしむるを欲せず。

且つ進歩黨は獨力政友會に當る能はず、故に力めて大同派其の他と提携して以て大を成さんとする志あり、黨中の所謂非改革派の首領犬養氏と雖も、絕對に大同派と提携するを忌むにはあらじ、唯だ桂侯、大浦男等の去就如何を疑ふて未だ進んで提携するに至らざるのみ、改革派に至ては、大隈伯の殆んど秘書官たる大石熊吉氏を始め、神崎東藏氏等の佐賀派極力大同派との提携を主張す、今非政友派の大同盟あるに方つて、挺身陣頭に立つ素より其の所のみ。

猶興會及び政界革新派は、其の色彩頗る進步黨に近く、或るものゝ如きは大同派を惜むと蛇蝎の如く、罵つて穢多組と稱するに至れりと雖も、また政友會の多數黨たるを悦ぶものに非ず、現に政友會も、進步大同の提携も、共に議會に多數を制するに至らざるがために僅々三十内外の議席を有する猶興會と雖も、此の間に立て進退去就すれば、能く大勢を左右し卷舒し得て、頗ぶる痛快を覺ゆるも、若し政友會多數黨と爲らば、猶興會の如きは殆んど一顧の値だも無きに至らんとす、是れ彼等の忍びざる所にして、其の自衞上また極力政友會の多數黨たるを阻止せざる可らざる所以なりとす、玆に於てか豺狼途に當る、何ぞ狐狸を問はんと稱して、彼の大同派とも一列となりて以て非政友派を作れる也。

政界革新派に至ては、其の事情素より猶興會と異ならず、彼等が其の唯一の雄辯を以て地方に遊說するや、到る處政友會多數を占め、且つ殆多攻擊の材料たるべきもの多きを視て、先づ主として之を指摘して以て革新を絕叫せり、而して其の辯論の頗ぶる喝采を得て人心を感ぜしむるを視、竟に自から主唱者の如き態度を執て非政友派を連衡せしめたる也

彼等の理想、感情必らずしも一致せず、其政見主義の如き相距る千里啻だならずと雖も、唯だ絶對的多數黨の現出を不利なりとする打算同きに出て、玆に大聯合を視たるのみ、此の大聯合が總撰擧の際に至つても果して鞏固なるべきや否やは疑問也、總撰擧後の議會に於ても果して繼續せらるゝや否やは殊に疑問也。

（四）

非政友派に對する政友會の態度は、吾人未だ容易に是非する能はず。補缺撰擧の場合、殊に前議員の死去したる場合に於て、他黨派より競爭を爲さゞること近時の例なり、蓋し死亡議員に同情し、他の喪に乘ぜざる男兒的意氣を主とし、兼て無用の紛爭を避けんとするなり、平岡浩太郎氏の場合に於て然りき、佐々友房氏の場合に於て然りき、波多野傳三郎氏の場合に於て然りき、此の例を以てすれば、石塚重平氏の死亡したる長野縣に於ても、當然大同派より其の後任を擧ぐべき筈なり、殊に撰擧後僅かに一期の議會を剩すのみなるに於て、他の黨派は之を先例に照して大同派に讓るを穩當なりしとすべし、然るに政友會が先例に戻り、男兒的意氣を捨てゝ、而かも候補者の擁立に多少の無理手段を用ひて（政友會の候補者は元進歩派に屬したりしものなるを、撰擧費を政友會に於て負擔することを條件として新たに入會せしめたりと）敢然として石塚氏の後を奪はんとしたるは、進んで非政友派と一大惡戰を試みたるものとして、吾人は寧ろ其の自由黨以來傳統の勇を稱するに躊躇せずと雖も、決して智なりとはす可らず。

其の先例を破り、男兒的意氣を缺如するに於て、先づ天下の同情を喪失せるの少からざるや爭ふ可らず、堂々たる一大黨を以てして、殊に政府黨たる地位に蹲踞して、區々茲に至る、誰か智といふ可けんや、且つ其の競爭に於て敗北せん乎、其の面目を損するの大なる論を俟たず、假令幸ひにして勝つも、聯合派の怨みを買ふこと淺からず、或は聯合派にして一敗忽ち沮喪せば頗ぶる妙なりとせんも、然らずんば却つて益々其の聯合を鞏固ならしむる掛念あり、是れ殆んど自から他の黨派を驅つて敵たらしむるもの也、斷じて智者の事に非ず。

但だ進んでは敢然として戰ふことをせず、退いては潔く他に讓るの寛宏を示す能はず、踏跙し逡巡するは、是れ勇もなく智も莫き也、天下斯の如きもの必らず敗る、政友會智なかりしと雖も勇は有り、否、蠻勇は有り、彼れは決して醉生夢死する者に非ず

吾人の聞く所によれば、政友會幹部の士は長野縣の補缺選擧を目して現內閣と山縣系との對抗なりとし、以て大に人心を鼓舞するに努めたりしといふ、聯合派が能く此の口實を粉碎するの智なかりしは憫むべしと雖も、政友會が此がため山縣系の憎惡を招くや疑ふ可らず、此の一事恐らくばまた政府の一禍因たらん、然り、小なる禍因たりと雖も、また必らずしも原野を燒くマッチたるなきを保せざるのみ。

（五）

長野縣の補缺選擧に於て、政友會の候補者は幸ひに約三千五百票の多數を以て當選することを得たり、

政友會の多數は、此の首途の勝を祝して竟に絕對的多數を占むるの朕兆と做さん

政友會或は絶對的多數を占むると必無とす可らず、勿論群猜衆疑の焦點に立てる內務當局、　に原氏は非撰擧干渉を標榜して、眷々其の遂行に力むべし、政友會は一の撰擧干渉なきも、唯だ其の政府黨たるの故を以て多數を占むると、必らずしも至難ならざるべし、然れども思へ、政友會多數を占めたりとも竟に何事をか做し得るぞ、貴族院の形勢現在の如く、天下の人心多く『多數黨の暴横』を恐れ、其の警鐘の亂打を畏怖すると甚だしき間は、而して山縣系の政客と釋然たらざる間は、未だ俄かに枕を高くす可らず、若し現內閣にして多數黨を控へて尙ほ謙虚、謹愼、率直ならば、或は漸を以て貴族院の同情を得、以て閣運の安泰を期し得べしと雖も、若し依然として野趣を脫せず、竟に爪牙を現はして獵利に次ぐに獵官を以てするが如きとあらば、否運立ろに至るべし、而して他の强誘懇惑のため、其の一角二角を劈かれて、多數黨また多數黨たるを得ざるに至るや必せり、蓋し政友會一ひ多數黨たらば、風を望んで來り屬するものあり、意外に尨然たる體形を具へんも、其の結合や決して堅實ならず、動もすれば斷決崩裂し易き虞あり、政友會のためにするもの未だ多く恃む可らず、政友會を敵とするもの亦甚だ其の多數を恐れずして可也。

非政友派の聯合程度は如何、長野縣の補缺選擧に於て、其の意氣頓に沮喪せざる限り、總選擧までは恐らくは今の態度を以て進むべし、總選擧の後、政友會多數を恃みて不謹愼ならば、而して進步黨大同派の幹部互ひに謙讓を以て事に當らば、聯合永く繼續して、政局の一變を視るに至るも亦測る可らず、思ふに山縣系の人々が、其の黑幕を撤して明白に態度を公示する時聯合の存否乃ち始めて決すべし、今に

して之を豫測するは寧ろ早計に過ぐ、吾人は唯だ政界の新現象として之を逸す可らずと做すのみ。

公侯伯子男

明治四十年九月二十一日は記憶すべき日なり、日露戰役に對する主なる勳功を彰表せられたる重要の日として永く記憶すべき日なり、即ち公侯伯子男爵の多く授けられたるは注目すべき事象にして、而かも聖代の昭事たり、吾人の斯くいふは反語に非ず、心よりして聖代の昭事とす、蓋し中興の偉業成り、次ぐに日清日露の兩戰役を以てし、國威の中外に宣揚する、實に古來未曾有と稱せらる、此の時に方つて多くの公侯伯子男の出づる、素より當然なるのみ。

山縣、伊藤、大山の三老が陞りて公爵となり、勳爵（共に大勳位たり）共に人臣を極めたるは、一代の偉とする所なるべし、此の三公は素より世界的人物にして、千秋に傳ふべき偉勳を有す、大勳位公爵を授けらるゝも寸毫も異とするに足らず。

此の敍爵中、初級の男爵を授けられたるもの最も多し、其の二級を飛べるもの、男爵より伯爵となれる山本權兵衛、小村壽太郎、黑木爲楨、奧保鞏、乃木希典の五氏及び子爵と爲れる寺內正毅氏あり、三級を飛べるもの伯爵となれる東鄕平八郞氏あり、東鄕氏の三級を飛べる無比の異彩たり、其の軍功殊に赫々たるが爲めなると言を俟たず、陸軍の軍司令官は總て二級を飛び大將は子爵に陞り、師團長及び中將

は總て男爵を授けらる、海軍の大將にして初級の男爵たるもの柴山矢八、鮫島員規の二氏あり、中將は總て陸軍と同じく男爵たり、陸軍大將の總て伯爵たり子爵たるに、海軍大將の男爵ある聊か奇とすべし。

日露戰役中、閣臣たりしもの皆陞爵又は敍爵の恩典に浴せり、次官にして敍爵(總て男爵)されしものは大藏省の阪谷芳郎氏、海軍省の齋藤實氏、外務省の珍田捨己氏、遞信省の田健次郎氏、陸軍省の石本新六氏(經理局長外松孫太郎氏また男爵となれり)とす、陸海軍、外務、大藏、遞信の五當局が殊に殊勳ありしと認められたると想ふべし、唯だ此の五當局大臣中、陸軍の寺内氏、海軍の山本氏、外務の小村氏が各二級を飛べるに拘らず、大藏の曾禰荒助氏が男爵より子爵に陞れるに止まり、遞信の大浦兼武氏が僅かに次官並に男爵たるに止まりしは何ぞや、或は陸海軍外務の特に征戰と國交とに勞したるがため乎、抑も又財政と交通との効績の未だ著るしく認識せられず、少くも陸海軍外務と駢ぶ能はざるが爲め乎、漢皇は嘗て蕭何を第一に推せるにあらずや。

兒玉源太郎氏が其の殊勳を以て、少くも二級を飛んで陞敍せらるべきに薨後唯だ男爵より子爵に陞りしに止まるは聊か遺憾ならずとせず、世上或は生者に厚くして死者に薄きを議する者なきを保せざれば也。

井上馨、松方正義の兩氏が伯爵より侯爵に陞敍されしは當然ならん、桂太郎氏は公爵となるも天下異とする者なきと勿論ならんが、閥閲未だ足らざるあり、山縣、伊藤、大山の三公に駢ぶ能はざりしは寧ろ前路の餘裕を有するものとも視るべき乎。

西園寺侯、大隈伯は井上松方二氏の如く、財政上の顧問たらざりしと雖も、其の二大黨を引率して人心を指導し、殊に大隈氏が外資と献酬して列國の同情を吸集するに努力したりし功績は、決して沒すべからず、思ふに媾和條約の前後に於て、詭激の議論盛んに行はれ、人心の動もすれば常軌を逸せんとするに方りて、西園寺氏大隈氏が其の引率せる政黨をして輕發せしめざりしがため、政友進歩の兩黨泰然として動かず、天下の多數をして向ふ所を過まらしめざりし功は、之を錄するの價値十二分に有り、假令陞爵の特典なしとするも、また全然度外に措かるべきものにあらずと信ず。

斯くいふものゝ、實は沙上の偶語と擇ぶなきのみ、大體に於て、撰敘宜しきを得、聖鑒多く謬たざるは、實に至尊英明の致す所として、衷心より感佩せざる能はず、殊に敘爵の恩典に浴したるもの及び其の一門の欣榮の大なるを思へば、吾人も亦聖代の祥事として多く之を慶せざる能はざる也

吾人の玆に喜ぶ所のものは、此の祥事に由て、世人をして名譽の人生に貴きとを著るしく覺知せしむべきにあり、近時黃金崇拜の風甚だしく、成功の大小を量るに積財の多寡を以てし、材幹の高下を別つに收入の多少を標準とするの風あり、名譽の職分たるべき政事家、軍人、文學者、技藝家等を卑みて、專ら銀行會社員を重んずる傾向あり、前者に偏する素より非なるも、後者に偏する殊に弊害あり、一代の人心を率ひて黃金をのみ崇拜し、滔々として拜金の風を煽するが如きは、決して其の社會を健全ならしめ、民心を淸淨ならしむる所以に非ざれば也、今や三井三菱の富を以てするも、竟に公侯伯たると能はず、俸給を得るの多き我が伊藤公、曾禰子、西園寺侯に數倍し十數倍する益田氏も、一代の尊敬を受

け、官民に崇重せらるゝことは意に政事家に及ぶ能はず、世界的人物として名を竹帛に垂れ、功を千秋に傳ふることは到底伊藤公東郷伯に及ぶ能ざること分明せり、一代の人心幸ひに能く之を識別して、人生必らずしも重きを黄金にのみ置くを要せず、名譽を得るも亦丈夫兒の一大快事たることを悟るに至らば、多く黄金以外の場所にも趨きて、拜金の陋風著るしく減退し、世は頗ぶる清新健全なるを得んとす、公侯伯子男の陞敍新叙によりて、世をして黄金以外、別に名譽の大世界あることを知らしむるの利や、實に大なりと謂はざる可らず。

然りと雖も名譽と黄金とを超越せば、人は實に人間を超脱して聖と爲るべし、神化すべし、看よ釋迦、孔子、基督、マホメット、弘法、親鸞は一の人爵を有せず、一の黄金を有せざるも、其の人心を感孚すること不朽にして、天地と共に盡くる無きことを、黄金のみを愛重するは卑しきに過ぐ、男兒少しく名譽を重んずべし、否、此の二者の上に超越することを期すべきのみ、吾人は殊に遠志宏望を懷く有爲の士のために斯く言ふ。

公論

綱島梁川先生の絶筆「勞働と人生」のはしがき

「毎々失禮四五日來心臓痳痺呼吸促迫にて大閉口。論文は勞働と人生てふ題にて約二十枚許草し候へども今三四枚の所にて此頓挫小生も殘念、併少しても病間あらば執筆のつもり、十一月號にならば勿論好都合に候也」とは余が九月十二日午前九時頃梁川先生を訪うて「秋期附錄號」に寄稿を約せられし文の論題を尋ねたる時、名札の裏に鉛筆もて書いて答へられたる文字也。先生の長逝せられたるは同十四日なれば實に此世を去らるゝ僅か二日前の事也。この文字こそ實に先生が書かれたる最後のものにして、之を書かるゝ時は非常に困まれ、殆んど一字一息の有樣なりきと。嗚呼其時よ、先生自身も斯く果敢なくならせ給ふとは知ろしめさず、必らず此稿を繼いで完結せしめんとのお志なりきと察せらる。余も亦いかでか、此文字を最後として先生の永訣せらるべきを知らん。思うて玆に到れば綿々たる愁思斷つべからざるものあり。先生の文を行らるゝや、多く其草稿を家人に清書せしめ、之に訂正を加へて推敲數回、殆んど字斟句錬の苦心をせられて而る後初めて世に公にせらるゝを常とし、時としては修正を經たるものを更に清書せしめ、又更に之に修正を加へられたることも少からずと。これ先生の審美的趣味の純正にして鑑賞的態度の强盛なるに依ること固よりなりと雖も、又先生の性格が謹嚴摯實、輕々筆を驅て文、意を盡さゞれば、或は以て世人を誤るあらんを恐れられたるによらずんばあらず。然るに此文未だ完結せざるに先ちて永眠せられたる事とて先生の絶筆なると共に所謂未定稿にして先生の常にせらるゝが如き推敲を經たるものにあらず、先生若し世に在さば必ずや、修正再三、字句、文調、語勢等に於て更に一段の光彩を添へられたるなるべきは毫も疑を容れざる所、之を未定稿の儘にて世に公にするは先生も定めて遺憾とせらるゝ所なるべく、余等も亦遺憾とする所也。然れども此文は先生の病勢漸く重られし時より稿を起され、病稍々緩き時あれば即ち筆を呵し、長きも二三時間、短きは三十分位の時間を繋ぎ合せて書かれたるものにして、所謂肉を削て想をなし、血を絞て文をなされたるもの、一字一句皆悉く先生の血肉の塊也。されば未定稿なるの故を以て之を公にせざらんは先生の更に大に遺憾とせらるゝ處なるべく、余等も亦遺憾の極みとする所なり。且つや余が八月下旬先生と語れる時、先生が從來の所説多く味て樂しみ思うて悅ぶ鑑賞的方面に偏し、安んじて働き、信じて行ふ實際的方面の更らに開拓すべきものあるを述べられたるよりして推せば、此文の如き從來の所説に比して更らに一歩を進めたる主張を吐露せられたるものとも見らるべし。げに此文を一讀すれば先生の精神の在る所昭々として明かに、固より言辭の修正を經ざる如きを疾むに足らず。是れ余が切に御母堂及び令弟建部政治氏に懇願して玆に之を公にしたる所以也。先生は眞に明治の哲人也。其偉大なる敎訓は其淸高なる人格、其純美なる文章と共に永く萬世を照らす。此文即ち未定稿なりと雖も此哲人最後の敎訓として我思想界の總てに向て一讀を請求するの權利あるを信ず。

（哲生しろす）

勞働と人生

綱島梁川

一

ゼネラル、ブース曰はく「働いた上にも働いて、も一つ其の上にも働け」と。彼れは八十年の生涯を働き通しに働きたる人なり。彼れは働きの權化なり。余はブースの名を耳にする毎に先づ此の一事に想到す。而しく以爲へらく彼れの生涯より他の一切を控除し去るとも唯だ此の一事あり、以て優に彼れを不朽の人たらしむべしと。讀者よ誤解すると勿れ、余が今こゝに「働き」と謂へるは必ずしも彼れが軍隊組織を以てせる社會的、慈善的事業の世の人目を炫燿せる如きもののみを意味せるにあらざるを。外に形はれたる社會的事業は未だ以て余が所謂働きの全內容を竭くしたるものにあらず。手を動かし足を働かすと共に目に見えざる精神上の思索瞑想も亦働きにあらずや、現實的、物質的の事功をのみ活動といふを已めよ、思ひを天地の悠久に騁せ、憂ひを千載の後に托するも亦是れ偉大なる活動ならずや。至誠を以て念佛一つ他の爲めに捧ぐるも亦是れ人道に對する働きなり。當さに遊ぶべきに遊ぶ、是れも亦形を換へたる働きなり、活動なり。

二

「働け」てふ一語には何人をも粛然たらしむべき權威の響あり、古より哲人聖者は常に勞働の神聖を唱ふ、而かも勞働の神聖てふ此權威ある一語も今や漸く文字と共に陳りゆきて復た現代青年の心を其の奥底より衝き動かす新鋭の福音たらざらんとするものの如し、之れを唱ふるものは徒らに聲を高うして唯だ働けとのみ叫び、之れを聽くものも亦之れを以て尋常一樣、同情も涙もなき經世家者流の言說として放過し去らんとする

也。意ふに世の識者等が謂ふ所の勞働神聖觀をば一種の呪符の如くに揮り翳して、現代青年の一面の煩悶病を立ろに調伏退治し得べきが如くに思ひ做せるは或は無理ならぬ事なりとせんも、彼等の勞働觀なる者は斯くの如き奇蹟的偉功を奏し得べきほどに意義徹底したるものなる乎。彼等常に言ふ、思はず考へず何でもよいから唯だ側眼をふらず一心不亂に働け、活動せよと。又言ふ、煩悶を解決してさて後に働くにあらず、まづ働け、働くうちに煩悶おのづから解決せらるべしと。或は亦曰ふ、爾理窟を措いて先づ生きよ、生存の策を立てよ、而して生存は活動と相須つ、生存し活動して後、一切人生問題の解決おのづから爾手中の物たるべしと。彼等が世の青年の爲めに謀る一念の老婆親切は謝すべし、彼等或は夫れ達識の活儒乎。唯だ惜しむらくは彼等が言說には頗る條理空疎の觀あり、彼等は何ても先づ働け、働くうちに煩悶は消え去るべしと言ふ、されど世の青年に取りてはその働きてふとが愼重の解決を要すべき當面の問題なるなり。彼等はまた口を極めて生存の要を言ひ生存ありて煩悶の解決も着手の餘地ありといへど而かも其謂ふ生存てふとが世の青年をして現に煩悶せしめつゝある重大なる「躓きの石」たるにあらずや。啻だに然るのみならず彼等の或ものゝうちには自己及び萬有の存在そのものに對して深刻無限の懷疑を抱けるさへあるなり。「無限の空間の永しへなる沈默は人をして戰慄せしむ」とパスカルの言へるが如き一種不可言の煩悶の經驗は彼等の概ね共有する所にあらずや。世の所謂識者にして若し之をしも一種の哲學的空想病に過ぎずとして冷笑し默殺し去るが如きとあらん乎、是れ彼等は未だ眞の自覺と同情とを以て現代青年の(少くとも一部の)煩悶問題に面接せざるものと謂ふべき也。所詮今日の少くとも敎養ある青年の煩悶問題は世の一部識者の指頭の觸著せるよりも更に一段深き處に觸著せるなり。識者或は色然として、斯くの如きは最早常識以外に逸したるもの、論外の沙汰也と喝し去らん乎、されど事實は尙ほ臆面なく斷言すべし、少くとも人生問題としての勞働といひ生存といふ

ど、今日の一部の青年に取りては、生死を賭しても解決を要すべき最も莊嚴にして沈痛至切なる一個の問題なりと。

三

現代の青年にして若し眞に眼前の物質的事功主義にのみ奔るの傾きあらん乎、或は又空想に耽り感情を弄ぶ輕薄なる女性的センチメンタリズムに溺るゝ弊あらん乎、或は又此滔々たる薄志者流以外に眞面目なる精神と堅實なる自覺とを持しながら端なく時代の思潮たる懷疑煩悶の大波に捲き込まるゝの運命に逢着したらん乎、此等の慘ましき時代病の療法として勞働神聖觀を提供するは最良の對症藥たるを失はざるべし。吾人は亦カーライルと共に一切の疑問の窮極の解決は竟に「働き」にあるべきを信ずるもの也。但だ働きは呪文にあらず、護符にあらず、唯だ之れを口に唱へ、壁に貼したるのみにて其即効の靈驗を見んには現代病は餘りに複雜精緻也。「働き」とは何ぞや、「働き」の中には如何なる光耀ある實驗的意義を含める乎、乃至如何樣に働くとが眞に有効なる働きたるを得べき乎。此等及び此等と關聯したる問題につきて余が以下提出せんとする解答にして若し多少にても讀者の心に響くべき或者を有し得たらんには是れ余が光榮也。然り是れ實に予が光榮の「働き」也。諸君は或は鐵を以て働くべし或は斧、鋸を以て、或は鑿、槌、書籍、金錢、辯舌等を以て働くべし。而して予は今筆を以て働く。各々皆働く也。

四

勞働は人生夢幻觀と撞着す。世界と人生との夢幻觀せらるゝ所には何の眞面目なる勞働かあらん。こゝに働くは夢みる也、描く也、行く水に空華の影を追ふ也。勞働の觀念は嚴に之れと相容れず、勞働は眞面目也、嚴肅なり、直ちに吾人の心魂に響く力の聲也、事實の聲也。勞働は天地人生を莊嚴なる事實と觀ずる根本的豫想の上に榮ふべき生命の大樹也、そは勞働なるものが莊嚴なる事實なれば也。人生夢幻觀は竟に眞面目なる又偉大なる勞働を產出するの國土にあらざる也。明治の先覺故福澤諭吉氏の如きは天地人生を夢也、戲れ也

と觀ずる根本の見地に立ちながら尙ほこの一場の夢や戲れを夢や戲れと觀ぜずして恰も眞面目らしく働く所に處世の妙趣ありと說きたり。余は曾て之れを奇怪なる矛盾觀として斥けたり。人生若し夢幻の戲れならば勞働も亦眞面目なるを得ざるべく、勞働若し眞面目のものならば人生はた夢たり戲たることを得ず、一方の觀は嚴密にして他方の觀と相背馳すべきもの也。福翁の如是人生觀や處世觀は斷じて、誠實なる人心の要求を滿足せしむる所以にあらざる也、夫れ生くるはやがて働く也、勞働を離れて人生あらず。勞働は人生の眞面目を要求す。聽かずや鍛鐵工の槌の一揮一下に「人生は眞面目也」(Life is earnest)てふ沈痛の響きあるを。勞働は事實也、人生の事實なるが如く事實也。眞に勞働に對して嚴肅なる興味を有するものは天地人生を一場の夢幻と觀じ去るを得ざるなり。

五

勞働は又發達といひ進化といふことと緻密に抱着す。**吾人は事物の發達進化を離れて光輝ある勞働の意義を捉らふること能はず。**吾人が働くは單に生きんが爲めにあらずして、更に一層善き狀態に於いて生きんが爲め也。發達進化の觀念の活潑なる所、手おのづから動き、足おのづから前む。現實は小也、發達は大いなり。吾れ今如何に果敢なきものなりとも日を積み月を累ねて大いに爲すあるべしとの一念現前するや、吾れ吾れを超越するの猛心坌湧し來たる、人生若し何等の發達進化なく又は唯だ同一事、同狀態を反覆するに止まるが如きものならば人は忽ち運轉を氷に喰ひ止められたる水車の如くなりぬべし。風吹き雲行く天地の健働ありて宇宙に不斷の生長あり。君子は自彊して息まず、健德日夜に進勵して新となれば也。吾等が人格に事業に發達進化てふ生命の潮の脈うつ不斷の自覺あればこそ、吾等が夕べを送るの夢安らかに、朝たを迎ふるの祈、勇ましきを得るなれ。到達や獲得の喜びは人の常に經驗して知る所、されど同時に又こゝに到るの徑路、即ち發達そのものにも無類の喜びあるは吾人の經驗する所也。吾人は豐富なる人生經驗の一面として「發達

の味ひ」てふことを提唱す。「發達の味ひ」に生くるものは永久に死を知らず。而して發達の味ひとは所詮勞働を離れては存じ得ざる也。勞働の味ひ即ち發達の味ひにあらずや。勞働が吾人中心の喜びたり得るは、そが吾人をして常に現在の「吾れ」より一層「高き吾れ」に進ましむるが故にあらずや。思想深邃なる一詩人が「人生は唯だ部分に於いて在り併しながら全部に於いて在ることを望む」と歌へりけるは、いみじき眞理なるべし。人が日夜遑々として働きいそしむは畢竟此の希望あればなり。貧しき繩賣の子だに其の繩かごを擔いてわが家を立ち出づる朝な／＼の顔には今日は昨日より多くの賣代を得べしてふ希望の色輝くを見ずや。日に新にして又日に新たなりてふ發達進歩の觀念は人をして一念の底より奮躍せしむ。偉人は他が睡眠を貪る間にも一息の油斷なく靜かに働きいそしみて能く其の大をなすなり。吾人はかの歴史的發達の觀念を闕如せりし若くは少くとも之れに疎遠なりし古印度人が、竟に嚴肅なる勞働の興味を有し得ざりしことの當然なるを思ふ。宇宙は生長し、人生は發達す。而して吾人は勞働によりて以て此の進化の大潮に掉すことを得るにあらずや。勞働を離れて復た進化發達てふものはあらざる也。

六

「神、光あれと言ひ給ひければ則ち光ありき」。天地森然之れを貫くもの唯だ一個の働也。宇宙の開闢史は此偉大なる働を以て其の開巻第一の頁を飾られたり。働は天地の歴史の始にして終なり。古聖は言ひき「天何をか言ふ四時行はれ、百物生ず」と又曰ひき「吾が父は今に至るまで働き給ふ」と。吾人が天地に對して虚心先づ觀じ來たるは其の一息不斷の氣化流行也。即ち働てふものなり。萬物は働によりて常に富み常に完く常に充ち滿つるなり。働ある即ち萬有の「在り」と謂はるゝ所以也、神は即ち働也、働は即ち神也。何の働もなき寂靜涅槃てふものは矛盾語也。寂靜涅槃はやがて働の極、活動の極、充實の極にはあらざる乎、斯く觀ぜざる全くの消極的、虚無的涅槃觀は到底天地の實相を如實に寫したる言葉として吾人人心と深き交渉を有

するに足らざる也。天地の實相を働と觀じ、活動と觀じて便ち人則の極は立ち道義の門は啓かるべし。かるが故に「易」の作者は天行の健動に君子自彊の範を置き、猶太の神人は「天の父は今に至りて尙ほ働き給ふ、われも亦働くなり」と喝破せり。更に歐洲今代の儒流の大家が概ね天地實在の本性は健動即ちアクチヸテー、又テーテヒカイトにありてふ揆一の觀を立て而してこの觀の上に德教彜倫の樣々の系統論を布かんとするは人の能く知る所なり。身を田疇の間に起こしたるわが二宮尊德が一挺の鍬を以て幾多の廢田を興こし窮村を濟へる秘訣は心を密にして天地健動の不息の流行に乘託したるが故なりと謂ふにあらずや。

七

働くは現在を働く也、今の一念を働く也。今の一念を働かざる働きてふものあることなし。働とは現在を充たすことにあらずや。過去は追ふべからず、未來は雲霧に鎖つ、眞に吾人に對して在りと謂ひ得べきは唯だ現在のみ。過去を想ひ未來を測るの事が亦是れ現在の働きなり。現在を充たす働の中より光輝ある理想も涌き、偉大なる希望も華くなり。爾の現在を充たせ、現在は爾が全宇宙也、否爾自身也。眞に働くものは最も切實に現在に立ち、現在を充たさんことを希ふ。彼れは當面の一事一念に全心魂を打込んで復た其の他を顧みざる也。彼れに取りては現在が唯一の事實也。彼れは貧賤に素して貧賤を行ひ富貴に素して、富貴を行ひ、病痾に素して病痾を行ひ、健康に素して健康を行ふ。彼れに於いては健康、病痾、富貴、貧賤等は必ずしも關心の事ならず、唯だ此等樣々なる現在の事件境遇に處して自家が全人格の一念を充實せしむると是れ其の唯一の願ひなり。自己現在の一念を充實せしむる、是れを外にして復た働てふものの眞正合理の形式的解釋はあらざる也。カーライルが其の謂ふ所の「最も手近き義務」に重大なる意義を附したる、やがておのづから吾人の意と相參するものにあらずや。若し勞働の義を是くの如く解せんか、こゝに忽ち一個の心靈上の貴き賜は與へらるゝなり、第一、吾人は一生の間、如何なる

位置境遇をも通じて一貫の平安を得べし。第二、如何に殊なる位置境遇の人をも通じて萬人皆平等なる尊嚴の自覺を得べし。吾れ昨は貧しくして病み今日は富みて而して健かなり、されど現在の一念を充たせる「働」の人として、吾は昨も今も同じ平安の態度を持續し來たれるにあらずや。彼れは天下の廣居に立ち、吾れは草茅無聞の人たり、されど現在の一念を充たせる「働」の人として彼我駢び立つ同じ尊嚴の自覺を有し得るならずや。蕾は蕾の現在の一念を充たし、花は花の現在の一念を充たせり。蕾は蕾の一念に住して開花の想を做さず。花は花の一念に住して結實の想を做さず。其の現在の一念を充たす働に於いては、彼此相軒輊すべき謂はれあらず。思ふに眞に勞働に忠なるものは此くならざるを得ざるなり。彼れも此れも同じく是れ天地の働てふ事實也。

八

勞働は現在の一念を充たす現在主義ならざるべからず。明日爐中の火となるべき恐るべき自己の運命をも思ひ煩はで悠然として今の一念を心一ぱいに咲き匂へる野草澗花は、あはれ我等が範とすべき高調なる現在主義の一ふしにはあらざる乎。されど現在主義の語、ともすれば誤解を招き易し吾人がこゝに提出せる勞働上の現在主義はかの通常謂ふ所の世俗的現在主義とは截然として其意義精神を異にせり。世俗的現在主義は今日主義也、「その日ぐらし」主義なり、これ漁人樵夫其の他一般勞働者に通有せる生活形式なり。世俗的現在主義必ずしも非ならず。其の現在有る所に足れりとして泊然として恬澹無繫生活を送れる點に於て殆んど自然を友とせる古聖の遺意を得たりと謂ひつべし。彼等が單純簡素の生活には往々にして剛毅木訥の仁を見る。以てかの聲利煩囂の巷にしばらくも一念の營みを抛ち得ざる大俗の躁熱者流を愧死せしむるに足りぬべし。然れども世俗的現在主義は竟に以て勞働の眞福音とするに足らざるなり。世俗的現在主義と余が勞働上の現在主義と其の現在を享受する形に於いては相似たりといへども其の之れを受用する所以の意義に於いて

は甚だしく懸絶す。彼れにありては「我」は現在に呑まれ埋められて復た現在以上に超脱する能はざる趣あるに反して此れにありては「我」は現在を支配して立つなり。世俗的現在主義は現在が行きとまりにて現在の奴隷たらんとし、吾人の現在主義は現在の中にありながら現在を吾に攝取してわが人格發揮の意味ある道具となすなり。彼れは現在そのまゝの淺瀨に浮沈すれど此れは現在やがて久遠悠久の生活を打ち開きたる深奧なる滿足の意識なり。一の現在主義は人を局促せしめ他の現在主義は人を開放す。夫れ現在の一念を充たして自ら足れりとする吾人の現在主義には悠々たる不朽生活の味ひあり、吾人はかゝる現在主義に立つて基督と共に明日は明日の事を思ひ煩へ「一日の苦勞は一日にて足れり」と言ふとを得べく又孔子と共に曲肱して水を飲む中にも名敎の樂地を享受するを得べきなり。こゝに心靈の馨りあり、理想の光りあり。天地の恩寵に打任せたる歸依の調べあり。クリストの如き、ポーロの如き、アシシのフランシスの如き曾ての意味の現在主義的勞働者なりき。念佛を正業と見て衣食住其他の萬行を助業と見たる法然聖人の如き亦此の意味の勞働の福音を唱へたるものと謂ふべし。之れを以てかの動もすれば「我等今日飮むべし食ふべし明日は則ち死ぬべければなり」てふ如き淺薄俗陋なる物質的眼前主義感覺的功利主義に墮落し易き世俗的現在主義と同視せんは謬解も亦甚しきものと謂はざるべからざる也。

若しそれ一切の思索瞑想を排し手足を以て働く働きをのみ勞働と解する一種の現在主義が吾人の所謂現在主義と相容れざるは必ずしも深辯を須ゐざるなり。

九

勞働は神聖也、人をして自己の手腕に立つて獨立の生活を營ましむ。それ勞働せずして報酬を得んとするほど世に奇怪にして不自然なる矛盾はなきが如く、勞働して而して報酬を得るほど自然にして順正なる事相はあらざる也。働きなくして吾等は生存の理由はあらず、吾等は最後の一息まで何等かの形に於いて勞作せざるべからず、勞作せずして報酬を得んとする思想は

人類の耻辱也。そはやがて個人の墮落也、國家の滅亡也。(我邦今日に於ける投機的精神の盛なるは最も寒心すべし。)吾等は「作かずんば食はず」てふ覺悟に立たざるべからず、この覺悟この精神ほど人をして剛毅勇敢ならしむるものあらず。或は働いて尚ほ食を得ずといふものあらん乎、思ふに是くの如き人は未だ眞に働かざる者即ち現在の一念を充實せしむる底の勞作を經驗せざるものの言ひ草たるべし。「自然」の組織は働くものに衣食を給せざるほど、さしも不自然に貧寒に慳吝ならず。如何なる種類の働きにもあれ働きにはそれに伴ふ自然の報償あり。織るものは著き、耕すものは獲る。あるは人に勞を藉して一定の工賃を得る、亦おのづからなる報酬の一種ならずや。凡そ自家が正直なる額に汗し淸き良心もて獲得せる報酬は皆以て天與の報酬と稱すべし。(但だ其の如何なる源より入り來たれる報酬が自家の正直なる汗を汚さゞる、良心を滿足せしむる底のものなる乎、之れを決定するの標準如何はおのづから別論に屬すべし、吾人は他を苦しめ他を倒して得たる如き惡者の財を受けてわが正直なる勞作を飾るの報酬となすこと能はず、是れ吾人も亦かゝる報酬を受くることに因りて間接に他が殺人底の惡行爲に與みするものなればなり。吾人の良心は飽くまでもかゝる報酬を受くることを拒絶す。)吾が淸き良心を以て獲たる天與の報酬、げに是れこそは、公明にして純淨、また一點俗世の薰染を帶ばざるなり。此の正直なる勞作と此の純潔なる報酬と、世にこれほど快美底のものあるべしとも思はれず。「中夜の音樂」とはかゝる快美底の實驗を描きたる言葉なるべし。

十

或は神の恩寵を信ずるものにして尚ほ自力の働きを賴むは驕慢不敬度の甚だしきものなりと謂はん乎、然り神の無限の恩寵は吾人の働きを以て言ふにも足らぬ無益のものとなすなり、吾人が區々の働き、神の前に何の光かあらんや、神の恩寵は些かも吾人の働き、行業の有無大小如何に繫り存ぜざる也。これ優婉の思想也、謙虛の態度也、歸依あつき信仰也。されど尚一步

を深くして考ふれば神の恩寵そのものと雖も全く吾人の働の無き所には降るに由なくして、こゝにも勞働對報酬の原理の洸々として嚴正に行はるゝを見るなり。夫れ神は世の罪人を憐れみ給ふ。而かも神は彼等を救はんが爲めには其最愛の獨子をして十字架上に慘憺たる血涙を灑がしめ給ひき、是れ豈神の大いなる働きにあらずや。更に吾等十字架を打仰ぐものは其の大愛に喚覺し猛然として改悔の新生活に入る。是れ信ずるものの大いなる働きにあらずや。かくして十字架は畢竟神即ち愛する者の働きと人即ち愛せらるゝものの働きと、個の二つの働きの結び出だしたる心靈の救の道たる也。誰れか十字架を以て何等の働きもなき奇蹟的恩惠の贖罪法と視るものぞ。十字架は神と人との光輝ある働きの感應也。

吾人をして恩惠を説くに專らにして勞作を閉却せしむると勿れ。念佛一つ唱ふる働きもなきものには如來も其の大悲の手を下し給ふべきよすがなき也。彼等は所謂緣なき衆生也。ポーロが「効績なくして義とせらる」てふ信仰や、ルーテルが「義人は信仰に因りて生く」てふ信仰や、皆是れ眞正なる意味に於いて心靈の働きと稱すべきものにあらずや。信仰の二字、談は決して容易ならず。信仰は吾人の全人格を根底より衝き動かす力也、働き也。形式儀文の外的なる働きは吾人をして神の恩寵に與るを得ざらしむ。而して信仰惟り能く神の恩寵に與るを得しむるは何が故ぞ。信仰は靈魂の偉大なる働きそのものなれば也。

元老時代去る

無名氏

無名氏とは何人ぞ。其活眼達識。時局を談論して備さに其曲折を盡すの巧妙、宛ら麻姑の痒きを掻くが如く、人物を批判して明かに其

長短を較するの手腕、恰も庖丁の牛を解くに似たり。現時政局の眞相を知らんと欲する者、何人も之を一讀せざるべからず。而して次號には更らに「桂、西園寺時代來る」の文を寄せらる約あり。本篇と併せ讀まば、庶幾くは近時政界の變遷を知るに足らん。

（編者しるす）

元老政治といふものは日本特有の政治として今では殆んど世界に知れ亘て居る。エルダー、ステーツマンといふことは政治上に於ける一つの熟語となつて居る。英國の或新聞の如きは、此元老政治を評して、之れは誠に結構な仕組である、折角政治上に經驗と信用とを積み重ねた人を捨てゝ了ふのは惜しいことだ、是非共之を利用するがいゝ。我英國なども宜しく日本に倣ふべしといふ位に大褒めに褒めた事がある。然るに又一方には之に反對して、元老政治といふものは立憲政治の意義に反し、責任內閣の趣旨に戻るものだとして激しく之を攻擊した向もあつた。議論は議論として事實上從來の日本は元老政治であつたことは疑ひない。處が今日に於ては、其元老なるものも。段々老い込んで來て、誰が要求するともなく、追々に舞臺の外に影を潛めて行きつゝある。勿論今日も猶元老といふ名があり、又元老會議といふ名もあるが、今日の元老といふ名は政治上に於ては最早や殆んど何等の意義もなきことて唯だ老いたる政治家を尊敬する言葉に過ぎなくなり、元老會議の如きも一の儀式上——露骨にいへば元老の虛榮心を滿足せしむる丈け——のもので實際に於て國家の運動を決定する力あるものとも思はれぬに至つたのである。

一體元老全盛の時代は何時頃の事かといふに、先づ明治卅三年の團匪事件迄で其以後は漸次其勢力を失墜して來たものといつて宜しい。世間の人が元老の勢力の最も發揮せられたる時代と信じて居た桂內閣の時代は實は此元老の勢力が衰へて來た時で、桂內閣と西園寺內閣との政權授受の際に於て最も著しく元老の勢力が減退した事を證明したのである。それは何故かといふに、政治上に於ける一番の大事は內閣の組織である。處が桂內閣と西園寺內閣との交代に際して、無論元老も其內閣組織の議に與かつたには相違ないが、其談判

は主として桂伯と西園寺侯との間に開始せられて、殆んど總ての献立が出來上つた後、若くは將さに出來上らんとする間際になつてから、初めて伊藤、山縣の二元老も之に參與したといふに過ぎないのである。其後と雖も元老の勢力が必ずしも皆無とはいへない。然しながら彼等の勢力は寧ろ過去の勢力で、現在の勢力ではない。彼等は國家の大事に際して其評議にも與かり其意見をも提供するが、彼等は寧ろ批評家として、忠告者として、相談相手として、訂正者としての位置を保つのであつて、彼等自らはイニシエーチブ(發議權)を取ることは追々少くなつた。然らば誰が斯く元老の時代を去らしめたかといへば「時」が去らしめたといふより外はない。如何なる英雄豪傑も「時」には抵抗することが出來ぬ。最近三四年の間に於て、隨分政治上に於ける野心家も居た、策士も居た。然し彼等の失敗の主もなる理由の一つは此等の元老を措いて其勢力に憑りて事を爲さんとしたのにある。彼等の眼中には過去と現在の區別がなく、昔あるものは今もあるものと買被つて、其不見識の代價を拂つたのである。例へば桂内閣が辭職した時分に、大石正己とか加藤高明などいふ連中は、必ず伊藤内閣が出來るものと極め込んで居た。處が彼等の案に相違して西園寺内閣が出來たので、殆んど驚殺さるゝ程周章慌忙したのは全く時勢の變遷を知らざりしが爲めである。

元老〳〵と吾々がいつて居るのは何人を指すのか、今茲に其範圍區域を定めねばならぬ。元老といへば先づ一番に指を折らねばならぬのは伊藤侯、それから山縣侯、次は井上伯、生きて居た時は西郷侯、それから松方伯、大山侯となる。即ち薩摩人が三人で長州人が三人である。處が三人の薩摩人は何時でも脇師になつて居て、仕手は何時でも三人の長州人である。一方はオックシゼン(酸素)で一方はナイトロゼン(窒素)である。これを旨く組み合せて天下の大事をやつたのである。

薩摩の方で一番エラかつたのは西郷侯である。若し智慮の分量からいつたならば或は兄の南洲翁よりか多

かつたかも知れぬ。茲に智惠といふのは決して屑々たる小才の意味でなくして、西洋の所謂ウィズダムといふ大才のことを指すのである。此人の生きて居る間は薩摩の位置は磐石の如きものであつた。此人はどういふ人であつたか、又どういふエライ處があつたか、世の中にはとう／＼知られずに死んで了つたのであるが、明治政史のインナー、セシトリー（内面史）には大いなる役（パートプレー）を演じた人である。脇師は脇師であつたが、脇師としては殆んど理想的であつた。伊藤侯も西郷侯なくしては立たれず、山縣侯も西郷侯なくしては立たれず、彼等が何を爲さんとする時も、必らず西郷侯の幇助を得なければならなかつた。此人の一番エラかつたのは他人の最も嫌がるものを自分が引受けたといふことである。凡そ共同生活をして行く時に誰しも他人よりも善い事を取り、惡い方を避けたがるのは當り前である。然し若し茲に其惡い方をウイリングリー（望んで）やる人があるとすれば、此人程便利で又必要な人がない。必要の前には何物をも犧牲にせねばならぬから、さういふ人が世に頭を擡げて來るのは當然の事である。處が西郷侯は即ちかゝる種類の人であつた。彼れは薩長の聯鎖ともなり、内閣と内閣との聯鎖ともなり、如何なる時と雖も常に平和の塊りであつた。試みに一例を擧げて見れば、伊藤侯が大隈伯に辭職を勸告するに行た時に一所に行たのは西郷侯。伊藤侯が李鴻章と馬關に談判に行つた時一所に行つたのも西郷侯。山縣侯が自由黨と提携した時に其直接の衝に當つたのも亦此西郷侯であつた。其代りに平常の行政などいふことには西郷侯は殆んど無頓着な人であつた、人の働く時には自分が遊んで、人の遊ぶ時には自分が働き、人の出來る事には自分が出てず、人の出來ない時には自分が出て行くといふ態度であつた。例へば第一次松方内閣の時分に西郷侯は内務大臣であつたが、其時に彼の露國皇太子の變事が起つた。然るに其場合に西郷侯が何處に居るかを見出すに非常に困難であつた。如何に探しても其行衞が分らぬ。詰度どこかに雲隠れして酒でも飲んで居たのかも知れんと思はれたや

うな事もあつた。しかし此人は先きにいつたやうにエライ人であつて、此人の生きて居る間は先づ薩長のバランス(平衡)も保てたのである。此人は藩閥心は毛頭なかつたが薩摩人は此人によつて重きをなして居た。

大山侯は西郷侯と從兄弟同志で、二人の間には血が通よつて居る。體格の大きいのもよく似て居るのである。が其性格に至ては甚だ違ふ。大山侯といふ人は、世人は意外に思ふかも知れぬが、ハイカラの骨頂で、なか／＼昔からハイカッた人である。外國人の交際といふことには西郷侯も餘程注意はしたが、大山侯はより以上に大いに注意し、而かも行儀はよく、品行も端正で、實にゼントルマンとして殆んど申分のない人である。而して我元老の中には有數の金持であるが、それも畢竟無用の費用を節して有用の利殖をしたといふに過ぎぬので、不義の金を貪ることなどは毛頭ない。此人も固より政治家であるが、然し其態度は我は我たり、汝は汝たりといふ風であつて、大山は大山であるが、其山は、たつた一つの孤立した山で、小山もなければ山脈もない。子分を拵へることなどは大嫌ひで又藩閥などいふことも絶對的に嫌ひである。而して初めから自分の分限内の事を考へて、其以外の事には口を出さぬといふ主義である。で今日でも達者ではあるが元老として何等のアクチブ、パート(主動的役割)を演出することがない。これは勢力の減少したるにあらずして、寧ろ初めから勢力を發揮しなかつたのである。然し日露の戰役に於て、兒玉大將で抑へ附けが出來なかつた所を此人が抑へ附けた所を見ると、なか／＼人の上たる貫目があるといはねばならぬ。此人は五六年間其勢力は不增不減である。

で、今日に於て薩摩の元老として兎も角も指を折るべき人は松方伯である。松方伯が元老としてどの位の勢力があつたかは今之を充分に探究することが六つかしい。けれども世間の或者が思うて居たよりも有力であつたといふことはいひ得るのである。それは何てあるかといふに、第一は 陛下の御信用が厚い。こゝに厚いといふ意味は伊藤侯や山縣侯の厚いといふ意味と

は少し違ふけれども矢張り厚い。殊に財政家としての御信用は餘程厚い。第二、は日本の主もなる金持に緣故が多い。例へば三菱の如きは親類で、島津家の如きには顧問で、安田家の如きも極めて親密なる關係にあり、其他京都大阪神戸あたりに於ける實業家の或部分——といつてよいか、或は大部分といつてよいか、彼れの感化の及ぶ所が極めて多い。のみならず、政黨に關係しない、所謂中等社會の人々には餘程信用せられて居たのである。松方伯は西鄕侯の如くパーソナル（一身的）の勢力は少いが、いろ／＼の道具建があつて、其道具建が松方伯をして有力なる一人とならしめたのである。處が元老の中でも松方伯は一番に隱居をしたのである。赤十字社といふ誠に都合のよい隱宅を見出して其處に入り込んで、其後は活動の政治とは餘程遠くなつた。それで三十七八年の役について財政上の協議や何かゞあつても井上伯が周旋する處が七分で松方伯が三分といふ事になり、其終り頃には段々井上伯の一人舞臺となつて了つた傾がある。て今では身體は達者だが、寧ろ鎌倉に風月を樂しむといふ評になつた。

薩摩の元老については先づ以上述べた通りであるが、次ぎに長州の元老はどうであるかと考へて見やう。

先づ井上伯から語れば、井上伯といふ人は一人で、西鄕侯と松方伯の仕事をやつた樣な風である。極めて性急で、極めて我儘で、又極めて向ふ見ずである。けれども猶井上伯にも一種の調和分子があつて、自分が喧嘩好きで喧嘩の火元であるとが多いに拘らず、始終仲裁業の樣な仕事をして居る。例へば陸海軍省と大藏省、大藏省と日本銀行、政府と政友會といふやうに兩者の間に仲裁に入つて居る。而して其仲裁が時としては雙方に不滿を與へて、甚だ痛み入るともあるが、兎に角人に賴まるゝ事が好きで、賴まれて世話をすることが好きである。賴み手がなければ自ら進んでもやるといふ風である。井上伯に仲裁せられては困るから、もう喧嘩も此位で廢さうといつて喧嘩の當事者同志が互に相談を附ける事さへある位である。井上伯といふ人は實に奇妙奇天烈な人で、小說の主人公としても、心

理學の標本としても、極めて面白い人である。一方て非常に褒卑にして汚ないかと思ふと、一方に非常に高潔な所があり、一方には極めて涙脆いと思へば一方には人に詰腹を切らせるやうな極めて酷烈な所があり、一方には逃げ道を作るのが早いかと思へは、一方には随分踏み込んで世話をする。當になるやうで、ならず。ならぬやうで、なる。實に不思議な人物といふの外はない。實は明治三十三年頃迄は日本の財界を中分して井上系松方系となつて居たもので、井上伯は三井の顧問、毛利家の顧問、藤田家、鴻池家なども皆伯の感化の及ぶ所で、日本の實業家及び、經濟に關係あるものは井上伯の門戸よりせざれば松方伯の門戸よりし、松方伯の門戸よりせざれば井上伯の門戸よりし、又悧巧なるものは双方の門戸より入つたものもある。處が其處は流石に松方、井上の兩伯で、二伯がかゝる互角の地位に居たに拘らず、互に何等の競爭もなく、衝突もなく、互に手を握て居た。これは甚だ感ずべき事である。而して二伯がかゝる關係に居たのは寧ろ井上伯に多とすべき點が多いやうである。といふのは井上伯は常に名譽の地位を松方伯に讓て、自分は松方伯の次ぎに立つを意とせざるが如き觀があつたからである。概して井上伯のストロング、ポイント(强味)の一はヴアニチー(虚榮心)のない事である。昨日まで自分の子分と思うて居たものの下に附くことも平氣でやつて居る。自分は自分の事をやればよいといふ主義である。其點は實に立派である。處が戰中に於ては松方伯が段々赤十字專門となると同時に井上伯の財政經濟に於ける勢力、日に益々進み、殆んど日本の天下は井上伯が一統するだらうと思はれたが、其機に臨んで當人が却て半ば退隱の姿を取ることになつたのである。どうしてさういふ動機が起つたのか知らぬが兎に角今日ては段々手を縮める方針になつて居るらしい。其後繼の勝之助氏が獨逸大使を罷めて東京の内田山の本邸に歸り、自分は興津の別邸に居るかも知れぬと云ふ噂がある。兎も角も時勢が井上伯を見捨てぬ前に井上伯が世の中に見切りを附けたのは些が先見の明ありとい

つて可い。

長州の三元老の中、後に殘て居るのは山縣侯と伊藤侯であるが、此二人のことは話せばいくらでもあり、或は一巻の書物も書くことが出來、或は十巻の書物を書くことも出來る。けれども今こゝにはザッといつて置くが、世の中では山縣侯を以て武斷派の代表者と思つて居る。或は或意味に於てさうであるかも知れぬ。然し歴史の上より考へて見れば日本の平民主義といふものは誰れよりも先づ山縣侯に負ふことの多大なるを感謝せねばならぬ。それは何故かといふに、日本の地方自治といふものは全く山縣侯によつて出來上つたものである。侯が地方自治に對する熱心は實に激しいもので、侯は今日殆んどアクチブ、ポリチックス（實際政治）を離れて居るに拘らず、郡制問題などに對する熱心を見れば、地方政治に多大なる注意を拂つて居ることが分る。それと同時に日本の徴兵令は全く山縣侯によつて出來上つたものである。その時分には士族兵でなければならぬといふ論もあつた。又所謂志願兵でやらなければいけぬといふ論もあつた。志願兵の論の如きは最も有力な論であつた。所が彼は總ての反對を排し、總ての困難に打勝て徴兵令を布いたのはデモクラシー（平民主義）の勝利の最も大いなるもので、士族の特權を廢し、四民平等の實が初めて上がるに至つたのである。徴兵令で以て平民主義を鼓吹するとは、當事者たる山縣侯も或は案外に思ふかも知れぬが、其結果は明かにさうなつたのである。此山縣侯が軍人以外に政治家として、どの位エライかといふことは一度に話して了ふのが惜しいから他日の問題として置くが、それは實にエライ人である、徳川家康といふ人の面影の幾分は必らず山縣侯によつて知り得るだらうと思ふ。政治家として彼れは確かに第一等の政治家である。伊藤侯と眞に旗鼓相當る人は只此人丈けである。が此人も寄る年波には敵し兼ねて最早や古稀の齡を過ぎて活動の政界から段々身を退く考をしたのである。彼は幸に其適當なる後繼者を得たから、其財産を安心して讓ることが出來た。其後繼者は申す迄もなく桂伯

である。

それから最後の伊藤侯はどうてあるかといへば、伊藤侯は一番政治的壽命が長いといふことも出來る。が、自分ては遠い昔から其考もなくなつたらうが、今ては如何に伊藤侯によつて事をなさんとするものでも今後伊藤内閣によつて事をなさんとするものはないだらうと思ふ。韓國は伊藤侯にとつて、松方伯の赤十字社てある。井上伯の三井、鴻池、其他である。山縣侯の陸軍である。て所謂有り餘るヴアイタリチー(勢力)を使ふ場所として韓國があるが、然し最早や伊藤侯も大舞臺の上に立て自分が働くといふ考は無くなつた。伊藤侯の時代も過ぎ去つたのてある。て伊藤侯も其時代が過ぎ去ても誠に安心てあるのは是れも亦山縣侯と同じく實に適當なる後繼者を見出したからてある。これも申す迄もなく現總理大臣西園寺侯てある。伊藤侯の子分には政治的活動の大いなる人々なければ又關係の廣い人もない。凡そ政治の世界に立つ者にして誰しも一度や二度伊藤侯の手に掛らぬものはないが其割りには彼に子分が少い。少いのみならず正直にいへば忠實なる子分が少い。これが伊藤侯の政治的勢力に於て山縣侯よりも大いなる缺點なるに拘らず、幸に一の適當なる後繼者を得て、古の詩人が劉玄德を詠じて士少能臣第一流といつたのは恰もよく伊藤侯に當て箝るのてある。子分は少いが西園寺侯といふ第一流の人を後繼者とし、これて先づ首尾よく樂隱居をする塲になつて居る。

つまり今日に於ては元老の時代が已に去て中老の時代が來て居る。ストリクトリー(嚴密)にいふことは出來ぬが先づ今後の政界は朝にあつても野にあつても最も注意せらるべきは桂伯、西園寺侯、其に次いては恐らく西郷侯のスクール(派)から出て來た山本男爵てあらうと思ふ。若し生きて居れば無論薩摩の川上操六、長州の兒玉源太郎などいふ人は少くとも此中に加ふるべき人てあるが、惜しい事には二人共亡くなつて了つた。

此話はこれて一段落を告げたのてあるが、終りに一

寸附け加へて置きたいのは、若し元老といふことを最う少し廣くいへば大隈、板垣の二伯も之に加へねばならぬのである。處が板垣伯は早く退隱して身體は達者だが政治上には最早や何等の關係もない、大隈伯も自ら退隱することは好きか嫌ひか分らぬが、つひに退隱の止むを得ざるに至つた。民間に於ては今猶大隈伯を擔いで仕事を目論む人もある樣子だが政界の事情に通じた人は大隈伯の時代は已に〳〵過ぎ去つた事を斷言するに遲疑せないのである。正直にいへば大隈伯の政治的生活は今より廿五六年以前といひ得る。大隈伯といふ人は不幸な樣で誠に幸福な人である。あの人を非常に不幸な人として同情するものがあるが、同情を得る丈けが彼れの仕合せといはねばならぬ。あの人は一度局に當れば必らず何かの間違をやる人だ。只局に當らずに何處までも評論家として、大言壯語して居るので、世界に名ある政治家として知られて居る。あの人のオッポジション(反對黨)に居るのはあの人の政治的生涯を長からしめた所以である。あの人は護謨玉のやうな人で民間に居れば膨れ、政治の局に當れば非常に小さくなる。實際のアドミニストレーション(政務)にかけては甚だ覺束ない手腕である。人間としては誠に非凡なる人であるが秩序あり組織あり系統あつて凡ての調子を合せて仕事をするといふことはあの人の不長所である。唯草創時代の、制度文物未だ整備せざる時、敏腕を揮て切り廻すといふことはあの人の長所であるが、物事の緒についた後は竹箒で疊の上を掃くことは出來ぬ。大隈伯は時勢に合はぬにあらず、時勢が夙つくの昔に大隈伯に合はなくなつたのである。彼れがオッポジションに立たのは誠に其處を得たのであつたが。今では其オッポジションとなる事さへも後れたではないかと思ふ。然し此人のヴアイタリチー(活動力)は非凡で政治以外に於て働くことは尚此上にやることであらうと思ふ。(九月十四日)

九月廿一日の爵記親授式に於て元老諸氏を初め此文に載せある人の爵記は概ね陞叙せられたるも此文を筆記する時は親授式以前なりしを以て今は其儘になし置くもの也(記者しるす)

外交上の新局

竹越與三郎

國家一日も外交なき時はないが、我が政府が列國に對して外交らしき外交を始めたのは、陸奥外務大臣が條約改正を行はんとすると同時に日清戰爭を開始した前後に於て初め之を見ると云つて差支ないと思ふ。故に我が外交は其歷史より言へば極めて古きに拘らず、又極めて新しきものと言はねばならぬ。而して日英同盟を締約するに至つて、更に新らしき局面を開いたのである。日英同盟の得失に至つては尙之れを論ずるの餘地がないではないが、併ながら兎に角新局を開いたと云ふことは掩ふべからざる事實である。而して露西亞に對して戰を開くに至つて、更に我が外交の局面は一變したのである。併ながら外交上より觀察すれば、日露戰爭は殆ど外交失敗の結果であつて、若し日英同盟を締約したる當初の精神を把持し、且當時日英同盟を謳歌せる者が唱へたるが如く、日英同盟の締結者が眞に外交の技倆識見を有して居つたものであるとすれば、日露戰爭は之を未然に防ぐことが出來たものであらねばならぬ。併しながら不幸にして當局の技倆は、日露戰爭を未然に防ぐこと出來ずして、二十億の國債を費し、二十七萬の死傷を出し、全國の產業を停止し、今に至つて尙國民をして其創痍より脫せしむることが出來ないやうの事になつたのである。故に日露戰爭は外交上より言へば、斷じて之を失敗と言はねばならぬ。併ながら蝦蟇の頭にも尙寶玉があると云ふが如く、日露戰爭も外交上より言へば失敗には相違ないが、更に又外交上に一新紀元を開くの基となつたのは、我邦の爲に祝賀せねばならぬ事である。即ち日露戰爭は外交上の失敗であるが故に、從來の我日本の外交歷

史、及外交局面は悉く塗抹せられて、是より以後外交は新しき局面に移つて來たので、ローズベリーの言葉を以て謂へば、明治三十年以後石盤は悉く拭去られて、新しき石筆を以て我が外交が書き始められたものてある、即ち外交上の更始一新の時てある。而して其局に當る者が、識見と度量と、而して平和を尊重する精神に滿ちた西園寺內閣てあつたことは、予の深く喜ぶ所てある。

忌憚なく言へば、條約改正以前の我が外交なるものは、單に列國の一顰一笑を窺つて喜憂すると云ふ有樣てあつて、甚だ國家の爲に歎息せねばならぬ事てあつた。當時の勢より言へば、此の如き事は已むを得ぬことてあつたかも知れぬが。今より顧みて亦赤面に堪へぬ次第てあつた。而して其反動として我が國民の間に對外硬といふ一種の精神的需用が出て來て、外國に對しては一も二もなく手強く出れば宜いと云ふ者が出て來た。則ち當時の屈辱的の位地に對する憤慨の聲と見ては、如何にも至當の要求てあるが、さりとて之を外交上の實際の手段とするに於ては、甚だ無用有害の說てある。然るに政府及外務省は、所謂國民の聲なるものは顧るに足らぬと主張すること多年の間てあつたに拘らず、此自主的外交若くは對外硬なる精神は、何時の間にか外務省を襲ふた。即ち桂內閣に至つて內國の政黨を操縱するの精神、及び人氣を取ると云ふ精神より、外交上に於て一種の新しき傾向を生じて、、兎に角外國に向つては多少の山氣を出して、當るか當らぬかやつて見やう、十の物を要求して一つ遂げれば宜いと云ふやうの精神によつて事を試むると云ふ傾向を生じて來た。予は勿論當局が果して誠心誠意に外國に向つて強くのみ往けば成功するものと信じると云ふ樣の分らずやてあるとは信ぜぬが、併ながら兎に角外國に向つては手強く出るが如き風說を流布して、民間の對外硬の精神に訴へて、其一派を掌中に入れんと試みて居つたと云ふことだけは斷言することが出來る。而して其結果として虎に乘るの勢て、幾分か外國に對して强みを見せねばならぬと云ふ羽目に陷つたと云ふこと

事實てある。

て此時以後我が外交は新しきスクールに遷つたものて、外國人もまた我外交に駈引が多いと云ふことを信じて來た。霞が關を稱してブラツフの本山だと云ふ言葉が外交社會に出て來たのは此時てある。デ我邦は元來久しく他國の外交家の爲に誤解せられて、初は安買せられて居つたが、後に高く買冠られ、我邦は到る處に探偵組織を用ゐて列國の機密を探り、大ヤマを企てると云ふやうに誤解される時に我外交も甚だブラツフが多いと信ぜられる樣になつたのは甚だ不利益てあつた。即ち過日獨逸皇帝が佛蘭西の新聞記者に語られて、露西亞の軍人が哈爾賓て床屋へ行つた、さうして髭を剃つて貰つた、あとて調べて見たらば其床屋の髭剃りは日本の軍事探偵てあつたと云ふとを言はれて、日本のスパイシステムを用ゆること此の如きものてあると言はれたさうてある。是は獨逸皇帝の言葉のみてはない、實は久しき間露西亞の軍人が此の如き事を言ひ觸らして居つたのてあつて、始めて聞く言葉てはないが、列國の我邦を見る此の如きものてあつた。然るに我が當時の外務省は、一を取らんと欲して十の懸値を唱へると云ふやうな風て、百里の土地を得んが爲に、千里の懸値を吹掛けると云ふことてあつたから、此スパイシステムとブラツフ主義と相合して、我が外交は內國に於ては對外硬の一派より多少の歡迎を受たに拘らず、同じ度合を以て列國の間には極めて不信、不誠實なるものと解釋せられて、日本政府の言ふことは、先づ眉に唾して聽かねばならぬと云ふ、極めて歎息すべき位置に立つたのてある。然るに當時の國民は御用政客及御用新聞の洞喝及誇張に迷はせられて、我が外交は何等雄大なる計畫があるかの如く思ふて居つたが、我が外交の不信にして、不振なること當時より甚しきは無かつたのてある。

然るに日露戰爭の結果として外交上に新しき傾向が出て、我は我が言はんと欲する所を言ふ、而して其言ふ所は必ず我が眞實に要求する所てある。我は讓るべき時は明白に讓るが、又取るべき所は飽までも取らね

ばならぬものであると云ふ、則ち我が外交當局の言ふ所は、權謀術數にあらずして眞に國家の要求する所、而して其後には眞の國力が附いて行くものであると云ふことを、列國の朝廷に識認せしむるやうの事になつた。則ち我が外交は近日に至つて極めて不信、奸黠と云ふやうの疑より免れて、日本政府の言ふ所は極めて忠實なる主張であると云ふことを列國に信ぜしむるやうになつた。それが爲に我が外交使臣と列國朝廷との間には、極めて打解話が出來るやうになつた、是れ甚だ祝賀せねばならぬ事である。例へて言はゞ、此頃日露漁業及通商條約に就て、我邦は新に露西亞政府をして死者を火葬すると云ふことを承知せしめた。此一點ば我が國人は輕々に看過して居るが、實は露西亞政府に取つては容易ならぬ大事件である。宗教上の由來より露國は從來未だ曾て他國の爲に火葬を許したことがない。凡そ露西亞のみならず何れの耶蘇教國に於ても、耶蘇教の信仰に於て死者は死んだ儘に葬らるれば、來世の教の來た時精神が蘇るのみならず、肉體が其儘て天國に生れ替ると云ふ信仰を有つて居るがため、露國では火葬と云ふことは、宗教上の信仰より許されなかつた事である。然るに我が使臣は、我邦には火葬の習慣があるから、場合に依ては火葬する必要があるからと云ふことを主張した。そこて、彼國の使臣は宗教上の由來より承知が出來ぬと云ふことであつた。我邦の使臣は近來極めて打解話の出來る仲であるから、どうも二十世紀の世の中に火葬が出來ぬなどゝ云ふ古い事は止したらどうかと云ふやうの事を、極めて友達づくに、爾我の間柄を以て話をした所が、外務大臣イスヴォルスキー氏も手を拍つて、イヤそれは極めて其通りである、實はもう止めたかつたのであるけれども、どうもよい機會もなかつたが、然らば貴國との條約を好い機會として、我邦にも新らしき風習を入れるが宜からうと云ふやうのことて、即座に之を承知した、さう云ふやうの事であつて、極めて些細の事てはあるが、併ながら我邦の言ふ所は、何等の奸黠なる主張計畫があるのではない、誠心誠意に言ふ所であると

云ふことが彼等に感じられて、萬事此通りに解決して出たのである。則ちポーツマウス條約に於て、漁業はインレツトに入れるとか入れないとか云ふやうの事も、若し我邦の外交の信用が三四年前の如くてあつたならば、到底解決は付かなかつたのであるが、我邦は決してポーツマウス條約を楯として、之に種々なる奸黠なる手段を附加へるものではない、讓るべきは讓り取るべきは取ると云ふことに就て、誠實なるものであると云ふことが信じられて來たから、今度の如き解決も付いたのである。即ち此の如くして日露の間も平和が恢復し、此の如くして佛蘭西との間も恢復して來たのである、即ち我が外交の信用が此に出て來たと云ふことてある。即ち公明正大、如何にも正々堂々として大人の言葉の如く思はれるやうになつたと云ふことは、我が外交の復活と謂はねばならぬので、予は深く國家の爲に之を慶賀するのである。

以上に述べた所は、我が外交精神上の議論であるが、偖其實質及布局に就て言へば、殆ど十年前、五年前の事と比して隔世の思ひがある。十年前は僅に英露兩國の競爭を利用して、其間に漁夫の利を占めんとするに過ぎなかつたのである。五年前は僅に英吉利と同盟して、自ら防禦せんとするに過ぎなかつたのである。日英同盟は確に我邦をして世界の舞臺に押出さしめたのであるが、尚其舞臺の一隅に居ることは免れなかつたのである。然るに今や佛蘭西と握手して東洋の平和を維持し、露西亞と握手して東洋の平和を維持し、英吉利との同盟は益々深厚となつて、世間をして日英露佛の四國同盟新に玆に成つたと言はしめるに至つた。予は此日英露佛が果して同盟したるや否やを知らぬ、文字に就て言へば互に疑心を去つて、互に平和を重んじ、總ての問題はフレンドリーの精神を以て解釋すると云ふだけの、無味淡泊なるものに過ぎぬと思ふて居る。併ながら獨逸側の政治家の言ふ所を聞けば、日英露佛は互に相握手して、獨逸を外交局面の外に逐遣らんと陰謀を企てゝ居ると云ふことを言つて居る。吾々の見る所是なるか、獨逸の見る所是なるか、予は之を

斷言する材料を持つて居らぬ。併ながら少くとも世界列國をして此四國が大同盟を結んだと言はしめるだけの形は備つて居るに相違ないと思ふ。

即ち臺灣の對岸なる福建省の如きも、曾て伊藤内閣の時に、清國をして我に誓はしめて、他國に割讓せぬと云ふ約束をせしめたので、我勢力範圍に數へてあるけれども、爾來佛人は同地に於て海軍教練鐵道敷設、鑛山採掘などを無遠慮にやつて我をして數ば切齒せしめたので、桂内閣の頃、此事を佛國に談じたれども冷硬なる挨を受けて引き下げたのであつた。然るに日佛協約の締結せらるゝと同時に、佛國政府はドウ言ふ譯か同地の海軍教練より手を引いて、教師は先月限りて皆な歸國してしまつた。恐らくは今後鑛山鐵道騷ぎもせぬてあらと云ふとだ。余は此間何等の消息があるかを知らぬが、日佛協約の影響は絶大廣遠にして、世間の盲目子が見るが如き單純のものでなく、文字の外、主張あるものであらうと思ふ。而して英佛の間も日英が同盟したるが爲に接近したと云つて差支ないのである。

又英露の間の接近も、日佛接近し、日露接近すると云ふことが與つて力あたに相違ないのである。然らば近時世界列國を聳動する所の四大國同盟なる者も、實は日本が其中心勢力の一であると云ふことを斷言するも亦大早計でないと思ふ。實に我外交布局の大なるや、東の端より西の端に及ぶものであつて、世界的の計畫て、之を名づけて平和の世界的トラストと云ふ者あるも亦偶然でないと思ふ。此の如くして十年前は僅に列國朝廷の殘肴冷杯を甞むるに過ぎなかつた我が公使は、今や列國の外交社會に於て實に活潑なる部分を働いて居る。十年前我が外務省の一秘書官に過ぎざりし本野君は、今や露西亞の都に於ては缺く可らざる人となつて居る、二三年前露國公使として我が一部の對外硬派より排付せられたる栗野君は、今や佛蘭西の都に缺く可らざる有用の人となつて居る、小村壽太郎君の倫敦に於ける亦此の如し。此の如く我が外交は其の精神に於て公明正大、大人の如き位地に立ち、其布局に於て世界に亘つた大計畫の中心となつて居る。此の如く

して我が國民四十年來の志始めて報いられ、眞に大國民となつたのである。世間日露通商條約、日露漁業條約に就て二三の苦情を並べる者なきにあらずと雖も、是は漁業當局者が一を得れば二を得んとし、二を得れば三を得んとする職業的の慾望より並べ立つる苦情に過ぎずして、實は近來の大成功と謂はねばならぬのである。而して此の如き成功は何から來たかと云へば、我が外交の精神が極めて陰險でなく、奸黠でなく、正々堂々、公明正大の態度に出て來つたものであると云ふ信用を得た結果である。是れ實に有形の勝利よりも、深く祝さねばならぬことゝ思ふ。

此の如くして世界に於ける我か位置は高まり、此の如くして日露の間は接近し、此の如くして日佛の間は接近し、此の如くして日英の間は益々親好となり、朝鮮問題も解決し、剩す所は支那の問題である。今や列國の眼は悉く支那に集つて居る。如何に支那問題が解決せらるゝか。如何に支邦が自ら立つか、是れ實に次の外交家に對して殘された問題である。知らず如何なる政治家が出て、如何に支那問題を解決するか。是れ實に刮目すべき千載の大機である。

次號論文豫告

次號の本欄に掲載せらるべき論文の確定せるものは

桂、西園寺時代　無名氏

にして又題目未定なるも已に依頼せるは

鎌田榮吉氏

芳賀矢一氏

の二氏。尚續々依頼中也。

葉隠れ

福本誠

殘炎未だ衰へず、苦熱燬くが如くなるまゝに、架上の一卷を抽き來り、長榻に仰臥して之を繙けば、今より二百餘年の前、寶永の昔、佐賀の武士に其人ありと知られたる山本常朝が語草に成れる『葉隠れ』なり。是れなん佐賀の藩士が『肥前論語』と尊崇せし武士道の經卷なり。抑々武士道は神道より出てゝ、神道は亦惟神の大道より發したり。恰も是れ忠義下りて氣節となり、氣節下りて遊俠となりしに似たり。然れば道を談ずれば、惟神の大道の蕩々坦々之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるには如かず。我は日頃より神道者流に從ひて神道を說かず、封建武士に聽きて、武士道を口にせざる者なり。

兎はいへど、其神道なり、武士道なり、倶に我日本國民が自發(オリヂナル)の敎義にして、惟神の大道の一端たることを失はざれば、吾人日本國民が人たり國民たるが上に、精神の修養に資す可きもの、亦實に尠からず。近年我國民が淸國に克ち、露國に勝ちて、良ゝ面を起しゝにつれ、忘れかゝりし武士道を憶ひ出て、盛に之を唱道するは好し。果して其武士道の神髓をだに能く知覺しつるや否や。此に『葉隠れ』を讀みゆくまに／＼、常朝が發揮せる斯道の大端を書いつくるも、無用の事に非じかし。第一に『葉隠れ』が敎ゆる武士道の四大綱は、

一、武士道に於ては後れを取り申間敷事。
二、主君の御用に立つ可き事。
三、親へ孝行仕る可き事。
四、大慈悲を起し人の爲に成る可き事。

即ち是れなり。後れを取らぬは義なり、勇なり。御用に立つは忠なり。親への孝行は讀みて字の如し。人の

爲に成るは仁なり。仁義忠孝、若くは仁勇忠孝、是れ武士道の本願なり。常朝はいふ『此四誓願を毎朝神佛に念じ候得ば、二人力に成りて、跡へはしざらぬものなり。尺取虫の様に少しゝ宛先へにじり申ものにて、神佛もまづ誓願を起し給ふなり』と。

茲に此四大綱に就き、常朝が用意の在る所を述べん乎。

武士道に於ては後れを取り申間敷事

是れ武士道の眞諦第一義、儒教に發せず、佛教に源せず、我が日本國民の天性即ち國性より湧出せし教義なり。『葉隠れ』之を述ぶること丁寧反覆、之を用ゐて一國の士氣を提撕せり。其一に曰く、

『古人の詞に七息思案と云ふ事あり。隆信公（龍造寺）は分別も久しくすればねまると仰せられ候。直茂公（鍋島）は萬事しだるき事十に七つ、悪し。武士は物毎手取早にするものぞと仰せられ候由。心氣うろ〳〵としたる時は、分別も埒明かず。泥みなく爽かに、凛としたる氣にて、七息に分別するものなり』と。

昔は季文子三たび思ひて而る後行ひけり。孔子之を聞きて『再たびすれば可なり』と宣ひしとぞ。拿破崙一世は『凡そ兵を行ふには、勇氣を三分の二と爲し、思慮を三分の一と爲す。勇氣之に過ぐれば、其弊や無謀なり。思慮之に過ぐれば、其弊や不斷なり』といへり。皆龍造寺隆信の言に符合せり。孔子に承たまはらず、拿破崙をも待たずして、錬りに錬り出だしゝ所に、貴き直は則ち存せり。

常朝は此後れを取らぬ道に於て、人々の心がけを訓へいふ、

『大難大變に逢ふても動轉せぬといふは、まだしきなり。大變に逢ふては、歡喜踊躍して、勇み進む可きなり。一關越したる所なり。水増れば舟高しと言ふが如し』と。

又曰く、

『平陣にては武功の人に乘越ゆ可き心掛け、强敵を討取る可しと晝夜望みを掛れば、心猛く、草臥も無く、武勇を顯す由、老士の物語なり。平生にも此の心得これある可きなり』と。

又曰く、

『武士道は死狂ひなり。一人の殺害を數十人して仕かぬるものなりと、直茂公も仰られ候。本氣にては業は成らず。氣違ひになりて、死狂ひなり。此内に忠孝は自ら籠る可し』と。

是に至りて語には弊あり。極西の人々に聞かしめなば「フアナチスム」とや評す可く、震旦、猶太の聖者等が立言の萬古に亘りて動かす可からざるが如くならず。然れど其意を究極すれば、孔子の夙に宣ひつる「自ら反りて縮くんば、千萬人と雖も吾れ往かん」との精神なり。此精神こそ吾人國民が祖先以來世々に傳へし日本魂の一なるなれ。日本國民は如何なる大難に逢遇するも「何糞!」といふ。或人は此『何糞!』を斯拉烏民族が口癖の「ニエット」に比せり。

「ニエット!」とは『何んでも無い!』といふ意なり。彼得は加爾十二世に追捲くられても『ニエット!』、拿破崙一世に打破られても「ニエット!」にて、終に斯くの如き大帝國を形成せり。我に在りても亦た然り。我國民も亦三百年來積威の幕府に對するも『何糞!』、世界の六分一を包有する露國に對しても『何糞!』と叫びて、以て今日の帝國の現位地は贏ち得たり。大きくいへば斯くの如し。若し其れ小さく一人に取れば、「王公相將彼れ何人ぞ……何糞!」といひて奮起する、其「何糞!」の口癖の裏に武士道は則ち托宿せり。是れ此氣象や愈々益々國民の想界に磅礴せしむ可し。若し其れ否らず、進みて取り、難きに克つの勇氣なく、人の成功發達を羨み猜み、若くは燒けのやん八となりて、扨『何糞!』に訴ふる者は、其れこそ全く犬の糞、武士道、神道、惟神の大道、何れの道にも遺矢すことを容せざる所の糞なるなれ。

常朝は終に武士の決心にいひ及べり。曰く、

『何某は喧嘩の打返しをせぬ故恥に成りたり。打返しの仕樣は踏込んで切殺さるゝ迄なり。是にて恥に成らぬなり。仕課す可きと思ふ故間に合はず。向は大勢抔と云ふて、時を移し、〆り止めに成る相談に極るなり。相手千人もあれ、片端より撫切りと思ひ定めて、立向ふ迄にて候が成就なり。多分仕濟すものなり』と。

是れ自ら反りて縮しと確信せる時の決心を一層明白に說示したるものなり。正理既に我に在れば、敵の多數何かあらん。場合の不可何かあらん。成敗利鈍は取つて除け、遣れる處まで遣て見るが、即ち眞誠の武士道なり。千萬人と雖も吾れ往かんと孔子の宣ひしも、鞠躬盡瘁斃れて後ち已まんと諸葛孔明の言ひたるも、

赤此處なり。明治の四十年史に前の三大難を乘切りたるも、大本の此に在りしを思はゞ、人々此覺悟なかる可けんや。

此山本常朝は大石良雄等の赤穗義士と時代を同くせる人なるが、此人が良雄等復讎の擧を評したる、別に一見地あり。其言に曰く、

「淺野殿浪人夜討……主を討せて、敵を討つ事延々なり。若し其中に吉良殿病死の時は、殘念千萬なり。上方衆は智惠かしこき故、褒めらるゝ仕様は上手なれども、長崎喧嘩の様に無分別する事はならぬなり」と。

顧ふに良雄等には良雄等の分別これある可く、彼が如き稀代の壯擧を無下に常朝の論もて律せんは深酷なれど、總じていへば、喜怒色に見はさずなどいふは、唐様の道なり、日本自發（オリジナル）の道に於ては、怒れば雷霆霹靂の如く、喜べば春風和氣となるこそ、日本男兒の本意なれ。常朝が深謀遠慮などいふことを斥けて、直情徑行を倘べることと自らなる武士道には合せり。

唐人ながらも磊落不羈なる李白が詩に、

「周公恐懼流言日。王莽謙恭下士時。假使當時身便死。一生忠僞有誰知」

と歌ひしは、即ち其中に吉良殿病死の時は殘念千萬なりといふものと同一意。

流石に維新革命の原動力となりし久阪玄瑞は常朝と同見の人なりけん。李白の詩意を俗謠に飜へして、

「祇園、島原、撞木町、傾城狂ひの其中に、病氣何ぞで死なしゃんしたら、忠歟不忠歟分りやせぬぞいな」

といへり。心ありての放歌行とは見えたり。因みに思ひ出づることこそあれ。長州が天下に先だちて尊攘の大義を倡へ、幕府の所謂征長の兵を四境に受けし時、一時恭順を裝ひ、幕府と和議を講ぜし事あり。此際長軍の將中に鬼來島と呼ばれたる來島又兵衞は、一隊を率ゐて三田尻に在りしが、解隊の命あるも三田尻を引揚げず。長藩、幕府の物議を氣遣ひ、高杉晉作を撰拔して、侯命を來島に傳へしめたるに、日頃來島と高杉とは無二の同志なりけるが、其高杉が媾和に同意するのみか、今上使となりて侯命を傳へに來ると聞き、烈火の如く憤り、我爲ん様を見よやと待ち居たり。乃て高杉入來りて、一時幕府に油斷させ、寛々後圖を運ら

さんも一策なり、暫く兵を解く可しといへば、來島目を瞋らして『平生貴様が靑表紙を捻くりて、而して後ちなどいふ有らぬ事を學べるが爲に、大事に臨みて引けを取る。後圖も糞もある可きや、來島は一切而うして後ちを容れず』といひしとぞ。元治元年の秋七月、久阪、來島等各々一隊を率ゐ、場處もあらんに、京都の御所に取りかけて、君側の姦を掃はんと試みたる事無分別といはゞ、天下の無分別これに過ぎたるもの無けん。之れが爲に一代の好漢俱に朝敵の汚名を被りて、身は戰場の露と消えたり。如何に視るも智惠のかしこき業には非ず。然も此大無分別は國民忠義の士氣を激勵し、是より僅かに三年を隔て、討幕の鳳詔は九重の上より降り、錦の御旗は函根の山の朝東風に飜りて、江戶の將軍政權を奉還するに至りたる、畢竟是れ常朝の所謂『長崎喧嘩の無分別』之が動機を與へしに由れり。今の武士道を口にする輩に此無分別の意義が分るや否や。

主君の御用に立つ可き事

是れ武士道の第二綱領なり。『葉隱れ』は訓へて曰く、

『御家來としては國學心掛く可き事なり。今時國學目落に相成候。大意は御家の根本を落着け、御先祖樣方の御苦勞御慈悲を以て御長久の事を本づけ申す爲に候。剛忠樣御仁心御武勇、利叟樣の御善根御信心にて、隆信樣、日峰樣御出現御威力にて御家御長久今が世まで無雙の御家にて候。今時の衆箇樣の儀は唱へ失ひ、餘所の佛を尊び候事、我等は一圓落着き申さず。釋迦も孔子も楠も信玄も終に龍造寺鍋島に被官掛けられ候儀これ無く候得ば、當家の家風に叶ひ申さゞる事に候』と。

末句に至りて、武士道の精神躍如として大に見はる。釋迦と孔子とは大聖なり。正成と信玄とは當時の軍神として一世の仰ぎし所、然れどそれよりも大切なるは龍造寺鍋島の御家なりといふ。山崎闇齋が『孔子大將軍となり孟子副將軍となりて御國を來り侵すに於ては、容赦なく討攘ふ可し。是れ即ち孔孟の道なり』と申されたると、其意相似たり。

今の世に於てルーズヴエルトは珍らしき大人なり。是迄其人の言行は尊信するに足るものあり。然れど其

人にして一朝人道を蔑し、正義を忘れ、條約を無視して、日米の國際に對しなば、何の假釋かある可きや。迎頭一擊を喫はして、其非を悔悟せしむ可きのみ。是れ亦闇齋の謂ふ所の孔孟の道なり。言ひもてゆけば即ちルーズヴエルトの道なるのみ。然るに今日の政府を視れば、日頃分別らしき顏せる人々にして、此際の向背に惑ひ、着々後れを取りつゝあり。武士道にして知るあらば、嗟呼我道窮まる歟と嘆ずるならん。

偶々「葉隠れ」の此訓を讀みて、思ひ起しゝことあり、封建の世代に雄強四隣を睥睨せし邦は、皆心を心としたりしなり。嘗て薩摩の人に聞けり。薩摩に於て楠公を尊敬するに至りしは、齊彬公が勤王を唱へ始められたる以來なり。それまでは『正成は御家の御先祖に手向ひしたる不屈の輩なり』といひあへりしとぞ。是は島津の祖先某が足利尊氏に語らはれ、西上の軍に加はりて湊河の一戰に楠公と兵を交へしに由りてなり。さほどに主家を思へばこそ天下の精强海内の雄藩とは稱せられたるなれ。島津維新父子日隅薩に據り、加藤清正肥後に在りて、兩雄互に對峙したる時三州の健兒は歌ひていへり。

『肥後の加藤が來るならば、焰硝肴に彈丸交ぜて、それでも懲りずに來るならば、首に刀の引出物』

異日山陽が健兒歌は此俚謠を譯せしのみ。常朝は最後に斷案していへり。

『御家を一人して荷ひ申志出來申迄に候。同じ人間に誰に劣り申す可哉。修行は大高慢にてげなれば、益に立たず候。我一人して御家を動かさぬとかゝられば、修行は物に成らざるなり。藥鑵道心にてはさめるも易く候』と。

是れ此心なり。唯其輪廓を一範推闡擴げ、之を皇室に、之を帝國に他意なく捧げまつらんのみ。

親へ孝行仕る可き事

是れ武士道の第三綱領なり。斯道や人の天倫に根ざしゝ所、説明を待ちて後ち知る可きに非ず。此には單に武士道に沈潜せし常朝が如何に孝道に立ちしかを概見せん。

「何某が養子餞に候故、氣に入らず。殊に親長病にて、氣短く相

成り、斷ぁず折檻仕り、惡口を申候に付て、居こたへ候儀成り難く、近々引取り申す可き樣子に相見え候。此事を養母參り候て、何とも迷惑に候間、病氣乍ら諸事忍堪候樣に親へ御異見賴み候由申候。斷り申候得共、賴み申すと涙を流し申候故、力に及ばず受合申候。親に意見は逆にて候。殊に病中也。悴を此方へ遣はし候らへと申す。母落着かず候て飛歸り候。悴參り候に付、申候は、總て人間に生れ出づるも、生々の大幸と存ず可き事に候。其上御當家の士と成る事、生前の本望なり。百姓町人を見て思ひ知る可し。實父の遺領を取るさへ有り難き事なるに、末子に生れ出て、他の家を繼ぎ、御被官の一人と成る事は、優曇華の仕合せなり。是を取逃して無恩人に成る事は不忠、親の氣に入らぬは不孝なり。忠孝に背きたる者は置き所なし。能く案じ見られ候へ。今其方の忠孝は只親の氣に入るまでなり。氣に入りたくても、親の氣向きがわろきとのみ存ぜらる可く候。親の氣直し樣を敎へ申す可し。私の面つき其外物每に親の氣に入り申樣にと、血の涙を流し氏神に祈らる可し。是れ私の事に非ず。忠孝の爲なり。此一念忽ち親の心に感應あるものなり。歸りて見られよ。早親の心直り居る可し。天地人感通する不思議の道なり。殊に長病なれば、久しかる可からず。纔の間の孝行逆立(さかだち)するとも安き事なりと申候得ば、忝しと申て歸り申候。後に承り候へば、歸り掛に親申候は異見に逢ひたりと見えて、先づ見掛が能く成りたりと。其儘氣嫌直り候由。誠に不思議の道理、人智の及ばぬ所なり。其時の異見ゆえ、忠孝ともに立ち候て忝き由、禮に參られ候。眞の道を祈りて叶はぬ事なし。天地も思ひほかすものなり。紅涙の出る程に徹する所、則ち神に通ずるかと存候」と。

忠厚の言、至妙の理、常朝其人の道を體せしこと尋常ならざりしを想見するに餘りあり。殊に神人感應の理を說示せらるゝ所、至人に非ざれば、發する能はざる言語なり。此理嘗て故蒼海先生より一再承はりしことあり。先生は我等の世代に見まゐらせたる第一の偉人にておはしつれば、此底の至理、自らにして感得せられけんとも思へども、亦夙に『葉隱れ』の憲章者より聞き給ひし所もあらん歟。我は恥かしながら不孝の子、三孝の一つをだに充たし得ず。烏滸がましくも孝道などを說く可き者には非ず。されど愚者も千慮の一得、兩親の生前より一つ自得したる事あり。時ありて親に不足の情起り、あらぬ事など思ふ時『我若し人に生れずして、獸に生れなば如何なりけん。幸にして人に生れたり。扨て此人たる我を造りしは誰なる歟。又身に繋れる種々の辛苦は如何にも怨めしきも、此生なければ、其辛苦すら嘗むるを得ず』と念ひ出れば、兩親の有り難さを今更の如く感ぜられ、前のあらぬ妄念の空畏ろ

しく、吁勿體なしと悔悟しにき。常朝の訓ゆる所も、亦此に在り。我と同じき小器の人々は、此邊よりして工夫を凝す可し。

大慈悲を起し人の爲に成る可き事

是れ武子道の第四綱領なり。孔子の仁を說き、釋迦の慈悲を敎え、基督の博愛を唱へたる、要は大慈悲を起して、人の爲になるに在り。是れこれを人道といふ。武士道の尊ぶ可きは、實に此に在り。是故に武士道には常に人に忍びざるの心あり。此に第四綱領の働一つ二つを示す可し。

「人に意見をして疵を直すといふは、大切の事、大慈悲御奉公の第一にて候。異見の仕樣大に骨を折る事なり。人の上の善惡を見出すは、安き事なり。夫を異見するも、安き事なり。大かたは人のすかぬ言ひにくき事も言ふが深切の樣に思ひ、夫を請けねば力に及ばざる事といふ、何の益にも立たず、人に恥をかゝせ、惡口すると同じ事なり。我胸はらしにいふ迄なり。異見といふは、先其人の受けるか取けぬかの氣を能く見分け、入魂に成り、此方の言葉を兼々信仰ある樣に仕成してより、好きの道筋より引入れ、言ひ樣種々に工夫し、時節を考へ、或は文通或は暇乞杯の折にて、我身の上の惡事を申出し、言はずしても思ひ當る樣にか、先の能所を褒立て、氣を引立て、工夫を碎き、渴く時水呑む樣に受合せ、疵直すが意見なり。殊の外仕にくき者なり。年來の曲なれば、大體にては直らず。我身にも覺あり。諸傍輩兼々入魂をし、曲を直し、一味同心に御用に立つ所なれば、御奉公大慈悲なり。然るに恥を與へては、何しに直り申す可き哉」と。

寔に仁厚の言、譬へば淸泉の巖間より湧き出るが如し。見るさへいとゞすが〳〵し。之を掬びて飮みなんには、身を潤すこと如何ならん。『葉隱れ』の訓示者常朝の家は世々斯道を體し來りし家柄にもや、常朝の言に『山本前神左衛門召仕の者に不斷跡の者あれば、一年の內何となく召仕ひ、暮に成候て、無事に隙をくれ申され候由』といへり。此心ありて始めて我　皇上の『博愛衆に及ぼせ』と戒め給ひし勅語の聖旨を體す可きなり。『葉隱れ』訓ふる所の武士道に綱領として示せる所は、以上の四箇條なれど、全篇に亘りて、訓示の本旨をしぼれば、それと箇條をこそ設けざれ、尙ほ綱領に入る可きものに、左の三意義の存するを認めたり。

信義を守る可き事
品格を重んず可き事
萬事に注意す可き事

即ち是なり。此に之を紹述して武士道の在る所を明にせん。

信義を守る可き事

常朝は教へて曰く、

「人の心を見んと思はゞ煩へと云ふ事あり。日頃は心安く寄合ひ、病氣又は難儀の時大かたにする者は腰抜なり。却て人の不仕合の時別けて立入り、見廻附け届仕可きなり。恩を受け候人には、一生の内疎遠に有る間敷なり。箇様の事より人の心入は見ゆるものなり。多分我難儀の時は人を頼み、後には思ひも出さぬ人多し」と。

讀みて信義ある人の例に到れば、

「諸岡彦左衛門に用事これある由にて召寄せられ、申聞けられ候一通の事に、神文と申され候得ども、侍の一言金鐵より堅く候。自身決定の上は、佛神も及ばれ間敷と申候て神文相止め候。二十六歳の事なり」と。

是れ人の最も難んずる所、唯これあれば、其人は智愚と賢不肖に關はらず、「可レ托ニ六尺之孤一。可レ寄ニ百里之命一」に足るものなり。人の人たる土臺は實に此に在り。武士道即ち生民の道、吾人倶に是をこれ思ふ可きのみ。

品格を重んずる事

禮儀を重んずる事も、自ら此裏に在り。之を武士道の第六綱と爲す。

常朝の父神左衛門の常言に、

「すら笑ひする者は、男はすくたれ、女はへらける」
「士は喰はねども空楊枝、内は犬の皮、外は虎の皮」

其言は諧謔なるも、其意は凛烈たり。

常朝はいふ、

「兎角武士は頽たれたるは疵なり。男み進みて物に勝ち、浮ぶ心なければ用に立たざるなり」

今のルーズヴエルトをして之を聞かしめなば是れある哉と嘆稱すらん。武士道の膽勇にして且つ有爲なるを尙ぶや斯の如し。而も坐作進退を論ずれば、

「士たる者は、先づ禮儀正しきこそ美くしけれ」
「禮に腰折れず、恐惶に筆潰へずと、親神左衛門申候」

宛然たる文明世界の僻氣、其妙實に言ふ可からず。

其出言に言ひ及ぶや、

「歌の讀方に、續けからてにはが大事なりといへり。是れを思ふに、常々の物言ふ事、心付くべき事なり」

又曰く

「武士は當座の一言が大事なり………此一言が心持あるなり、口にて言はれぬものなり」

近世にても三田の福澤翁は、町人氣質のうちに武士道を存せし人なりき。此頃或方にて翁が物したる一幅看たりしが、筆太に「士曰女曰一言最重」と書けり。例の福澤流の漢語にて士の曰くても、女の曰くても、一言が最も重きものなりと敎へしなり。常朝の言へる所と、符節を合せたるが如きも亦妙なり。

節儉も亦訓戒の一なることは、前の内は犬の皮とあるにても知らる可し。然れど他の專らに節儉をいふに異なるものは、外は虎の皮といふ所に在り、常朝之を解して「内は費なき樣にして、外めを嗜むなり」といへり。味は實に此に在り。されば、

「何某當時儉約を細かに仕る由申候は、宜しからざる事なり。水至て淸ければ、魚住まずといふ事あり。藻がらなどの有る故に其陰に魚は隱れて成長するなり。少しは見のがし聞のがしのある故に、下々は安穩なり。人の身持杯も此心得ある可き事なり」と。

奢侈をこそ戒むれ。其の屑々たらざるところ自ら大人の意氣を見る。人には此餘裕ありたきもの也。

「葉隱れ」傳道者の言、時に優にやさしきのあり。左の一節を讀め。

「風體の執行には不斷鏡を立見候て、直したるが好し。(自分若き時理發なる顏といはるゝが心苦しく)此顏仕直し申す可しと存じ立ち、不斷鏡にて仕直し候。理發を面に出し候樣にては、諸人請取り申さず候。摺り座りてしかとしたる所のなくては、風體宜しからず候」と。

善い哉古武士の心を用ゐしことや。之に就きて想ひ起しゝことあり。久阪玄瑞は常に懷中鏡を懷に收めし由なりしが、元治元年の秋、京都の御所に討入りて、當時の所謂會姦薩賊を相手に火出づるばかり終日戰ひ、今は是までなりといふ時、御築地の内に立ちながら、例の鏡を取出てゝ之に向ひ、つくづく自家の顏を看居たりしが、莞爾と打笑み、物靜かに腹搔切て失せたり

しとぞ。其の今はの意を付座すれば『孔曰取レ仁。孟曰成レ義。唯其義盡。所ニ以仁至一。讀ニ聖賢書一。所レ學何事。自今以往。庶ニ幾無ニ恥』とほゝゑみたるならん。大丈夫たらんずる者、斯くそこあらま欲しけれ。

萬事に注意す可き事

是れ武士道の第七綱なり。其方法として示せる所の一端を擧げん乎、

『手跡の行儀正しく疏略なきより上はあるまじけれども、其分にては堅くれ賤しく見ゆるなり、此上に格を離れたる姿ある可し。諸事に此理あるなり』と。

常朝は之が實例を示して曰く、

『彌三郎へ色紙を書せ、紙一ぱいに一字書くと思ひ、紙を書き破り候と思ふて書く可し。善惡はそれ者の仕事なり。武士はあぐまぬ一種にて濟むなりと染筆也』

妙は自然に志す所に在り。

『武藝に傾脊して、弟子抔取つて、武士を立つると思ふ人多し。骨を折て漸く藝者にならるゝは、惜き事なり』

我幼少の頃、福岡に有名なる武藝者あり。刀槍拳法皆其奥妙を極め、數百の門人を有し、自ら豪傑を以て居りたるが、一日ある心得ある士を訪ひ、酒打酣みて、四方山の話せる中、客が得意の武藝談となり、主人の武藝に拙なきを侮慢しける時、主人は屹と形を改め、側の脇差押取つて過言をなし給ひそ、拙者やはか貴殿に劣る可き、去來勝負仕らん、貴殿に其座は去らせ申まじと氣色ばみて中腰になれば、武藝者は忽ち度を失ひ、低頭して過言を謝したり。其時主人は打笑ろぎ、武士に武藝は缺ぐ可からざる事なれど、其れより上に尚ほ一つ肝要の事あり。魂の据處なり。心得ある可しと諭されたりとぞ。『葉隱れ』の眞諦第一義に達したる人の言動なりと謂ふ可し。

『人中に欠仕候事、不嗜なる事に候。ふと欠出候時は、額を撫であげ候得ば止り申候。左なくば舌にて唇を舐り、口を開かず、又は襟の內、袖を掛け、手を當てなどして、知れぬ樣に仕る可き事に候、くさめも同前なり。此外も心をつけて嗜む可き事なり』と。

注意は此處まで到る可し。

『酒盛の樣子はいかう有る可き事なり、心をつけて見るに、大かた呑むばかりなり。酒といふものは、打上り奇麗にしてこそ酒にてあれ。氣につかれば、賤く見ゆるなり。大かた人の心入にたけ〴〵も見ゆるものなり公界物なり』と。

至言と謂ふ可し。

自發者の言とて、時には可笑き事少からず。されど妙味は此中に在り。左の一節の如きは其一つなり。

『大雨の感といふ事あり。途中にて俄雨に逢ふて、濡れじとて道を急ぎ走り、軒下などを通りても、濡るゝ事は替らざるなり。初より思ひ切りて濡るゝ時、心に苦なし。濡るゝ事は同じ。是れ萬にわたる心得なり』と。

我青襟の時、司法省の法科に在り、或日 に校外に散歩し、乃て歸途に就きしに、驟雨颯と到りければ、帽子傾けて、ひた走り走りけるに、我より先に一人の校友の雨中ゆたかにのそり〱と歸り行く者あり。後より追縋りて之を視れば、日頃親しき仲間の一人櫻井一久なり。我校の短帽は庇狹かりければ、雫は流れて、額より胸へと傳はり、ずぶ濡れとなり居れるも、蛙の面に水といふ樣にて、いと〱平然たり。我れ其肩を搖り、オイ走らうぢや無いかと促がせば、櫻井は往手を指さして『ムム前きも降つとる』といへり。我れ此に至りて、我の天禀遙かに櫻井に及ばざることを自覺したり。當時の校友百餘名、今日之を稽ふれば、大臣となれるもあり、公使となれるもあり、或は次官、或は局長、或は博士、或は代議士、狂簡斐然として皆章を成しつれど、其器度を論ずれば、終に一人として神戶の一辯護士櫻井一久に及ぶ者あらず。其際より之を觀れば、九州の頭山、畿內の櫻井ならん。偶々『葉隱集』を讀みて、大雨の感殊に深きを覺ゆ。最後に常朝が一句を擧げん。

『四十より內は、强みたるが好し、五十に及ぶ頃より、大人しく成るが相應也』

我れ今にして相應の分を思ふ可きのみ。

協約の流行と世界の平和

池邊吉太郎

林外相は本日（九月十四日）を以て伯爵に陞叙せられ、栗野大使、本野公使の兩人も亦同時に男爵に特敍せられたり。これ固より日佛日露の兩協約を締結したる功によることなるべく、誠に結構なる事共なり、吾輩亦之に對して毛頭異存のあるべき理由なし、此等の協約は我國今後の平和狀態を長うするのみならず、又多少世界の平和の足前にもなるべきことゝ思はる。然し近來の如く其處此處に協約の流行し、前にいへる日佛、日露二協約の外、或は英佛或は英露等の協約の存するは何故なるか、其主動者は何處にあるか。此れ果して林外相一人の力か。將た又栗野大使、本野公使の發明せるものか。此事少しく考へ見るの價値あり。吾輩は信ず、如何なる國自慢の人と雖も日本が主動者となつて此等の協約を出來したるものとは思はざるに相違なし。抑今日、歐亞の兩大陸をかけて大いなる形勢を造り出すか、又は變化さするか、孰れにしても國際關係の大本となる國二つあり。此等の協約は畢竟するに此二國の權力平衡上、又は軋轢競爭上、出來せるものにして、今日列國離合の根本原因は主として此處に存す。二國とは何處〳〵ぞ。いふまでもなく英と獨となり。英獨二國の商業上に於ける競爭は實に久しき以前よりなるが、近來は政治上に於ける反目も極めて激烈となれり。英國人も獨逸人も、共に成るべく喧嘩をせずに濟ましたきものと隨分心遣をする樣なり。靜かに二國の爲す所を見れば彼等が二國の喧嘩を謹んで避け、大いに避けんとする態度一目瞭然たり。然し左樣に心遣をし、謹んで避け、大いに避けんとするに拘らず、從來の道筋を案ずれば行掛上、之を丸く收める事は並大抵ならぬ難事と見えたり。英國は日露戰爭中に佛國と協商を遂げ、前世紀以來の舊き六つかしき問題

を片附け、亞弗利加問題を初めとして世界の各方面に亘れる英佛の利害衝突の問題を決着せしめたり。英國が斯く佛と手を握りたる底意が、果して獨乙を苦しめめん爲めか否か、吾輩にはよく分らざれど、其結果よりすれば確かに獨逸皇帝の癪に障りしことは疑なし。獨乙人は今に至るまで依然英人に對して、佛人が獨人に對する以上に、イヤな感じを有しつゝあり。而して獨人は英人に對する此鬱憤を洩さんが爲めに、却て佛人を踏附けたる仕打をなす。モロッコ問題の如きは明かに其形跡あり。カサブランカの港は獨逸が非常に欲しがりしものらしく、而してそは該港が地中海と大西洋の海權上必要地點なるが爲めならんと思はる。然るにアルゼシラスの會議に於て、遂に獨逸は其目的を達するを得ず、該港は矢張佛と西との共に勢力を持する所となりたる如きも、獨逸の切り込んだ事も亦夥しきもの也。當時獨佛双方共大力味に力味て、議整はずんば兵力に訴へんとする意氣込を示したり。而して佛國の後押しには或は英國の力も籠りしこと、察せらる。

されど當時佛國の兵力は到底獨國の敵にあらず。英國を頼みて主戰論者たりしデルカッセ氏は辭職するの止むなきに至り、佛人涙を呑んであの事件の形をつけたり。當時佛國が獨逸の壓迫を感じたる事寔に尠少ならず。是れ佛國がデルカッセ以來の親英政策を追うて、遂に英佛協約を結びたる所以なるべし。然るに此協約は又獨逸皇帝をしていよ〳〵苛立たしめたり。英國側にても英佛接近は以前よりの持論にして、殊に現內閣員などは最も熱心に之を唱導したるもの、佛國の希望と相合して、英佛の協商は容易に成れり。而して英國は佛國と結べるのみを以て滿足せず、佛國を通じて一方には伊太利と他方には西班牙と近つき、伊西と親善して以て地中海に勢を振ふ。此地中海問題についても亦獨逸はあんまりよい眼を以て見て居るべしとも思はれず、のみならず伊太利は直接に獨逸の同盟なれば、英國が之に手を附けるを見ては甚だ癪に障らざるを得ず。夫れ故に如何にしても英國に對抗するの策を案出せんとするが獨逸の希望也、且つ今一つ獨逸の癪に障

りたるは英國の露國にも近けること也。これは佛國の手を通じてか否か明かならざれど、兎に角英露協約の事實としてあらはれたることは獨の非常に不快とする所也。つまる所、英國は一方には佛と露に手を附け、一方には伊西を引き込みたり。こうなつては獨逸も英に對抗すること頗る困難に歐洲に於ける英獨の平衡は保つべからざるに至りたり。嘗て歐洲中原に覇を唱へたる三國同盟も今年にて期限滿了し、又更らに更新したるも、極めて表面丈けのものとなり、今日は獨乙の賴みとすべきもの殆んど無く、全く孤立の姿となり了らんとす。こうなりては獨逸も心細からざるを得ず、故に彼は大に露國に近かんことを望み且つ求めたるも露獨兩帝の會見等の結果はこれも遂に失敗に終りたるが如し。英露協約成て中央亞細亞に於ける兩國の利害調和せられたる今日、露獨兩帝の會見の役に立たぬも止むを得ぬ數ならんか。兎に角今日の政界に於ける第一の見物、第一の大事件は英獨の權力平衡の爭なること論なし。而して歐洲の中原に於ける兩國の現在は英勝ちて獨負けたるが如きも、而かも英獨二國の競爭の範圍は決して歐洲のみに止らず。亞細亞の方面も勿論其範圍中也。獨帝の亞細亞に對する野心は決して少ならず。少ならざればこそ、馬關の條約に干涉をもしたれ、膠州灣をも占領したれ又近時西部亞細亞即ち近東の方面にも手を伸ばしたるが此方面に於ては頗る具合よきが如し。而して具合よければよき程英國とは利害相衝突す。獨のすることは英が氣に喰はず、英のすることは獨が氣に喰はず、其衝突の場所廣くして根底は深し。誠に困つた代物なり。而して若し歐亞をかけて大いなる爭ありとすれば日本も之れに捲き込まるゝなきを保せず。何れかといへば無論英國に捲き込まれて居るを拒む能はず。先頃の日佛協約、英國は大賛成也。其唯一の同盟國たる日本と、英國が親み初めたる佛國と協約するとなれば英國の大賛成は理の當然也。日本は金を借りに佛國に行けり、日本の外務省と英國とチョと耳打をして相談一決、英國は小躍して悦べり、日露協約も亦同じ事也。日露協約は英露協約よりも早く出來た

りたるも、露國に接近策を講じたるは英國が先にして日本は後也。英國が中央亞細亞に露國と妥協したりとて、日本も必ずしも極東に於て露國と妥協せねばならぬとの筈もなかるべし。其間には何か屹度旨いことあるに相違なからん。日本と雖も一々英國の手先きに使はれ居るべしとは信ぜられぬ事なれば也。然し結果よりいへば日本の爲す所は皆英國に都合よき事のみなり。英國の御誂ひ向に出來る樣なり。或は極論かも知らねど、此等の協約は日本の爲めよりも寧ろ英國の爲めになる方多かるべしと思はる。林外相は英國より勳章を、栗野大使、本野公使は英國よりナイトを授けられても決して不當ならじと考へらる。此文の初めにいへるが如く近來の協約は日本の爲めに効なしとは思はれず、日本の平和狀態を長うし、延ひて世界の平和にも幾分の足前あるべきことと信ずれども、然しこれは英國が力を揮うて獨逸を抑さへ得ることを條件としての事なり。若し抑へ得ざれば隨分厄介なる結果を生ずべし。獨逸はなか／＼の怪物なり、若し英が獨を抑へ切れぬ時は彼は隨分大した事をやり兼ねぬ奴也。彼は將來支那に於て如何なる事をなすべきか、而して英國は之に對して如何なる程度まで日本の肩を持つべきか。英國がよい具合に働くならば近來の協約は日本の爲め、世界の平和の爲め結構なることとならん。若し英國がよい具合に働かざる時は可なり厄介なる問題なるべし。吾輩が協約の流行は幾分世界の平和を保障する力ありと云ふもの、呉れ／＼も英が獨を抑へ得る事を條件としてなるを忘れざらんを希望す。（文責在記者）



新聞と雜誌と著書

三宅雪嶺

故陸羯南は新聞記者として文才を發揮し、頗る言論界に重きを爲しゝかど、今後暫く新聞記者として文才を發揮せんと思ふものあらば、恐らく失望に終はるを免れじ、羯南の名を好まずして文名自ら揚がりしは、能力の他に優りしに因るも、又た其の時代が新聞に於て之を認めしに因らずとせず。即ち明治二十一二年より十數年の間大に力を論文に致すことを得、問題の稍々重要なるは五日若くは十日に亘り、時として三十日の長きに及べり、而して羯南の長處は殆んど遺憾なく此間に顯はれたり後ち歲月を經るにつれ、新聞はその日その日の問題の解釋を旨とし、僅に數日に續くも尙ほ長きに過ぐるかに掛念せらるゝことゝ爲りたるが、斯くては如何に文才を發揮せんとすとも得て能くすべきにあらず。羯南をして長文を書くことなく、始めより今日の如き新聞に從事せしめば、能力の遂に認められざりしやも知るべからず。

今の新聞の體裁は今の時代が之を作れるもの、社說の如きも現狀の如くにして可なり。されど此の如くんば最早や大なる文才を要せず、常識を以て一通りの解釋を下し得れば足る、文字の間に多少の巧拙ありとも何ほどの事にあらず、此に注意を拂ふの讀者も多からず、尋常の文才あり、尋常の判斷力あり、而して幾許か、規則立ちて黽勉すれば、事優に以て辨ずべし。しかし其れだけ能力を顯はす機會の乏しきを承知せざるべからず、新聞に執筆して文豪たらんとするは、文官試驗を受けて政治家たらんとするに似たり、必ずしも不可能の事とせざるも、順序の然るべき所とも思はれず。當今の新聞は文豪を出すべきものならず、偶々文豪の出でたらんには、別に相當の事情の存せるなり。世界に多くの新聞あれど記者よりして文豪となれるは比較

的極めて少し。新聞としては倫敦タイムス最も名高く、之れが關係者としてデレーン最も顯はれしが、こは文章よりも寧ろ編輯事務に於てせしものにて、文を綴るも社論を敢てせざりき。社論を分擔するは他に人あり、無名にして入り無名にして終り、時に名を知らるゝも、狹き範圍に限られたり。日本の新聞は、初めこそ大抱負を抱いて從事せしものありたれ漸々器械的に傾き、今となりては以前の如く文才を發揮すべき餘地なし、新聞には新聞の面白味あれど、文を樂むべき所にあらずと知るべし。

獨南の爲しゝところの如きを爲さんとせば、宜しく雜誌に於てすべきなり。文才の雜誌に顯れたるは擧げて數へられず、英國にてはエデンバラー(ジエフレー、シドニ、スミス、ブローハム、マコーレー等の關係)クヲーターリー(ウオータ、スコット、コラリッヂ、ロッカルト等關係)ブラックウッド(デクヰンシー、ウヰルソン「クリストフア、ノース」等關係)、乃至フヲートナイトリー「リユイス、ジヨン、モーレー等關係)、コンテンポラリー、(テニソン、グラッドストン、ラスキン、ハクスリー等關係)ナインテーンス、センチユリ(テニソン、グラッドストン等關係)の類に近代の文豪は殆んど皆な網羅されたり文章らしき文章、論文らしき論文は實にその中に現れぬ、新聞ならば幾日にも亘るべきものゝ收められたるなり。我國新聞の論説は多くその日の事に限らるゝと共に、雜誌は、大論文を掲載するに傾くべき筈なるに、今日にては猶ほ然る能はず、論文を集めたるは或る學會より出づる學究的のものを除いて他に之れ無しと云も妨げず、大抵雜錄若くは小説を交へて紙面を賑し、多數の目に觸れんことを勉む從つて眞面目に論文を書かんとするものも少く、偶々長きものあれば論説の速記にて甚だしく冗漫に失せる文字なり。今日の事情として或は已むべからざらんも、聊か遺憾ならずとせず、文を以て世に立つには雜誌に於てするの順序なるに、之に適當なるもの、有るか無きかの有様なり。されど纒まりたる思想を發表するに雜誌の方新聞より都合好きこと言ふ迄

もなし、此の頃己れの作れるところを集めて一卷の書と爲すもの多くは雜誌に出てたるを集むるを常とす。中には新聞に載せたるを集むるもあれど、こは比較的甚だ少なし。新聞の單に一日の讀草にして、翌日反古となるに對し、雜誌は稍々永續性を帶ぶ、今一層永續性を帶ぶるやうにありたし。世の進歩に伴つて改まるに相違なきも、文を念とするものには、新聞雜誌に於ける此の種の區別を察せざるべからず、材料を精撰し、文章を推敲するが如きものは、雜誌に於てすべし。

さはいへ是れ唯だ雜誌の新聞よりも永續性なるを、いふに止まり、謂はゞ五十歩百歩なり、文章の價値は畢竟するに著書に存す。力を籠めたるものは雜誌にても尙ほ不可、著書ならずんば十分ならず。文品を判斷するものも、著書に現れたるを以てするが當然にして、僅にその日限りの論文、又は一週一回一月一回の雜誌に出てたるを以てすべきにあらず。斯かるものに對しては批評も淺薄なり、善い加減のものなり、其の批評家は斯かるものに拘るべきにあらず。短篇にては技巧の見ゆるところあり、才の察せらるる處あれど、其力量に至つては知るべからず。短篇を以て判斷を請ふものは場當りを求むるに止まる、惡しく言へば一時を瞞過せんとするなり。新聞にては到底平素の懷抱を幾程も顯はし難し、新聞には新聞の職分あり、之を樂むものの從事すべきところにして、此處にて己れの文才を發揮せんとするは、或る特別の場合を除いて能くすべからず、之に比すれば雜誌は可なり、それ程に消滅し易からず、エフエメラルに非ず、以て傑作を出せるも稀れならず。而も尙ほ大に力を用うるに物足らぬ感なしとせず、文に志ざして之を遂げんとせば著書を敢てするに若くはなし。爲すべきを忘れて爲すべからざる歲月の早くも流れ、顧みて惘然たるとあらんか、固より著書といふも、謂ゆる汗牛充棟、有りと雖も無きに異ならざるの多し斯かるものに焦慮するは面白からぬ事とせんも、事には自ら一定の徑路あり、若し著書に於て煙沒すべくんば、雜誌は尙更なり、新聞は尙更なり、

文名を得るを以て無用の事とし之を避くることならば兎も角、以て一地歩を占めんと欲せば箇中の消息に惑ふべからず。之を喩ふれは、新聞は歩兵なり雜誌は機關砲なり、而して著書は大砲なり、陸軍は歩兵を重もとせるも、機關砲大砲の必要の次第に加はりつゝあるを見る、海軍に至りては主として大砲を用う、小銃の用ゐ易きを思ふてその他を忘るゝは誤れり。（雜記）

文章論

山路愛山

先日上總國九十九里の濱片貝村に家族一同避暑したる砌、成東にて闇齋學をする某君、わざ〳〵閑居へ訪問いたされ。一夕色々の談話したる其折フト思付たるは闇齋學にては講釋を重き事にし、其一派にて一廉の先生といはるゝ人には必ず門人の物したる講釋筆記。或は語錄樣のものあり。左樣のものを見たらんには文章修業の上に益あるべしと思ひ、某君に請ひて一二册借りたれども遽かに歸宅することになりて僅に飛々に拾ひ讀みたるのみにて翌日直に返却したり。さりながらそれだけにても先賢の一話一言。中々に興味深く覺えたり。闇齋學者は實行を重んじ文章を以て塵埃同樣に心得るが其自慢なれども德あるものは必ず言あり。先賢が粧飾も外聞もかまはず。天然自然、率直に言現はしたる詞にも、其德は爭へぬものにて、自ら味あり。文章は畢竟性格の發露に過ぎずといたく感じたり。それにつき近頃の文章に些か不平あり。愚見を開陳して世上君子の批評を待たんと欲す。抑も文章は必ず達意を主とすべきものには非ず。物徂徠先生も達意を主とする文章は公事師の訴狀の如きものなり。公事師は必ず相手を言負して自分の訴訟に道理あることを十分に

言張り、裁判の役人にも成程と合點さする樣に書かねばならぬ故、道理も十分に立つ樣に一から十まで巨細に書立つるなり。さりながら左樣に十のものを十二分に云ひては含蓄も無く、餘情も無く、讀む人は唯其平凡に飽くべし。文章は左樣のものに非ず。言ふべき道理も必しも言ひ盡さず。書くべき風情も必しも書き盡さず。言短く情多く、人をして幾たびも讀んで、幾たびも新しき味を覺へしむる樣に書かねばならぬものなり。されば唯思ふ所を其儘書くと云ふ樣なる率直の流儀にては埒の明くものにあらず。必ず修辭といひて別段の修行を要す古文は修辭の模範なればよく／＼玩味すべき者なりといはれたり。此段は我輩も至極同意なれどもそれも事と品に依るべし。たとへば新聞の文章の如きは修辭も勿論必要なれども餘りに文句をひねくりて讀む人に早わかりのせぬ樣にては第一新聞の役目に違ふべしと存ずる也。たとへば東京先日の水害は百年以來の珍事にて後日の年代記にも載るべき程のものなるに、東京の新聞記者果して善く一目瞭然水害の模樣を寫したるものありや。大騒ぎのテンテコ舞にて文章も踊つたり跳ねたり致し居れども、記載の實質は甚だ不分明にて詞多くして實少く、迹にて參考になるものは少し。天明六年の水害を曲亭馬琴の記したるものを見るに詞多からず、而も要を得たり、當時の光景見るが如し。馬琴の如き歴史的の大家を以て今の雜報記者に比するは氣の毒なれ共、さりとては餘りの懸隔ならずや。凡そは此頃の新聞雜報は總て煽情的にて針程の事を棒程に云なし事實に頓着せず、文章にてごまかすが多き樣なり。こは獨り雜報のみならず論説も同樣なり。但し新聞の論説にて讀んで直ぐに分るものは時事新報のと、池邊君の朝日新聞なり。之に加ふるに蘇峰君の國民新聞東京だよりを以てし、以て解し易き文章の三幅對とすべし。其外は或は初學の學生が妙に六づかしき文字をひねくりて同輩を嚇す樣にて、讀みながら笑止に存ずる事多し。今の世の忙がしさに一寸讀んて分らぬ樣なる新聞社説を書きて得意がる人の心は如何なるものぞ。眞に氣が知れぬとは此事なるべし。

それにつきて我等の懺悔話あり。今より十餘年前、我等或る時舊友に會し、其人の寓所にて半日を費したり。此人は髯などを生やし何會社に勤めて、其會社にては中々幅の利きし男なり。扨四方山の話も盡きて、各、枕引寄せて横になりしに、彼れは机上の「國民之友」を把り臥しながら仰いで高聲に讀み始めたり。我等默して之を聞くに氣の毒なるかな一頁に五六所も誤讀したり。我等此時心中に發起しけるは髯の生いたる會社員にして讀むこと能はざると此の如し。蘇峰先生「國民之友」を以て自ら任ずと雖も是れは「學生之友」にして「國民之友」に非ず。眞に「國民之友」たらんと願はゞ今少し和らげて書かねばならぬことなりと其頃深く感じたり。それにて思ふに福澤先生の見識こそ恐ろしけれ。先生は始めより文章の故格を破壊し誰れにも分り易き福澤一流を立て、それにて生涯を貫ぬかれたり。今の時事新報の社説記者などは先生の皮膚をのみ學びて、其精神を閑却したる看なきにあらざれども猶ほ達意の一流を守りて世の習に染まざるは先生の遺徳といふべし。文章は固より達意をのみ主とすべからず。さりながら新聞の雜報、論説などは天下萬衆が相手なれば成るべく分る様に言ひて貰ひたく存ずるなり。此頃の新聞社内幕を開くに論説は猫の尻の様なるものになりたり。普通の雜報も必しも新聞社のドル箱に非ず。新聞社のドル箱は俗受けのする猥褻なる特別の記事なり、左樣の記事を多く書けば讀手も増加する由なり。我等竊に按ずるに是れは其筈なり。今天下の新聞論説に俗人の讀んで分りそうなるものは少し。悉く是れ彼等に取りてはチンプンカンなり。平民の灸所には少しもとゞかぬ無意味の論説を書きたりとて、それを讀まぬは當然なり。今の儘にして置いたらば新聞の論説は自然に立ぎえとなり、猥褻なる雜報のみ繁昌すべし。我等は重ね重ね笑止に存ずるものなり。平民にても「オイ兄弟分、しつかりしねへじやいけねいぜ」と云ふ樣なる筆法にて、彼等の言はんと欲する所を言ひ、彼等と呼吸を同くし、彼等と言語を同くし、彼等と感情を同じくしたらば、左樣なる論説は必ず好んで讀むべし。

今の論說は平民に取りては甚だ遠通寺にて、廻遠く、堅くるしく、分り惡くきものなり。されば我等は新聞の論說などは修辭よりも達意の方に重きを置かれたく存ずるなり。且又修辭を主とせねばならぬ美文にても餘り氣取過ぎて意味の分らぬものあるには閉口す。修辭とは意味の分らぬ樣に、氣取りて書くことを云ふにはあらず。左樣の文章にては讀者は誰迷惑を感ずるのみ、更に餘韻、餘情の沙汰などに及ぶべき隙なからん。眞の修辭といふはたとへば一聲の杜鵑の如し。杜鵑の一聲は人々皆明かに聽き得たれども聽く人の思は千萬無量なり。修辭の妙を極めたる文章は其意義決して曖昧ならず。何人も其意義を覺るべくして、而も之を讀みたるものゝ感慨は無量なり。大者は大感し、小者は小感す。一輪の明月、天に懸りて其影は山野河海に散ずるが如し。是れ則ち少しく書いて多く思はしむるものなり。然るに近頃の大家先生といふものを見るに、其文章の氣取りさ加減、讀者を五里霧中に卷きて窃に自ら之を冷笑する概あり。甚しきは雜誌の數頁を費して書きたる文句が、遂に其何の意たることを解する能はざるものあり。或は何の造作も無きことを山師の玄關大業にひねくり廻はして物體ぶるものあり。我等の樣なる疳癪持ならば一行半にてざつと書いてしまふ程の理窟を五頁も六頁もひねくりて讀者を苦しむるものあり。左樣の先生も分らぬ所が是れ則ち名文なりと自讃すべく、本體の知れぬ神さまは、本體の知れぬ所が尊しとて隨喜する馬鹿書生もあるべけれども文章の道に於ては魔道と謂つべきものなり。まして小說などは勉めて誰れにも分る樣に書くべき筈のものなるに近頃は勉めて分らなく書く人もありと見へたり。何某先生は天下第一の文人の由にて其作物は近頃新聞に現はれたれば拙者も後學の爲め日課同樣に讀み居れども正直の所中々分り惡くし、拙者のみ分らぬことかと存じて一二の人に聞くに分らぬといふ人多し。或人は何某先生は獨りて善がつて居る樣だと云ひたり。我等愚昧故の事とは存ずれども日本人民の內にては先づ讀書子の積なり、其讀書子が欠伸を忍びて勉强して讀む程のも

のならば天下の人民九分九厘までは分らぬものと申して差支なかるべき歟。

それにては折角の著述も唯一人の物好を立つるのみにて濟世の功、更に無かるべき歟。我等は大家先生の猛省を請はざるを得ざるなり。或は左様に言ひたらば、分らぬは君が分らぬのにて我が知る所にあらず、俗に佞するは我等大嫌なり。知己を千載の後に待つものは時代の上に超然たらざるべからず。鶴は高く飛び、雀は低く飛ぶ。汝の分際にて我等を議すべからずとの御叱もあるべし。それも御尤の事なり。さりながら「ダルヴヰニズム」といふ奴は無遠慮のものにて文章の世界をも支配するものなり。分る文章ならば讀手も多く文章家も其收入にて獨立して益ず筆を揮ふを得べし。分らぬ文章ならば讀手は物好の小數者に限り、文章家は全く獨立を失ふに至るべし。衆人皆醉ひ、我獨り醒めたりの自慢も、自己存在を失はゞ詮なきことならん。文運を背に負つて立つ程の人は自愛の道も講ぜられたく存ずるなり。斯申しても猶ほいや／＼存亡は我念に非ず。我は唯我が物好を立つるのみと申されんにはそれは特別の見識なり。我等の議する所に非ず。



佛露同盟破綻の緒

フライジンニーゲ、ツアイツング

三國同盟と均衡を保たんが爲めに訂結せられたる露佛の同盟は急劇に其根底を動搖がさんとする虞あり。其所由を原れるにもと此同盟の主なる利益は露國掌中のものにして耗盡したる露國々庫の充實を佛國の援助に籍る所に存す。蓋し露國は世界中孰の國に於ても佛國に於て借り得るが如き巨額の金を得ること能はず、露國々債の佛國に募り得たる額面は無慮數十億に上れり、頃者又々半官紙の曲筆眞を掩はんとするも詮なく其國庫に多大なる金額の需要を生じたる事露はれたり。債は千九百〇六年度の國債數十億は既に全く費消せられたりと覺ゆ。されば露國大藏大臣は又もや此尻を例の大盡に持ち行きて拭はせんとせしが、此度は佛國より體よき門前拂を喰はせられぬ。抑急進黨内閣員はもとより露國と

政治的同盟を確守するに二心あるにはあらざりしがど、大統領クレマンソー氏は露國に於て歳出入の監督に任ずる國會が存せざる限りは今後佛國にては外債の募集に應ぜざるべしと言明せり。此事は眞實疑なき所にしてクレマンソー氏の此體度に出でたる事がネバ河畔の同盟者を震怒せしめたる事も亦疑なき也。

七月上旬以降佛露兩國の激昂したる新聞紙は筆尖より火花を散らして戰ひ、世人は此面白くして滅多には見ろ事の出來ざる芝居を見物したりき。先づ露國の新聞「ノヴエ、プレミヤ」が唐突として一論説を公にして佛國の現狀を手厳しく指摘し、佛國陸軍は軍事上全く無用の長物也となし、更に露骨に、若し露國が佛明西に是を以て何と致してよろしきや知らずといふ幾十億の元金に利子を揃へて返しなば大なる善根を植え付けたるものなるべし、露國が佛國より



AN ARDENT WOOING.

"My country is that of the Rising Sun—yours is the Morning Calm. We are made for each other. Be mines, or I will carry you off byforce !"

—*Fischietto* (Turin).

幾十億を控制せる程是以上佛國に對しての惡戯をなし得るものはあらざるならん云々と喧嘩を賣る。之に對し佛國新聞は默し居らず。自國の政府に聊か關係を有せる有名なる巴里の新聞「マタン」は佛國の陸軍云々といへるに對しては海陸より國が日本に受けたる攻撃に就き皮肉なる例證を擧げて冷評し、露國新聞が財政上の償却云々といへるに對しては「マタン」のいはく

佛郎西は露西亞より金の無心を受けたる故早速之を貸與へたる所甚だツマラヌ奉公を露國に致したる事となれり。」そを如何にといふに一政府を信用して出じたる十億は國土の富を増進し國民の繁昌を普れからしむべしと思ひきや、無駄なる事に浪費し、哀むべき冒險をなして泥棒の懐を肥さしめ其泥棒は罪を被ることもなし。此冒險の果てが如何に成行きしか實に明々白々。故に露國若し負債を辨濟せんと欲

したる時は吾人は其金を衛戻す等の事をせざるべし、何故とならば吾人はあからさまにも此を以て何と致してよろしきや知らざれば也。かゝる事は決して露國の心配を掛くる處にあらず。吾國の國庫は開放せられたり吾人は露國の食指が動き出すを待てり。

更に他の佛國新聞にて先にモスコウキワチの同盟者に對し示したる深切とは打つて變つたる言をなせるものあり。之に對する返報として彼得堡の新聞「ロシヤ」は其論説に於て「ノチエ、ヴレミヤ」に倍する毒舌と之に倍する無禮の言辭を弄せり。新聞「ロシヤ」は一般より總理大臣ストリピンの機關と目せられたるものなり。「ロシヤ」紙の曰く佛郎西の財界の現狀は外國の國債募集に應ぜざるを得ざるが如き狀態に在りかくの如き境涯に立到つては所詮露國の金程良好なる財源を見出すことは有り難からん。佛國よし露國に金を貸したりとてそは能き商賣にこそあれ決して好意とはいふべからずと。「ロシヤ」の所論は他をして露國は危地にありて佛國の債主に利子を仕拂ふ迄には到底至らざるべきことを通察せしめたり。佛紙の此洞察に答へて「ノボエ、プレミヤ」は更に又佛國との提携は露國の價値を減じたりと言ひ、平和克復後即露國の内亂蜂起の砌佛國政府の有司は露國政府の有司を袖にして革命黨の爲めに一臂の力を假したるを難ぜり。

「ノテエ、プレミヤ」紙曰はく

佛國大使ボムパールの態度こそ近頃推參の極みなれ。彼は我内訌に於ける現狀をも察知せずして漫りに我に賴みもせざる助言を爲し、剩へ巴里政府にて露國政府の官憲に對し殆んど敵意を挾まん許りの振舞に出てたり。露國内亂に關する佛國半官紙の論定、又議事堂に於て露國々債に關する質問に答へたる佛國大臣の一々の説明は佛國政府の一統か露國政府なのけものにして新に生れたる國會と提携せんと欲する者なるが如き感を起さしむるものなりき。かくの如き卑劣にして首鼠兩端を持したる態度を以て露國政府の當局者に臨みたるに我革命的、反抗的團體を煽動せし者たるは必定。恐らく佛國政府の希望する處は露國に在る其大使の行動及存念が革命的露國を隱衛に保護せんとするに在るを認めざらんとするに在りしやも知れず。返す〳〵も吾人は當來に於て佛國政府たるものは我革命黨の極端なる反抗的體度に對し彼等の發言が西班牙政府の發言よりも著しきものたらしめざるが爲め其主張に毫末も理由を與へざらんことを望んで措かざる也。

故に露國政府が此新國債の拒絶に逆へる赫怒の外尙佛國政府に對する苦狀には他の理由有つて存す。蓋し佛國政府は露國革命に直接の挑發を與へたるを以ての故也「ノチエ、プレミヤ」の論として上に抽けるものは露國政府の意嚮に外ならず。蓋しツアールの帝國の狀況に在つては誰も知る如く政府の意見に逆ふが如き言辭を弄したる時には新聞紙にして罪科を免れ得べきにあらざれば也。此悲むべき事變に關しては又佛露新聞紙上の喧嘩の遣取に當つて私の觀察箇人の意見の意義よりも更に進んだる意義を添加するが如き時は双方各半官的に事柄を説明せんと力む。されど實際は事態新聞紙上の論戰といふ丈に止

らず更に以上に及ぼす。

彼得堡に於ける佛國大使ボムパールか誅せられざるべからざる事は公然の秘密にして、佛國御用紙「タン」が已に向に提示せし處の如し。此ボムパール君は彼得堡にては全然駄目と成了りぬ。人は佛露の關係を一層惡からざらしめんが爲めに今や此人を犠牲にせんとせり。露西亞政府はボムパール氏が彼得堡に於ける自己の職責を全然勝手氣儘に云爲せる證據を擧げんとす。即彼は内閣員の賄賂を以て大藏大臣コヽプゾフの密旨を得たり、此密旨といふは昨年九月總理大臣に報じたるものにして、此に仍りて非常に困り果てたる露國の窮狀は揭言せられたる也。此密報は當時眞先に「タン」紙上に公にせられ、從つて佛國にては露西亞の新なる各國債に對し警戒の體度を取るに至れり。尙ボンパールは「ノボエ、ヴレミヤ」が言ひたる如く露國革命黨に對し好意的態度といふより以上の素振を見せたるは事實也。然れども兩國同盟の復舊の目的は彼得堡に於ける佛國大使の移動に仍りて遂せらるべきや否やは問題以上也。ボンパールは急進主義内閣に方つて急進黨と銘を打たる代表者也。而して急進主義としていへばもと初めより彼得堡城内にては受の惡しき方なり。今若し新債の拒絕が計劃を破壞せざりしならば世人は此同盟の破綻にも亦恐らく廻り合はする事ならん。

人は全體の事變が今後いかに發展するかといふ之を多大の興味をもつて追究して止ざるべし。既に露西亞は兩國同盟が滅亡に歸したる後は再び獨乙と結ばんとすなどヽ臆測を逞うするもの各所に現はれたり。到る所に政治的自負心を有せる表皮ばかりの敎養を受けたる人民はカイゼルヰルヘルムが北海の旅行を了へたる後再び東海に於てツアールとの會見が行はるべきことを早くも取沙汰せり。露國政治の駒指の風旨は刀刃の鋒味を缺かざるべきを以て露國大藏大臣は秋期收穫終了後獨乙の銀行家を叩くべきことを主張するならん。されど恐らくば凡てかくの如き報告は先づ夏の間の揣摩臆測の政策の生じたる所に關する而已か。

海牙平和會議の軍備廢止問題

「ベルリーネル、ノイエステ、ナハリヒテン」

英國が提出せる軍備廢止問題の結果は一時は實行せらるべく見ゆるものなれど、之に對する眞摯なる希望の綱は何方より見ても維がるべきものにあらざるべし。評論之評論紙の主幹ウヰリアム、テー、ステッド氏との會見に於て獨乙平和會議參列委員長も如上の意味を以て語れり。

彼は又フォン、マルシャール男爵との會合に關し吾人に下の通報を寄せたり。

「予は放任主義の賛成者也、放任說へ加担する方遙かに價ある事也」とフォン、マルシャール男はいへり。返答の責任なき評論誌の主幹は其味方少なきを愬ふるを得ず。此□の關係或はその他の關係に於てフォン、マルシャール男は第一次の平和會議に敏腕を振ひたるパウンセフォルテ卿に比せらるべし。パウンハフォルテ卿の上衣は此度は英國の肩にかヽら

ずして獨乙の肩上に落ちたり。彼は何事も實際的に行動すといふ傾向あり、頃者吾人に語つていはく、「吾人玆に集會せる所以のものは實際的の結果を得んが爲にして論理の討議をなさんが爲に非ず。余は未だ一度も主義に就いて語りしことなし、只法文を討論するを望む而已。吾人は勿論抽象的には理想に於て凡て一致するを得、然れども會議に於ては如何なる方法を以て此根本の主義により實際的の結果を擧げ得べきかを知らざるべからず。法律の章程に規程せられざる主義の主張は徒らに時を費すものたるに過ぎず」と

此説によりて其爲人を知り得べし英國の委員が討議に附すべき軍備制限問題も獨乙人の見解に從へば法律上の根據に可能性ありや否やの研究仍未だ充分ならざるを思はしむ。世人は此問題に關し尙未だ立派なる形式を見出すことを得ず 其形式の發見せられざる限り問題はフオン、マルシャール男の見に從ひ此事件に關しては未決定の爲、差置くの外あるべからず、蓋し其問題未だ確固なる根底の上に立てるものにあらざれば也。



ATTITUDE TOWARD THE CZAR.
—*Wahre Jacob* (Stuttgart).

併しながら許可せられざるべからざるものを他の列國の幻惑を刈除する爲めに力爭する事、彼の意にては必要にあらずとせり。語りて曰はく吾人凡ての希望して措かざる所は吾人の隣國の上に勝を與ふるにあらずして吾人の側に於て隣國を當惑せずして和解すべき事也。世人が最上の結果を底幾する上は何人と雖一隅に壓迫せらるべきものにあらざれば也。此精神は實に平和會議に臨席せる吾同僚を一貫せる處なるべしと察せらる。吾人は一般の爲め何者をか爲さんか爲めに來れるものにして、吾人の勞に相當する丈の事を何か仕出さざる限り予は此海牙を去らざるの決心也」と。

英國の首相サー、ヘンリー、カメベルバンナーマン氏及外務大臣サー、エドワード、グレー氏が國際的議會同盟の英國委員團體の一員にして頃者海牙平和會議に於て此團體が採用せる決議を齎らし歸れるものと會見せし時も軍備問題の提議に就て議する處ありたり。バンナーマン氏は平和會議の進捗殊の外遲々たる所以を繰返し〳〵述べ、故に人は自國の側

或は自國の爲めに利を圖るには便なるべきも列國委員の出席者多數なる事が所期の進捗を妨ぐるものなるを考へざるべからず。軍備制限問題が平和會議に於て著しき地位を占めざる事はなげかはしき事也。然れども難關は此問題自らよりは寧ろ事情の上に存するものにして今や其半途に在矣、故に此場合に在て爲し得べき最上の策は以前の決心を更に確固ならしむるに在るべき事疑ふべからずとなせりバンナーマン氏は又英國委員は平和會議に於て活潑なる行動をなし、而も正當なる方針に據れるものなるを信じ徹頭徹尾英國の任命を果すべきを期せり。渠は其所説に結論を與へていふ、平和會議に於て自國の所期を誇示するには箇々の委員にては不可能にして實際的好果を收めん爲には委員は平和會議の意向によく一致するの道を知らざるべからざる事勿論也。彼れ委員にして他國と一致せる政策を採らざりせば彼等は恐らく一致を遂げ得べかりし實質に於て譯けもなく成果を危くするを得たりしならんと。サー、イー、グレー氏は説いて曰はく政府は到達の見込ある事共をのみ爲すべき積りなり、此を以て或は軍備廢止或は兵備縮少問題に關し一般の意向に影響を與へ此問題の採用を得將來の平和會議に於て此問題の可决の上に一條の路を開くを得んか。若し平和會議が一の確乎たる方針を有すべくんばそは調和的の處置を執るとの意義に於て然るべしと、彼の希望する所は之と類似の事變に於ける落着に對してとるべき處置の完成の問題はドゲゲルバンクの場合の如く長き部分の要求せらるゝ事にして假令平和會議の進捗が爾來遲くならざりしとも或は吾人の希望せし如くに明白ならざりしとも會議の進むにつれてやがては大速力を以て其事業を爲さるべきを信ず云々と語れり。



ATTITUDE TOWARD THE PEOPLE

獨逸軍略を改む

「ナショナール、レビュー」

英獨間國交の改善は先づ獨が佛國に對する行動の變化に待つ、何となれば英佛の親睦に著き發展を示し、ウイルヘルム二世をして電氣に打たれたる想あらしむるに至れるもの、その本づくところは千九百五年の夏

に於ける佛に對する彼の威嚇に在り、即ち彼は責任者たるデルカッセの首を要求して遂にその望を果し、傲岸なる國民に斯ゝる屈辱を嘗らしめながら、猶ほ以て滿足する能はず、何時かは佛に迫るに我と英との妥協を捨つべきを以てし、捨てざらば干戈を以て見えんと迄強迫したるにあればなり、これ畢竟、當時英佛の親睦なるものは一旦危機に瀕せば忽焉として破壞に終らんのみとの說あり、斯ゝる僻說に傾聽せる勸告者に偶ま誤まられたるもの、ホルスタイン伯が其後直に官職を辭したるもの實はその引責に出でたるものとす、英獨間國交の改善は、獨逸皇帝、ウイルヘラム街、並に各國の首都に於けるその代表者等が、その公言すると單に默識するとに拘らず、我英佛兩國の親睦は誠に英國歐大陸政略の要石なるを認め、彼等の野心を放擲するに至らざれば能はず、去れど此の如きは得て望むべからず、獨逸をしてその政策より主要の武器たる陰謀を拋たしめんことは豹の斑紋を變へ、エチナヒア人の肌膚の黑きを改むるよりも難し、デルカッセ辭職當時の如き、正面より我との妥協に對して異議を挾み、施いてアルヂエシラス會議に迄その問題を新にしたるが、而かもその結果は獨が如何に雄を大陸に稱すとはいへ、彼が佛に對し自ら事を好むが如き邪惡なる攻擊を向くるあらんか、我英は直にその態度を以て自己に向くる攻擊と見做すべしとの事實を、深く肺腑に銘し得たる外、何等の得るところとてはなく、凡て失敗に終るに至り、比處に從來の兵器を變じて煽動的に出で、禍機の中より生ぜんことをのみ目ざすに至れり、ホルスタインやシーマンスや、乃至フチンドンネルスマルクス等の如き鐵火政略は一變してビユーロー侯の溫柔にして平滑なる宣言とはなれり即ちビユーロー侯は世界をして獨は最近四十年間殆んど平和を樂めるを思はしめ、兼て獨の心には列強と親交を訂する以外に寸毫の存するなしと宣言す、去れど斯ゝる甘言蜜の如き表皮の下には、我英佛の親睦を沮害する陰謀が、巴里にも倫敦にも共に新に行はれたり、實に我英の新聞記者等がポーツダム巡遊以來に於て最も進取的に行はれたる運動なりとす、而るに鈍や我無邪氣なる正直一圖の國民は、彼等の目的は實際我英獨間の交誼の調停にはあらず、誠は千八百七十年以來の獨の方針なる英佛兩國を沮隔せんとする一種の政略たるを知らず、敢て彼等の爲に奔走するものあるを致す。痴の至りなるかな。

新戒律條文

「ベルリーネル、ターゲブラット」羅馬通信

「オブセルバトーレ、ロマノ」紙が世の渴望期待せる新戒律條文を公にせしは洵に其時の宜しきを得たるものといふべし、此新戒律條文は宗敎法庭の附正會が世間に慈悲を施せるものなり。此戒律條文は六十五箇條の敎條より成り、凡そ聖典、信仰及本山に關する各般の違犯を責罰せるものなり、此六十五ヶ條中の一ヶ條は敎門不可讀書目の必要を擁護し、獨乙公敎會に對して向けられたりと思しきもの也。此戒條敎文は圖らずも神學上萬般の新方針を生ぜしめ全世界の公敎會の地位に於て聖典の解釋

及教門に對する質議すべき服從に昏惑を招くことゝなりぬ。操觚者が雜を極めて論ずる所は羅馬は幾分か片意地なる要素を以て多く煩はさるゝ所あらざるべしといふ一點に歸す。

イル、メスサゲロ

紙は此戒律條文は法皇に謁見せし最後の折に法皇が繰返したる辭に該當するものゝ、法皇の宣ふ所は「凡そ新なるものは危險なるもの也、故に近世の公教會は分裂と歸服との二者の間に在りて持續するの外なし。只バチカン黨の歸服は確なるべし」といふに在り云々と論ぜり。

比較的自由主義を採れる

アウグスブルゲル、

アベンドツアイツンク

紙はウルツブルクの神學教授ヘルマンセル氏の書牘中より一文を書せり。其書牘に仍り「コリスプ、ロム」紙が最近に掲載せる所即ち彼の僧正の前に於てセル教授が表面上前言取消となせるに對し双方の始末書は嘘八百の魂膽なる事を知りぬ。セル氏は其書牘に於て明かに千九百〇四年正月挑戰狀に署名せしことの實否を爭ひ、(僧正の始末書といふは只シュレール僧正の署名になるものにして千九百〇四年正月廿四日の日附あるもの也)シュレール僧正が彼の主張に關し彼の面前に於て挑戰狀を讀み聞かせたるも之に署名せんことはセル氏の全く要求せざりし所也と辨ぜり、



PEACE ANGEL—"My beloved children."
MARS—"Swear loyalty to your mother—by my sword."
PEACE DELEGATES—"Amen, amen, Father Mars."

アウグスブルゲル、アーベンドツアイツンクは其蒐集したる材料には據る所あつて存すと確言せり即ち

(一)セル氏は又千九百〇五年十二月六日に於て取消を爲さず却りて反對派エズイト教のスツフレル氏の誤解せる説明及從つて起るべき行動に對し彼の教文に説明を與へたるに止る、而して彼はスツフレル氏の誤れる非難を棄却し自己の正當なる見解を固執せる事。

(二)今羅馬の一新聞に戒律條文として掲載せられ各國に電報にて通知せられたるかの挑戰狀の執筆者はヴルツブルクの宗家の牧師カール、ロバート、ギドー、ブラウン博士なる事。

コリエレ、デラ、セラ

紙は新戒律條文の出てたるは次に列擧する大僧正逹の宗敎上の努力の結果也。となせり曰はく、セラフイノー、バヌテリ。デイ、ピエトロ。ラムボラ。コツテイ。フエラタ。レスピギ。メリー、デル、バル。シユタインフーベル。セグナ。ピベス、イ、ツートー和尙等是也。仍バンヌーテリー並にフエラタ、或程度迄にはラムボラも聖書の「自由」討究に關し、なす所ありたる人々也。戒律條文より主として狙はれたる的と成れるものはテイレル及ロイシーの學校也。其他亦正敎の團體に於て、今日の戒律條文は千八百六十四年のものよりも嚴ならざるもの也と認容せられたり。殊に今日の戒律條文は曩日のものと反對に箇々の破戒に對する敎門の罰則の列擧を廢止せる點に於て見る云々と論じ。

ヴルツブルゲル、ジユールナル紙はいふセル敎授は千八百九十九年二月廿七日彼の歸順の前夜尙代議士ケーン氏に向つて、自己の著述は敎門禁閱書中に入れられたりと語り、次の如く自ら筆を執つて認めたり。

危險なるもの戒を犯せるものと目せられたる文章に何等の理由も與へられず又期待せられず、況んや其宣言をや。故に絕對主義と近世文明間の總體の哲學的倫理的說明が決せらるゝが故に此等の總括的の處置は守らるべし。

此判決ありて後五年に至り世人は判決の理由に是非を與へたり、而も彼が正當なるが故也といふにはあらで彼に取りては些も有難からざる恩惠より出でたりといふに至りては何といふべきか。後日に至りセル氏は斷腸の思にて彼か確信の犧牲を供へたる後ヴルツブルゲル、ジユールナルに其門下生の口吻を以ていはしむ。判定は決して彼に取りて酷ならざりき。彼は自己及自己の著書に於て、懷抱せる信念が爲さゞるべからずと命ずる所を爲せり。敎會の命令をば彼亦認めざるを得ず、假令心中には禁閱書會議の意向よりは優りたる見を持したりとするも。云々と。

○　○　○

此最近の例はセル氏と親交あるヴルツブルグ大學敎授連ヘーン博士、キーフル博士、メルケル博士をして獨乙公敎會評議員會より脫會せんとするに至らしめぬ。

附錄小說には五名家の佳篇を收めて、頁數非常に增加したるため、特に本號に限り詞藻欄中の小說及び海內思潮全部を省く。



明治故人評論（六）

齋藤綠雨論

△綠雨醒客

馬場孤蝶

綠雨の病歿したのは、三十七年四月十三日の午前九時過かと覺へて居る。世上では『陋巷で窮死した』といはれて居るが、死んだ場所は横網の交番の裏である。誰でも行つて見られると解るが、陋巷には違ひ無からうが、なか／＼小奇麗な陋巷である。家も、長屋ではあるけれども、三間に臺所付、三坪位は確にあらうと思はれる立派な飛石の敷てある庭のある、何れかの隱居所といふやうなので、此又小ヂンマリとした住居であつた。場所といひ、家といひ、キチンとした小ざつぱりとした所が、いかにも綠雨式である。『窮死』なんださうだが藥も飲めずに死んだ譯でも無く、看病を爲て吳れる者無しに死んだんでも無い。又、香奠でやつと葬式を出したのでも無い。小體な暮方の人に相應な病氣の手當も爲、あの邊に住まう人が呼ぶほどの醫者も呼んだ上で、相應な葬式を出す位の金はあつたのである、左まで富家に生れたといふでも無い人の終末としては夫れほど不當なこと丶も思へず、元來が商賣とは爲らぬ性質の文藝に身を委ねた人の最後としては反つて自然な方であらう。我輩は、綠雨の最期を悲慘とまでは思はず、窮死とも思はぬ。我輩が知り初めた時分からは、係累といふも大分輕るくなつて居たやうでもあり、一軒家を持たずとも暮らせるといふ、まづ氣安い境遇であつた。隨つて氣が向かねば、働かずとも、何うにか爲らうといふ譯、隨分所謂おアシのことは云つて居るし、自ら稱して『錢の子』とは云つては居たもの丶、金錢利得に關しては恬澹であつたので、俗界の人が持

つやうな煩悶は無かつたらう。鋭敏な男であつたから彼様いふ暮方て居たらば、死ぬる時には、十分な手當は出來まい位なことは知らぬ事は無かつたけれども、それに就て常に備を爲るといふ風ても無かつたので見ても、自身の生活は覺悟の上であの通り小さく爲て居たのであらう。綠雨は氣骨ある男だ、己の自信を枉げ品格を下げては、少々派出な世渡を爲たつて何の役にも立たぬと思つて居たのであらう。常識に富んて居た綠雨は、確に自己の天分を自覺し、自己の位地を明に解して居たので、見苦しい射利の運動などは爲無かつたのである。要するに、當人覺悟の上て、あの寂しくはあつたれ、心安い小奇麗な生活を爲て居たのてあるし、又、それが出來るやうな境遇に居たのてある。親があるて無し、妻があるて無し、子があるて無し、まことに無責任な境界てある、洗つたやうな手奇麗な生活てあつた。作物の方から見ても、一冊に纒めることの出來る分は殘る方無く纒めた、書いたものは悉く活版に爲た。殆ど一物の殘るもの無き奇麗な結末てあつた。綠雨死去の當時こそ、我輩なども、悲しい生涯てあつた、哀れな人の身てあつたと、世間並の弔意を表したが、今日になつて見ると、左様悲しがらずとものことと思はるゝのてある。

さすがは風雅の人てある、さすがは世情に通じた人てある。短氣な氣六づかしい生れてありながら、なかなか氣樂な所があり、まことに愛嬌のある男てあつた、拂ふべき所、返すべき所の極まつて居る金ても、手に入いると、封筒に包んだまゝて袂へ入れて、のッそり友人の所へ出掛けて、何うだい出ないかと誘ふ、てはといふので外へ出ると、必らず二人乗の車を雇ふ――相乘て無いと話が出來ぬといふのだ――て、途方も無い遠方まて出掛けて、一寸つと氣取つた所で飯ても食ふのてある。三十年の暮近くかと思ふが、島崎藤村子の森川町の假寓て戸川とも四人落ち合つて、向島から千住へ出て、大橋の袂から車て淺草の中店まて來て、東へ曲がつた所の或る鳥屋て晩飯の馳走を受けたことがある。我輩は、この時に初めて知合になつたのてあ

る。その後も度々左樣いふ事はあつた。眞面目極まつた怒つたやうな顔て、奇言妙語をポツリ〳〵と吐き出して、人をして破顔せしめる頓才は、羨ましい程てあつた。冷嘲の目的はひとり他人に止まらぬ、自分の身の上てすら容赦なく笑物にする。隨分行詰まつた境地に居る時ても、例の悠々たる態度て、自身の境地を冷笑の材に爲やうとする。如何にも男らしい、如何にも快い擧作てある、人に依つてはこれを嫌らふ人もあるが、我輩などは氣樂もので同情心が薄いから、一種の藝術に對するやうな氣が爲て面白かつた。かういふ洒脫な態度は、天分の奇才と、多年世情に通じた人々と交際して得た修練と、相俟つて生じ來たつたのであらう。近頃の書生さんのなかからはこんな人は滅多に出來無い——多分出來無いのが宜いのてあらう。少なくとも太平の兆てあらう、文明の餘澤てあらう。或晩てあつた、『戸川が金を持つて居るから借りようぢや無いか』といふんて、我輩が地下室と名付けた、臺町の岡田——今の閑翠館——の一室へ二人て押しかけると戸川氏は『惜しいこと、今まて五圓一枚持つて居たが、今の先わきへ渡して了まつた』といふ、我輩は、已ぬるかなと失望すると、横て、綠雨が『間一札を容れ無かつたね』とニヤリと爲た。

が、しかし、一體に品格のある、何處かに威力のある男てあつた。戸川氏が、三十八年の夏出京された時に、日本銀行の應接室て我輩に齋藤の死際は何うだつたね』と聞かれたから、『あの男には、君も知つてる通り、一種の威力があつて、人を壓するやうな所があつたが、それが、死期に迫つては、尙一層明に顯はれて如何にも峻嚴な樣子が見事てあつた』と答へて置いた。

作物に就ては、實際力の籠もつて居るのは、何と云つても小說てあらう、自分ては『かくれんぼ』が一番得意てあつたが、我輩などには『油地獄』の方が、一斑の興味を起こさせる所が多くて、解かりが善い。尙晩年の作『朧夜』は文章の凝つたもので、この點ては明治文壇の珍てあらう。『門三味線』は記憶せぬ。が、我輩が特に感服するのは『金剛杵』『霹靂車』などの辨難の作

物である。明治文壇恐らく空前絶後の筆であらう。特に通を振り廻はさゞる部分が最も善い。例へば、『金剛杵』のなかで、世人が矢鱈に青年作家を擔つぎあげるのを難じて、

あゝ君が胸間に在て燦然たる光を放つものは時計なるなからんや時計はもと瑞西國の發明に係る秒を報じ分を報じ時を報ず廿四時即ち一晝夜なり吾人は實に君が時計を得たるを喜ぶトこんなのが所謂青年作家に對する今の批評家の調子なりあわてゝ青年作家の取り込むのを見れば鎖の先は墓口なり時計は常に大屋のを聞いて間に合はせて居るとの事まだしも天保錢のぶら下りしに比ぶればましなるべし。

といつて居るのなどは、水際立つた罵倒だと我輩は、面白さに堪へられぬ、綠雨は通人であつたかも知れぬが、所謂その通なるものが大部此人の作物の邪魔を爲て居る。これにコダわつて實際の文才が延び無かつたのは確であらう。『おぼえ帳』『ひかへ帳』などのなかにある通の講釋は少々ウルサイ氣が爲てならぬ。高が金を出して女を買ふ位なことにあゝまで眞劍な筆を著けずとも宜からうと思はるゝ。境遇と時代との爲に、さすがの才人も妙な方へそれた者であると殘念で堪まらぬ。が、さういふ所を除いた他の部分の、滑稽に富み、愛嬌の豐なのは、是又、常人の企及すべからざる所である。ウキツトとしては、確に明治文壇に獨歩せる觀がある。幸田露伴氏の口から二度聞いた『或某々の二新聞社が合併した時に齋藤君が「黑砂糖と黑砂糖を寄せても矢つ張り黑砂糖だ」といつたので、その新聞社の人々は酷く怒つた』といふ話などは、甚だ面白い。

有磯逸郎といふ人が、今年の六月の『文章世界』に、綠雨と抱一庵とを比較して大分似た所があるやうに書いて居るが、之れは少々コジつけのやうだ。常軌を逸した抱一氏と何處までも常識的な綠雨とは何れの點よりするも同日には論じ難い。世間の人氣を氣にする所が似て居たなどは馬鹿な話である。そんなことを云へば、文士は皆な似て居るといはねばなるまい。綠雨、

抱一の二文士の短命の原因は、此兩士が餘り世間に執着し過ぎたからだと爲てあるのも、少々見當違てある抱一庵は知らず、綠雨の短命は長い間の肺患てある。我輩などは能くあれまて生きて居たことだと思ふ位てある。綠雨は生活の人としてイクヂが無かつたといふのてあるが、我輩などは、綠雨は生活の上手な人てあつたと思ふ。金を取らずに小奇麗に生活して行ける人は、生活が上手てあるといつて宜からうては無いか。て、有磯氏の評論の終には、

若し此二人にして、今少しく文學に不眞面目てあつたなら、或は俗人として失敗が薄かつたらう。

併し乍ら、その著書は極めて平凡てあつたらう。

と書いてあるが。抱一庵氏の文學に對する態度と綠雨の同じ態度とはまるて話が違ふ。抱一氏の態度は決して眞面目ては無い。證據は、その譯文の極めて無法なるに見ても歴然として居るし、又同氏の作物は悉く平凡てある。半狂者と比較されては、綠雨も、餘まりの事に閉口するてあらうと可笑しさに堪へられぬ。

最後に、綠雨の戀愛事件を公にする。輕佻だなど〻君子の叱責は覺悟の前てある。綠雨を品行方正の君子だと誰も思つては居まいから、女との關係を公にした所て、別に不都合もあるまいし、又、幸か不幸か、我輩の知つて居る限ては、相手の女もこれが爲に迷惑するといふのても無かりさうてあるから、思ひ切つて、こゝに公にする。樋口一葉氏の書かれた所て見ると、綠雨は、本所の或る荒物屋の娘に岡惚れを爲て居て、其の家の前を車て乘り越すのが得意てあつたが、その後關係して、横濱の方へ行つた女の容貌が、前の娘に善く似て居たといふのてあるが、多分その横濱へ行つたといふ女は、吉原の江戸町の松中米といふ店に居たのてあらうと思はれる。何んだかそんな話を綠雨自身の口から聞いたやうな氣がするのてある。所が我輩の知つて居るだけていへば、綠雨の關係した女の顏には一種の系統が立つて居るやうてある。前にいつた横濱へ住み替を爲たといふ女は見無いから解からぬがその妹女郎だつたといふ女と——名は忘れた——成八

幡の海紫といふ女と――これは寫眞を見たばかり――緑雨の最後まで傍に居た金澤たけといふ女との間には骨相、容貌にやゝ共通の點がある樣に思はれてならぬ。何ちらかといふと、瘠ぎすな、引き締つて棱のある顏付の女ばかりである。系統ていふと、緑雨自身の顏付とやゝ種類を同うする容貌の女である。松中の女は、年は廿三位てもあつたらうか、無暗に鼻張は强かつたが、それて居て何處か甘い所があるので、緑雨には何時も飜弄せられ通してあつた。多分この女の事は、緑雨隨筆中に二三が所出て居るてあらうと思はれる。成八幡の女も二十三四てあつたらう、それからは、年明になるが何うして呉れると掛け合はれて閉口したと云つて居たことがある。これは三十一年の冬かと思ふ。緑雨はなか〳〵色男てあつたのてあらう。柳橋の或る藝者屋に若い時分食客を爲て居たことがあると云つて居た。三十五年の一月の元日と覺えて居るが、その時分、小田原の緑新道に居た緑雨を訪問すると、茶だの煙草盆を持つて來た打見には二十三位な小奇麗な田舍藝者あがり位には見える女があつたが、我輩は、大分小奇麗な下女を置いたものだな位に思つて別に氣にも止めず、雜談を續けて居ると、緑雨は酷どく調子を低くして、『(覿面)の主義などは全く擲つて了まつた』といふのてあつた。あ、左樣かと、かういふ事には遲鈍な我輩は、初て悟ることが出來た。それから後に、東京ては齋藤の家に居る女は一體何てあらうといふ樣な話が方々てあつたものと見えて、與謝野氏が、手紙て『大兄の家に居る婦人は何んだらうといふ噂が東京ては方々に傳はつて居るが』といふ樣に言つてやると、その返事には『妻にあらず、妾にあらず、婢にあらず、唯の女なり』とあつて、前途は何うなるか解らず、今試驗中てあると云つて來たといふので、與謝野氏共々大笑を爲たことがある。この女が金澤たけ女てあつて緑雨の晩年はこの女の世話に隨分多く爲つたのてある女の詮議はなか〳〵八かましい男てあつたが、まづ本式に關係した女といふのは、右の金澤たけ女て、何ちらかと云へば平凡な婦人てあつた。小田原以來の殆ど

座食の爲に、女の持物を一時典じて凌ぎを付けた事も多かつたので、綠雨は死期に臨んで、別に報酬は出來ずとも、物質上の損害だけは償のつて遣つて吳れと、懇々親戚の婦人に遺言したといふのである。我輩は、この話を綠雨の棺の前で聞いて、齋藤の決して惡人で無いことを今更ならず感じたのであつた。いくら皮肉でも、いくら悟つたやうな事を云つて居ても、人間は人間である。綠雨が晩年に至つてとう／＼平凡な婦人に歸着した所は、甚だ面白いと思ふ。このたけ女と綠雨との關係は鵠沼の東屋で生じたと傳られて居る。かういふ事を公にするのは、デリカシイを缺く事であるのは勿論であるが、綠雨のやうな性質の人の傳記には隱して置く方が宜いか、公にする方が宜いか、我輩には判然とは極められぬので、今日まで默して居たが、格別默して居る爲に故人の利益を増した證據も無いのであるから、こゝにこれを公にする次第である。若しこれが宜く無い事であらば、十分に攻擊せられて、一向に苦からぬのである。

△齋藤綠雨子

塚原澁柿個

綠雨君ですか。私の綠雨君に初めて逢つたのは假名垣魯文翁の—假名讀新聞だか、いろは新聞だか忘れましたが、其の新聞を新橋の竹川町だと思ひます—出して居られた頃で。或る日私が其社を音づれて翁と色々の話をした折り。「時に先生、近日の雜報には大變面白い結構なのがある、一昨日の心中話(兩國の百本杭あたりで有つた心中話だと覺えて居る)などは近來の名文章だが、あれは誰方の筆ですな。」と聞きますと、翁は笑つて、「あの筆者を君に紹介しやうと思つてゐた處。それは彼處のあの角に机を控へてゐるあの靑い眼の怖い男さ。」と云つて、「齋藤君一寸と來たまへ。此が日報社の塚原君だよ。——此人は齋藤賢で、江東みどりと云ふ社中の秀才さ。以後は御心易く願ふ。」と云つて引合されたのが抑もの初めでありました。其時君は伏目になつてにやりと嫌な笑ひを見せられたを、私は今日で

も覺えて居る。其折り私は心に思つた。成る程此の人にしてあの文章が書けるのであらう。何う見ても感情の鋭い、鑿察に敏い、硝子の如き頭腦を持てゐる先生だ。何しろ後來恐るべき文壇の一飛將となる人であらう。と私も實は恐れた。其の恐れたのは右申す氏の文章の奇警にでもあるが、其れよりもあの青白い、今研から出た計りの村正とでも云ふやうな其の凄い眼でしたよ。其れから其後一度か逢ひましたが。君も泛交が嫌ひ、私も出不精といふものだから、其の以來は打絶えて仕舞つて居たのが、君が例の「かくれんぼ」を書かれた時でした　其頃日報社に「伊勢乞食」なる人があつて、――尤も此名は「正直正太夫」に逆へた名て。――右の「かくれんぼ」の文章について攻撃を始めた。――すると先生怒つたの怒らぬのと、手負猪の如くに猛つてかの金剛杵、霹靂車の筆法て怒鳴り出しました。(其の駁撃を載せた新聞は今忘れた)處が其の飛汁が何時か私の身にも及んて。その事柄は今丸で忘れて了つたが何ても私が或る者の道具か何かに使はれて、其れが社の非常な不利益になるといふ風聞の様な事を書いたのです。私も突然だから驚きもしたし、殊に社に關繫がある事なのだから棄ても置かれんて、其の事實有無の問合せの手紙を出したのです。と其の翌々日か、先生、社にやつて來て、「や、御問合せのあの事は、更に精探を遂げた處が事實無根で、君には甚だお氣の毒な事てした。で僕は今日君に謝罪に來た」。と恁う言はれるです、其頃の正太夫氏が勢といへば、邪が非だらうが、横に車だらうが、一旦言出した事は是非押し通すと云ふものになつて居たから、私も此の謝罪には更に驚いた。それから近所の西洋料理へ行つて、一盃飲みながら段々話すと追々口が解けて來て。――勿論明ら樣に然うまでは言はんが――、先生、かの「伊勢乞食」なる名を其本人と、私との聯合の名て同盟軍を組織したのだと想つたらしい、處がかの精探を遂げて見ると、其れが勘違へ。私の全然無關繫なる事が判つたので、其れて先生、氣の毒になつて、飛て來たのだと私にも粗分つて見ると、私は寧ろ其の非を遂げぬ、流石は江戸ッ子

の潔よい腸に感服しました。其で私も其れから打解けて話もしましたが。其れに就けても世間では、——恐らく今日でも、——綠雨氏と云へば淚も血も人情も無い、（正眞の血は無い、御存知の蒼い顏だつたが）皮肉一點張り、人を虐めて其の苦しむのを見て喜ぶ樣な、鬼か蛇のやうな人であると思つて居るのは大間違ひ。其の奥の魂は誠に淸淨な、人格の卑くない、一種の奇傑だと私は信じて居る。だから氏の評言を、人は惡だの毒だのと云ひますが、熟く讀んで見ると、皮肉な中に愛情があり、粉韲遺す無しと云ふ下に自から育成の意が含まれて居る。縦しや骨灰微塵と叩かれた人でも之れを虚心平氣といふので味はつて見たらば猛火裏の梅花と云ふ感じが必らず起つて來るだらうと思はれる要するに人情の微の微、粹の粹に洞徹した人で無ければあの評論は出來ますまい。明治の天才と云つたら氏は確に五本の指の中に算へ込まれる人と私は思つてゐる。但し氏は極めて得意であつたが、右の「かくれんぼ」の作は餘り感心されたもので無い。（以上談話）

△綠雨氏に就いて

後藤宙外

故綠雨氏は直接對面して語ると、始終俯向勝な態度を以つて低い優しい聲の用意周到な談話ぶりの人で、折々奇警な語を吐き一寸皮肉も挿むが、絶えず口元に微笑を湛へてゐる、憎氣のない方で文章で見るとは大きに違つてゐた。

常に警句を警句として苦心もし考案もしたらしく、談話の間にも其の取つて置きを折々持ち出す、「惜しいが一つ驚かしてやれ—」と云つた調子で吐く。果して聽手が驚くか、感歎すると、心から悅しさうに微笑んで、俯向けた顏をあげて聽手の顏を一瞥するといふ罪のない人であッた。氏は眞に警句を愛し、警句に苦心し、警句に依つて自ら慰藉された趣が確に其の性質の一面に在つた。此の警句癖が氏の文を鋭利な簡潔な力強いものにさせた利益も多くあつたらしいが、其の弊としては、氏をして非常な遲筆家とならしめた。此の

遲筆と强い名譽心、負け嫌ひとが相持ッて、生活の困難やら金錢上の非難やらが氏を少なからず煩はすと、なッたらしい。勿論この外にも多病てあッたことゝや、人の下に働くことを嫌ひなことや、物事に飽きぽかッた事なども氏を逆境に誘つた原因にはなッて居やう。併しこの始終苦鬪惡戰の間に立つた事は、他から見て至極氣の毒の次第ではあッたが、之れに依ッて一層氏の特長が激成せられ助長せられたといふ効果もあッたかと思ふ。何しろ明治文壇に比類ない異彩を放つたのは事實て、著作的良心の堅固てあッた事や、文章が旨かッた事や、不屈の健鬪家(晩年は稍々衰へたが)てあッたことなどは、誰も異論のないところてあらう。

△綠雨氏のはなし

雪　生

綠雨といふ人は評價の上に異論の多い人だらうと思ふ、現に近頃持て囃されてゐる藤村君が、「綠雨はどこがえらいのてせう」といはれたことを確に記憶してゐる。それは明治二十九年か三十年頃て、僕も藤村君も仙臺にゐた頃のことだから、今はどんな說だか知らないが、とにかくに、日本國中には、當年藤村君と同說の人が多からう。僕も必しも大文豪だとは思はないが併し其の希有な文才は捨つべからざる者だ思ふ、その有無は必しも明治の文壇を輕重するものではないかも知れない、唯この江戸時代の戲作の遺響として得易からぬ才筆が、明治の新文藝と相並んで顯はれて、しかもそれが一方のチャンピオンを以つて目せられてゐたことは、江戸趣味の如何ばかり明治時代の讀者中に殘つてゐたかを證明するもので、且つは新日本の文藝が西洋趣味の移殖ばかりで成り立つたものてないといふことを證明する一根據てある。かゝる意味て、綠雨といふ人は、明治文學史には遺却すべからざる一異彩てある。

　江戸趣味といふものは馬琴でもなく春水でもない、彼は支那文學や歷史の詮索が產出したもので、これは

日本全國の墮落した趣味の代表である、と共に特に江戶趣味といふべきではない、門左や西鶴は勿論上方の產物で、江戶の關かはるところに非ず、として見ると二百五十年の江戶は果して如何なる文學に特色を殘したか。人は或は江戶座の俳諧ともいはう、だが、それも禪宗や老莊に胚胎した蕉風に、江戶的色彩を加へたに過ぎぬ、生粹のお江戶生れのお江戶育ちといふと、畢竟安永天明の輕文學、文字通りの輕文學に過ぎないのである。二百五十年は僅に人間の五代か七代、まだ立派なものは出來なかつたので、しかも、寬政の廓清や天保の改革が、日に〳〵儒道の窮窟な束縛を嚴にしたものであるから、お江戶趣味は妙にこぢくれて了つて自在な發達をなし得なかつた、だから、寬政以後に純江戶時代の產物として見るべきは、僅に三馬などの中本位のものであらう。

　綠雨が江戶式であるといふのは、必竟かういふ意味の江戶式であるといふとて、上安永天明の黃表紙や蒟蒻本から下三馬の中本に至る系統、即ち偉大とか崇高とか、深邃とか靈妙とかいふ側とは全くかけ離れた、いはゞ纖細な怜悧なともいはうか、堂々たる或は敬虔な、態度の偉丈夫ではなくて、機敏な小股くゞりの上手な男、從つて信仰とか信念とかいふものはない、唯常識である、寧ろ宗敎とか倫理とかの迂遠を嘲つて、自己の小智に跨つてゐるといふ風で、さればといつて、自己に十分に信賴する丈の安心があるかといへば、さうでもない、屢心細い弱音も吐かぬでもないが、なるべくはそれを隱して平氣な顏をする。かういふと何か惡人でゞもある樣だが、決して〳〵さうではない、極めて好人物で、小股くゞりに他人の缺點を見る明がある如く、自分の缺點をも實はよく承知してゐる、それを隱して行くことが上手だと思つて、たゞそれに滿足してゐるのみで。他人に非難せられると、その滿足を破られて一時は大に憤る、でも內々はその非難に敬服してゐるのだから、其の憤怒も長持はしない。だから他人を惡口しながら、やはり氣の毒に思つてゐる、其の惡口も自分の小滿足を買ふが爲に過ぎない、いは

と一時の出來心だ。從つて又、偉大な崇高な、自分よりは大いとか高いとか許さねばならぬものは、甚だ嫌である、だから、例の小股くとりて罵る、笑つてゐれば笑つてすます、怒れば時に殊死して戰はぬでもない我慢な氣負ひ性な氣質は、この間から起つて來るので助六の氣負ひも三馬の冷嘲も、所詮は同じ物である、畢竟は氣の小さい、單純な可愛らしい男である。浮氣女に好かれる質である。其人の性行と、その文藝上の特色とが、どこまで一致すべきかは問題で、所謂る戯作は竟畢一時の出來心から起つた、戯作で、其人の半面——か顯れてゐないことが多い。喜三次や春町や京傳や三馬や乃至綠雨の人物如何は、今定めるべき必要はない、その筆を持つ態度はかくの如きであつたといふに過ぎない。

「色者十人」三文で業平や光源氏を翻弄してゐる手際や、「楠軍慮知輪」に楠公をさへ嘲つてゐる筆致は、必竟この態度から來てゐる、艶次郎や慾助を嘲るに豈手間暇を要せんやではないが。綠雨の態度もこれであつた、彼に對してはあらゆるものが滑稽に見える、氏の批評は甚だ意地が惡いように見えたが、實は正直のところ其通に見えたようで、正直正太夫の名は空しからずであつた。その矛盾や滑稽の見當らぬものは面白くない嫌だ、山や海は小生には大きすぎる、やはり東京の寄席がよいとは、氏が僕によせた手紙の一節であつた。

交友や文壇の人々の話があつても、決してえらい人だといつたとを聞かない、西鶴や門左でも、時々滑稽の材料にする、その癖、某は惡人だといふことも殆んど聞かない、一葉には竊に敬服してゐたやうだ、だがえらいとはいはない、只上手になつたといつてゐた、天外は嫌であつた、だが、別に惡い人とも思つてゐなかつたことは確だ。

僕が故人と面會したのは妙な機會で、文士としての氏ではなかつた、僕の知人で世話になつたことのある人の妾が、綠雨の借用證文を持つてゐて、其の證文をさる高利貸に差押へられた、綠雨氏の爲には氣の毒だが、今取り返す方法が立ちにくひといふ話で、當代の

高名な文士が高利貸にいよ〱苦しめられるのも氣の毒だが、何とかなるまいかといふ僕も思ふし、其の妾の方では、（さまで名高い人とも思つてゐなかつたが）勿論非常に氣の毒がつて、何とか話して見て吳れよといふことで、中へはいつたのが最初のことである。例の綠雨君流で、話はついても實行が緩漫で、何でも其の高利貸にも頗る惱まされた樣だつた。

その妾といふのは本は柳橋の人で、氏の青年時代をよく話して聞かせた。氏はハンケチさんといふ異名で通つた者で、何時も恥かしさうにハンケチで口を覆つてゐた、何でも小西などといふ人達が、例へば京傳に對する文魚や、魯文に對する香以といふ格で、氏は勿論金なしに遊んでゐたのだが、少し懷が暖まるとお酌などを集めて遊んでゐたさうで、それに當時の流行兒であつた某妓が、頗るハンケチさんと中の好かつたことは、評判だつたといふことだ。晩年のみすぼらしい程疲せてゐたのは病氣の爲であらうが、青年時代から好男子といふ方でもなかつたと聞いてゐる、其の氣質に自ら人を惹き着ける所があつたことは、この事實に見ても明なことゝて、晩年にも、氏の爲に多少の着物なども失ひ果てながら、臨終までも守つてゐた婦人のあつたことは人の知る所であらう。僕にとつても、綠雨氏といふと自らなつかしい友人といふ記憶が起つて、所謂る文壇の名士といふ風の考とは別物である。

『僕が文藝界の爲に上京した時にも、氏に一臂の力を貸して貰はうと思つた、氏も小田原から出京しても吳れた、だがとう〱約束の原稿は出來ないで了つた。夫の辯解やら斷やら數々の手紙も見た。上京の後に度々面談もしたが、其の出來なかつたのは、要するに何度書きかけても興が乘らぬといふので、思ふに其時の氏は從來の江戶風を離れて、明治式の批評家をも驚かさうといふ意氣込であつた爲に、終に筆端の自在を失つたものと思はれる。京傳は寛政以後の讀本時代にも、まだ前代の惰力で名は高かつた、其の歡迎の聲に煽てられて書くことは書いたが、蒟蒻本時代の精彩は殆んど跡方もなかつた。思ふに綠雨も書かせて見たら其の通

りに不成功てあつただらう、雨蛙と「かくれんぼ」乃至は覺え帳以外に氏の特技はないのてあつて嘗て、帝國文學に月に對する抒情の樣なものを、稍當世風に書かれたがこれも全く失敗の作てあつた。

江戸式と明治式とは、元來の態度が全然別物てある彼からこれに轉ずるのは、輕業師が踊を初めようといふ樣なものだ、筆の輕いといふことと位は似てゐよう、其の他には類似がないのてある。

踊が唯一の技藝てあると思ふ人には、　は無意味てある。現代の文士が綠雨の價値を認めぬのも無理のないことだ。この點に到ると、單に綠雨の問題てなくて江戸趣味の文藝一般の問題てある。

川柳、喜三次、春町、京傳、三馬、綠雨、とにかくに僕には面白い、理窟は他日に讓ることにしよう。

氏は生れから云つても江戸の本所で、尤も嚴君は伊勢の某藩士だが、江戸邸にゐて明治になつても其邸の家從か何かてあつて。だが氏の話によると嚴君よりも慈母の方の氣質を受けたもので、ことにお母さんの話をせられることが多かつた。其お母さんは何ても江戸の職人の家に生れた方てあつて、江戸兒氣質に富んてゐられたやうて、現に氏が病中に寄宿してゐられた近親も塗師に關係した職業てあつた。其お母さんに就いて面白い逸話を聞いたことがある。氏の子供の時に近い頃舶來した立派な鉛筆を友達が持つてゐるので、氏、も大層欲しがつてゐたが、元來富裕てはないからとても買つて貰へない、頗る殘念に思つてゐると、或る日この高價な鉛筆を一ダースお母さんが買つて來た、それが多くもない銀の簪を賣つて其金て求められたのだと知つた時は、子供心にも非常に有難く思つたと、自身に語られた、純江戸兒氣質はこの薫陶から來たものてはなからうか。教育は中學の半途退學て、特殊な明治の知識は、新聞雜誌から得たもののみてあつたらう讀書は中本や草双紙。萬葉を讀んてゐられたことがあつたが、何か字句を捜して材料にする丈て、精讀せられたのてはない。

△綠雨に就て

幸德秋水

○藝術の立場から綠雨の作物を批判するのは、專門の諸君が澤山ある、門外漢たる僕は只だ我が親友なりし綠雨其人の平生に就て一つ二つ話して見やう。

○綠雨といへば、ヒドく片意地な、僻んだヒネくれた交際い惡い人てあつたかのやうに世間では噂さした、が僕はソンナには思はなかつた、僕が彼と親くしたのは三十一年頃からて、其以前の綠雨は知らぬが、其後の彼れは死に至るまで爾汝の交りが渝らなかつた、此方からマジメにさへ出れば、彼れは極めて誠實て且つ親切な人てあつた。

○成程彼れは多くの人を攻擊した、憎んだ、敵とした、交際を斷つた、僕の手許にも某々氏等を手痛く惡口した手紙も多少殘つて居るし彼れの攻擊と憎惡には、いつも十分な道理を備へて居た、僕は彼れの喧嘩爭論に就て常に尤もと思はぬことは無つた。

○彼れは自身極めて正直、眞摯、潔白てあつたので、世の虛僞、瞞着、輕薄、山氣の多いのが癪に觸つてならなかつた、流行を趁ふこと、門戶を張ること、時好に投ずることを激しく嫌つた、若し斯る事柄に接し斯る人物に遭へば殆ど所謂衣冠を着て泥土に坐するの思ひが有たらしい、雅量に乏しいと云へば云はれる、然し若し之を以て綠雨が今の文壇に多くの敵を作つた理由としたならば、僕は思ふ、是れ綠雨其人の恥辱でなくて、偶々以て今の文士社會が如何なる空氣に滿て居る歟が現はれるではない乎。

○綠雨の文を作るのは、實に苦心慘憺たるものであつた。獨り其措辭の一字一句苟くもしないのみでなく、其材料も亦自身の十分に熟知し興會しないものは決して筆に上すことは無つた、彼は世間多くの小說家の如くに良い加減なゴマかし、間に合せ、知た振りはしなかつた、要するに彼は知らざるを知らずとして恥ぢなかつた、其代り自身の熟知したとては一歩も讓る所がなかつた、然し彼れの知らないことは尠なかつた、

術以外、戀愛以外のヿは何にも知らない人達とは聊か見識を異にして居た、彼の學問見聞は殆ど何れの方面にも亘つてゐた、僕等の如き藝術の門外漢が彼れと長日月の交際を爲し得たのは、全く彼れが嗜好と知識の多方面で、談話の材料に富て居た爲めてある、然り彼は愉快な談話家てあつた、口を衝て出る奇語警句は實に應接に遑なかつた。

○綠雨は藝術家としての自家の技倆を琢き且つ伸はすのに熱心であつたが、而も文壇に黨を樹て派を作り、一種の勢力を扶植し一種の覇權を振ふて其文を賣るのを以て醜陋の極なりと信じて居た、藝術家は其技倆手腕に依て立つべきものてある、學閥若くば文閥に夤緣すべきものではない、とは彼れの常に口にする所てあつた。左れば彼れは曾て其派某社の麾下にも參せざると同時に、自身も決して一黨一派を作るヿをしなかつた、彼れは親切に後進を敎授した、靑年を引立てた、而も是等後進靑年に對しても單に友人として世話するのみて、先生とか首領とかを以て自ら居らなかつた、彼は何處までもマジメな獨立の藝術家たらんとし、政治家、策士、外交家らしき行爲を潔しとしなかつた、是れ實に彼れが晩年落寞悲慘の境涯に陷り、其死後にも澤山の謳歌者を有しない一理由である。

○綠雨を語るに就て一つ殘念に堪へないのは、彼れが肺病に殺されたよりも寧ろ貧乏に殺された一事てある、彼にして多少の財産、若くば一二の保護者あつて、相應の療養を加へたならば、猶ほ若干の歲月を生延び、若干の作物を出すヿを得たのは確かであつた、樗牛さんもエラかつた、紅葉さんもエラかつた、子規さんもエラかつた、梁川さんもエラかつた、死ぬまで寢床で書きつゞけられた、が彼等は兎も角寢床の上に安んじて居られるだけの月給若くば收入があつたさうな、綠雨は夫れすらなかつたのだ、三十七年の春寒く、北風身を切るやうな晩を、骸骨のやうになつて咳入りながら、本所の橫網から有樂町まで、僅かの小遣ひを相談に來たのも幾度であつたらう、彼は其瞑目の二三週間前まで、重體の病苦を忍んで米代を拵へに步いたのだ

今思ひ出しても實に淚の種である。
○恐るべきは實に貧乏である、社會に貧乏てふとを絕たざる限りは、綠雨の如く、正直、潔白、眞摯なる人物は、常に此悲慘の運命を有するのである、僕は綠雨の末路を思ふ每に今の社會に對して、万斛の恨なきを得ないのである。

△齋藤綠雨君

幸田露伴談

齋藤綠雨君の死んだのは惜い事でした、正岡子規君なども同じ病氣ではありましたけれども、子規君の遺つた仕事は俳句と云ふ短かい詩形でありましたから、小さく纒りが付いて、一日は一日だけづゝ成功の痕を殘し留められました。それが小說と云ふ樣な長い形の者となつては然うは行きません、詰り正岡君は同じ病氣でありながら、より多く仕事は妨げられなかつた樣です、勿論健康體であつたなら、もつと澤山の仕事を成し遂げられたでせうが、兎に角あの樣な病體でありながらも纒つた仕事を殘したのは、其の關係した仕事が俳句と云ふ短い詩形であつたからの故もありましたらう。綠雨君の本領は矢張り小說にあつたので、之れは小時間で出來る者でありません、一句一句一節々々宛と書けない事もないが、然う云ふ風にばかりしては出來難いものです、それで綠雨君の晩年は警句を並べる小品文の方面に向つて仕舞つて小說は出來なかつた、之れは實に氣の毒の事でした。

綠雨君の觀察の銳利であつた事や、書き方の皮肉であつた事などは世自から定論がありますから此處には言ひません。

綠雨君は人に依りては隨分打ち解けた話もした樣ですが、元來が無口で、マジラ〳〵と人の話を聽いて居て、之れを直く自家の藥籠中の物となし、あの皮肉な文章の材料に使ふものですから、大抵の人は君を好かなかつたやうです、私は彼の人に對して別に感情を害しも害されもせなかつたが、聞いて見ると外の人には

随分酷な遣り方をした事もあつた樣です、畢竟するに私は或る距離を保つて交際した故もあるでせう。

綠雨君の爲人は私等よりも上田萬年君、與謝野鐵幹君、馬場孤蝶君、野崎左文君などが知つて居るでせう、與謝野君、馬場君は若い時からの友人ではなかつたが、萬年君や、左文君は極若い時からの友人だつたさうです左文君は溫厚親切の長者で、始終綠雨君の爲に盡されました。

私は彼の人の惡まれ口で、今でも可笑しいと思ふて覺えて居るのがあります、大同新聞と云ふて大同團結の機關新聞がありました、それに東京公論と合併して國會新聞が出來た時分です、すると綠雨君は、

黑砂糖と黑砂糖と合併しても、矢張り黑砂糖だ。

と云ふたのです。私はそれまで何方にも關係がなかつたので國會となつてから始めて這入つたのでしたから左まで其の皮肉には感じませんでしたが、何にしろ警拔な惡口には驚かされましたよ、社の連中はもう皆て憎い奴ぢやと怒つてゝありました、何しろあんな惡る口を言はせては實に名人でしたなあ、綠雨君の亡なつてからもその遣り方を學んで居る人を見掛けますが、併しあの風には誰も出來ません、一體綠雨君は非常な神經質で、それに內氣でしたから、ポン〱口に出しては何も言へなかつたので、それ丈けそれが文章となつて銳く出て來たのでしやう、こんな風ですから餘り評判も好くなく、友人と云ふても前に擧げた野崎君などが恐らくは一番親しかつたでせう。

根氣は無かつたやうですが、それも病氣の爲めでしたらう、あんな病氣で發熱頻繁と來ては誰れにしろ根氣も挫けてまし[illegible]からなあ、それですから若し彼の人が小品文と云ふ方面に斗り專心に遣つたなら、却て晩年に於て振ふ事が出來たかも知れません、しかし矢張り長い物を遣る氣があつたので、然うばかりに諦めきりも仕なかつたでせう、兎に角惜い人でした。

作物では「油地獄」と云ふのが好く書けて居りますやうです、この風のものは當時外の人には書けますまい今でも書ける人は少いでせう。

「油地獄」は神經質のウブな人が藝妓買ひをはじめるといふところから書き出した一條の情話で、なか〳〵精細に描いてあります、この風の作は昔にもありますが、あれ程精細に渉つたのはありません、綠雨君自身ては餘り好いとは思ふて居なかつたかも知れんが、仲々よく出來て居ります、未完のものでは「門三味線」と云ふのがあります、之れも好いが何方かと言へば私は「油地獄」を採ります「門三味線」の方は氣取つてる處があります尤も綠雨君は作に眞面目になると氣取つた書き方――技巧を盡した書き方をするので、苦心したものになると乾度通人めき、氣取つたものとなるのです、て讀み行くまゝに思はず知らず案を打たしむるのは多く不用意の小品文にあつたかと思ひます。

早く死んで多くの作物も殘さなかつた人ですから、餘計に申す事もありません、自分で自分の福を疵つけた行も有つたからですか知りませんが、生涯を貧乏に苦しめられ病の中に世を去つた、才人綠雨君の末路は實に悲哀の影を文學史に印したのです。

△綠雨君

秋骨

昨夜は雨中の御使ひに接し恐縮しました。齋藤綠雨君の事に就き何か書くといふ御約束を爲しましたので先頃から切りに考へて居ますが、どうも今の處では私には出來ません。尤も嘗て文章世界に同君の事を書た事はありますが、當時は何の氣もなしに筆を執つたのてして、只今御請求のあつたに付て、同君の事をよく〳〵考へると妙な心持になるのです。

第一生前の綠雨君は何かにつけよく物言ひをつける至極取り扱ひ難い人でしたが、死後の同君も同樣で、下手な事を言ふと、化けて出て來るかと思ふ樣な氣かします。此れは戯談てはありません。綠雨君にはそんな鬼氣があつたのです、今もあるのです。

第二に手紙を御目にかける御約束をしましたが、此れもやめます。同君の手紙は甚だ面白いので、澤山取つて置きましたが、今繰りかへして見ると、次の三種

に分れて居ます。
第一は私の缺點を抉り出したやうなの。
第二は綠雨君自身の弱點を露はして居るもの。
第三は私の友人の事に亘るもの。

御目にかけるなら先づ第一のでせうが、綠雨君の筆を以て抉り出した自分の馬鹿を世間に御披露するのも如何かと思ひます。第二第三に至つては公にすべきものでなからうかと思ふのです。こんな理由から手紙も御免を被りたひのです。つまり御約束を反古にした譯ですが、此れ丈け書いたのでも、或は多少綠雨君を髣髴する事が出來るかも知れませんから、若し是非にといふ事なら此の手紙を公になされても。それは苦しくありませぬ。まことに申譯ない事ですが、書かうとすると、綠雨君が出て來て止めるやうな氣がするのですから、おゆるし被下れば幸です。

△故人綠雨

上田萬年

綠雨の事に就いては帝國文學會で演說して置きましたから、最早、別段附け加へる餘地はない、唯その後氣付いた事柄の中で二三ヶ條だけお話して見たいと思ふ。即ち此前の事柄は皆綠雨の得失を見ることの出來る材料を與へるものと思ふからである。

私が本鄕の彌生町から淺草向柳原町に引越した時、綠雨も同じ向柳原町の妹の家に假寓して居たのだから移轉の御祝ひだといつて小僧に家鴨を持たして寄越した、寄越したは宜いが、その家鴨は生きて居るじやないか、それを籠に入れるとも無く、首を抑へたまゝで私の家の玄關へ來るや否や、おつ放して歸つて仕舞つた。家内のものは非常に困つて逼げ廻る家鴨を追駈け廻す、引越最中の忙い處を非常な人手(ひとで)をかけて狼狽へる、迷惑といつたら大したものだつた、此樣なことをして人を困らして面白がるといふことは之にも限らん

随分好んでしたことの樣に思ふ。

又或る日の事、私の處へ小僧が手紙を持つて來て、唯之を先生に上げて呉れろといふ、披いて見たら中には一枚の半紙の白紙があるばかしで、文字は何も書いて無い、狀袋の上は書に唯上田樣とある、その字體で綠雨が書いたのだと知れたばかりだ、之は何ゞ書いてない處て意味を取つて呉れ、自分の希望するところを汲んて呉れ、問題は何時もの問題だ、定つて居る、言ふ丈野暮だと、斯う考へれとの意味と悟つた、之は一つ自分も曲つて出樣と思つて返事も何もせずに居るとその晩綠雨は自身てやつて來て、その事を話して大笑したことがあつた。

綠雨のする事には識らず〳〵の間に人を驚かし、又人の感情を害する事が有つたかと思ふ、一例を擧げて見るなら、或る時私の家へ吊柹を贈つて呉れた時に、斯樣な手紙が來た。

　　これが先刻申上候品なり
　　　甚すくなく甚まづし

唯唄にも申す
　秩父名物、嗅ア天下につるし柹
其
　柹てござりますとだけの事

唄が假令へば好いか知らんが、人の家へ物を贈るのに嗅天下などは甚だ恐れ入る、併し私は綠雨に左樣な意志があつて書いたんでは無いと、善意に解釋はして居るが、彼の綠雨である、それが書いたとすると、何か左樣な意味に取れぬとも言はれぬ樣である、綠雨を知らない人が、又はその人の妻君などが斯樣な手紙を見たなら、屹度厭な奴だといはうと思う、併し私から見ると綠雨には此處が面白い點である、綠雨の人となりは、如何に彼が惡戲をしても、その惡戲に惡意が混らぬといふ事を知つて居るから、私には面白くて唯笑つて居るのである。

茅ヶ崎から小田原へ引越す時である、手紙を寄越して、畢生の筆を揮つて見たいと思ふ、之を最後の依賴として移轉の費用を辨じて呉れろと言つて來た、て當

時生きて居た理學士の讓君、今の小山軍醫の弟達とも相談して、希望を果さしてやることにした、併し段々後て聞いて見ると、其處て知己の婦人が出來て、その婦人と小田原て一家を持つたといふ事だ、此事は弟始め私などには少しも聞かせずに爲たことて、後から聞いて吃驚した始末だ、肺病と婦人」それて畢生の事業の完結とは隨分困つた考と言はねばならぬ、此處等に綠雨の妙味がある。

綠雨は人を説くにも這入り方を知つて居る男てあつた、併しながらその説かれる人が、綠雨の言ふことを何處までも正直に受け、それて從つたと思つて居たならば甚だ迂遠な考てあつたといはねばならぬ、私などは能く實相を知つて居て、唯綠雨の説き方に感服するのみて、何時もその希望に叶ふ樣にした積だ、多の人は或は此點て綠雨に愛想を盡かしたかも知れぬ、之て愛想を盡かしたとすれば、それは綠雨を未だ能く知らなかつたからだといはねばならぬ。

私が此處に擧げた樣な話材は、考へたたなら猶だ幾等もある事と思う、綠雨と交際した人々から、成るべくその材料を發表されることを希望する。(談話筆記)

次の數節は上田博士が曾て帝國文學會にて演説せられたりといふもの、上に收めたる博士の談話と相待つて綠雨氏の性格を伺ふに便りあれば博士の許を得て帝國文學より此處に抄錄する事とはなしぬ。

綠雨氏は或る點ては非常に生張面な人てありました、綠雨氏が兩親を失はれてから後たつた一人て暮して居られた時、私の友達は同氏より賴まれて下女を世話したことがある、ところが其下女はぢきに同氏の家を出てしまつた、そこて其友達が何故かと聞いて見ると、あまりに窮屈て新聞紙などを疊むのても折目がキチンとして居ないと、始終機嫌が惡るい、あゝやかましくては到底奉公は出來ぬといふことてあつた、これは新聞雜誌などに出された原稿に對しても同樣てあつて、一言一句どころか、傍訓の假名が一字違つて居つても隨分やかましかつたのてあります、しかしかう自分が他人に生帳面てあることを望まれたやうに、自分は他人に對して生帳面を守られたかといふに、之は又仲々さうてない、何事の約束ても隨分生帳面てない事が多かつたやうに承知して居る、若し綠雨氏に對して悪感情を有つて居るとか、又は非常に非難する人がありましたら、恐く私は綠雨氏が他人に對して生帳面てなかつたといふ點てあろうと存じます。

茲に面白い話があります、或る時金融にこまつて、或る友達のところへ、日と時とを限つて金を借りに行つた、これはお互にあり勝ちの事で珍らしくも何ともない、しかし綠雨氏はその苦しい金を便にして出て、やがて途中で逢つた知人と軍鶏屋へ行つて大たばを極めて過半その金を費つて仕舞つたといふことである、苦しいかと思ふと苦しくない、しかし諸君、凡て人間といふものは引括めて見ると、こんなものでは有りますまいか、非常に堅い事を云つて居る先生が必ずしも堅い立派な先生でもありませんから、かういふ事を取上げてお話するのが却て野暮であるかも知れませぬ。

綠雨氏は或る點では又非常に見え坊であつた、隨分貧苦の境遇に陷つても、此點は仲々痩我慢を維持して居られたのであります、平素下駄を買ふには必ず伊勢よして買たもので、どうも香取屋のでは面白くないと云つて居られた。散髪は十六七年頃からのなじみの藥研堀の勝床でなければ心持がわるい、北床なにかはいやだと云ふ風でありました、此等の嗜好は晩年まで棄てられなかつたので、着物でも羽織でも帶でも隨分ひどくなつた物を着けられる樣になつても、やはり昔し通りであつたといふ事であります、一體生帳面の人ならそれ相應にされさうなものですが、其處が綠雨氏の面白い所であります、綠雨氏は又妙な質で、髮を頭の眞中から分けて非常に毛を長くして居た人で私が西洋から歸つて來てからだん／＼攻擊して短かくさせた時でも此頃の寫眞に出て居る位の長さでありました、それに帽子が非常に嫌ひて私は殆ど同氏の帽子をかぶつたのを見た事はありませぬ、生張面な人なら、帽子の似合はぬといふ一種の見え坊から出た見識でありませう、まあかういふ樣に見え坊でありましたが、此間井原君の書いたものを見ると、往來でおでんの立ち食ひをしたといふ事である、これは私共もした事であるけれども、すしてんぷらの立ち食ひなどもした、隨分大家になつてからもしたのであります。

これは紅葉氏の病氣の折及び其なくなられた時に、綠雨氏は見舞狀や悔みの手紙を出されるのに就いて、大層心配されました、どうも自分のありかゞ知れては困るといふ事で、それには郵便も下手には出せない消印が何區だからと云ふのでは面白くないといつて、私の友達の所に來られて賴まれて、其所で其友達が日本橋、京橋、深川などの妙な所へ行つて手紙を投函したと申します、そんなに平生自家の居住を他人に知らせたくないならば、自分の死亡された時に、わざ／＼遺言までして、何月何日何地に於て目出度往生仕るなどといふ廣告はしなくてもよささうなものであります、しかし此場合には非常に生帳面にこれまでも懇意な人々に挨拶して行かれたので、勿論惡るい事ではないが、それなれば又平生懇意にした友達などに、何處に居る位は知らせてもよささうなものである。それで又全くわからぬつもりで安心して居られたのが妙であります。

まだ／＼奇談は多くありますが、こんな事はこれだけとして、茲に私が特に申上げて置きたいのは、綠雨氏の一生に於て私の甚だ遺憾だと感ずる事であります、此の觀察は誤つて居るかも知れませぬ、其の點は特

に諸君の御批評に任かせる事と致しませう、

綠雨氏が毎日新聞に入られた時分に、其社主は報知新聞の社長てあつた小西義敬と云ふ人が持つて居られました、其小西義敬と云ふ人は、年齡僅に十六七歳てあつた、此の文學者の才の秀てた所に非常に惚れ込んだものと見える。或る人は、それは小西義敬氏てはない、川村惇氏だともいふ。しかし私は小西義敬氏と記憶する、此の人が此の若い、まだ世間見ずの、どちらか云ふと、貧苦の中に育つた少年を、忽ちに東京の華奢を極めた紳士社會へ紹介されたのてあります。此の唐突な境遇の變化は、綠雨氏の一生に取りて甚だ惡い結果を生じたと存じます、丁度一箇の貧乏書生を、官費留學生として四五年西洋へやつて、彼地の衣食住の生活を習はせて置いて、扨て歸朝後役にもつけず、月給もやらずに置くと同じ事て、華奢な生活に慣れたものが、一朝其社會から墮落すると、これは誠に不幸な目に遇ふのてあります。理想ばかり高くなつて、勞働するのはイヤになります。勞働しようといふ氣はあつても、もちくづした身體は、勞働に應ずるだけの力を失ふやうになります。從つて小西氏からはなれに綠雨氏が、自からかせいて自分の汗水て取つた金を使ふ習慣を養はないて、兎角他力主義に依賴するやうになつたのは、私のかへす〴〵も殘念に思ふ點てあります。もし綠雨氏に對して、諸君及世間に於て誤解があるならば、かういふ點に基いた失策てあり、缺點てあらうと存じます。勿論初め綠雨氏を可愛がつた人は、何處までも引受けて世話するつもりてありましたらうけれども、それが續かなかつたのは、事實に於て止むを得ぬことてあります。「明星」を讀みますと、綠雨氏が岩崎を自分の身に持たぬのが、一生の殘念てあると書いてある、たゞ見ると相替らず皮肉なことを云ふと思はれる方もありませうが、此境遇を知つて居る私から見ると、實に無限の感慨が其中にある事を知るのてあります。世間の貴族だとか豪商だとか云ふ人の中て、充分に文學を愛し、文學者を愛する人があつて綠雨氏のやうな人に、十分の仕事をさせたら、隨分面白いものを明治の文學史上に遺せただらうと存じます。しかしこんな感慨ばなしはするだけ野暮てす。

最後に、綠雨氏の平素の好きなものと、嫌ひなものとを申上げて、此壇を下りようと思ひます。まづ嫌ひなものは第一火、第二船、船は渡し船ても大嫌ひて、市川に居た時分に渡し船に乘つた所が、向ふから小蒸汽が來たので、眞靑になつて船を返せと泣いたといふ奇談があります。しかし一番嫌ひてあつたのが借金取、……、これは誰てもてある……大町桂月君など綠雨の方てはあまり好きてはなかつたらしい。それから好きなものは第一ハンケチ、第二烏、第三婆、まだ其外にありますが今は申しませぬ。猶他の事はいづれ折を見まして、帝國文學の雑誌の方へ掲載する様に致しませう。

△齋藤綠雨君

戸川殘花

緑雨君とは淺い面識ですから能くその性格を盡す譯には參りませぬが、書かれたものでは「あられ酒」や「みだれ箱」などを最も面白く讀んで居る、他の人の小説を讀むよりは、氏の隨筆を讀む方を遙に興味があると思つて居た、が段々氏のものを讀み續けて行くと、終には批評や諷刺をしたくなく、惡口も言ひたくないのに、仕方なしにゑんやらやつと批評もし、諷刺も言ふといふ樣な風に見える、如何にも書かねばならぬ、罵倒せねばならぬ、更に適切に言へば批評せねば食へぬといふので、始めて筆を執つたらしい痕が歴々と見える、此樣なつては叶はぬ、筆端自ら窘蹙して如何に多くの警語を放つとも空矢に終るのが多くなる、夫の思內に充ちて語外に顯れ、宛ら泉の觱沸として湧くが如く、隻字隻句皆必然の勢に驅られて爭ふて紙上に墜つる底の文章でなくては、諷刺もその力の半を減ずるのだが、その樣なものは之を氏の初年の作に望むべくして中年以後には望むことが出來なくなつた、此中年といふことを判然何時頃迄とは言ひ得ぬけれども、何ても、氏が強く社會から擯斥されない前までは、輕妙な字句の間に氏獨得の諷刺を恣にしたものだ、緑雨君は此頃死んだ綱島君などゝは違つて最近の青年の思潮といふものには觸れて居ぬ、それ故彼の樣に諷刺を恣にし罵倒を逞うしたに拘らず、割合に煩悶も厭世もなく、從つて自殺入水等の危險を伴はなかつた、氏が最近の宗教、哲學、或は文學の思想に觸れられなかつたのは此點から見れば寧ろ幸とする、それから緑雨君の筆致だが、心の奥を刺す樣なものは無いと思ふ、此點から見ると徳川時代の戯作者一九とか三馬とかの潮流と、明治初期の思想とを調和したのが、緑雨君の筆から現れたと思ふ、即ち滑稽、諷刺の徳川時代に發達したものと明治の篁村氏一流等に現れたものとを學んで一丸としたものと見ても宜い、其處へ行くと內田不知庵とは大に違つて居る、不知庵君には徳川時代の戯作者氣質、言はゞ道樂者といふ風は微塵もない、謹嚴なる筆である、緑雨君と不知庵君とは到底同日に論ずることは出來ぬ、社會の闇黒面を描いて人をして顰感せ

しむるは不知庵君輙ち緑雨君に及ばぬが、近代の新思潮を經緯とし、文壇を警醒せし力に至つては緑雨君遂に不知庵君に及ばぬのだ、坪内逍遙氏の「書生氣質」の出たのは十八年頃であつたと思ふ、當時文壇に名乘を揚げたのが此不知庵君と緑雨君、不知庵君は西洋的の批評家である、緑雨君は徳川時代的の諷刺家である、緑雨君の生涯は甚だ悲慘なもので、浮かむ瀬も無く終られたのだが、その悲慘の生涯を氏は如何に觀じたてあらうか、所謂浮世三分五厘的に觀て死んだてあらうか、之は疑問なのだ、否私には左樣とは信ぜられぬ、じやといつて敢て責任を以て飽く迄と言ひ切れぬけれど、先づ想像するところでは、世を罵り人を罵り、その一生を罵り拔いたところを見ると、左程に洒脫な、浮世離れのした考は無かつたと思ふ、一九、三馬といふ輩は徳川時代に於て少しは老莊的の頭を有つて居た人だ、特に兼好とか西鶴とかの感化を受けた樣に見える、勿論讀書によつて自得し、自らも左樣と意識して居るとはいはぬ、それよりも寧ろ時代の思潮が然らしめたと思ふのだ、歷史を案ずるに、徳川時代の元祿享保以後小說家、俳人、茶人等の間に、一種の浮世三分五厘主義が行はれた、その前文祿慶長等の時代から老莊の趣味が擴まつて來て、所謂浮世三分五厘主義もその邊から出て居らぬのだが、しかし賣茶翁とか、深草の元政とか、木下長嘯子とか、或は下河邊長流等は同じく厭世家遁世者といつても氣骨ある厭世家である、遁世家といつても信仰ある氣骨ある遁世家である、而して此等の厭世家、遁世家は多くは佛敎的の人々である、俗世には重きを置かぬ、此意味に於て浮世三分五厘主義だが、併し世を輕くは見るものゝ、漫然輕く見るではない、世を果敢なむものゝ、漫然果敢なむものではない、果敢なむ、輕く見るの底には剛健な、高尚な、神秘的な信仰が籠つて居る、之が又文化文政、天保等、所謂徳川の末世になると、浮世三分五厘の文學者は多いが、眞面目な、高尚な哲學觀といふものゝ除れた唯、一種の道樂者的厭世家と一變して居る、即ち一九、三馬の徒がそれて、偶ま越後の奇僧釋良寬の如

きものあるのは異例に屬して居る、一九の如きは死ぬる時には花火を懐にして死ぬ、遺言てその儘火葬にさせて、涙の會葬者を呀ッとばかりに驚天させた、死後まて人を茶にする料見、大凡そ此類てある、斯ら見て來ると、綠雨君を德川時代の遁世家、厭世家、諷刺家等と同一視する譯にも行かぬが、左ればとて佛蘭邊の過激な革命的筆致ある者とは大に違ふ、それ故私は綠雨君の思想を次の樣に判斷する、德川衰世の洒落者氣質が、明治時代に入り來つた漠とした西洋的思想と渾和したものだと。氏の文章を讀んて御覽なさい、併し私はそれを面白く讀んて居ます。兎に角に明治文壇の奇才てす。

島崎藤村著『水彩畫家』主人公に就て

丸山晩霞

この小說が世に現はれたのは、今より三年前即ち三十七年一月一日、新小說九年一巻の巻首に揭げられたのて、余が歐米の漫遊から歸朝して程經ぬ時てあつたあの主人公に就ては余は多大の迷惑を蒙つて居る、されどその頃は田園生活の時てあつたから、迷惑の區域も狹く、且つは香氣の漸次に消滅する如く、時日と共に其聲が淡くなつて、漸く安堵の思がした。然るに藤村君はあの作頃より名聲が高くなり、都に世活を移してからといふものは、それは〳〵すさまじい勢て、自然派藤村の名は旭日の東天に輝く如くてある。余は君の爲に大に祝賀を表するのてある。然しながら余にとりて最も痛苦に絶へざる事が、その反面に復活した事てある。それは君の名聲と共に、今日世人に忘れられたる處女作の「藁草履」、「から老嬢」、「水彩畫家」とこれ等の舊作を集めて、何とかいふ表題を附し、口繪と表紙を改めて春陽堂から、世の中に再現したのてある。然るに今迄讀まなかつた手合までが、藤村といふ名義のもとに、我も〳〵と競讀する事になつた。忘れられた(水彩畫家)はこゝに又復活して新小說時代よりも喧

しくなつて來た、それは余丈には慥に知る事が出來る、そして(水彩畫家)主人公のモデルの聲は先に數倍して余を苦しめるのである。されど余がまだ田園に隱て居つたならこれ程でもあるまいが、余も生活を都に移したので、新知己は日に日に多くなるから、迷惑の區域は從つて廣くなり、それは〳〵モデルの聲は非常のものである。この八月信州澁溫泉場に開設した水彩講習會に行つた時等、會員の多くはそれを持出し、講習が終つて各所を旅行したが、行く先々で矢張持出さるゝのである、この頃歸京すると來訪の友人も訪問する友人も、余の顏を見ると新しい事件でも始まつたかの如くに持出さるゝ、中にはあの(お初)は今の妻君かねー等皮肉の事をいふものもある、余もこの辨解には困つて、さうさ中々煩悶した戀女房だ等いふて居るが、內心決して心よくない、その度毎に長々しい辯明も出來ないし、それにあの事を問はるゝ度毎に壽命が縮る樣な氣がする。

何故に今となりて八ヶ間しいかと思ふて居ると、或親しい友人のいふのに、この頃二三の雜誌に(水彩畫家)は君をモデルにしたといふ事が掲げてあつたとの事である。物好きもあればあるものだ。元來余はあまり物事を頓着しない性であるが、こればかりは無頓着て居る事が出來なくなつて來たから、こゝに公表するの止むなきに至つたのである。

先づ第一に辯明して置くのは、『(水彩畫家)の主人公は余をモデルにしたといふ世の誤解である』尤もあの主人公のバックの一部分は余をモデルにした事は是認して居る、これに對しては何とも思つて居らぬ。その主人公の余でないことをこれから述るに先ちて、先づ藤村君と知己になつた事も述べて置く必要がある。余と藤村君と知己になつたのは、余が外國行の前で、三宅克己君が信州に來て小諸に世帶を持つたときで、そのとき藤村君は小諸義塾の講師であつて、馬場裏といふ處に住んで居つた。有名な新體詩人といふ事で、三宅君の紹介で氏の家を訪問したのが初めてである。その後余は外國に行つて。歸朝したのは三十五年の九月下

句頃と覺えて居る、歸朝したことを氏に報じてやると早速小諸義塾の生徒て畫を好きな傳吉といふ男を連て余を訪問した。島崎氏の居る小諸と余の故郷禰津とは二里半離れて居る。そのときであつた、一週間に一日遊ぶ考ひて小諸義塾へ圖畫の講師に出てくれとの事てあつた、小諸義塾は木村熊二といふ人が塾長て、講師は妙な人間の集りてあるし、殊に束縛の無い講師といふのてあるから、余は承諾してそれから出る事になつた。其後は一週に一日は氏と會話するのてあるから、余が歐米漫遊の顛末は語つたのてある。それから藤村君は何か長いものを書き始めたとの事てあるが、誰にも秘して居つた。三十六年の冬に近い頃と覺えて居るが、一日塾の授業が終ると、見せるものがあるから自宅まで來ないかとの事て、君と同道して書齋に通ると今度の小説は漸く脱稿したから君の許可を得るつもりだといふて、其の原稿を見せられた、表題はまだ附してなかつたが、始めの半ページ程見ると、何ぞ計らん余をモデルにして書たものてあるから、甚だ不快を感じた。然し事實を事實通りに描寫したものならば差支ひないが、少しは事實もあるが事實とは全然違つて居る、よし違て居つても余をモデルとしたら、余らしい人格とか性情が現はれてゞも居れば少しは我慢する餘地もあつた、然るに主人公なる鷹野傳吉が洋行した不在中に、女房のお初が昔契りし清水直衛といふ男と手紙の往復をなし、その手紙には種々の殺し文句を列べ絕望の初子より、戀しき直衛さまへ等書てあるのを見て波瀾を起し、傳吉とお初て苦悶するのがこの小説の主眼て、余をモデルにしたとすれば實に夢にも思はぬ事ばかりて、余は氏より多大の寃罪を蒙つたのてある、余が最も不快の思をして讀て居ると、藤村君は人を引きつける樣な聲て君の許可次第……さも悲しさふてあつた。余は前にもいふた如く頗る無頓着の性質てあるから、前後の深い考ひ等は無論無く、事實は事實てよい、事實てない事は如何に書き立てゝも事實てないのてある、殊には實名を現はしたものてもなし、小説として發表するのに大したこともなからふ、そして藤

村君が苦心の作といふ事を推察すると、否諾て撥附けるのもあまり友情がない。その上氏は歐洲自然派の小說家等は互にモデルになつたりなられたりして居る等見て來た樣な口調にて解かれた爲め、あの中に自分の友人の事等も書てあつたから、それ等を削らして承諾した。自分はそれぎりて忘れて居つたら、翌年一月一日發行の新小說に(水彩畫家)といふ題て發表されたときは、無頓着の僕もギヨッとした。傳吉の苦悶が主となる可きてあるから、何とか他に題の選み方もあらふに、水彩畫家としては、いよ〳〵以てあの小說の全部が余をモデルにしたものと世間から推量さるゝのも無理がない、自分丈は藤村君の犠牲となり冤罪を蒙てもそれは斷念して居つたが、斷念の出來なかつたのは、世間と妻とバックに使はれた母と妹と、妻の里方の人々とその親戚と余の親戚とてある。好奇心を充したがる人々は、評判の小說となつて購讀されたので、自分は妻にも故家の人々にも隱すつもりてあつたのが、今は隱す事が出來なくなつて、第一着に不穩の言語を列べて手紙を寄せられたのは妻の里方てある、第二に通讀して苦情を申出られたのは、故家の母と妹てある第三として大々的不平を訴へられたのは余が妻てある、妻は極の內氣ものにて、今の女學生的おてん流にガミガミつゝこまれぬ丈それ丈困つた、余は種々に辯明しても、其當時程不快の家庭を作つた事はなかつた、それから第四第五第六と苦言の攻擊て、余が生涯の中てあの時程不快極る正月をした事は無かつた。この時余の苦痛であつた事を充分に現はす筆を余は持たない、風景畫て現はす事も出來ない、これを藤村君に書かせたら、これ丈て又小說が出來るてあらふ。モデルが御入用なら、このときの事を正直に描寫してくれる方なら誰にても御貸し申す。今日となつては余一人丈て、他のもの〻困り方は少いと思ふ。そして妻も今は何も不快とは思はぬ樣になつたが、玆に一つ氷解する事の出來ないものがある。それはバックに使はれた(柳澤濟乃)のモデルてある。あの中に書てある如く、余が歐洲から歸朝するとき、ロンドンから因幡丸といふ船に

同乘した婦人がある、その婦人はヴインナに留學して居つた人で。故鄕は余と同國でしかも余の故鄕より四里離れた所のもの、段々語つて見ると妻の母の里方の親戚に當るといふ所より親しくなり、東京まで同道して別れた。余が歸朝して故鄕に歸る間も無く彼れは來訪して、樂しく語つて二泊した事があつたが、そのときは別に家庭に何もなかつた、然るに（水彩畫家）では音樂者として傳吉を訪問して對話したとき、ざれ事が書てあつた『醫者？ホヽ、醫者のいふことなぞが奈何して宛になりませふ。女の病氣と言へば――直に歇私的里。あヽ、醫者に私の病氣が解る位なら、ヴアイオリンを抱いて泣いて居やしません。』この言語だけは未だに余の妻は氷解する事が出來ない。あの小說が現はれてよりは、家庭の平和を保つため、彼の婦人とは絕交して居る。

藤村君からあの小說を一冊もらつて、通讀した後に會つたとき、余の面白からぬ顏をして居るのを見て、藤村君は慰める爲めに言ふたのであるか

『あの傳吉は僕でお初は僕の妻で實際あの通りであつた、しかも僕の家內と昔契りし（直衞）といふ男にやつた手紙は一句も添へず一句も削らずだつたよ』

と言はれたときは余は氷水でもかけられた如く顏色は土の如く胸の鼓動がギクリと高まつたのである。余を慰めてくれるらしいこの一言が、余にとりては多大の痛言であつた。そのとき余は心に思ふた。藤村といふ男は實に人の惡い男だ、自分の實歷を懺悔するのに、塗りつける人もあらふに、親しいといふ友人、しかも無邪氣なる畫家になすり付けるとは、如何にも邪見の男だとつくづく君の顏を眺めた。又思ふのに、自然派の小說家といふものは、或人をモデルとして、その人の皮相ばかりを寫して、その人の自然の性情等を寫さないで、自分の經歷をそのモデルに添加するものであるか、果してそれが自然派の立場とすれば、自然派の小說家程世に惡人なるはなし、如何となれば、無邪氣のものを冤罪に落し入れ、又は神らしき人を犧牲にし

て、その人々に苦痛を與へて、その作は上作とか何とか世間から賞められて、その度毎に自分の地位を上げて行くといふ、こんな悪人は世の中にあるものでない。余は文學の事は知らないが、矢張り繪畫の自然派と等しく、人物を主として描寫するものとせば人物の自然の機微をうまくつかんだものが上乘の作だと思ふ。例へば或人物をモデルとして描寫するなら、その人の性情から言語から習慣まで、自然の趣くまゝを寫すのだらふと思ふ。余はこんな風にも考へた、あの小説を見ると、主人公の傳吉を藤村君自身とすれば普通の人の忍ぶ事の出來ない事まで忍び、人に同情が深く涙も多い、自分の事を人になすり附ける樣の事は決して無き筈、最も藤村君はあの小説の主人公は、名譽の人物と思ふて居つたのかも知れぬ、普通の人の出來ない事を忍ぶ傳吉は、名譽かも知らん、變人かも知らんが、余自身の立場からすれば、余はあんな名譽は斷然避ける、あんな變人になりたくない、矢張り普通の人物となりたい。更に〳〵自分の定めた自然派といふ事に立歸りて考ふると、藤村君の今いふた事は虛言といふ事を信じた、なぜなれば君は今余の考へた樣な自然派の小説家とすれば、實に小説的好經歷を以て居る君であるから、無邪氣なる畫家等を引張り出さないで、傳吉だのお初等と言はないで、自分が主人公となりて、僕がとか余が妻とかいふて書く筈である。これを書く位に躊躇する君では無い、これを書く位の勇氣は必ずもつて居る。さふすれば矢張り余の推量通り、他にあんなモデルがあつたのであらふ。あれは藤村君自身の經歷でない事は今も信じて居る。それから(音樂師柳澤清乃のモデルも、君が音樂學校に這入つて居つたとき、自ら經歷のあつた女だといふ事を他の人より聞いた。これも余は虛言だらふと信ずるのである。以上は余が世間から冤罪を蒙つた辯明である。

それから次に余と余に關係のある人々をモデルにした事實と、事實でない處とを小説に就いて區別し、尙余が假にあの主人公となつた意見を書て見やう。(第一)の條にある汽船薩摩丸は因幡丸で、同乘した婦人と二人

一緒に東京迄とあるが、他に友人が一人あつて三人て東京に這入つた。傳吉の住所は小諸とあるが、小諸は余が妻の里て、余の住所は小諸より二里離れたる烏帽子岳の山麓、禰津といふ處てある。

去年の九月、小諸を出發して此汽車に乘つた時は、秋雨の瀟々と降る寂しい悲しい日。着慣れもしない洋服を始めて着て、室といつたら狹苦しい三等。流石に窓から陰氣な空を眺めたり、やたらに激昻して戰慄へたり、離別の涙を流したりして、丁度漂泊する旅人の思てあつた。其に引換へ、今度は樂々とした二等室、身には佛蘭西風の背廣、旅の帽子、新嘉堡仕込の籐の洋杖――今更のやうに傳吉、自分て自分の激變に驚くのてあつた。去年山躑躅の花の咲く頃から、半歳に水彩畫二百枚、其を抱いて二三の同伴者と亞米利加へ渡るといふ時は、是程贅澤な歸朝を憶度して思ひがけやう。到底人間の想像の及ばない、深秘な運命の力が身に附纏つて居るやうに考へて、傳吉は長旅の出來事を想起すのてあつた。

何といふ貧相の傳吉てある、余の出發したときは稀なる好天氣てあつた。今てこそ和服の方が着心がよいから着て居るが、その頃は多く洋服を着て寫生に出た。出發のときは無論二等室、晴の出發にケチクサイ三等室には乘らない、一等室の無かつたのは寧ろ殘念の位てあつた。余は此の門出にメソ〳〵した泣事は言はなかつた。歸朝のときも殘念てあつたが一等室がなかつた、止むを得ず二等て我慢した。佛國ては河合君と夜店てダブ〳〵する樣な出來合の夏服を求めた丈で、九月下旬の信州は寒かつたから、米國着早々仕立させた背廣の黑服の汚れたものを着て居つた。余は無頓着の方だから、自分て自分の激變等とは露程も思はなかつた、米國で金はもふけたが小遣位送つて歐洲てみんな消費して國へ歸つたときは殘金五圓しかなかつた位だ矢張り信州兒て歸て來た。百枚程の水彩畫を描くに三年程かゝつた。最後のヂヤラ々々した泣事は考ひもしないし思もしない。かくある可きは當然の事と思ふて居つた。

その次の條に停車場に着いて盛な歡迎があつた樣に書いてあるが、余は何時も汽車には乘りおくれるのが普

て、このときも汽車に乘りおくれて、期定の時間に着かなかつたから、余が故家の僕と二三の人に迎へられたので、荷物は送らせる事にして、寫眞器械一個持つて居た丈である。澤山の諂諛者が先生といつたと書いてあるが余が先生といはれたのは小諸義塾に這入つてからだ、余が郷里の人は健策といふ名であるから、健さん〳〵といふて居る。以下は改めていふ程の事もない。(第二)の條に傳吉は小膽な泣男と見へる、こゝても又ベソ〳〵と泣事を列べて居る。余が歸つて來た當時は何も考ひないで毎日ごろ々々と寢轉んで居つた。傳吉には女の兒があつたが余には男の兒があつて、此の小兒と毎日遊んで居つた。これ迄が余をモデルにした事は自認して居る。(第三)の條の始めに傳吉の母の事と妹の事が書いてある。これは無論余の母と妹をモデルにしたものとは思はれない。

『あれ、母親さんは機を織つて居なさりやすか。』とお勝は地機の側へ擦寄つた。

『機を織るのは私のお勤めさ。』と母親は梭の音を止めて、お勝の顔を熟視める。

『兄さんも御祝だと言つて居なさるに、少許お休みなすつたら奈何てこわすよ。

『これをしれえでは、私は氣が濟まれえ。』

『ホヽヽヽさう母親さんのやうに精出す人も無い。』

『おめえも、それぢや御祝かえ。傳吉が御祝だと言つて、御客をするのは今日で幾日目になる。六日目ぢやれえかよ。あれぢや、最早御祝を通り越して、御饗宴だ。私はへえ、それが氣に入られえのだによつて、傳吉に聞かせる積で、斯うして機を織つて居る。斯の梭の音が彼の耳には入られえのかしらん。』

余の母の昔は知らないが、余が覺えてから機を織た事は一度も見た事がない、よし又余が饗宴をしよふが御祝は何日やらふとも、何かの音を聞かせてあてこする樣な下等の擧動はしない。母はその頃より樂隱居て、小說でも與へて置けば、これが無上の樂みだといふて居る。それから傳吉の妹と余の妹とを比したら、大した相違はあるまい、只言葉てあるが、あれに現してある樣な下等の言語は用へて居らぬ。君は僞に信州のどこらにかある下等のモデルを使つて書いたのであらふ

が、余の如き信州人が見ると、どうしても他國の人が一年か二年信州に來て居て、耳ざわりになる樣な言葉丈を覺えて、實際用ひなくもよい處に矢鱈に使つてある。藤村君の評判の(破戒)等も、少しも信州の自然らしい言葉が出て居らぬ、下手な落語家が田舍言葉を眞似た樣てある。それから傳吉の母は昔の迷信を護つて、優曇華が咲いた等いふて大に氣にして居るが、余の母はそれに正反對の氣性てある。それは亡父に感化されたのてあらふ。余が亡父は商人て、明治前から外國の商人と貿易等を爲して、明治初年のハイカラ男であつたから、余が母に於ても優曇華は蟲の巣だ位は心得て居る。それから傳吉の住居は草葺の貧家の樣であるが、余が故家は草葺の家もあるが、死家が多く、今は大した金滿家てはないが、昔の全盛の面影は現はれて居る樣に自分は思ふ。

『それだから、おめえの目は未だ若えわサ。去年の秋まで無暗に世の中を惡く言つて見たり、高い山に登つて野宿をして見たり、深夜に劍を拔いて詩を吟じて見たりした兄さんと、今年の秋洋服を着こんて、葉卷を咬へて歸つて來た兄さんと——れつから内部は違はれえ。去年の秋は彼方の極端なら、今年の秋は此方の極端だ。ハヽヽヽ、激烈で、剛氣で、物のやりかたが傾き過ぎて、加に氣の變り易い、絕念の早いところは、亡くなつた父親さんに其儘だ。』

とは傳吉の言葉であるが、傳吉はこんな氣性で何故に前には泣事を列べたてあらふ。これを余とすれば、深夜に劍等を拔た事はないが、よく似た處がある。それから饗宴等の事が長々列べてあるが、傳吉は酒好きてあつたらふが、余は大の酒嫌ひて、日本酒なら小盃に一とつ位てある。終りにお初と直衛の關係が書てあるが、直衛のモデルは…知らない。第四の始めは傳吉と妹のお勝との對話てあるが、事實は違ふが、余にしても妹と語るはあんなものであらふ。終りに近き處から、傳吉の妹はお初と直衛の關係を物語つたに對して

『疑深い人だれえ。畢竟、お前なんかには解らない。成程社會といふものから言つて見れば、直衛さんのやうな人は——罪人だらう。しかし、彼程可憐な眞面目な罪人が世の中にあらうか。譬へて見るなら、戀は洪水だ。いくら他が堅固な堤防を築いたつても、そ

んな堤防は衝き破つて出る。あゝ、あゝ、ありふれた不德と一緒にして見る人には見させて置いて、さういふ醇粹な愛情を胸に抱いて、默つて此世を去る人はいくらも有る——直衛さんの悲哀は、たしかに正直な青年の悲哀なんだ。』

『そんなら兄さん、彼人から姉さんのところへ手紙なぞを寄すのは?』

『ヘヽヽヽ、打捨つて置くさ、其様ことは。』

『寫眞を寄すのは――』

『寄したつて可いぢや無いか。』

『あんまり貴方も氣が大き過ぎる。』

傳吉といふ男は、風景畫家らしい處も少しはあるが、こゝでは詩人のいふ樣な事を言つて居る。余ならばこんな關係のある事を聞かされた上、直衛といふ男が手紙を自分の妻によこした等を聞ては、こんなに落付拂つては居ない、早速お初を呼びつけて處分をして、これが事實なら大破裂だ。(第五)この條よりこの小說の骨子となるので、傳吉は畫家の傳吉でなく詩人の傳吉と見れば、實にうまく書てある。

お勝の出て行つた後、傳吉は新築の設計を工夫しながら、部屋の內をあちこちと歩いて見た。妻の部屋までも歩いて見た。不圖、箪笥の上にある手紙を取上げて、例の好奇な心から、何の考も無く拔いて讀むで見る——御手紙が屆いた、此頃の御無沙汰も心よりする譯では無いと書いてあつた。夫の歸朝後、毎日の客、兎角夢のやうに暮して居ると書いてあつた。薄い緣を思ふ度に、枕紙も涙にぬれると書いてあつた。今は死んだと絕念めて呉れよ、殘るは君を慕ふ心ばかりと書いてあつた。『絕望の初子より、戀しき直衛さまへ』と書いてあつた。

愕然として、愕然といふよりは茫然として、

『絕望の初子。』

こゝてお初と、余が妻の相違を述べて置く。お初は上田の醫者の娘で、東京の女學校を卒業したといふから普通學は無論外國語等も出來たてあらふ。余が妻は小諸の新町の商家の娘で、學問等は無い、普通の手紙を漸く書く位のものだ、內氣の處はお初に似て居るが、前に約束した直衛の如き情人は無論無いから、他の男から手紙等もらつた事は一度も無い。然してお初程美

人ては無論無い。若し男から手紙が來たとすれば隱しては置くまいと思ふ、先づざつとこれ丈の相違がある。それから余が傳吉の位置てお初のあの手紙を見たら、前後を考へる餘地が無く、よし餘地があつても凧の糸でも切る樣に、さつさと離別して、決して煩悶はしない。そして世間に女は澤山あるから、こん度は選びに選びぬいて、理想的の妻をもろふ。然し小説はこれでは面白くない。底で先づ狂氣の樣になつて煩悶する處が面白いのである、この煩悶の條が中々うまく書てある。どうしても傳吉は情熱的詩人てある。（第六）この條は極く短く、煩悶に煩悶を重ねた結果、傳吉は自分を犧牲にして二人を助けるといふ思想に變つたといふ事てある。余は前に自分の考を述べたからこゝには言はない。（第七）は自分を犧牲にして二人を助ける手紙てある

『甚だ唐突ながら一筆申上げ候。かれてより御噂さ、蔭ながらうけたまはり居り候。さて、未だ御目にかゝらずとは申し乍ら、深き情を有たせらるゝ君の御心をたよりにて、腹臟なく思ふところを書き記し候。此手紙、決して惡しき心を有ちて申上ぐるには候はず―かりにも惡しき心を有たば、斯かる手紙は差上げまじ。何卒々々心靜に御覽下され度く候。』

『と申すは余の儀にも無之候。實は、君より妻へ宛てたる本月十七日付の御書面、また妻より君へ宛てたる手紙、はからざる機會よりして生の眼に觸れ、一方には君の今日の御境遇を審にし一方には妻の今日の心情をも酌取りし次第に候。』

『斯く申す生ことは、十年一日のごとき畫家の境涯、幼少の時、父に別れ、貧しき母の手鹽にかけられ、家計を助けんとばかりに絵提灯など畫き習ひしが性となり、もとより好める道とて止め難く、知らず〳〵洋畫に心を委ねて多くの辛酸にも遭逢し、いさゝか人の情を知り、世の態をも學びたるものに候。さればこそ、世にありふれたる卑しき行のやうに、一概に君の涙を退くる生とのみ思召さば、そは未だ生を知らざるにて候。否、否、君のごとき無垢なる感情を抱かるゝ人の今の世にありと思へば、反つて心強くも懷しくも思ひ居る次第に候。妻とても又、一旦やむを得ざる境遇のために、昔契りし心の誠を忘れ、君の情を捨て、言ひかはせし言葉を反古のやうにする程の女ならば、生に

とりて悦しとも思はれず候。緣ありて生の許に嫁ぎ來りし時、妻は既に二十歲。まして上田に育ち、早くより世のなさけを見習ひ、うしろだてなくて叶はぬ女心には、君のごときを杖とも力とも賴み慕ひしこと、むしろ處女の至誠かとおもはれ候。

『斯く君の悲哀を汲み、お初の心情をも察するに、此儘に過さんも堪え難く、添ひ遂げらるゝ緣とも思はれねば一旦は結びたる夫婦の契を解き、今迄を悲しき夢とあきらめ、せめては是世に君とお初との願を叶はせんの志、及ばずながら自身に媒酌の勞を執つて、改めてお初を君に娶せんものと決心致し、昨夜、一昨夜、殆ど眠らずして其方法を考へ申し候。』

『こゝに一つの困難といふは、君も知り給ふお初の父の昔氣質に候。たとへ死するとも恥辱を親に見するな――とは堅くお初に言ひ聞かせし、斯る一徹の人、何か今の世の青年の悲哀を思ひ知らん。言ふとも聞き入れまじ。彼是を考ふれば、生が苦心は水泡にして、反つて君の名を辱むる不幸の決果を來さんかとも危まれ候。あゝ、生は晝も夜も思ひ疲れて、畫筆執る心すら無きものと相成り候。生が枕は歎の爲に濡れ、生か衾は涙の爲に漂ひ申し候。』

『君と、お初と、生と――三人の關係は決して輕きことゝも思はれず候。世間幾多の青年の中には、君と同じき境遇に苦むの人も澤ならん。新しき家庭を作りて始めて結婚の生涯を恨むものゝ中には、あるひは又た生と同じき疑問に迷ふの人も多からん。噫、惱めるは君のみか、こゝに惱める生ありとも思ひ浮べたまへ。斯の謎の解くると解けざるとは、實に三人の生死にもかゝはることを思ひ知りたまへ。斯ることを書き連ね、身の恥を忘れ、愚かしき恐怖と悲歎とを包むの暇もなきは、ひとへに君とお初とを救はんとの願に外ならず候。あはれむべきはお初に候。君もし眞にお初を思ふの厚き情もあらば、願はくは友として生に交らんことを許したまへ。三人の新しき交際――これぞ生が君に書き送る最後の願なれば、今後吾家庭の友として、喜んで君を迎へんと思ひ立ち候。お初の靈魂は君のものに候。お初の肉身は生のものに候。君は昔のごとく不幸なる女を捨てたまふなかれ。生は君にかはりて長くお初を後見む。思ふに君は春秋に富まるゝの身。生とても同じ。一時の悲哀よりして互に終生を棄つるなく、他日手を執りて今日を追想し、胸襟を披いて相語るの折もあらば、これに過ぎたる幸はあらじと存じ候。あゝ、情はあまりありて、言葉は

意を盡さず候。萬書遺し候。草々。九月二十五日。
鷹野傳吉
清水直衛様

何といふ美しい文章である。何といふ優しい文句である。高山に登つて野宿をしたり、深夜に劔を拔いて詩を吟じた傳吉も洋行してからはすつかり心に分別が出來、丸て別な人間となつた。

『幼少の時父に別れ、貧しき母の手鹽にかけられ、家計を助けんとばかりに盆提灯など書き習ひしが性となり、洋書に心を委ねて多くの辛酸に遭遇し』云々實に苦學生の感心な男だ。余と相違して居るのは、幼少の時父には別れたが、兄といふ人があつて書を修業させてくれて、世間普通の書生で修業した。又盆提灯等書たこともなければ描て居る所も見ない。(第八）この條の初めに東京に出たとき清乃を訪問したとあるが、余はモデルにされた婦人には其後一回も會はぬ。傳吉の新らしい住居といふのは、余の家の寫生だからよく現はしてある。家族に龜一といふ書生がある、龜一といふ名てはないが書生が居つた。それから新築内て傳吉は不平て書を描て、東京の展覽會に出品して、一枚も賣れずに殘りは横濱の美術商へ捨賣りにして歸つて來た、東京の批評家の嘲笑等を列べてあるが。余は新築に這入つて毎日〳〵樂しい生涯を送り、出來た畵を東京の展覽會にも出品したが、あの畵は評判がよくて、今ても人の記憶に殘つて居る。その頃に未だ食ふに困らないから、横濱に繪の捨賣等はしなかつた。大分傳吉は失望して、唯一の希望、唯一の生命は清乃の慰籍だ等のろけて居るが。余の清乃にされた婦人から手紙が來ると、家庭が兎角不穩であるから、手紙ても來れば握りつぶして居つた。清乃にされたモデルはこの小說を讀んだてあらふかそれも知らない。(第九）この條は傳吉の家に清乃が訪問した事が書てある。これは先にも述べて置た歐洲から同船して歸つた婦人が訪問した事を書たてあらふが、事實とは丸て違つて居る。對話等は新體詩人と女音樂師てやりそふに書てある。(第十）この條は傳吉が爵々として居るのを見て母とお勝との對話と、來訪した清乃は傳吉の妾等と噂し、お勝

がお初に全情する處を初めに書た。彼の婦人が余を來訪したとき、故郷の人が見て妾ではないか等いふた事は事實である。他は事實でない。こゝでも又忌味ある下等の言葉が列べてある。中頃に傳吉の母は傳吉に向つて妾を持てはならんとか、女を友にしてはならんとか書てあるが、余の母は余に妾を持つ身分になつたら幾人でも持てといふて居る位だ。そして友が女であらうふと何共いはない。(十一)この條の始めに傳吉が友懐かしさの情に燃えて、輕井澤に満乃を訪問したとある。傳吉は訪問したてあらふが余は訪問しない。壽室に這入つた千代といふ傳吉の兒を傳吉は叱る、お初が來てその兒を抱きかゝへる、千代は泣く、傳吉はやかましいと怒氣を含んで言つた等、家庭の不穏が描てある。余もあの小説が現はれてからこんな事もあつた。傳吉は何故か大不平である。(十二)この條は姑がお初に同情し、寫生から歸つた龜一といふ書生に傳吉の行た先を尋ねる等の事で、余をモデルにしたものでない。それから(十二)(十三)(十四)て終るのであるが、この間には種々なる波瀾があるが、傳吉といふモデルを書たもので、余と余に關係したモデルの名義はあるが、少しも事實にない事である。只一とつ龜一といふ書生が苦勞人て、傳吉が煩悶の結果家を解放した、お初を里方へ歸すと聞て、龜一はソクラテス等を引張り出して無事を保つたと書てあるが、余の家にありし書生は龜一の樣な才氣無くどこまでも自然派の風景畫家といふ樣な、余と等しい無頓着物で、今は日光にありて大分上手になつて居る。吾等も自然派の風景畫家として、自然の趣を寫して居るが、如何に描く描寫しても、自然から何共小言が無い。藤村君が自然派の小説家てあつたら、水彩畫家の第一回を改めて(小説家)とか(新體詩人)とかいふ表題で現はしたら、評判は更に高く、無邪氣の畫家やその關係者を、苦しめる樣なことはなかつたのてあらう。」

沙翁全集既刊目次

- ●ハムレット　定價金八拾五錢　郵稅拾錢
- ●ロメオ・ヂュリエット　定價金八拾錢　郵稅拾錢
- ●ヴェニスの商人　定價金八拾錢　郵稅拾錢
- ●オセロ　定價金八拾錢　郵稅拾錢
- ●リア王　定價金八拾五錢　郵稅拾錢
- ●から騷ぎ　定價金八拾五錢　郵稅拾錢

戸澤姑射譯

沙翁全集 ジュリアス・シーザー

挿圖貳拾個
菊判全壹册
定價九拾錢
遞送料八錢

苟くも沙翁の名を記する人にして、世界第一の史的悲劇「ジユリアス・シーザー」の名を記せざる人なからむ、夫れ沙翁全集の各篇何れか傑作ならざらむ、而かも「ジユリアス・シーザー」は所謂四大悲劇と共に傑中の傑を以て稱せらるゝもの加之西歐の小說劇中には、古來著名なるものと雖も、人情風俗の相違よりして、其の人格往々邦人の讀者には、容易に理會感得せられざるものあるは、文藝の飜譯者が遺憾とする所なるが、本編の如きは編中に現はるゝ幾多の性格、不思議に邦人の趣向に適合し、恰も我邦の武士道を、自由民權の舞臺に活躍せしむる觀あるは、奇と謂ふべし、大方諸子乞ふ一讀の榮を賜へ

發行所　東京京橋區銀座壹（振替二一九）　大阪北久太郎町四（振替二八六四）　株式會社大日本圖書

式當

ほとゝぎす

第十一巻第一號——十月一日發行

● **やもり物語**（小説）寅彦

くらやみ坂の街燈にとまりてゐたやもり、、が荒物屋の娘を呪ひおふくろを呪ひ終に二人を呪ひ殺して後ち、荒物屋の亭主は後添ひを貰つて、子供が生まれて、亭主はニコ〳〵として子供をだいて表に立つて居る、其から街燈のやもりも平和な眠りを貪つて居るといふ趣向也。例のしつとりとしたる筆致は人の模倣を許さず。天下一品なり。

● **勝敗**（小説）虚子

勝雄といふ子供が病氣のおぢいさんと口相撲を取りておぢいさんが敗北するところ也。

● **世に出ぬ雛**（小説）中野羊我

近江の片田舎の百姓の息子が京都の呉服店へ奉公に出る、歸りて見ると結髪の娘が死んで居ると云ふ筋也。片田舎の光景より結髪同志が雛祭りの幼な遊び、呉服店へ初奉公當時の叙述等に面白き筆多し。

● **夢の如し**（寫生文）四方太

例によつて幼き時の回想を明快なる筆を以て寫せり。火燵の前ておとり膳て飯を食ふ田舍役者秀公夫婦を措くところが本篇の山なり。秀公が忠臣藏の討入の時舞臺て喧嘩して鬘をラムプの上に磨りつけられて、ブル〳〵怒りながら樂屋に歸るところなどあり。

● **歸省雜筆**（寫生文）鼠骨

「法要」「ホト、ギス」「叔母樣」の三篇に分たる。「法要」は父の法要を寺で取行ふところ、「ホト、ギス」は田舍の兄の所で敦公を澌きながら十餘年前を回想し、其時一緒に遊んだ娘が今は或博徒の女房になつてゐて逆待されつつある由を聞くところ。「叔母樣」はこれも久しぶりで叔母樣ところへ御馳走になりながら親戚の誰彼れの變遷を語るところ、各篇それ〳〵の面白味あり。

● **かくれんぼ**（寫生文）岡本松濱

舞子になる二人の小女が舞師匠の家にて近處の坊ンチと三人かくれんぼをして遊ぶところ也。濃艶春の如し。

其他寫生文四篇

俳句を挿める紀行文三篇

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ほとゝぎす

●俳諧散心（俳句） 虚子、東洋城、癖三酔、三允、松濱、蝶衣約一年間一週一度會合して句作せるもの也。

●夏秋雜詠（俳句）高田蝶衣

●義信と玄佁（書談）中村不折 淺草の觀音堂の天井に天女を描けるは義信「施無畏」の額を認めたるは玄佁、而して二人の墓は一間とも隔たらず同じ墓地に眠むれるは面白からずや。

●法帖と碑（書談）中村不折 前號を受け來りて本號にて完結す。

●老梅居雜話 内藤鳴雪 愈老健若者を瞠若たらしむるものは老梅居主人なり

●自然派觀（評論）野上血川 自然派に向つて放てる矢なり。

●蕪村の連句 萩原羅同 蕪村の連句は芭蕉の連句に若かざる事を例證を奉げて論斷せり。

表紙は下村爲山筆 卷頭カットは淺井默語筆

●彼岸詣り（口繪）不折

●鷄頭（裏畫）爲山

●大根洗ひ（挿畫）庄野宗之助 其他挿畫十餘枚

此他募集句、地方俳句界新刊紹介等例の如し。

定價一册貳拾五錢郵税一錢五厘

東京麴町區富士見町四ノ八

俳書堂雜誌部

（電話番町七四八）（振替口座一一二五〇）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

長谷川二葉亭氏著

中村不折氏表裝　川村清雄氏口繪

小説 其面影

新聞批評

●讀賣新聞評　文章の老熟して厭味なきは言ふまでもなく人物の性格それぐ\に描き分けられ殊に小夜子の如きはその面影を見るやうなり

●東京日々新聞評　如今落莫たる小説界本書の如きは谷中の跫音と云ふも適當の贊辭にあらざるべし

●毎日電報評　遉に二葉亭氏の筆だと肯かるる境況と人情との道行が大膽に有りの儘に畫かれてあるが嬉しい表裝は凝つたものだ

●報知新聞評　流石大家の筆致時流を抜けるを見る

●都新聞評　自然にして深刻なるは向ほ當世第一流の作たるを失はず

●國民新聞評　文辭と云ひ其の趣向と云ひ自然にして工を弄せず各々の性格は躍如として現はれて居る是は疑もなく浮雲以來の傑作

●日本新聞評　兎に角今日の文壇の潮流を辿らんとするもの丶是非一讀すべきものである

洋裝極美
實價金七十錢
郵税金八錢

發兌元　（東京日本橋區通四丁目 振替貯金口座壹六壹七）　春陽堂



蕩兒の歌

吉野臥城

始めて胸の一の戸を
ひとりに明けて迎へたは、
肉の香知らぬ夢ごゝち、
夢のやうなる憧れに、
あこがれて笑む花の雨、
しつぽり濡れて蛇目傘、
離れまいぞと柄を握り、
浮世小路に立つ浮名。――
人にせかれて別れては、
世は辛いもの憂いものと、

慰籍おもふ酒の味。
鼻唄ひとつ、微醉の
盃を吸ふ舌鼓、
ああ歡樂は底ひなき。
甕より湧く、こぽこぽと。――
年増女中に首抱かれ、
「可愛い殿御はやるまい」と、
鳩のやうなる胸の息、
ぞくぞくとする溫かさ。
異性の血潮聽いてより、
耳を離れぬ遠鳴の
海に心は引かれ行き、
浪のたちゐも騒ぐ胸。

逢ふも逢はぬも騒ぐ胸、
餓が滿つれば性慾の
火は燃えさかる宵の春、
醉うてころりと肱枕、
たぬき寐入の顏に頰を
當て、「殿御は可愛や」と、
眞の情の獨り言、
「ああ誠か」と、起き返り、
手を握りしが緣となり、
花の灯に親しんで、
世の色々の姿も見つ。
暗い流れに舟を浮け、
女樂師と袖連ね、
博士の妻に手を執られ、
捲くや大臣のおもひもの、
尼の柔乳を探りては
若き血潮を騒立たせ、
廂髮、はた姫君と

戀に泣いたり泣かせたり。
さては相場に萬金の、
夢は破れし古袷
縫うて、藝者と籠り居の
裏店住ひ、―世の中の
酸いも甘いも嘗め盡し、
悟りがほにも莨吹き、
眼開いて見て居れど、
思ふは矢張若き戀、
その初戀の嵯峨夏子。
年增女中の阿部お初。
若ビヤニスト森玉枝。
よろづ家お京。下田あや。
水橋喜美子。井出靜子。
竹本小染。新榮尼。
大塚のぶ子。花家きん。
女詩人佐和秋子。
未亡人久世竹松子。

森島露子。辻井なみ。

虫が鳴くとて、鳴かぬとて、
しよんぼり空を眺めては、
戀の未練か思ひ出す。

一路

前田夕暮

青じめる月の光にありなしの一路見いてぬ君思ひ行く

風曇月ほのあかき海原に人魚か泣ける波遠鳴れり

今靜に君が手とりぬいつの日かとりなれしたる心地おぼえて

秋遠き野末にまろきうすいろの物あり露に吸はれてまろぶ

若き日にふたゝび君をえしといふ我がおごりありすゝり泣かるゝ

風あかる夜の空を吹く疲れたる心は君を思ひうかべぬ

初秋の空吹く風の眼に見えて我が魂凉し君を思へば

胸よひらけ青野がなかにかくれたる一眼見し子の小さき魂に

墓しづかに二つならべりこゝろなきさまなり君よ涙あらずや

夜の空あかるきかたに別れける君ありとこそそらだのめしか

夜は深し相對ひ居て物いはず別れまほしくなりし秋かな

野に遠き青き家あり窓とぢて日にかゞやかず君ひとり住む

和歌 柴舟選

○ 關 孤帆

霧ひたにとさせる如き灰白の中に人ありものもとむらし

ふととまりゆくてをながむながめては小暗き路をまただとるかな

夕雲はさびしう榮えぬ灰色の小鳥となりて飛べよわが魂

白き花あまたさゆらぐあけぼの丶遠山かげに夢はかへろふ

○ 佐野翠坡

少女子は胸の思ひと言ふ花を頰にさかせてわれを見るかな

野の家のほかげにほひて高草のぬれたるうへを風やわらふく

いかづちの遠くなる日をわが爲めに臼などひける父おもひ居ぬ

水底に笛ふく神のありともおぼゆる朝の森のいづみか（柴舟先生のみ歌に）

○ 都成牧郎

胸に住む愛の小鳥は音を立て丶夜ひるいはず君と鳴くかな

大杉の木がくれもる丶日の影に肩射られ行く朝山の路

わがおもひ昔にかへるさみしさの限りおぼゆる秋のうすれ日

○ 武田斐雄

盲ひたる人の歩みのそれに似てわが行く道のおぼ〱しさよ

きみとわがおなじ思にあこがる丶人住むらしき遠の島見ゆ

わがこ丶ろや丶に動きてゆく雲のはてなきに似るきのふけふかな

○ 小林狂霞

何ごとを思ふにあらで涙するわが眼とらへよはつ秋の風

ひろき野を吹く風とよむ森かげの君が小窓の灯を思ふかな

しら／＼と月はしらみて桔梗のつゆに明けゆく岡の家かな

○　梶原秋風

にほはしきおもわもうかべ秋花の白きがおほへ人のおくつき

かぐはしき芙蓉の露に朝髪のみだれあぐると櫛ぬらしけり

白綾の長きそてふり片のりの鞍に姉嫁く白はぎの里

山門に椿散るらむいみじうも經よみたまふ姉と居る夜は

○　大津照水

朝露の青葉が上に蝸牛この世をさぐる小角のばしぬ

大き木の夢ゆるがしてあけがたを森よりひゞく鐘の音かな

月はいま丘をのぼりぬ大木の木かげの洞にうすあかりして

○　小川眞清

眞夏日や撫子咲けり砂道を日傘してゆく少女づれかな

月の磯遠鳴る潮の音をきゝて二人ゆくかな夢見ごこちに

ほとゝぎす啼きぬ霧ふる松原に潮の音ひびき夜あけぬる時

○　高橋葦水

雨の日は囚人（とらはれびと）の心にて悲しきことを思ひつゝゐぬ

あさ霧や淀の橋行く青物のつゞく車に日のにほふかな

○　鏡ケ浦人

いかなれば快樂ほろびしわが胸にゆふべ／＼を君住みたまふ

雲の峯君がこゝろと我こゝろとらへむひと屋つくるけはひに

○　友野牧葉

門畑や瓜の葉かげに鷄の砂あみて居る古郷の夏

きみが啞朝白百合につゆの玉まろぶとぞ見るわれ見ます時

○　小川夕美

白鳥の森こえ來れはわが心食まれむこゝち胸悸きぬ

秋風は芙蓉の園に琴おきてひくとし思ふ美くしきこゑ
○　菅原喜代藏

檜林栗木林の森の國あき風わたるやまからのこゑ
○　高木皐郎

さかつきにさゞなみ、たたせ此の秋の豊けさ興じ子等飲みて居ぬ
○　小木鳥城

おほとりの靜けき空をゆくが如いつわがこゝろ甦へるべき
○　中川靈波

秋の花さびしき去年のまゝにさけ心つよがる人に似ずして
○　金城醉竹

君とわが話うばひておもしろう林ならしぬ初秋の風
○

小田の家八束垂穗の稻の香を吹く風めでゝ父はいまさむ

應募和歌は東京市小石川區原町一三三尾上柴舟宛の事



柿

昔知る寺に遊びぬ柿の秋　へき生
二タ盆の柿を供へぬ十九日　同
柿の蔕栗の毬皆ほつ句かな　同
柿の木に吊り殘されし案山子哉　同
歌添て愚庵より柿十五かな　同
澁柿や堂守も無き閻魔堂　同
橋越て柿賣る家を見當てけり　同
水乞へば柿を食はする野寺かな　同
柿畑に庵してホ句のあるじたり　同
小鳥網張りて人無し柿畑　同
柿の讃子規先づ筆を揮ひけり　同
うらなりの熟柿に落る入日かな　縦横
柿の木に梯子かけてあり晝の月　柳子

柿むいて芒の岡を遠く見る　南洋
柿澁くホ句も澁しと俳日記　授非痴
柿赤き暮秋の山家見て過る　句舟
澁柿の赤く熟して戀あらん　南華
道の邊の大樹の柿を仰ぎけり　鎮西郎
今歳また炭屋が呉れて柿澁き　濛雨生
草枕名物の柿强ひられぬ　飛十
柿を愛す鄉先生の庵かな　牛後生
思出の熟柿に多き鄕里かな　千曲
俳諧の柿食ふて一人男かな　鳴弦樓
門の柿野鍛治の鎚の響かな　碧潭
靑柿や屋根皆低き山の村　天香
釣柿の戸々に秋立つ山家哉　霏峯
盆の柿法主へ向けし尻もあり　草壺
昔猿と蟹とありけり柿の村　泡石
柿の木の夕日につくくぼうし鳴く　金魏子
住職の心よからず柿澁し　白鳥
乳母の家熟柿も見えて急がるゝ　葦水
柿食ふて句案の腹の冷えまさる　靑瓢
山猿は子を生みにけり柿の秋　姑洗
柿を食ひながら鳴子をひきにけり　四綠

雲水と柿食ひ語る峠かな　曲翫
山の邊や蕎麥畑白く柿熟す　寒骨
祭すんで柿なき村の淋しけれ　靑城
牧場守る二軒の家や柿熟す　工刀
柿村に入つて後るゝ人馬かな　洛燕居
十室の邑みな柿を植えにけり　古月
南瓜棚壞して淋し柿一と本　十湖
山の驛物見梯子や柿赤し　沐雨
丈山の隱れ家見えて柹赤し　桃村居
盜み食ふ柹みな澁し僧の留守　同
梯子して竿して熟柹もぎにけり　柹鄉
留守の戸の柹に寄り來る鴉かな　同
五畝の畑五本の柹の主かな　釘山
柹一木憎くまれものゝ婆が家　同
靑柹に歸校の心殘りけり　芹村
三年の病癒えけり柹の秋　同
柹赤き田圃の中の我が家かな　鬼村
物干すや柹に夕日のさすところ　同
干柹の軒に米搗く男かな　岩翠
菜を間引く畑の隅や柹一樹　同
演習の兵士とめけり柹の秋　渭南

柿喰ふて手習をする法師哉　同
柿と栗と今年嬉しき家居かな　總子
師の坊の樽柿よしとまゐりけり　同
本陣の鳥毛の上の熟柿かな　眞佐矢
手習の草紙干したり寺の柿　同
豆柿の嵐に堪ゆる梢かな　石鐘
椋鳥のあながまや柿切らばやな　同
食ふとしもなく裏庭の柿落とす　刀川
より取りし柿の實おぞや澁かりき　同
竹添へて結び吊る枝や柿熟す　初聲
盗みたる柿懐をころげけり　同
柿食ふて栗食ふてそも長き夜ぞ　骨董
庵の主柿に卑吝の心無し　同
杣の妻ほめければ柿呉れにけり　鬼洗
晩稲田の刈りかけてより柿紅葉　同
熟柿落つ此の夜頃ホ句なからめや　同
澁柿の澁とる夜や雨淋し　夜光
干柿に豆打つ庭の埃かな　同
落柿の腸寒し草の霜　同
老僧の髭にわりなき熟柿哉　小魚
福引の澁柿もある趣向かな　同

柿赤く菊の膾の色に出づ　同
背伸びして手届く程や柿熟す　俯仰
侘び住めば庭木の柿も眺めかな　同
柿植えし佛に柿を供へけり　同
蕎麥畑の其上畑や柿熟す　同
赤くなる柿に皆葉の落ちにけり　泊水
澁柿に寒き日あしを惜みけり　同
稲刈るや遠き我家の柿赤し　同
柿食ひつ句作心や南椽　同
八年の柿なる年となりにけり　同

募集課題　柚味噌　十月十五日締切
　　　　　乾鮭　十一月十五日締切
應募俳句は東京市本郷區曙町大谷正信宛の事



太宰權帥の實現(?)

統監府の官制。副統監の新任。揚名の遙官の漸歟。

福本日南

統監府の官制成りて、副統監の新任見はる。官制は規定すらく『副統監は統監を補佐し、統監事故ある時は、其職務を代理す』と。半島小なりと雖も一國なり。自ら稱しては大韓國とさへいへば、『日本帝國政府を代表し、條約及法令に基き、諸般の政務を統轄す』るには、監と副監とを竝置するの必要ありとせん歟。扨も大袈裟なる裝置なる哉。韓半島を以て交趾(コーチン)、安南(アンナン)、東京(トンキン)を包含せる印度支那に視よ。前者は二十二萬平方基魯(キロ)と一千萬人内外にして、後者は四十九萬平方基魯と二千萬餘人なり。然も佛國は太守の外に副太守を置きしを聞かず。又韓國を以て印度に視よ。前者の面積及人口は彼が如くにして、後者は五百萬平方基魯と三億人なり。然も英國は副王の外に副々王を設けしを聞かず。小題大做とは其れ統監府新官制の謂ならん。

但し是は餘りに正直に新官制の受取過ぎならん。一回首して欠伸すれば、我中世史前に於ける太宰府官制の油然として眼底に湧出し來るを覺ゆ。曰く『權帥。納言以上任レ之。中古以來、例於二正帥一者。擬二親王官一。承二府務一人任レ權也』と。是に職原抄の我に敎ふる所なり。斯くの如くして最初は太宰帥皆府に涖みて政務を執りたる者が、中古以來に徒らに親王(若くば名公鉅卿)の名譽を表彰する官職となり、名譽の上よりして揚名と稱し、職務の上よりしては遙官と號し、身は平安の京中に優悠して、太宰府政の弛張興廢を顧みず。『承二府務一人任レ權』じて、府政は一切權帥に放委せられたり。

之を支那流に形容すれば臥而視レ政ともいふ可く、一見如何にも豪らそうなれど、其實は臥而不レ視レ政なり。平安の朝廷が鎭西の綱紀を失墜したりしは、全く此に基しにき。

藤侯新に赫々の功業を立て來りて、優詔を蒙り、中外に倶瞻せらる。功は功、勞は勞、其功勞は吾人も大に感謝すれど、由來厭き易いが相公の性癖ならざる歟。相公は崇閣鎖裏に深座すれば、セウルの俚謠の耳にする無かる可し。然も俚謠は所在に反響せり。

「大統監！朝鮮經營は副統監にはね委せ、主は胡蝶の夢を見る」

バッパカパッパ、パッパパッパと。嗟乎パッパカパッパ、パッパパッパなり。三年五年は惰力でも持てん。其れ奈何十有餘年の後ち、此重寄の統監の職は、成金の公侯爵が揚名となり、遙官となり、京城に於ける統監衙門は終に屬僚輩の官局政治(ビューロークラチスム)に落ちんのみ。是れ韓國內雜輩の喜なり。是れ韓國外〇〇の喜なり。それだけ帝國の新憂とならん。それだけ被保護國の新愁を增さん。國家四十年蓄積の勢力を傾注し、始めて今日の位置を現じながら、不祥の雲翳を圈端に端睨せしむ。誰か此作俑たる。吁誰か此作俑たるや。

豫約出版の取締

碌々子

豫約出版といふこと近來の大流行也。大部にして高價なる出版物は大抵豫約にて募集せらる。未だ出版ならざる書物に一時に金を拂ふことも（主もに甲種豫約）每月幾らかづゝの金を取らるゝことも（主もに乙種豫約）共に苦痛なしといふべからざるも、前者を以てすれば定價よりも非常の割引を以て買ふことを得べく、後者を以てすれば一時に多大の金を出す資力なき人も買ふを得ることゝなつて、讀者にとつても比較的都合よきとは勿論也。況して書肆にとつては出版部數を畧ぼ確實にし得て、甚しき損失を招くが如きとなかるべければ、豫約出版は誠に讀書界の爲めに望ましき一慣例といひつべし。但し現在我國に於ける豫約出版業の多くは玆にいふが如き、出版部數を確實にするといふ以外に一種の意味を以て豫約に着手するものに似たり。二種の意味とは何ぞ。豫約資金の融通てふこと即ち是れ也。豫約金なくしては出版する程の資力なきもの

が、豫約金を運轉して出版せんとすること即ち是れ也。甚しきは一時の苦しみを逃れんとして豫約金を募集し、豫約出版期までは何とか工夫のつき相なものと、づう〳〵しくも豫約金を別途に流用するものもありとか。見よ我國の豫約出版にして期限を誤らずして發行せられたるもの果して幾何かある。大隈伯を首頭とせる「國書刊行會」の如き、營利を外にせりといふ堂々たる組織なるに拘らず、毎月二千頁を出版すといふ豫約に背き、月を以てしては三四ヶ月、頁を以てしては四五百頁少きものを出しつゝある。經濟雜誌社の「日本社會事業」の如きは已に豫約金の全部を探りて、六月に渡すべき上卷をも渡さず、而して今に至て出版期未だ知るべからずといひ、金尾文淵堂の「佛教大辭典」の如きも又出版期を過ぐる數月にして尙ほその出版の成否さへ疑はる。其他豫約出版にして其發行期を後れたる者、又後れつゝある者幾何あるか殆ど知るべからず。是れ何が故ぞ。國書刊行會の如きは知らず、他は皆資金足らざるが故にあらずや。豫約書を出版する程の資金なきが故にあらずや。かくいへば如何にも書肆をのみ攻撃するが如く聞ゆべし。出版業者固より罪なきにあらず、豫約金を融通して出版せんとするが如きは極めて亂暴の業也。若し豫約金見込の如く集らずして出版するを得ざれば已に應募したる人に向て非常の迷惑をかくべし、又若し他に一時流用せんなどの考にての事ならば夫れこそ詐欺の骨頂にして言語道斷の沙汰也。孰れにしても時期を誤りて人民に迷惑をかくるが如きは道德上も法律上も默過すべからざることにて、我當局者がかゝることに向て恬として顧みる所なきは頗る訝かしきことゝいはざるべからず。我等は玆に於て豫約出版の取締を當局者に望まざるを得ず。即ち或豫約をなさんと欲するものあらば其豫約募集假移の三分の二、少くとも半分（豫約價六圓の書一萬册の募集するは四萬か三萬）を供金託か保證金として政府にて保管し若し書肆が違約して人民に迷惑をかくることあらば、この金にて損害賠償の道を講ぜしむべし。若し今日の如く無取締の有樣にては豫約せる書肆にして破產せんか、豫約者は只豫約金を損することゝなり如何に苦情を鳴らさんとするも苦情の鳴らす所なきに至るべし。かくいはば人或は云はん信用ならぬ本屋を信用したるが馬鹿にて損は要するに自業自得也と。若しかゝる說を許さば戸締りのゆるき家に入りたる泥棒を尤めずして戸締のゆるき人をのみ責むるが如し、戸締りのゆるきも固より獎むべきとにはあられど泥棒を捕へざる警察は何處にもあるべからず。かゝる說を以て豫約出版取締の無用を唱ふるは決して道理ある論といふべからず。又豫約物に向つて一々左樣なる取締をせんと煩はしきと至極也との論もあらんかされど今日の如く取締法なければこそ、豫約出版の續發もするなれ、若し右に述べたる如く供託金保證金をとるとゝならば、眞に資金あり財力ありて眞面目に事業に着手せんとする者の外、豫約をする者なくなり、豫約出版者は大いに數を減ずべし。豫約出版の數を減ずるは惜しむべきが如きも今日の如く人民に迷惑をかくる豫約は寧ろなきを以て優れりとす。一山三錢か五錢の梨は見た目は得らしけれど皮をむけば虫喰へるか、味のあしきが多く、却て初めよりよきものを買ふに若かず。豫約出版條

なるが如きもの今日は寧ろ一山いくらの代物が多し。且つ今日の如きは豫約に不信用なるものあるよりして眞に財力あり資金あり眞面目に事業に着手したる者あるも、書肆の眞相を知らざる者は不安心に思へて豫約せぬもの甚だ多し。若し當局者の監督あつて確實なるものゝみとなり、期限も確守し品物も間違なきものゝみとならば一時衰へたるが如き觀あるも後には却て盛となるべし。野原に火をつくるは舊き草を燒いて新しき草を生やす爲め也、杉の枯枝を拂うて生垣を疎らにするも、新らしき枝を生やして更らに生垣を密やかにするが爲め也。豫約出版を取締る又野に火を放ち、杉の枯枝を切るの意に外ならざる也

余は出版業の内幕を知らず、又出版法についても特別の智識なし。從つて此論の如き其道の人より見れば疎漏の點極めて多かるべし、只現今の豫約出版について直覺的に不滿に感ずる點を卒直に披瀝して當局者の注意を喚起するのみ。

名月や潮滿ち來れさゝれ蟹　蓼太

二文豪を弔す

松逕

赫々たる炎暑の打ち續く、今年の夏は斯くて何時まて人を熱殺することぞと喞つ間に、暴雨一過又一過、氣候頓に改まり、冷熱昨と今と掌を反すが如し、料られぬは天上の攝理なるかな、斯かる氣候の激變には健者も堪ゆるを必せざるに、況んや久しく病軀を抱いて藥爐に伴ふものをや、果然陸羯南氏は逝けり、次いで綱島梁川氏は逝けり、一は高邁の見侃諤の論、之を雄渾の文に寄せて名聲夙に世に噪がる、一は敬虔の信清高の德、之を雅健の辭に托してその名又喧傳せらる、彼

は政論家なり、此は宗教家なり、守るところ異なりと雖も、輿望を一身に集むるに至つては等し、二氏にして世を去る、何となく此秋獨り今歳の秋をなすの感あるもの、豈唯凉颸梧桐を吹いて、一葉二葉蕭索の韻を傳ふるによるのみならんや、羯南氏の識、論、文、世既に定評あり、今更に說かんは屋上更に屋を架するの誚あるべし、唯吾人の敬服するところとして言ふを禁ぜざるは、識よりも論よりも。將た文よりも、何は措いて先づその人格を推さゞるべからず、擧世滔々、只利に走り名に狂する中に立つて、虛無恬淡終生臺閣の榮を戀はず、事を臺閣に見る元と至難の業とは思はず、普通の才あるものには何人にても爲し得るところと信ぜりとは聞けど、而かも之を以て榮とはなさず、見て平凡事となすが故に、從つて求めず、されば又厭ふといふこともなし、白屋に甘んじ布衣に安んじ、手に一管の毛穎を捻つて敢て無冠の宰相を以て居る、その心事の皎潔夐かに選を俗流と異にするを見る、聞く氏は又往々にして人の熱狂的態度を見せて事々しく論じ出づるを好まず、此の如きものには、故らに平日の所論を變へても、先づその鋭鋒を挫くを常とす、例せば氏は平生士道の貴ぶべく、名節の重んずべく、勢利の厭ふべきを說く、故に客の來りて此の如き話材の下に疾言勵聲することあらば氏の氣受け宜かるべしと思はゞ誤まる、何、勢利爾く避け得べきものならんや、吾人も人間たる以上は左迄に泊然たる能はざるなりと語る、之を以て一般を推すべく、氏の是なりとするところ之を他の口よりすれば必ずしも是とせられず、非なりとするところ之を他の口よりすれば必ずしも非とせられず、一見怪むべきが如きも、要するに味噌の味噌臭きは上味噌にあらずとするの見地より來り、之を以て一知半解者、附和雷同者、僞善者、虛勢者、迎合者を排斥したるなりと、然らば又是は餘りに理性に重きを置きて情には冷ならざりしかといはんも然らず、氏と寸交あるものは皆之を否定するところ、唯上述の如きは氏の情の發露の他と異趣あるを示す者のみ、氏の情は上述の如き一知半解者、附和雷同者乃至、僞善者虛勢者、迎合

者等に對して發すること頗る猛烈、榛莽道を梗ぐ、之を拓かずんば已まざらんとするの慨ありといふ、彼此考へ合すれば氏の眞骨頭は自ら吾人の胸に躍如たるべし、梁川氏は篤學の士にして又篤信の人一たび病床に神の恩寵を愛け、甚深微妙の法悦を感得するや、悲心已む能はず、熱愛の至情は多年の蘊蓄を傾け來つて溢れて恍洋の大文章をなし、新聞に雜誌に頻に、解脱の眞諦、悟境の妙趣、見神の神秘を語る。社會の進歩に人事の複雜を來し、從つて世路の嶮艱を增す、懷疑に罹せ、煩悶に泣くの青年少からずと雖も、既成宗教は多く彼等の願盼を促すに足らず、否、促すべき大知識に乏し、それ以外に又一二の自稱神佛等あるも、學問足らず、識見及ばず、生中(なまなか)科學の知識ある青年には破綻の見易くして歸嚮する所以を知らざる時、論理の專攻を以て志となし、その方面にても優に一地歩を占むべき氏が、此處に一轉折して燃ゆるばかりの信仰を詩趣横生の文字に示す、如何ぞ彼等をして皆を決せざらしめんや、如何ぞ彼等をして襟を正うし驕慢の心を堪えて、謹んで聽從せしめざらんや、別に自らなる時運の際會もありたるべけれど、知識ある階級をして兎にも角にも宗教の眞理を默認せしめ、神の權威を信ぜしむる傾向を作れる者、一半の功は氏に附與して不可なかるべし。氏の信仰は直截なり、而して宏量なり、氏は「汝の心をして常に神の存在を願ふ樣にあらしめよ、然らば汝は決して神の存在を疑ふことなかるべし」といふ、ルーソーの語を以て名言となし、之を以て人をも導き自らも亦之によつて赫奕たる神の靈體を拜す、而して此神をば必ずしもゴッドと執せず、彌陀とも稱へ如來とも言ふ、此の如きは皆事の當然にして何等の奇あるなし、奇となさば偶ま見神の二字を以てすべきも、而かもその奇とすべきは誠に淺人味者の迷想よりにして、具眼者には又何等の奇もなき當然の事に過ぎず、されど教の弘まる何等の奇をか要せん、談理の如何、用語の如何もあるべけれどそは末のみ、究竟は唯人格に待つ、乞見にも、眞理を聽けといふ事あり、聽いて知る分ならば之にても可なれど、知つて行ふには不可なり、釋迦の

平等觀基督の博愛說、時には千門萬戸に食を乞ふの徒にも聞き得べからんも、釋迦の人格基督の人格と結合し、その金口より洩るゝにあらずんば、到底服從を迫るべき力とならず、梁川氏の信徒を有するは實に氏の人格にあり、一點の驕傲なく一點の衒氣なく、玲瓏たる心鏡常に滋潤の光を湛え、唯只已み難き熱愛の至情より、謙抑して衆に說く、此の如きは誠に得難きの人格といふべく、吾人は氏の後應に何處にか後繼者を得べきを危む、嗚呼二氏は去りぬ、氣候の激變が如何計りの影響を死者の數に及ぼせしやは知らず、然かも二氏の訃を聞くは猶ほ數百千人の訃を聞く想あり、仰いで浮雲の流るゝを見る、浮雲も亦慘として哀むものゝ如し、嗟乎



我輩も猫である（八）

白也

議論は議論として、我輩はこの放鳥の足元に居るのを見ると、喰つてやり度くつてたまらなくなつた、大に食慾が起つて來た、然し折角放したものを、喰ひたいと云つて無暗に喰つて了つては、如何にも無慈悲のやうに思はれてならぬ、

羊を喰はうとした狼のやうに、放て屁理屈を付けやうと云ふのではないが、動物の性たるや、元來慘酷なものである、人間は自ら進歩せるものと自惚れて、慘酷な事はせぬものゝやうに吹聽して居るが、決して當てに

はならぬ、人間の子供を見れば、其當てにならぬのか明かに解る、我輩等が鼠を慘酷に弄ふ如く、人間の子供は總ての動物を慘酷に弄ぶてはないか、蟬の眼玉を潰して放つたり、雨蛙の尻の穴に麥藁を通して吹いたり、蜻蛉を糸て縛つて振り廻したり、計へ來れば到底際限はない、夫れが大人になると、人間は慘酷の事をせぬと稱して居る、相應に滑稽の至りてある、慘酷は動物の天性てあるから、我輩は深く慘酷なのを咎めるのてはないが、樣々に苦心して、多少自然性を矯めたのを進歩とは何事だ、自然を標準として云ふ時には、進歩ではない退歩てある、

自然を離れた性質が尊む可きてあるか、或は自然其儘の性質が尊む可きてあるか、議論の仕樣て奈何にも理屈は付く、そんな理屈を着け合つた處て初まらぬ、我輩は自然を離れたものも歷史的に價値があり、自然其儘のものも、亦歷史的に尊いと信ずるのてある、十二連發のピストルも、種が島の懷鐵砲も、鐵砲の歷史的價値に於ては同等てある、或は種が島の方が尊いかも知れぬ、色々に變化すればする程、昔の物に價値が着く、人間が樣々に苦心して、自然を離れゝば離るゝ程、自然其儘の者が尊くなる、人間が鍍金をして、金ピカの光を放つて得意がる程、我輩は澁味ある古色を輝かすのてある。

この金ピカを人間は進歩と稱する、自然を離れさへすれば、皆進歩だと心得る、動物は耳を動かす事が出來るのに、人間は其筋肉が萎縮して、動かす事が出來なくなつた、動物には尾があるのに、人間は其骨が尾閭骨一つになつて了つて、尾の痕跡を殘すのみだ、斯の如きは明かに退歩したのだ、然るを自惚と負惜みに富んだ人間は決して退歩だとは云はぬ、背退的進化だと云ふ、勝手な熱も茲に於てか遺憾なしてある、

人間が汗水たらして金ピカに成つて、自惚と癇氣とを擅まゝにする時、我輩は又愈々古色の奥床しさを發輝せねばならぬ、我輩はこの放鳥を喰ふ事に決心した、

放鳥をなす者のために、雀を商ふ人間がある、この商ふ者のために、雀を捕ふる人間がある、之れを捕ふ

る者も進歩せる、萬物の靈長にして、商ふ者も放つものも、亦進歩せる萬物の靈である、然らば之れを喰ふものも亦、萬物の靈長乎、

向ふから何處かの猫が來る、理屈を云つてる間に、彼のものにせしめられては引合はぬ、雀を喰ふに速かなる可し、計謀は密なるを良しとすて、音をさせぬやうに石塔を下りて、暫時お尻をむぐ／＼と振り立て、十分にねらひを定め、ヤッと飛び着いて一撃を加ふると、羽ばたきして脱せんとするのを、ドッコイと爪で引かけてたぐり込んで、首尾克く一匹を捕へた、元來ならば十分弄んで、遺憾なく自然性を發輝す可きであるが、同類が向ふてねらつて居るので餘り時間を費すと、名も知れぬ猫に高名を爲さしむる憂があるから、不本意ながら、容赦なく腹中に葬つて了つた、この間に向ふの猫も一羽捕つた、斯うなると自ら競爭心が出て、捕つては喰ひ、喰つては捕り、何んでも六羽ばかり喰つたら、腹が張つてせつなくて堪らぬ、居ても起てもゐられなくなつた、

最う義理にも我慢にも喰はれない、見ると向ふの先生も十分と見えて、重さうな腹をしてノソリ／＼歸つて行く、

斯う腹が張つてはやれきれぬ、何とか腹減しの方法を講じなければならぬ、最う雀なんどは見るのも厭になつた、心と云ふものは、境遇て奈何にもなる、貧乏の爲めには盜心が起るが、榮花の果は施しの念が出る、貧に盜みをしたものも、榮花の身になると、慈善と云ふ道樂心を起すやうになる、不思議なものである、榮花者は慈善をする、今の我輩は、盛に運動でもするより外に、差し當つて腹減しの妙法もない、食后直ちに運動をするのは、衞生上よろしくないけれど、腹の皮の伸びるだけ喰ふと云ふ樣な、衞生上甚だ以てよろしくない事を、既に既にやつて了つたのだから、今更衞生を說くの權利もない筈である。

先づ第一着に木登りをして見やうと、幸ひ寺の庭の片隅に、大きな榎があるから、出來る限り頂上まで登つて見た、

高い處は氣味も悪いが、又可い氣味でもある、身は羽化して登仙するかと思はれる、人間共が有象無象と往來する、大都會の一部を眼下に見下すと、遠きは小さく、近きは丈け短く、寸馬豆人平素は大きな事ばかり云ふ人間がみすぼらしい程小さく見えて、齷齪として行きつ戻りつする樣は、笑止とも愍然とも、宛ら蟻の匍ひずるに似て、萬物の靈長、見識のない事夥しい、
斯うなると天下に大なる品位と見識と、有難味と威力とのあるものは、唯獨り我輩あるのみのやうな氣がして、思はず快心の笑みを漏らす事を、禁じ得なかつた、我輩が庸醫の食客である事も、紅鹿君の毒に當てられた事も、墓地で放鳥を食つた事も、腹のせつないのも、何も彼も、一切悉く忘却して、全く無心の境に入つた、無心とは放心の意味ではない、又無我の事でもない、唯我ばかりになつたのである、
人間はこの世界に生存するに就て、連りに或る解釋を得やうとして、樣々に心配して、樣々な空想をして居る、甲の空想と乙の空想と鉢合せをして、妙な顔をし合つて居る、或る者は安心が出來ないと云つて泣いて居る、或る者は解脱が出來ないと云つて悶いてゐる、或は強いて不可解な事を云つて、安心を装ふて居る、或は勝手な理屈をつけて、氣安めをして居る、物好きな者は、己れの仲間を殖さうとして、青筋を立てゝ騒いで居る、御苦勞樣の次第である安心も立命も、悟りも解脱も、大悟徹底も救はれるのも、我ばかりになればそれでよいのである、人間は自己の存在を知り乍ら、我を見出し得ぬから苦しむのである、淺墓な話である、總ての念を忘れて、唯我ばかりになりさへすれば、心配も糸瓜の皮もない筈である、我ばかりになれば、我以外はゼロなのである、無價値なのである、無勢力なのである、此無價値なる無勢力なる中に立つた我は、總ての物を超脱した、至高至尊至善なるものである、果た又總ての上に立つて、一切を統御すべき大權力者である、即ち自己は帝王であり神であり又佛である、
斯く悟り得た時に誰かこの至高至尊なるものを、穢汚墮落に陥らしむるやうな、輕卒な行爲を敢てする愚

鹿者があらうぞ、誰か寶石を塵溜の中に置かうとする間抜があるか、キリストの所謂、豚に眞珠を投げ與ふるものあらんやてある、

自己の至高至尊なるを悟つた時は、宇宙の總ては悉く我が配下てある、宇宙の何者も皆我が足下にひれ伏すのてある、自己の一擧手一投足も、皆悉く宇宙の眞理となり軌範となるのてある、斯くの如くんば、世は幸福てはないか、痛快てはないか、社會は光榮あり光華あり、希望あるものてはないか、何處に不安や不平や泣言がある、要は自己の尊さと有難さとを知り得ぬから、愚痴が出る、心細くなる、安心が出來ぬのてある、

一體人間は餘り素養もない癖に、いやに六ケ敷しい事ばかり考へたがる、やれ宇宙の眞理がすべつたの、やれ萬有哲理がころんだのと、頼まれもせぬ頭痛を病んて、氣の速い連中は旅費をかけて日光邊まて出掛けて行く、いくら華嚴の瀑が、數百千年瀑壺の岩をたゝいて居るからと云つて、こんな答案をたゝき出しても置くまい、加減乘除も解らんものが、開平開立をして見やうとしても、解る可き道理がない、道理がないのに無鐵砲に考へて、日光へ出掛けたら人は何と評するだらう、自分自分の眼玉は、如何なる作用によつて、物を見る事が出來るのてあるかさへ解らん樣な人物が、自分よりも廣い大きい、宇宙萬有を知らうとするなどは、無鐵砲の甚だしいものだ、それが知れないからと云つて、のこ〳〵さえ〳〵、日光邊まて出掛けるなんぞは、華嚴の瀑の瀑壺と共に、ドン底の知れぬ無鐵砲てある、と獨り得意になつて天下を睥め廻して居たら、眼の前の小枝に、白いやうな黒いやうな、半流動體の一種異樣なものが、天からヘタリと落ちて來た、七夕姫の白粉屑てもなからう、何者だらうと見上げると、虚空遙かに一匹の鳶が、悠容迫らざる態度て、邊りに中天に丸を書いて居る、ヘタリと鳶のたれてけるが、この大聖猫に送るに、糞汁を以てするとは何事だ猫を馬鹿にするにも程があると思つたが、退いて惟るに、鳶は我輩より幾層倍も高い處て、合せて我輩をも

蟻のごときもの丶様に、平然と見下して居るのだから、彼はこの大聖猫より、より遥かに大聖高と心得て居るのであらう、して見れば我輩に糞をひりかける位の事はお茶漬さら／＼の仕事であらう、大變な奴が居る、上には上があるものだ、輕卒に自惚れると飛んだ耻をかく、何事に限らず、周章いて自惚れるのは、耻をかく基であると、逃げ仕度を仕ながら、陳腐な事を考へた、

すると折惡しく風になつた、相憎く上れるだけ上つたので、我輩の居る技は甚だ細い、ゆれる事一通りてない、今にもゆり落されさうて危險で堪らぬ、天何ぞ聖猫に禍する事の甚だしきやと、恨んだ處で治まらぬ、治まらぬと知つて徒らに恨むやうな、愚な事をする我輩てはない、とは云ふもの丶内心大に閉口した、一生懸命爪を出して、小枝にかぢり着いて居るより外はない、大聖猫も斯うなつては滅茶々々だ、一文の價値もない、睨みのきかぬ事一通りてない、

其内爪が痛くなつて來た、爪を立て直さうとすると落ちさうになる、我慢して痛いのを辛棒して居ると、四足がしびれてもげさうだ、段々日が暮れさうになつて、氣が遠くなるやうだ、安心も立命も何處かへ吹き飛ばされて了つた、切ない中ても幾分の餘裕があるので、ヒョイと向ふを見ると、屋根の鬼瓦が、セ丶ラ笑ふやうな顔をして、我輩の顔をまともに見て居る、生敵な奴だ、他人の苦痛を笑ふと云ふ法があるものか、瓦の無學なのにも呆れたものだと、癪にさわつたから睨めつけてやつたら、軈て瓦の横顔へ風が當つて、妙な音を出す、氣の故か知らんが、我輩を嘲けるやうだ、愚迂々々と聞える、

凡そ小半時ばかりて、幸に風も凪いだから、この期逸す可からずと、眼を瞑つて念佛を誦ひながら、ズル／＼と滑り下りた、下りたと云ふよりは落ちたに近い、聖猫ホウ／＼の態てある、何んだか我輩を苦しめるために、別仕立に起つた風のやうな氣がする、

最う聖猫になるのは懲々てある、若かず俗界の寵兒とならんにはと、又石塔の上て發心を仕直した、未だ

爪が薄ら痛い、少々眩暈もするやうだ、一と寢入りして見やうと、家に戻つて見ると最早紅鹿君も歸つて了つた、

新刊批評

▲日本社會年鑑　日本社會研究會編纂　隆文館發行

明治三十九年中にあらはれたる有らゆる社會事象を網羅せんとしたるものにして「新聞よりも簡潔なる、歷史よりも明細なる指針」となり、以て「現社會の要求」に應ぜんとしたるもの也。編を分つこと、政治、經濟、教育宗教、學藝、社會の五となし各編亦分れて數章又は十數章となる。且つ冠するに明治文化の大體を論じたる序論を以てし、附するに、皇室、三十九年略史、大臣知事局長、貴衆兩院議員、多額納稅者、神道佛教各派管長、華族等の氏名を以てす。此書は日本社會研究會の最初の事業にして今後每年繼續して更に完備せるものを出さんといへば、我社會の爲めに極めて慶賀すべき計畫といはざるべからず。若し本書のみの出來榮を以ていへば、發行者自らも認むるが如く、多少杜撰の點もあり疎漏のふしもなきにあらざれども、最初の試みとしては先づ成功に近きものといふべし。凡そ社會が進步すればする程、自己の專門とする所に精しからざるを得ざると仝時に、又社會全體の步趨をも心得置くの必要切也。然るに此社會全體の步趨を心得ることはなか／＼の困難にて、一步專門外のことに亘れば、殆んど全く與り知らざるが如きは世人の常態也。此缺を補ふべく、博文館發行の「世界年鑑」の如きあれども、彼れは主として統計によれるもの、而して統計は稍々其道に馴れたる人の便とはなれども、普通一般の讀者に興味を以て其書を手にすることを得ざらしむ。然るに此書は記述的の所大部分を占め、且つ大體は平易流暢なる文章もて何人にも面白く讀ましむるやうに書きあれば、世人をして社會一般の事を興味を持て知らしむるには甚だ便利なるものといふべし。處々に識者の寫眞を挿み、又衣服の模樣、髮飾、下駄の繪等を附けたるの用意も恐らく世間一般の讀者を近かしめんとの希望よりなるべし。今單に文藝界についての記述について見るも、細かに穿鑿すれば、評必らずしも當らず、說必らずしも妥ならざるものなきにあらず、又作家の代表的作物として擧げたるものゝ如きは甚だしき見當違ひのものなきにあらざれども、大體の思潮の傾向を論じて、略ぼ要を得、一般の讀者が知るべき必要ある位の範圍は大抵網羅しあるを覺ふ。兎に角吾等はかゝる種類の書を以て最も我現社會一般の人士に必要なるものと信じ、熱心に此書の一讀を江湖に推奬するもの也（定價金貳圓五十錢）

▲雲表　小島烏水著　左久良書房發行

小島烏水氏は文章家といはれて居る。殊に紀行文家としては天下一

高いやうである。僕等も中學に居た頃には氏の文を愛讀したものだ。然し近頃は一向感服せん。どうも文庫式とでも名くべき所があつて、漢、和、洋、の分子よく調和して居らぬ。いろ〳〵なものから、集めて來て、くつつけたもの丶やうに思はれる。殊に科學的の智識を得意相に振り廻して居る所は餘程みずに感ずる。又形容詞でも「小豆の精のやうな臙色の百姓家」とか何とか奇拔に言はふとした所は概れ譯の分らぬ變挺なものが多い。十年一日の如く盛んに書いて居るので僅に暢達な所がないではないが僕にはどうも烏水氏の文の妙味は分らん。何れ其中少し詳しく此事を論じて見やう。但し此本の體裁は非常に凝たもので、持て居るには實に心持のよい本だ。（定價八十錢）

▲水彩畫法女性と趣味　丸山晚霞著　日本葉書會發行

丸山晚霞氏は水彩畫家中に錚々たる名ある人だ。此篇主として女子に水彩畫法を敎ふる爲めに書かれた者だが、男子と雖も水彩畫を學ばんとする人には大いなる參考となる。否な獨り水彩畫を學ばんとする人のみならず、藝術に趣味を有して居る人には何人にも有益な本で、殊に文學に志す人などには非常に參考となる所があると思ふ。色彩に關する部分などは文學者にとつても極めて興味のあることで、天然の色を描くにしても參考となるふし多く、又自然物殊に草木山川の類の形狀や輪廓などを研究する時にも參考になることが澤山書いてある。殊に文字に多少の生硬の箇所あるを除いては筆致概れ流麗、材料の選擇もなか〳〵詩的である。又卷頭に附してある著彩畫八葉、口繪數葉、所々に挿んであるスケッチ等美しとも美しい。趣味ある人の机上に一本を勸める。（定價二圓）

▲随想錄　新渡戸稻造著　丁未出版社發行

新渡戸博士の學才識見世已に定評あり。此篇博士が英文新誌に英文にて書かれたるものを櫻井鷗村氏の和譯したるもの、及び博士の講演したるものを集め、共に博士の校訂を經たるもの也、譯文の方は文章として必ずしも疵なきにあらざるも――否な時々讀きのあしき爲めに意味の曉瞭を來すことさへもあれど――概して穩健和樂の氣に滿ち、時には殆んど詩歌的感情の高潮に達したるものさへあり、多く倦怠の念を起さずして讀了せしむ。講演の方は一般に文章の方よりも面白く、洒落にして、ヰットに富み、浮世話の中に嚴肅なる問題を解决し行くの手腕、博士獨得のもの也。殊に「カーライルとゲーテ」「敎育の目的」等興味津々たり。學生恰好の讀物といふべし（定價一圓）

▲耶蘇之時代　原田助譯述　警醒社發行

獨乙のマーテン、サイデルの著を譯補したるもの也。主としてイエス在世當時の時代の狀態を知らしめんことを目的とせる者にして極めて眞面目なる者也。新約聖書の研究者には參考となるべし（定價六十五錢）

▲含羞草　木村鷹太郎譯　武林堂發行

シエレーの詩「ゼ、センシチブ、プラント」を譯したるもの也。非常に美麗なる本にて、紙もよく。繪もよし。又其解說及びシエレーの傳記等もあつて初學者の爲めに計ることも忠實也。（定價七十錢）

▲淡湖　石丸梅外著　緑水社發行

征途に出てゝ負傷して、歸て病死した友人の事實談を書いた者だ相だ、初め少し讀んで見ると、文章は流麗な樣でもあるが又コンヴエンショナルな書き方もある。通讀の上詳しく評するかも知れぬ。（定價四十五錢）

▲經濟學講義（上卷）　法學博士福田德三著　大倉書店發行

慶應義塾大學で講義せんとする稿本を出版したものである。由來博士の文章は難解て、從て思想も極めて曖昧だといふ評判であつたが、本書は專ら其點に注意せられたもので、大體意味の分り易いやうに書いてある。固より平易流暢といふべき文章でないが、此位なら先づ我慢が出來る。槪してマーシヤルの說を根底として之に博士の見を附したものだ。下卷が出てから精評したいと思ふ。（定價七十錢）

▲人格之養成　加藤咄堂著　東亞堂發行

咄堂の文、彼れの辯に比して劣ること數等なるも、又教家佛中の文章家也。維路暢達、行文流麗、一點晦澁の弊なし、本書の如き最も氏の特徵をあらはせるもの、一讀せば得る所多かるべし。（定價五十錢）

▲歸鄕記　堀内新泉著　成功社發行

知人某氏の哀史、奮闘史を書けるものといふ。小說としてはつまらぬものなるも、事實を讀む讀者には面白きふしもありぬべし（定價四十五錢）

▲小品文集　山路愛山著　警醒社發行

明治三十二年より三十三年にかけての氏の文を集めたるものなり、第一集とあれば今後續々發行せらるゝことなるべし。此時代は氏が信濃の新聞に居られし時にて氏の所謂「下町的文學」を初められしも此頃ならんと覺ゆ。通俗にして趣味あり、思ふまゝを遠慮なく縱橫に語り居る處痛快なれども、新聞に書かれたるものなる爲めか、內容は稍々乏しく、之を氏近來の文に比すれば讀んで後に殘るもの少き心地す。吾人は氏の文章を愛讀すること甚しきもの、續々此集を刊行して氏近來の文にまで及ばんことを願ふもの也（定價廿五錢）

▲熱狂　德田秋聲著　祐文社發行

熱狂はゴルキーの「オルッフ夫婦」を飜案せるもの、ゴルキーの勁健なる文調に比しては少しく弱きに失するの嫌ひあれども、原作はあの通りの佳篇なれば、兎に角面白く讀まる、附錄の「臨終」は今日の氏の技倆に比して必らずしも賞するに足らざれども數年前の作としては極めて傑れたるものといふべし。氏も亦稍々得意の短篇也と聞く。（定價六十五錢）

▲樂天子　　巖谷小波著　博文館發行

世故に通じた小波山人が自己の閲歴より人事の萬般に關する感想を述べたもの、平正の文字の底に穩健の識見が示されて居る、最後に樂天宗の教旨が詳論されて十條といふものが數へ立てられて居る、讀んで此宗に歸依すれば事に處して過たず、洒落に世を樂むことが出來やう、（定價三十五錢）

▲日蓮上人　　山崎紫江著　金港堂出版

日蓮の一代記を新體詩に作り上げたもの、奔放の意氣雄健の文字以て偉人日蓮を傳ふるに適して居る、（定價三十錢）

▲箴言講義　　湯淺吉郎著　警醒社書店

舊約聖書中にある箴言を分類したるもので社會的箴言、法律的箴言、實業的箴言、教育的箴言、倫理的及宗教的箴言、の五章に分ち、初に緒言の處で希伯來民族を説明し、預言者、祭司、智者、歌作者舊約文學等の大體を話し、更に總論の處で箴言の一般に亘る解説をしてある、（並製定價五十錢）

▲漢口　　水野幸吉著　富山房發行

日清戰爭日露戰爭等事局は常に北清に偏つて居るので從つて一般の視線を其方にばかり集め、支那本部の方は自然に疎んぜられて居る傾きがあるが、今や京漢鐵道は全通する、揚子江の航運は發達する、漢口は揚子江と漢水との落ち合ふ處で清國の中樞に當り、今は英米佛獨露日那等諸國の人民が入込んで商業を營んで居る、實に中部支那の死命を制すべき好場所になつて居るのだから必ずや此處には各國權利の一大競爭が行はるべきだ、日本は一葦帶水の隣境であるから、自ら有力なる一議席を占むべき運命をもつて居る、我國人は須く目を此地方に注いで大に雄飛を試むる覺悟が必要だ、此書は漢口に關する事といへば細大洩さず、先づ地理より始め衣食住に移り、氣候と衞生、漢口の歷史、それから工業牧畜漁獵航運、金融通貨及び度量衡、商業機關外國貿易、物產、公益及公共機關、税關及郵便制度鐵道等、その他猶は數章、殆んど一切を網羅し盡して遺憾ない、志あるものゝ必讀の書である、（定價二圓二十錢）

▲音樂通解　　東儀鐵笛著　博文館刊行

我國の昨今は頗る音樂に關する趣味を感じて來た樣である、處々に演奏會もあり少からぬ聽衆を集める樣である。從つて西樂なども澤山輸入されて居つて、やれベートヴエンが如何のモツアルトが如何のと話題に上すものも大分殖えては來て居るが、正直に言つたら音樂に對する觀察力は何れ程の度に發達して居るか甚だ疑しい、本書は一般の人に其の觀察力の修養を助ける爲め音樂に關する凡ての事項を精細に平明に、而かも變態ある一種快心な文字で說明してあるので、毫も隔靴搔痒の感えはない、志ある者は此好著述により相應の修養を積まれんことを希望する、（定價六十五錢）

六附録

まゆらん 偶写



この日の慈善音楽会のプログラムは何れも劣らぬ人揃である。先づピアノ独奏

の大島照子と云ふのは、山下が一度關係した事のある女だ―――全く一度限！今から丁度三月ばかり前。それから這方山下は會ひも爲なければ思出した事も無い。今日の此音樂會にも照子の出る事は知らずに來たのだ、義理で買はされた高い入場劵を反古にするのも忌々しい所から、面白く無かつたら途中で出る意りで入つて見たのだが、入るまでは誰が何を演ずるやら其れすら注意しなかつた。入場してから始めてプログラムを見て、始めて照子の出るのを知つたのである。

大島照子！プログラムに書かれた此四字を見ると、三月前の、今年の夏の鎌倉の一夜を思出して、山下は最う外の演藝も身には入らなかつた、只管照子の登場のみ待たれた。

照子は相變らず美しくて氣高い。今年僅か二十九だが、何う見ても二十四五だ。打見の若い美しい丈に、殊に其の鬘のやうな濃い切髮が目に付く。一體若い女の切髮と云ふものは人の哀も引易いが、又何にも知らぬ者にまでも好奇心を起させる。山下も嘗て其切髮に引着けられた一人である。

照子のピアノは華族女學校に居た頃から名高かつたものださうだ。滿場は先づ其の若い美しい切髮姿に目を側めせられて、而して素人放れをした其獨奏に更に耳を醉はされた。

山下が大島照子の名を知つたのは、今から三年前の日露戰爭當時であつた。那の當時勇しい戰死を遂げた陸海軍人の中に、殊に大島海軍中佐の死は天下の耳目を聳たせた。と云ふのが、一つは中佐が名門の女婿であつたからで。中佐の夫人が照子と云ふ名も、照子が故白須賀男爵の愛孃であつた事も、山下は其時の新聞紙上で知つたのだ。照子の父は前の日清戰爭に戰死した有名な將軍である。父の男爵と云

ひ、夫の中佐と云ひ、何れも軍國の爲めに倒れたと云ふので、天下の同情と尊敬は未亡人の照子に集つた。山下も其一人であつた。

照子が今日のピアノの曲は、可也に長ものらしい。山下は其の美しいピアノの音を聞くに就け、三月前鎌倉の別莊に避暑して居た其時の照子が思出される。鎌倉の別莊と云ふのは照子の生家の白須賀男爵家ので、其時は照子と、照子の乳母と唯二人限て逗留して居た。而して山下が照子に接近する動機となつたのが彌張其ピアノであつた。

其れは月の薄曇に曇つた、丁度春の朧夜のやうな靜な晩であつた。一月ばかり前から病後の靜養に來て居た山下は、宿の夕飯を濟してブラリと散歩に出たが、餘りに好い晩なので、町を一廻りしてから海岸へ出た。晝の中は然しもに賑かだつた海水浴場も寂りとして、見渡す濱邊は人子一人見えない。夜の海は穩かに睡つて、渚に忍び寄る浪頭が寐惚れて咳くやう。何所までも〳〵淡々しい薄月の影に唯仄白く打煙つた砂地を、山下は夢に包まれたやうな心持で獨り浮か〳〵歩いて居た。無いやうでも海邊の風の冷々として、ネルの單衣が夜露に濕りとなつた。唇が鹽はゆい。

興は盡きぬが、病後の身ではあり、餘り永く夜氣に當つてもと思返して、海岸を横へ入つた。兩側は松の並木で、露の降りた濕ぽい路へ、薄墨の浸染んだやうな疎な影を踏んで二三町も來た時、偶とピアノの遠音を聞いた。思懸無いので、山下は立留つて耳を傾けた。一抱もあるやうな並木の黑松が二本、左右から太い枝を翳交した中に、細い赤松らしい立木が兩側生垣のやうに植つて、突當りに家があるら

しい。奥深く籠りと茂つて居て、月の覺束無い光では其所まで見通されぬ。ピアノは一層明かに聞えて來る。山下は唆かされるやうな心持になつて、フラ〳〵と其邊へ足を向けた。

突當りの門まで半町餘りもあつた。無論別莊らしい。垣越しに覗いて見ると、門の横手の小さな孫屋に明が見えて、蚊遣の煙が仄々と庇裏に小迷つて居る。恐らく別莊番の住居だらう。母屋と思はれる方には火影一つ洩れぬ。ピアノの音は仍奥深くから來るのであつた。山下は垣根に添つて裏手へ廻つた。垣根の内も外も一面に赤松が植つて居て、梢を洩れ射す月の光がチラ〳〵足元に零れて、下草も何にも無い奇麗な砂地が一足毎に輕く窪んで、冷たい砂が足の甲に冷々被る。垣の外をグルリと廻つて、ピアノの音は裏二階であつた。南に向つた海を見曠しの縁側が障子になつて居て、燈火の影が華かに射して居る。何の曲かは分らぬが、美しいメロヂイが流れるやうに續いて、其れが邊の濕りとした夜の空氣に漂ひながら、靜な木間を潜つて何所とも無く消えて行く。山下は凝と垣越しに見擧げて居た其目を返して、其音の消え行く仄暗い木間の奥を覗いて見た。と、ピアノの音は歇んだ。山下は夢から覺めたやうに顏を撫てゝ、而して又二階を見擧げた。途端に明るい障子が一枚スルリと開いて、白い女の顏が出た。

其時の光景は今思出しても在々と目に浮ぶ。其時の山下は實際息の塡まるやうに感じた。木間を隔てゝ這邊は暗いし、見付かる氣遣の無い事は知つて居ながら、それでも出來るだけ體を竦めた。二階の其縁側からは無論海が見曠されるので、女は亂次なさゝうに遠く空りと目を放つて居る。顏は瞭り分らぬが、靑白い月影が其半面を照らして、色の白いのが冷たく浮上つて見える。山下は何うかして其目鼻立

まで見定めたいと思つて、息を凝らして眸を据ゑた。林の中は密りとして蟲の音一つ爲ぬ。葉末に溜つた露の雫の微かに音をさせて落ちるのが、一つ〳〵瞭りと耳に聞えて、自分の心臟の鼓動までが自分の胸に響く、澁苦いやうな松葉の匂は鋭く鼻を衝いて、山下の此時の神經は恐しいほど鋭くなつた。

「那様所に出て被居つて、お風邪を召しますよ。」年増らしい聲で不意に障子の中から言つた。今階下から上つて來たのだらう。

「あゝ。」と素直に頷いて、白い顏の嬌しい姿は障子の内に隱れて了つた。

山下はハッと思つて爪立をしたが、座敷の中まで視線は屆かなかつた。

二階で何やら又二言三言辭を交して居る氣勢であつたが、旋て又年増の聲で、

「ぢや、お葡萄酒でも召上つて、而して……」とまで聞えたが、後は分らなかつた。

其中に年増の姿が緣側へ現れて、二階の雨戸を繰り始めた。山下は何とは無しに溜息を吐いて、密と邊を見廻して、而して酒に醉つたやうな足取で林を出た。兩手を頰に遣つて見ると頰は熱かつた。

宿に歸つて寢床に就いた其夜の山下は、何時までも〳〵睡られなかつた。病後の衰弱した體は長時間の夜歩きに疲れて、官能ばかり興奮した。

翌日宿の者に聞いて、昨夜の其れが白須賀家の別莊である事を始めて知つた。而してピアノの主は故男爵の愛孃で、故大島中佐の未亡人である事も知つた。それから山下は暇さへあれば其別莊の周圍を小迷つて居た。晝間始めて未亡人照子の姿を見たのは、例の年增——其れは照子が小兒の時から今日まで

お傍去らずの乳母――と一緒に、海水浴へ行く途中であつた。月影で見たやうに神秘めいた氣高さこそ無かつたが、山下が心に描いて居たと大した違はぬ美しさであつた。いや、姿や縹致よりも、先の夜は氣付かなかつた頭の其切髪が、如何に山下の好奇心を動かしたらう。若い美しい未亡人の切髪姿！成程哀れと云へば哀れだが、山下は其れを仇めいて見た。

山下は最初先づ別莊番と近しくなつた。それから例の年増の乳母を手懐けた。照子も長い間の別莊住居に、辭敵と云つては毎も變らぬ乳母一人で、退屈もし、對手欲しやでもある。何時とは無く山下と辭を交すやうになつた。

其時も矢張海水浴場から海岸を廻つて、夕飯後の散歩の歸りであつた。途中から夕立に降出されたので、山下は故々廻道をして例の別莊に雨宿りをした。孫屋の別莊番の所で濡れた着物を乾かして貰つて、それから又小一時間も待つて見たが、雨はなか〳〵歇まない、一層激しくなるばかりだ。母屋は宵から雨戸を閉切つて人聲も洩れぬし、何時まで別莊番を對手に無駄話をして居ても氣乘りがせぬので、山下は雨を侵して歸らうと決心した。其所で雨傘を貸して貰ふやうに別莊番に頼むと別莊番の所にも一本しか用意が無いと云ふので、故々母屋へ借りに行つてくれた。

すると、別莊番と一緒に母屋の乳母が遣つて來て、

「まあ左も右も那邊へ被來いまし、此の降るのに貴方、迚もお歸りになられるものですか。最少し小降りになりますまで……さあ、奥様も丁度お寂しがつて被居る所ですから。」と勸める。

山下は固より厭では無い、言はるゝまゝに乳母に附いて母屋へ行つた。

玄關からは入らずに、庭木戸へ廻つて、雨垂のピショ〳〵繁吹く眞暗な簷下に沿つて行くと、鉢前の雨戸が一枚だけ開いて居た。二人は其所から上つて、乳母は後を閉める。中は眞暗である。女中部屋でもあらうか、幾間か隔てた向ふで女共の笑聲もするやうだが、雨の音に紛れて能くは聞えぬ。

「お暗う御座いますから……」と言つて、乳母は先に立つ。

四尺幅もあらうと思はるゝ廣い眞暗な廊下を、山下は探足に附いて行く。突當つて曲ると、其又突當りに仄と薄明が見えた。二階から射し下ろす明で、其所が梯子段である。地紙形の梯子段を上ると、乳母は二階の上り口の襖戸を閉めて、中から横桟の猿を卸した。縁側だけ障子のまゝで、座敷の紙門は何れも涼しさうな葭簾戸になつて居る。山下は座敷へ入ると、直ぐピアノが目に付いた。

照子は次の間で碁盤に向つて居た。傍には葡萄酒の罎と小形のコップと、菓子や水菓子の容器とが置いてある。

「能く被來いました。」と山下に挨拶して、乳母に、「碁はお嫌ひ？」

「如何て被居いますか。」乳母は山下に向つて、「お嫌ひて御座いますか。」

「いや、好も嫌も、天て存じませんので。」と山下は固くなつて言つた。

「ぢや、最うお舍し遊ばせな、何うせ私が負には決つて居ますから。」と乳母が照子に言ふのを、山下は慌てゝ、

「何うか然し、私にはお管ひ無く……何有、分らなくても拜見します。」

「ぢや、勝負を付けて了はう。さあ。」と言つて、照子は白石を取つて乳母を促した。

乳母は爲方無さゝうに盤に直つた。

山下には新しいコップに葡萄酒を注いで遣つて、二人は前の續きを打ち出した。乳母は對手と云ふよりも、寧ろ照子に教はつて居るやうなものだ。傍目にも迷惑らしい。始終愚うして對手を爲せられ爲せられ、厭々覺えたものでも有らう。碁に通ぜぬ山下が見ても如何にも氣の乘らぬ打方だ。上手か下手かは知らぬが、照子の方は石を一つ持つて行く其手付からして輕い。雨で冷々するので、被風を端被つて、照子だけは白縮緬の厚い褥に坐つて居る。客のは麻の夏蒲團だ。盤に向つた其の大様な取做、誇を持つた姿形、山下は碁よりも其方にばかり心を取られた。葡萄酒の所爲か、仄り赤くなつた横顔が燈火の影に澤々と匂零れて、濃い切髪の後毛が二筋三筋頰に被つた。口元に折々優しい微笑が浮んだり、冷たい嘲の色が動いたり、美しい目は始終盤の上に輝く。而して無意識にコップを取つては葡萄酒に唇を濕す。唇は珊瑚を含んだやうに赤い。一心に見入つた山下は、照子が其コップを口へ持つて行く度び、自分も器機的に自分のコップを口にした。

貴族の種て、勇士の妻て、而して今は美しい未亡人！　山下は無論尊敬して居る。昔は才媛を以て聞

え、賢婦人を以て目され、而して今は若い貞節な寡婦！　山下は無論同情もして居るけれど、其の尊敬や同情と共に又強い好奇心も以て、飽かず照子の姿を見入るのであつた。

其中に漸と碁も終つた、照子の勝は言ふまでも無い。碁盤は乳母の手に片付けられて、照子は山下の方に坐り直つた、裾風が生暖く鼻を煽る。と、何と思つたか、山下は慌てゝ飲半しの葡萄酒を一息に干して咽せた。

乳母が改めて注がうとすると、

「いや、最う澤山で……」と急いでコツプを隠して、「最う私　餘り長坐しましても何ですから……それに雨も歇みましたやうですから。」

「雨は那麼に降つて居りますよ。」と言つて、照子は貴かに笑つた。

山下は見苦しいほど赤くなつて、「えゝ、ですが……大分最う遅くもありますから。」

「まあお宜しいでせう。」と乳母が口を添へる。「遅いと被仰つて、未だ貴方、九時ぐらゐのものですよ。お宿へお歸りなすつたつて御用がお有りなさるぢや無し、まあ緩くりお寛ぎなすつて下さいまし。奥様も這麼に雨は降りますし。お獨りでお寂しがつて被居るんですから……ね。それは御身分格も有りますし、如何にお寂しいからつて、滅多な方には恁うして居て戴く譯には參りませんけれど、貴方なら何も

も最う來つて丁と分つて居ますし、私も安心してお來でをお願ひ申した譯で御座いますから、まあく御緩くりなさいまして。」

「乳母や、お寒くは無いかね。」と照子が注意する。

「本にまあ、私些とも氣付かずに居まして、貴方、何か被ける物をお上げ申しませう。」

「何有、澤山です。」と言つたが、山下は曝乾かした單物一枚で、稍肌薄を感ずる。

「でも、今日は冷々致しますから……」と立懸けた乳母は、些つと照子の顏を見て「、お二階にはあの、殿方の召すやうな物が御座いませんが……」

「何うせお前、誰も見は爲ないんだから、有合せの物で御不承なすつて戴けば可いわ。」

旋て乳母が次の間から持つて來たのは、華出なネルの女物であつた。白粉や香水の移香と共に、山下は身に沁めて女の匂を嗅いだ。病後の身は激しい官能の刺戟に血も肉も戰く。

然かも翌朝目覺めた山下は、堪へ難い嫌惡の情を以て其着物を脫ぎ捨てたのであつた。昨夜の雨は何時の間にか霽つて、雨垂の波殘がポツリ、ポツリと庇を遶つて居る。朝未だ早いので外は深として、遙に海の鳴るのが聞える、天氣になつて風が添つたのだらう。座敷の中は籠行燈の火影が昨夜のまゝ點つて、一晩立籠めた寢臭い人香が、女の着物や持物の移香と混じて一間に蒸れた。山下は行成飛出して外

の新しい朝の大氣が吸ひたい、心行くばかり吸つて、此の疲れた頭と體とを清々させたい。而して此の嫌惡と不快とを悉く忘れて了ひたい。山下は自分の單衣に着更へて、外の白むのを待つて居たが、明方の冷かさが身に沁みて、病後の弱い皮膚が粟立つ。

「俺は何時の間に睡つたらう。那程不快を感じながら、能く飛出しもせずに平氣で睡入られたものだ。」と自分で自分を怪しんだ。

照子は漸と目を覺して起き出た。其の亂次ない寐卷姿は一層山下の不快を募らしめた。

「昨夜碁を打つて居た那時の樣子と……いや、月の光に始めて見た那女と、是が果して同じ女だらうか。貴族の種も、將軍の令孃も有つたものぢや無い！　這麼風で彌張死んだ夫にも冊いたのだらう。」と心に思つた。

護國の鬼となつて、壯烈な戰死を遂げた其の夫の大島中佐までが、然う思ふと急に尊く無くなる。

「何時お目覺めなすつて？」と照子は聞く。

山下は苦々しさうに、「貴方は御存じ無い筈です。」

「然う、那樣に能く睡まして？」

「私は最う歸ります！」と出拔けに立懸けた。

「あら、最う少しお待ちなさい、今に乳母やが起きて來ますから。」
「誰にも會ひたく無い、此儘何うか歸して下さい！」
「だつて、乳母やが起きなければ、階下を開けさせる事も出來ませんもの。」
それでもとは言ひかねて、山下も澁々坐り直した。割膝をして固くなつて居たが、體が顫へる。
「昨夜の那のネルでも引被けて被居いな。」
「いや、最う澤山です！」
「でも、お寒むさうですわ。明方は冷々しますから。」と言ひながら、照子は自分だけ被風を端被つた。
「同じ冷々するにしても、能く冷汗は出ん事だ！　恥しいと云ふ事を知つて居たら、今朝平氣な顔して男の前に居られた譯では有るまい！」山下は餘程然う言つて遣りたかつた。
が、那樣憎まれ口を利かなくとも、自分の方で二度と最う近づきさへせねば、此儘何事も濟んで了ふのだ。餘計な耻を掻すでも無いと思返して歇めた。
緣側の欄間障子が薄々と白んで來た。
「お遠待ですねえ、最う乳母やも起きますよ。」
照子は被風の紐を掻け合せ、頭へ手を遣つて後毛を繕ふ。山下は其れを見ると、激しい憎惡の念がム

ラ〳〵と又込上げる。昨日までは年若い貞女の哀れな寂しい姿と見たのも、今朝は性慾に長けた寡婦の淺ましい慾求を思はせる。

と、階子段を忍びやかに踏む音がして、次いで上り口の舞戸を外からコツ〳〵と輕く叩く。例の乳母が起きて來たのだらう。照子は立つて行つて開けて遣ると、乳母は狼狽へた氣色で、

「何うぞお早く！　つい寢過しました……お遲う御座いますから。」と言ふなり、直ぐ最う先に立つて降りて行く。

山下も狼狽へて立つた。乳母の後を追つて急いで上り口を降りやうとする時、背後から照子の柔かな手が行成手首を摑んで、

「ね、お忘れなすつちや厭ですよ。」

「いや、是限忘れます！　私は二度と惡夢に襲はれやうとは願ひません！」

照子は彈かれたやうに手を放した。山下は後をも見ずに階子段を急ぎ降りた。而して乳母に案内されて裏門から拔け出た。昨夜入る時も其所だつた、鉢前の一枚の外には、母屋も孫屋も雨戸は皆未だ閉つて居た。

山下は其日の夜汽車で東京へ歸つて了つた。それから丁度最う三月になる。始めの中は折々思出しも

爲たが、何時忘れるとも無く忘れて了つて、今日の此の音樂會のプログラムを見るまでは、大島照子の名は全く念頭を去つて居たのだ。三月前鎌倉の月夜に自分獨り聞いた其人のピアノは、今日滿場の聽衆を醉はしめて居る。而して三月前の鎌倉の雨の夜に自分獨り眺めた其人の若い美しい切髮姿は、今日幾百の會衆の仰ぐ所となつて居る。山下は得意と失望とて頭は混亂した。曲が闋つて、割るゝばかりの喝采に送られながら、壇を退く照子の背後姿を見送つて、

「那は俺の情婦だ！　何うあつても最う一度縒を還さにや成らん！　照子は俺の情婦だ！」と山下は心に繰返し叫んだ。

（完）



蜩の
鳴き出すと
街々を真
直ぐ夕日が
流れて、軒ら
突き出した薇笑

ガあか／＼と店の奥まで明りくなる、福松は木地挽轆轤の手を止め、作事莚の上に前垂の塵を拂ひながら立上つて表の方を眺め

「ほう七つ時だよ」と言つたが、此時女房の御虎も同居人の庄公も留守である事を思出して淋しさうに欠伸をした。

店を二つに仕切つて福松の作事場は入口の左の方で、僅か一間ばかりの處に鐵鎚、鑿、鉋、苧箱、釘箱轆轤など、挽きかけた肉杏や山欅、橡、寒籐の根など雜然に置て、後背の棚には出來た許りの木獨樂や達摩樣や振上げ球や體操の亞鈴其他子供の玩弄品が順序もなく並べられてある、玩弄品と言つても人煙疎らな此の藏館の溫泉村で、何れ百姓の子を相手の商賣であるから只だ頑丈に打つても抛げても毀れないのが特色で、荒削りの獨樂や顏の歪んだ達摩を煤交りの墨や朱の粉位いの二色を彩る許り至極手數のかゝらぬ智惠のない品物だが、其割合に何れも／＼十錢以上のものとては無い、随つて一日の賣高も知れたものであるけれども、併し福松は其日の生計に困る事もない、といふのは女房の御虎の內職にも依るが、福松が今の樣に腎の病に罹らぬ前、木挽頭であつた時に多少の貯蓄をして置いたからである。

奥の方で消魂しく鷄の叫ぶ聲次てばた／＼と飛上る羽音が聞える。

「畜生、白犬の奴又た來たゞあね畜生う叱っ畜生う」と此方から怒鳴つて其方に立て行かうともせず、こゝこゝと鷄の聲の次第に小さくなるのを聞きながら手製の木地煙草入から煙草を捻つて煙管を口に銜

えたまゝ、要時何事かを考へて居ると、河一つを隔てゝ大鰐の村に方り、喇叭の音と共に勢よき兵士の足音、其れがごっ〳〵ごっと一定の音律を取て手に取る如く聞える。

「今着いたどな」と言で氣の無いやうな笑を浮べたが、此時口の煙管に火の無いのに氣が付いて燐寸を擦つた。

年の頃三十六七額は四角で抉り拔いたやうな生際から五分刈が延びて二た月も經たといふ位に栗の毬の様に剛い髮が直立して、四角な顏の割合に鼻柱が低く眼と眼、眉と眉との間は著るしく飛び離れて居る、其れに厚い下唇が少し突き出て下顎が横に張て居るので、いかにも正直さうな大食の人に熟く見る相好てある、暑さに御搆ひなく頸に古びた手拭をだらりと掛けて居る。

此種の人間は今まは此藏館に見るばかりて對岸の大鰐村には汽車の開通と共に跡を潜めた、昔は藏館の温泉といへば大鰐の温泉よりも繁昌したもので蒲團張した小葛籠馬が日に幾度となく見られたのであるが、國道が向ふへ廻る、間もなく停車場が向ふに出來る、西洋擬ひの青ぺんきの家根が向ふに見える、何處から渡て來たとも知れぬ白粉臭い女が雪駄の尻金を鳴らして向ふ河岸を歩く、宿屋といふ宿屋は次第に向ふへ引越して了ふ、恁うなると藏館へ渡る一本の架橋は土地の人が渡る丈けて、此土地では珍らしい白浴衣に夏帽の人などは中々見る事が出來ぬ、其れは稀に來ないではない、一と月に二三人位は福松の店先に立て其の木地挽の轆轤の廻るのを面白さうに見る事がある、其時は福松得意になつて技倆を振つて見せるのであるが、何にしろ達摩樣と獨樂丈けては三十分と立ち止まつて居るものが無い、福松の

作る縁喜達摩も招ぎ猫も到底旅人を大鰐から呼び付ける程の力がない。
　同じ温泉村でも大鰐は陽の村で藏館は陰の村である。
　唆かす樣に對岸の人音、喇叭、其れを福松は聞くともなしに二三服喫み續けた。
「もう休まねえかよ、晩だによ」と街道から聲を掛けたのは土地の若者竹公で。
「恐ろしい暑いてんだのう」と廣い店の方へ腰掛ける。
「おう竹公けえ、何處さ行て來たゞよ」と福松は歩み板を飛び踰えて店に敷いた花茣蓙の上に胡坐を掻く。
「大鰐よ、兵隊が二百も來たてはあ、豪あてんだ」
「爾けえ、二百もけえ」
「今夜皆んな宿りだんべ、布屋に丸佐に福永に阿波屋、宿屋もはあ仕方なかんべえ、宿めたら損だちうが、相手が兵隊だでのう」
「宿りだんべえか」と福松は煙管の雁首を燐寸の棒で掘りはぢめる。
「宿りだ、今夜又た騷ぎだんべ」と竹公は四邊を見廻し
「居ねえかな」
「庄公けえ?」
「うんにや」と詰まつて慌たゞしく

「御前の御嗅よ」
「嗅か」とこれも釣り込まれて後を見返り
「布屋さ手傳に行つた、一寸くら貸してくれろつて」と苦笑する
「ほい爾けえ、働きもんだてのう大鰐中にあれ丈け手も足も廻る女無えだて」と福松の顏を見て、何思つたか急に
「俺あはあ群集て汗い掻いたてはあ心太一杯やりてえと思つて來ただが」
「爾けえ、俺ても突かれねえ事あなかんべ」と店の隅を見る。
福松の作事場と仕切つた、今二人が坐つて居る店は女房の御虎の内職で、釣忍に風鈴、小さな國旗などを吊した下に杉葉葺きの中屋臺、茶碗、水瓶、竹柄杓など行儀よく並べて下り口に新らしい四尺許りの水槽、滿々と水を湛えた眞中から竹筒が勢よく水を吹き上げると、案山子の樣に簔を着た人形が二つくるり〱と追ひ駈けごつこをして居る、これは福松の手製であるらしい、水の底には心太四五本、魚ともならず深く沈默して居る。いつもならば此處に御虎が居ると、夕飯早い連中が、笛、尺八、明笛など騷々しく吹きながら此に落合つて御虎と無駄口の言ひ合ひに夜を更かすのであるが、今日は晝から留守なので藪垣の蜩が際立つて覺える程閑寂てある。
福松が立上らうとするを竹公慌たゞしく止めて、急に腰に煙草入を挿し込んだ
「いゝだよ福公、晩に又來るだから」

「聞けえ」と坐り直つて。

「又來るだかよ」

「うむ來るだ、御前とこの御嬶の顔見ねえぢや眠られねえだてはゝゝ」

「冗談口言ふもので無えぞ」

「晩にや歸つて來るだかね」

と道へ出て聲高に竹公は歩き出す

「歸つて來べえよ、來ねえてどうするか」

と福松の聲が聞えたかどうだか、竹公の姿は見つく夕日の中に小さくなつた。

「ほう、飯の支度だ」と福松は獨り言ふて奥へ引込む。

これが毎日の仕事の一つて御虎が裏の溫泉へ這入つて其れから薄化粧、髮を結ひ終るまでの間は、福松が飯を焚く、汁を煮る、店から臺處まで拭掃除をする、其れから此春除隊で歸つた同居人の木挽の庄公が歸るのを待て夕飯を濟ます事になつて居る。

膳立までして待てども御虎も庄吉も歸て來ない、村の者は大鰐の兵隊を見に行たのか但しは御虎の留守の故か一人も店に聲掛けるものがない、日は次第に暮れそめて軒先の蚊柱が崩れ〱て其處ら中薄暗くなるとわあっといふ程蚊の唸きが聞える、店の燈籠に灯を點して奥の洋燈を心細く、一人つくねんと戸口まで出て見ると、大鰐の天の色ぼうっと明るいのは大方軒並の提灯の炎であらう、只だがや〱と

いふ賑やかさは手に取るやうである。

「福衆よ飯食べたかね」といふ聲に振返ると其れは隣の御かよ婆さんて、家中は兵隊見物に出た留守居の役、これも淋しさうに又羨やましさうに向岸を眺めて居る。

「まだゞよ」と福松が言ふ

「あゝ爾けえ、御嬶あ未だ歸らねえだね」と御かよは無遠慮に福松の傍に腰を掛け。

「主あ何んてまあ御嬶を貸してやつたゞよ」

「何んてつて御前、商賣になるだあてよ」

「一昨年の事考えて見せえ、え一昨年の事」

「何にが一昨年の事だよ」

「何にがつて其んだら人の好い事だてはあ馬鹿されるだよ」

「何にが馬鹿にされるだよ」と福松は不機嫌らしく口を閉ぢた。

「其んてははあ納まらねえだよ、一昨年の暮だつぺえ、仍且はあ兵隊が繰込んで御虎っ子はあ布屋さ手傳に傭はれたんべ、其りや御前だつて忘れねえ筈だよ、大將だか何んだか御頭樣も兵隊も二晩泊りて歸つた後でどうしたと思ふだ、御虎っ子三晩も四晩も歸らねえてねえかよ、何んでも其時兵隊と可笑しひ評合になつてだつて誰も知らねえものが無えたが御前も知てるだんべえにはあ」と立續に饒舌り續けて、福松の煙管で煙草のみかけ、ふつと吹いて

「あんまり人がはあ好過るてはあ」
「一昨年の事だつて本當だか噓だか見ねえ中あ分らねえだ」
「其んだら根性だて可えねえだ、何處の國にはあ其んたら處ら見付けられるやうな馬鹿あんめえ、御虎っ子ははあ松前からの渡り者だて主より賢いごたてよ」
「其りや俺あより賢こいだ」
「其れんにはあ器量が美いて主にやはあ分に過ぎてるだあて」
「分に過ぎてるだあ」
「器量の好いものあ何んぼ用心しても他から仕掛けられるてはあ油斷がなんねえだ」
「御かよ婆さんや」と福松は屹度改まつて
「俺あ其んだ心持い惡い話聞きたくねえだ、元とん處は御前が媒人ぢやねえかよ」
「其りや其んだよ、其んだてはあ氣い揉んだよ、一昨年來た兵隊がはあ今日又たこねえとも限らねえだて」
「其りや其んだな」と福松は首を垂れて
「でも婆さん、俺あ御虎っ子にや餘程世話あしたゞ、生命の親だによ、御虎子だつて恩を知らねえ事あんめえや」
「恩を知らねえ?」と婆さんは驚いたやうに叫んだ「恩は知らねえ筈ねえだ、だけんど福衆考えて見

せえ、恩といふものあ其時丈けのもんだよ、切ねえ峠を越して了えや誰でも忘れて了ふだ、地獄て佛様に逢つた時あ嬉しかんべえが、極樂さ行着いて了えや佛様も何も忘れるだつて誰れかに聞いたゞよ、爾たつぺえ、其處だあよ、御虎子だつて小間物背負て旅いかけて此土地さ流れて大病煩つた時主が助けてやつた恩は並大抵ぢやねえだ、だけんどはあ……」

「忘れねえ、死んでも忘れねえて言ふただもの」

「誰がさ」

「御虎よ」

「いつだ」

「毎晩のやうに」

「ほう寐物語けえ」と歯を露出す

「うむ爾だ」と眞面目てある

「其處が間違の基だ」と乘出して「主に自惚あるだあて可えねえだ、人に恩掛けてさのう、いゝか聞かつせえ、俺あ彼人に恩掛けてやつたゞあて彼人は一生俺あを難有えと思つてるだんべえと思ふのは詰り自惚だあ、此村の生え抜きなら構はねえだか、旅いかけた女だて男の世話にやなりつけてるだあによ、人の恩位え何とも思ふものてねえだ」

「御前御虎つ子何か暗え事ある思つてるかよ」

「あるつて證據がねえだ、けんども御前、百姓こ鼻が白粉つけてよ、紅え褌を足に搦ませてよそら……

……………」

「もういゝだ聞きたくもねえだよ」と福松は急に高聲になつた。

「怒るものおちやねえだ、主の爲めを思ふてはあ言ふたゞよ」

「御前又俺あの面見ると其れ言ふだてよ」

「言ふたら惡かつぺえか」

「もういゝだ婆さん歸つて呉れろよ」

「一昨年の事てもさのう」

「歸つて呉れろいふだに、俺あ御前の面見ると如何いふ譯だか癪に障るだよ」

「歸れなら歸るべえが」と婆さんは腰を起して

「御前庄公を何故に家さ置くだよ」

「何んてもいゝ俺あ人ら世話するちうに不思議あんめえ」

「仍且恩を施すだあかね」と横を向いて指を折て數へ

「主あ確か三十七の四線だあね、御虎っ子は何歳だね」

「二十七だ」と不精〲に口の底に言て、ぷつと地べたに唾を吐く

「二十七なら五黄だ、強え星だによ四線あ食はれるだ、庄公は」と言ひ淀んで

「御前庄公が此間から穿いてる表附の下駄何處から出したと思ふだ」
「知るもんけえ」と蒼蠅さうに言ふ
「誰れに買て貰つたと思ふだよ」
「まだ歸らねえがよ」と福松は怒鳴て煙草入を摑んだまゝ屋臺の方へ歩み出した。
「えらあ兵隊がはあ賑やかだ」と婆さんは對岸を眺めて軈て戸口の中に引込む。
福松も同じく其方を眺めて暫時は茫然と立て居たが、何思ふたか優しい聲で
「婆さまよ」と聲懸けた、隣の奥の方で
「何んだよ」といふのが籠つたやうに聞える
「俺あ一寸くら行て來るだあて留守う賴むだ」
「何處さ行くだよ」と聲が近くなる。
「一寸くらだよ」と口籠る
「何處さだよ」と再び問ひ返す。
「何處てもいゝだよ」と少し焦れ込んで、福松は店の燈籠と奥の洋燈を消し
「賴んだよ」と聲を掛けてすた〳〵と闇の中に見えずなつた。
「無理あ無えだよ」と婆さんは暫時其後を見送る。
福松の急いだ方角は言ふまでもなく大鰐て彼れは暫時橋の上に佇んで對岸から來る人に眼を留めなが

ら思案に耽つた、元より何を考へるといふ事もないが、福松の身には如何いふ譯か大鰐へ行くのが辛いので、大鰐へ行くといふよりも兵隊を見るのが辛いのである、いつもならば庄公を迎にやるのだが今日は庄公も留守だ、大方兵營に居た時の友達があつて其れに會ひに行たのだらうと恁う思つてる中に橋を渡つて了つた。

　町といふ町はごつた返したやうに賑やかで宿といふ宿の明け放した二階の欄干に脱ぎ捨ての軍服や襯衣や洋袴下などが干烏賊のやうに並べ掛けられて其間を上るもの下るもの恰ら火事場の如く騒々しい、中には日に緒けた眞黑な顔と手足を宿屋の貸し浴衣から出して手拭提けの下駄穿き、三々五々温泉場へと出懸る、其れを珍らしさうに打集つて見る村の者女子供、全て煮ゑるやうな騒だ、であるから福松が温泉所の前を通た時などは唄ふもの叫ぶもの湯を搔き廻す音、其等が夜を晝と漲り籠つて往來の人の土埃と一緒に一種の悪氣を散らすので、腎の病に疲れた彼れは輕く眩暈を感ずる程であつた。

　横町を出ると直ちに布屋の前、玄關には人を寄せ付けず、左右に二人の兵士が銃の先に劍付けて微塵も搖がず立て居る、其邊りは大洋燈三つ許り其れに磨き立ての反射鏡を掛けたので光明瀰蔓、氣の弱い福松は足の度を失つて蹌踉と群集の中に逃げ隠れた。

　御虎は何をしてるだらうと考へた、此工合では定めし忙がしからう、到底何時歸るか當てになりはしないと諦めた、同時に此那嚴めしい處に女の癖に能くも平氣で出入りが出來て飯の給仕までするものだ、と今更らながら御虎の度胸が羨やましくも又た呆れられもした。

突然肩を叩くものがある、と見ると夕方に來た竹公で、松阪木綿の筒袖に白い三尺帶、薄ら寒さうに兩手を帶の前に挾んで貧乏搖りをしながら立て居る、

「竹公けえ」といふと

「賑やかだな、大鰐にや昔から無えごつた」と喜んで居る

「主あ先刻一遍見たて無えかよ」と福松が言ふ。

「見ただ、けんど家にや默として居られねえだ、これで五遍目だよ

「五遍目けえ」

「兩方の軒の提灯が幾個あるか主あ知つてるけえ」

「知んねえだ」と言て福松は

「其んぢや主ああの俺あとこの御嬶あ見ねえかな」

「うむ見た、見た、見たゞ」

「爾か見たか」と顏を突出す

「いんまの先刻だによ、庄公と一緒に行つたゞよ」

「庄公とけえ」と氣の釋けたやうな笑顏になつて「野郎氣が利いてるな、俺あ留守だもんで迎えに來て呉れたあだ」

「俺あには挨拶もしねえて大急て行たよ」

「うん酬けえ、難有う、難有う」と別れかけて振返り

「何方の路だ」

「田圃の方で逢つたとよ」

「田圃の方？」と怪みながら急ぎ足て人推し分けた。

福松と竹公が話して居た丁度其頃ほひに大鰐から藏館へ通ふ遠廻りの田圃路を御虎と庄吉が歩いて居る。

御虎は廿七の色白、瘠せぎすのすらりとした撫肩、引結銀杏の後ろ姿、鬢を締める丈け締めるのが此女の癖で、木綿ではあるが中形の秋草の浴衣に擬八丈と黒繻子の腹合の帶をしめた背中の皺の處に、大きな月が浮き出たやうに見えて居る、七分の醉、足元頗る覺束ない。

「提灯を御貸しつてば提灯をさ」

「提灯を？どうするだあよ」と男は蹌めく女の肩を攫まへながら歩く

「いゝからさ、提灯をさ」と女は少し焦れ氣味てある

「其んてもはあ危ねえだて、燃して了つたら可えねえだ」

「燃やしたつていゝぢやないか、私暗かりの方が好きなんだから」

「冗談こてねえだ、提灯無えだら河の中さ投り込むだんべえ」

「結構御前さんと一緒なら」と逆蝣を一つ入れてハヽヽヽと高く笑ひ

「御前さんも元とは兵隊さんだてえから懐かしいよ」

「巫山戯るてねえだよ」と庄公少しく不平らしい。

「いゝぢやないか、其りや一昨年の事さ、今ぢや御前さんといふのが……」

「大けえ聲だのう」と庄公は四邊を見廻した。

「木挽をさせるにや惜しいわね、だけども御前さんを抱て寢ると杉葉臭いが家の馬鹿野郎を抱て寢ると枯葉臭いのは恐れ入るね」

「靜にしねえか」と庄公小聲に制した

「靜にしないよ」と御虎が笑つて「おう寒」と身を慄はした

夏とは雖も奥州の極端、滿天の星が澄み渡つて空の色深く、隱々たる天の河は夜色定まる地の冷えと冷たさを通はして、提灯の灯を慕ふてか虫の聲時雨の如くに草を慄はす。

「寒くなつたな」と庄公も靜かに歩き出す、草の露に揺れ揺れて河の水に走る提灯の光り、御虎が紅い蹴出しをしどげなく洩るゝ眞白い脛が又となく美くしい。

「ほゝゝゝ」と御虎は頓狂に笑つて。

「馬鹿野郎がどんな顔して待てるだらうね」

「馬鹿野郎〳〵いふて無えだよ、聞えたら惡いによ」と庄公飽までも小聲である

「聞えたら猶ほ面白いぢやないか、私何でも亭主を怒らしたり困らしたりするのが好きさ中々怒らない

んだもの、此方て腹が立て來るわな」

「そんても危ねえだてはあ」

「危ねえのは尙ほ面白いやな、私普通の事あ嫌いさ」

「御前隨分氣が大きいな」

「馬鹿〱しい何だね男の癖に、惚れ拔いてるから大丈夫だよ」

「誰か來た樣だ」と庄吉が立止まつた。御虎も立止まつて。

「風だよ」と又歩き出す

「爾か」と言て庄吉は猶も背後を氣にしながら歩き出す。

「提灯持は先きだよ」と御虎は振返る

「能く提灯を氣にするだね」と紅白染の提灯を柄長く秋草の上に翳した、虫の諸聲がはたと止んて、あらぬ方に別けて聲美き虫が平氣に鳴て居る

差し翳した灯の光りに庄公の顏が薄紅く見えた、眞黑な髮が夜露に濡れて濕とりと美くしい、小肥りの下膨れほた〱と美味さうに見えた、別に美男子てはない或は普通以下てあらうと御虎が平素思はぬてもないが、併し此の場合只だ何となく爾見えたのて。醉が大分覺めて來たらしい。

再び足音がした、今度は御虎が先に立止まつて後ろを透し見る、いかさまにも人の影、其れがいかにも力なき歩みやう、呼吸切れまでが聞える。

「祸祟けえ」と庄公が盤掛ける。
「おう」と返事をする
「何だね御前さん迎にも來て呉れないて、庄さんが來なかつたら私一人て如何する事も出來ないぢやないか」と御虎は突然に怒鳴つた。
「庄公濟まねえ事たな」と漸やく追着いて
「御前ももう何處さも行てくれるなよ、俺あ今日程氣い揉んだ事あ無えだよ」と途ぎれ〳〵に言ふ
「何も御前さんに氣を揉んて呉れと頼みやしまいし」とぷり〳〵する
「爾言ふな、隣の婆さんが來てのう、そら御前怒るて無えだよ、一昨年の事もあるだてはあ、怒るて無えだよ」
「一昨年の事？」と御虎は屹度なる
「俺あいふたて無えだ、婆さまだよ、言はれて見りや俺だつて氣持能くねえだて」
「どうしたてえの一
「喧嘩あしたと」
「御かよ婆さんと」
「爾だ」と自分の唾を嚥み込んて漸と息を落着ける。
「私の爲めに？濟まなかつたねえ」と嫣然して「私先刻から寒くつて仕様が無いのよ」

「寒いだかね」と福松は心配さうに「俺あこんだにはあ汗え掻いたゞ」と掌で自分の胸の廻りの汗を拭く

「實がないねえ、私寒いてえに御前さんが暑いてのは、ねえ庄さん」と先に離れて歩いて居る庄公に聲掛ける、庄公は何といふ事なしにハヽヽと笑つて行く。

「もつと此方へ粘着いて御呉れよ」と御虎はぐつと福松の手を引いた、不意を食つて福松頗る慌てゝ引かれた手を拂ひ。

「じよ、じよ冗談するでねえだ」と危なく立止まる

「何でもいゝからさ」と身を凭せかける。

「人がはあ見てるでねえかよ、庄公も居るだあに」と嬉しさうに御虎の手を攫まへながら特更に聲を低くして言ふ

「見だつて好いよ夫婦だもの、ねえ庄さん」と又た呼止める

「爾だとも〳〵」と庄公は背後も見向かず草履の先で石を蹴返へしながら歩いて居る

「そらもう橋だ」と福松は握つた手を放した。橋は僅かに三尺許りの幅さで、六七間の長さ、中程に杭を二本打て撓みを止めた積であるけれども、足を運ぶ度に舟の樣に搖れて動もすれば身體の度を失ふやうになる、河上の東の森に當て二十日の月が薄明りく梢の間を模糊すと、其れが河の流に二筋三筋の細長い光りを走らして、恰らに遠森と橋とを墨繪の一幅、其森の上を滑べつて來る月明りが今ま橋の上を

渡る三人の乳の邊りの上丈けを染め抜いたやうに活々と照らす、先になつたのは庄公で次は御虎終りは福松である、福松は幾度か

「危ねえぞ」と聲掛ける、其癖自分の足元が一番覺束ないので。

「ねえお前さん、此橋を二人で一緒に渡つたのは何時だつけね」と狎つたるい樣な調子でお虎は月の方を向いて鬢の亂れ毛をはらりと手も掛けずに顏を横に振つた、明瞭とした眉毛額の生際が水々と仄めき渡る處又となく嬉しく福松は息を詰まらして見詰めた。

何思ふたか先になつた庄公は突然に唄を唄ひ出した。

「御醫者樣でも大鰐の湯でもッはあほいわいのさ」

「危ねえよ」と福松は後ろから叫ぶ

「惚れた病はァありや癒されぬう」

「はあほいわいのさ」と御虎が拍子取て。

「大鰐の湯でもう」と繰返す

「腎の病はァありや癒されぬゥ」と庄公が高く唄い直した。

「腎の病はァ」と御虎も唄てハ丶丶と笑ひ出した、庄公も笑ひ出した、御虎は腹を抱へて身體を左右に搖ぶりながら耐えきれぬ程笑ひ出した、其れに約り込まれて福松もフ丶丶と笑ひ出す

「腎の病はァ」と庄公益々得意になつて唄ふ

「はあほい腎のそらほい」と御虎が笑ひ轉げながら囃したが、其にも耐らなくなつて二人は踊り出した

「危ねえだ」と福松は前後に足を加減して叫んで居る、二人が踊り出したので橋は一上一下波を打ち出す、幅三尺の假橋、其上を渡る二人が半身を月影に出沒してきやつ〳〵笑ひながら唄ひ踊る、本氣の沙汰でない。

「危えだいふに、もう止めねえか」福松は遂々腹還になつて唸き立てた、其那締が笑ひの高潮に達した二人に見えやう筈がない、

「腎の病がさはあてりやどつてい」

「癒らねえだ、そりやほい」

はゝゝほゝゝゝ、二人は笑ひ笑つて止め度もなく踊りながら福松には御搆なしにずん〳〵行て了つた。漸やく橋を渡つて福松が、家の前へ行て見ると、月光晝の如く人通りもなき街道の眞中で二人は猶ほも笑ひながら踊つて居た。

福松は元來沈默の方であつたけれども今のやうには憂鬱性ではなかつた、御虎を妻に迎えたのは三年前て、其時お虎は小間物を背負て旅から旅へ、遂に此土地へ流れて來たが、不圖病つて次第に重くなり、持た路經ては足るべき筈がなく困て居る處を福松が聞て一仔一細の世話を見てやつた、斯る田舍てはお虎ほど垢拔のした女は無いので村の若者も大騷ぎをやつたが、併し誰とて進んで世話をする者もなく又

女房にしやうといふ者もなかつた、其れは此の土地では飯を食はない嬶が欲しといふのが平常の言草になつてる程で、到底共稼でなければ其日が暮らせない、御虎が病氣の時見舞に行たものが歸て來て、羅宇の長い煙管で煙草を喫て居たと話した時に一同が眼を圓くして其贅澤に驚いた事があつた、であるから白粉代、髮の油を勘定して誰も御虎に結婚を申込んだものがない、御虎のやうに旅から旅へ歩くものを此土地では「松前子」といふ、敢て松前の人に限た譯でない、函館の人でも東京の人でも長崎の人でも、苟くも言葉の異つた人は皆んな松前子といふ、其れは維新の際に函館や松前邊りから流浪して小間物屋、反物屋、藥賣などになつて來た女が多かつたので今だに松前子なる言葉が用ひられてある、同時に松前子には油斷すなと云ふてある。

お虎も此土地の所謂松前子で、何處から來たのか誰も知らない、當人も言はない、何れにしても自分の故郷を秘する必要があつて又た故郷に歸られぬ事情があるらしい。

福松から望んだのかお虎から持たせかけたのか是も明かでないが、媒人は隣の御かよ婆さんで、此婆さんは嫁入の世話をするのが好きで又た其れを破壞し歩くも好きな、言はゞ吉事にあれ凶事にあれ何でも自分の身體を休めずに饒舌て廻るのが道樂だと見える。

福松がお虎と夫婦になり立ての時は、離れても爾だが、彼は別して女房を可愛がつた、隣の婆さんが唇を嘗めずつて。

「其ら見せえよ、本性を表はしたゞ」と言ひ廻た時には福松には凡て臺所の事や拭掃除までする役廻り

となつて居た、其れても誰かゞ「氣を付けろよ、嬶の尻が重たくねえけえ」といふと、福松は顔を眞赤にして「俺だて男だ、嬶の尻に敷かれるもんけえ、要らねえ御世話だ」と怒鳴る、女房の事に關して自家の權式を損ぜられる樣な言を聞くと、いつでも喧嘩腰になるが、其の他の事に就ては平素が至極隱當な人なので誰も惡氣を持つ者は無い。

女房が臺所をするのと亭主が臺所をするとは餘程の相違てあるが、此の相違が一時に來るのでなく、ぢり〳〵と少しづゝの讓步から來る相違だとすると、一寸氣が付き難いものである、福松の臺所役は隨分熟練するやうになつた。

處が御かよ婆さんの所謂一昨年の事が出來に及んだ時に村中の年寄共が福松に離緣を勸めた、これには彼も敵はなかつたと見えて斷然御虎を逐出して了つた。其時の事てあるが福松は急に元氣が付き出して來た、人に逢ふ毎に必らず「俺あ嬶あ追ん出したゞよ、俺あ今まで鼻毛數まれてる樣に見せかけて居たゞよ、あんだ奴に馬鹿にされて堪るものけえ」と威張つたものだ。

然るに其れから十日も經つか經たない中に御虎が再び福松の家に歸つたといふ風評があつた、果して其れに違ひないが、福松の許を逐はれてから布屋に奉公して居た御虎と橋の上て邂逅したのが緣て、どんな話をしたのか、其晩から逆戻といふ事になつた、是れには村中の者も一驚を喫つた。

其れから間もなく福松は腎の病に罹て木挽を廢した、丁度其時兵隊から歸て來た弟子の庄吉が同居する事になつたので、木挽の株を其れに讓て自分は木地挽となつた、御虎が水屋を始めたのも此年からで。

御虎の逆戻以後、福松は馬鹿に鬱ぎ込むやうになつた、村の者は腎病の故だといふ、又た面目が無くて小さくなつてるのだといふのもある、が、御虎を再び入れたといふた處で別に福松の德望が衰へた譯でもない、離緣に賛成した連中も仍且毎晩のやうに御虎の店に來て無駄口を戰はして居る。福松は仍且臺所守を務めて居るが今では隣の御かよ婆さんの他一言も言ふものはない。

御虎と庄公が踊を踊つてから二三日後の夜である、福松は村端れの海藏寺を出て歸途に就いた。

和尚樣の相手をして珍らしく醉ふた上に例の勢なき歩き振て、寺からの野路、薄や葭、野茨など夏ながら丈け高く延びた中を踵打つ草履の音淋しく、稻田の緣を行く堰の水音を聞くともなしに、和尚樣の言ふた事を考へながら歩く。

「巧え事を言ふものだ、和尚樣ちう者あ女の事なんて盲だあ思つてだに、豪あもんだ」と其の痩せて居ながら短い首を二三度掉て見て

「子供のう出來ねえぢや本當の夫婦の情愛無えだつて違えねえだ、子供のう出來たら氣い探ませる事なかんべえ、違えねえ、これだハアそれだ」と嬉しさうに手に提げた風呂敷包を振て見る。

風呂敷包に包んであるは、和尚樣から貰つて來た五合の小豆と三つの燒麩である。

「これだ」と掌に叩いて「利くべえよ、弘法樣の御呪禁だてはあ」と一生懸命に急いだ

「女だんべえか、男だんべえか」と恁う考へた「男だんべえ、和尚様が請合つたゞあ、だが女だら如何しべえか、女でもいゝだ、弘法様が授けて呉らつしやるだもの、勿體ねえごんた」と又考へ直して
「女よりも男がいゝだ、授かるなら男にして貰ふべえ、男だ、男だ、だけんど女も又た可愛くて宜いものだ」いろ〳〵考へて
「あゝ何方でも宜いだ」と到頭最初に戻つて了ふ、何だか嬉しさが背中の邊りから込み上げるやう、左なきだに醉ふた足は地に落着かない。
「寐てるだんべえか、うむ最早寐てるべえ、寐てつても構はねえて御呪禁食はしてやるだ」恁う考へた時、自家の前へ來た。
「今ま歸つたゞよ」と勢よく聲掛けてがらりと戸を明けた、家には音も返事もない。戸を閉め直して再び
「今歸つただよ、御嬶よ」といふた時慌たゞしく上框に出たのは御虎である、寐起姿の手拭地の浴衣に紅い細紐を緩く締め、眼の縁がほつと上氣したやうに薄紅く、物に驚いた樣に眞直に棒立になつて居る。
「如何かしただかな」と福松は上へ上り込んで爐の傍に坐る。
「どうもしないよ」と胸の處に手を當てゝ居る。
「何んて其んだに呼吸い切てるだよ」
「何んてつて」と詰まつて「御前さん突然に怒鳴るんだもの、吃驚すらあね、野中の一軒家ぢやあるす

いし、私本當に胸がどき〳〵して來たよ、これ御覧な」と一寸蹲んで膝と膝とを着け、福松の手を取て乳の處に當てがふ。

「ほう大變だな、俺あ惡かつたによ、勘忍してくれろ」と次の間を見た、次の間には蚊帳の綠稍々草色に褪せて縁の紅も茜になつたのが靜かに垂れてある

「庄公は？」と言ふと

「今歸つて來たばかしだよ身體の工合が惡いて直ぐ寐て了つた」

「其りや可けねえだ、どう惡いだ」

「如何惡いか私に分るもんかね」と福松を離れて差向に坐り

「御前さん御酒飮んて來たの」

「うむ」

「飮めない癖に御止しよ、あゝ吃驚した」とがくりと傾いた銀杏髷の後ろの方を兩手て直す。

「勘忍して呉れろい御前眠て居ただあかね」

「あゝ一寸横になつたのよ」

「蚊帳の中てけえ」

「誰が御前さん庄さんの寢てる處へ……」

「それぢや蚊に食はれだつぺえ」

「待人は蚊帳の外ぢやないか」と獨りて恐悦がつて笑ふ。

「いや勘辨して呉れろ、其代りに御土産あるだ」と醉顔を萬遍なく燃火に照らして莞爾〱と之も亦笑ふ。

「御土産？御寺の御土産なら氷餅位のものだよ屹度」と立上る、蚊帳の中で寢返りらしい音がする、はつと思ふたやうに御虎は其方を向いて

「おう暑い團扇は何處だつたか知ら」と獨りて言ひながら蚊帳の向ふの方へ身體が隱れたが、一言二言蚊帳の中と小聲で話す、庄公は未だ眼を開いて居る。

「御虎よ」と福松が呼ぶ

「おういゝ月だこと、窓が夜明のやうだ」と急に高聲で

「痛むの、困つたね、其那に苦しくつちや」

と態とらしく言ふ

「庄公眼いさましてるのけえ」と福松は蚊帳の中を透すやうに見て

「鹽梅はどうだよ」

「うむ」と如何にも切なさう、「腹あ痛んで胸がむか〱して堪らねえだ」と庄公が言ふ。

「暑氣當りだんべえ、御虎よ、あにしてるだ千金丹飲ましてやれえよ」

「彌？、庄さん飲むの」と、此時蚊帳がさや〱と動いて、御虎は壁に吊るしたの藥袋を取て爐傍へ出

て來た。

福松は仍且機嫌よく、風呂敷を兩手に額の處まで捧げて「南無遍照金剛」と二三度推戴きながら包を釋いた

「おや小豆と麩」と御虎は包の中を見て驚く。

「これだつてはあ、のう、こりや御寺様の畠て出來た小豆だ、こりや弘法様の麩だによ、難有え事た」

「何にするの」と物珍らしさうに又覗く

「御呪禁だ、小豆五合に水一升、其れに此の麩を柔かく煮てさ、其れをはあ噛まねえて飲むだ、子供の出來る呪禁だによ」

「おう厭だ」

「何が厭だ、勿體ねえ、三つの麩を御前が一つ俺あが一つ、あとの一つは半分づゝ口て截切つて丸吞だ」

「子供が出來るんてすつて」

「顯著なもんだてはあ」とにこ〳〵すゑ。

「御呪禁てすつて?」

「男の子が可いか女の子が可いかよ」

「其りや何方ても可いけれども」と瞥と顏色を見る

「爾だつぺえ、授かりものだ、撰り好みしたら罰い當るべえ」と御虎が中腰になつて爐の上の自在に掛

けた鐵瓶の口に湯呑を當てがつてるのを見て

「ほう、藥かよ、早く持て行て飲ませろよ」

「あゝ餘程御腹が苦しいさうだから」と藥と湯呑を持て蚊帳の中へ這入つた

「おや俺あ是れ煮るべえ」と立上る

「今夜其れ食べるのかい」

「爾だ」

「これから煮るの?」

「爾だ」

暫時、話が途切れた、庄公が湯を呑む音がする、何やら小聲で狐鼠々々言つたらしい

「あゝ其れがいゝよ、だけんど御前さん、煮え切らない人も小豆の樣だと云ふ程だから中々煮えないよ」

「一つ時は掛るべえか」と立ちながら言ふ

「二時間位だよ」

「二時間位え譯い無えだ、善は急げちうだて」

「其も爾ねー御前さん苦しいかえ」と庄公に言つたらしい。

「うむ胸の處が」と苦しさう。

「俺あ鍋洗つてくるだよ」と福松は裏の井戸の方へ出る

くす〳〵と二人の笑ふ聲が蚊帳の中から起る。

鼻唄を唄ひながら上機嫌、福松は軈て鍋を自在の鍵に掛けて、下から榾を焚き初めた。

天井もない眞暗な梁から細の自在がぶら下がつて居る、爐は四尺餘りの大きさ、へら〳〵と榾が燃え出して鍋の底を甞めると、爐側にある眞鍮の大きな灰吹、福松の頭の上に方る佛壇の金具、黒光りに滑々とした戸棚など一様に光り交はして、ぱち〳〵と音する柴の中を潜り込んで又た薄く柔らかく逃げて行く煙の末は三尺許りの光線取の高窓、月鮮やかに夜が更け更めた。

「お虎よう」と福松は顔に漲る煙を除けながら火を掻き立てゝ。

「庄公仍且いけねえか」

「あゝ癪氣になりさうだから」

「困つたな、抑えてやれよ」と柴をぽきりと折り、又たぽきりと折る。蚊帳の中は靜かである。福松は何やら鼻唄を小聲で唄ひ出した、醉は未だに覺めぬらしい。

暫時は双方無言て、家中は寂莫と冷え行く樣に虫の聲が聞える、福松は悠然と其の厚い下唇を緩まして眼は細々と洋燈に眩しさうに横顔を射られて怛と鍋の上を見結めたが、不圖首を延ばして蚊帳の中を覗くやうに透し見た、けれども向ふは眞暗、片側の障子丈けが朧に白く見える。

「御虎よ、御前起きて來ねえかよ俺あ一人ぢや退屈てなんねえだ」と呼て見る

「もう直きだよ、御呪禁は急くもんぢやないとさ」と明瞭と答える。

「其りや爾だ、庄公は眠つたゞかな」

「今漸と落着きかけてる處だよ」

「爾けえ、いゝ鹽梅だ、年い若えてはあ身體あ使ひ過るてのう」

「………………」

「來年の春あはあ嫁子取てやるだ、其んでもはあ一人身にしてははあ大鰐の淫賣婦も買はねえて感心だあよ」

「…………」

「御前の知てる家て庄公の嫁になるよな可い女娘あるだかね」

「…………」

「若えのが可いだ、若えのがよ」と夢のやうに言て、洋燈の心が蚯蚓の鳴く聲のやうに油を吸ひ込む音を無心に聞きながら

「御前もはあ廿七だてはあ婆さまになつたゞあな」とはゝゝと笑ひ、鍋の蓋を取て見て

「未だ煮ゑねえだ、御前初めて亭主う持たのは幾歳の時だよ」

「…………」

「俺あ處さ來たのは廿四の時だ、其前に何人もあつたんべえ、若え亭主と年老た亭主と又た俺あがの年位の亭主と、何れが可かんべい瘠せた男と肥えた男と——なあ御虎よう」

「…………………」

「だがはあ御前にも呆れ返るだ、村の若え者がはあ店さ集つてる時にはあ、俺あがの惚氣言ふてはあ、俺あ赤面する事あるだよ」

「…………」

「のう御虎よ、眠つたゞなね、看病のうして轉寐するとはあ風邪引くだあよ」と又鍋の蓋を取て見て「未だ煮ゑねえだ、歟の方は柔かくなつたゞが」と膝の上に鍋蓋を持たまゝ眼を擦り／＼欠伸をしたが、此時遙かの／＼遠くて尺八の音が聞えた。

「ほう竹公の奴、吹いてけづかるな、いゝ御月夜だてはあ」と耳を澄まして「河上の森ん中だんべえ」と次第に恍惚となる、竹公の尺八が風の模樣で近く遠く緩調に聞えると、窓の下の小流れの石に囁ぐ音がちやぶ／＼と單調に其れを操つる、二つの音が聞き慣れた耳に謎のやうに和らかに纏まつて來ると、月は天心に近ついたてあらう、屋根の茅を傳ふ夜露の雫がぽたり／＼と一定の間歇を置て軒下の石に滴る、福松は澁さうな眼を細くしては又開いて、恟と鍋底の火を見詮めて居たが、其火が次第／＼に自分の魂の中に滅入り込みさうになつて來て、自づと崩るゝ榾の白灰幽かに螢の如くなる頃には、こくりこくりと居睡の影法師可笑しく、爐の火に負けた洋燈の光りが急に明りく壁を照らして居る。

不圖眼を覺ますと、榾の火が冷たくなつて居る、醉が覺めたので四邊が俄かに淋しい。

「御虎よ」と呼て見た

「あいよ」と直ぐに答える

「はあ火が消えて了つたで」と言ひながら寒さうに立上つて、裏の薪小屋へと出て行た。水口の戸を明けると月光滿面ほうと立止つて向ふを見ると、柿の木と南瓜棚の間、庄公の寢間の椽の方に廻る細い路の薄暗い月影を忍んでばた〳〵と逃げ出した二三の人影がある

「ほう竹公けえ」と聲掛けると、何も言はずにくす〳〵と笑つて二三間逃げ延びると堪らないやうに、わあッふッと噴飯し、垣としもなき木槿の犬ぐゞりを拔けたかと思ふと見えずなつた。

「又た夏梨盜りに來たゞな」と福松は氣にも留めず、榾五六本抱えて家へ這入ると、御虎はもう蚊帳を出て、不相替ほつとしたやうに眼を潤ませながら鍋の下を焚き付けて居た。

「ほう榾があつたのけえ」と燃え上る火を見ながら福松が立て居る

「あつたのかぢや無いぢやないか、此んなに澤山此處にあるのに、寢惚けてるんだよ」といつて仍且自分も眠さうに爐の火を懵乎と見詰めて居る。

「あゝ爾けえ、寢惚けたゞ」と例の締りのない悠然とした笑を浮べて、胡座を搔き、面白さうに鍋を眺めて。

「もう煮えたかな」

「煮えたかも無いもんだよ、焦げ付いてるぢやないかね」

「爾けえ、焦げ付いただかね」と濟まないやうな顔をする

「焦げ付いたら鍋と能く利くかも知らないわ」

と御虎は嫣然と笑ひかける。

「爾だ、其りや利目があるだんべ」と福松は目も鼻も無くして笑み傾むけた。

うと／＼と眠つたかと思ふと又直ぐに眼が覺めた、其處ら中の隙間から朝日の光が虹の如くに射し込む。

「遲くなつたゞな」と言て四邊を見ると御虎が居ない。

「もう布屋さ行たゞかな、兵隊が朝立ちだてえで」と思つて起上る、病後と言ひ夜更かしをしたので頭が馬鹿に重い、腹の底には何といふ事なく忌々しさが潜んで居るやう、自在から下したまゝの鍋が呪禁の小豆を入れた昨夜の通りに冷たくなつて敷板の上に載つてある、折角煮たものを何故昨夜は食はなかつたらう、御虎はぐつすり先に眠つて了つた、いくら起しても起るものでない、蹴飛ばしても起して食はせれば宜かつたが、惜しい事をしたものだと思ふと益々氣がむしやくしやして來る。福松は漸やく起きて戸を明け、扨て茫然と店の框に腰を下したが、飯を焚く勇氣もなく掃除をする勇氣もない。承塵の棚には道具箱がない、庄公も篦棒に早く出て行たものだと、昨夜庄公が病氣で苦んだといふとを忘れて爾思つた。此時奥の塒の方で雞共が體屈さうにごと／＼音させるのに氣が付いたのでやをら身體を起して裏戸から雞を畑へ追ひ出した。

朝日は遮るものなく畑に漲つて、芭蕉菜、唐芋、蕗などが今ま乾上らんとする露の香に濡色眼も覺め

る許り南瓜棚の花が眞黄色い漏斗のやうに蕋の奧まで日に向けて長短の葉隱れ、いき〳〵と微風に動いて居る、福松はぽちねんと畑の中に立て水色の空を仰いで居たが、急に足を返して木槿垣から河緣を辿つて街道の方へ出た、今ま二時間も經たら暑さが照り付けやうが朝の中は家並の前の箒目未だ、荷車の輪の痕もない、夏の朝は流石にすが〳〵しい、其のすが〳〵しい風に逆上せたやうな頭を吹かれて當てもなく歩き出すと、何となく未だに悒々しい、いつもならば恁な天氣の好い日には小鳥のやうに嬉しい氣がするのであるが、今日は天氣と自分と別々になつて居るやうな氣がする。

面白くないから歸らうと足を返すと、丁度此時村の若者勘公といふのに逢つた。

「御早う」と勘公が聲掛けて直ぐと何やらくす〳〵笑ひ出す。

「御早う」と福松も氣のない返事をすると。通過た勘公は振返つて

「小豆甘かつたつぺえ」と笑ひながら行て了ふ。

「何を言ふだよ」と福松は首を低れたまゝ歩き出すと、次に喜佐公といふ若者に逢つた。これも福松の顏を見るや否やぷつと噴出して

「御早う」といふ

「御早う」といふと

「小豆は甘かつたつぺえ」と言ふて過る。

和尙樣が饒舌つたのだらうと、きまり惡いやうな思になつて福松はもう人に顏を見られるのが厭にな

つた、すると又一人
「御早う」と聲掛るものがある
「御早う」と見向もせずに答へながら、ずん〳〵歩くと
「福來よ」と呼び止める、駄菓子屋と豆もやしの圍ひ小屋の間から出て來たのは竹公てあつた。
「何んだよ」と立留る
「小豆は如何したよ」と笑て居る
「如何もしねえだ、主の世話になるめえし」
と福松は唇を閉ぢる。
「氣を付けろよ、嗅がいゝ事をしてる傍て呪禁の小豆も無えものだ」と是も眞面目になる
「何んだと」と福松は先刻からの忌々しさが一時に込み上げて來た。
「何んても無え」と竹公が默つて了ふ。
「手前こそ夜中に梨い盗みに來やがつて、手前なぞは尺八い吹きに夜遊びしてるのぢやねえだ、梨い盗みに歩いてるだ、泥棒野郎」
「何が泥棒だよ」
「ものう盗めば泥棒だあによ」
「はゝゝゝ」と笑て竹公は

「盗まれる奴あ用心が悪いてだ、氣い付けろよ、梨い位え何んでもねえだ」

「何が何でも無えだよ」

「いゝだよ、よんべの小豆あはあ甘かつたんべえ」と足を運び出す

「馬鹿野郎、阿呆、泥棒猫やあい」これ丈け怒鳴て見て福松は漸やく少し氣が晴れた、すると二三間離れた竹公が急に引返して來て

「鼻あを氣い付けろよ」と頤を突出して耳の所に口を間近く擽ぐるやうに言て逃げかける、其肩を確と攫んで

「主あ何んて其んだ事言ふだ、證據あるか」

「證據あるだよ」と口を尖らして向ふを見

「御かよ婆さんに聞て見ろ、昨夜俺あ婆さんに敎へられて見に行ただて」

「何を見に行ただ」

「主の御鼻あ、主の鼻先ていゝ事をしてた處をよ」

「見たか」

「見ただ」

「何處から」

「窓の處の穴からよ、洋燈が向ふだてはあ能く見えたゞ」

「本當けえ」と有丈の力で腕をぐつと引く

「痛え、本當だ」と向ふを見て

「來た、來た、婆さんが來たゞ、聞て見ろ」

と逃げやうとする

「こら待てよ」と縋るやうに惹留めた福松の顏は汗ばんで、呼吸使が荒くなつた。

「おう婆さんよ大變だ」と竹公が聲を掛ける

「主あ言ふたゞかね」と婆さんが進寄て

「駄目だよ、言ふ丈け駄目だ、から意地無しだてはあ」と冷やかに福松の顏を見る

「本當けえ」と福松は眼を据ゑて婆さんを見る、眉の八字が著るしく動く。

「聞て何するだよ」

「何するッて、何するッて、殺して了ふだ」

「誰をだ」

「恩知らずの恩知らずの庄の奴をだよ」

「御虎つ子は殺さねえて抱て寐るか」

「うんにや彼も殺すだ」

「人う殺したら我身も生命無えだぞ」と婆さんが笑ふ

「一晩代りに抱て寐たらよかつぺえ」と竹公も笑ふ

「うんにや、やつつけるだ」。と福松は不思議に考え込んで

「婆さんや」と突然に叫んだ、吃驚して立退つて

「何だよ」

「本當けえ」と念を推す、聲が哀れに慄えて居る

「見た事あ本當だつぺ、のう竹公」

「俺あ呆れたあだよ」竹公が横を向いて言ふ

「俺あ腹あ痛えいふだて、心配して藥飲ませろいふてやつたゞにはあ」と福松は大きな眼の端に無念の涙を、こぼさじ〳〵と瞬いた、髮の毛が埃に滲んで額の骨むら〳〵青筋著るしく痩せた形は又となく悲慘てある二人は默つて其樣子を見て居ると、軈て福松は其の痩せた腕を延ばして、空中の何物かを推し遣るやうに一二度振て見て

「畜生う、俺あやるだ」と叫ぶかと思ふと、薄く四角な肩をすうつと二人の間を拔けて一目散に驅け出し

福松の指して行方は海藏寺である。

海藏寺は安倍貞任が建立したといふ巨刹である、柱の古び銅蓮の錆色、叢立つ杉檜に包まれた屋根の破風、鬼面の瓦は高麗からの舶來と聞えた、門を這入ると一道の靑嵐ひや／＼と肌に迫つて、森閑とした廣い境內は一千年の土の香に苔の鱗も見せず、いつも夜露に濡れたやうに濕ほふて居る。

靜かさは大杉の下の六地藏、水の無い竹筒を淋しさうに控えながら、もの言ひ度氣に並んで居る、丁度其の上に當る大杉の眞天邊、見る目も遙かに鼯鼠かと思ふ許りに枝を踏まへて影小さく、叢葉隱れ、丁々と斧を振ふて末枝を拂つて居るのは木挽の庄吉である、斧の音は本堂の屋根に谺を作つて、かちんかちんと境閑かに響き渡る。

疲れ疲れた身體を、呼吸せき切て驅けて來た福松は、物も言はず大杉の下に立て、突と上の方を見上げた、血走た眼に額の汗が流れ込む。

暫時上の方を睨んで居たが、竹公は其れとも知らず、仍且斧の音かちん／＼と響かす、杉の高さは十丈餘り、周圍は三匝程もある太さて、根から三丈許りの間は一本の枝もなく、庄吉の登つた二本繫の長梯子が、其儘に立て掛けてある。

福松は、前後も見ずに突如件の梯子に手を懸け、曳と許り一引き二引きすると、上の幹に絡んだ繩がぐらりと釋けるや否や梯子は轂と地響を打て倒れた、此物音に氣が付いて更に梯子の倒れたのを知た庄

吉は吃驚して一番下の枝まで下りて下を見ると、福松は默つて庄公が根方に置いてあつた大鋸を取り上げ、遮二無二太い幹を挽き初めた。

「何するだよ」と庄吉は上から聲掛ける。

「何もしねえだよ」と福松は默つて仍且ごし〳〵と挽き續ける。（完）

第一人者

真山青果



人物

理学博士 楢崎元城

同長女 みち子

同次女 俊子

みち子長男 徹太郎

老婢 ろく

その他、下男多作、會社員、人夫等。

所　澁谷邊、博士自邸。

時　現代。

博士邸、裏庭。十月下旬、午後三時頃。大暴風雨の翌日の事とて滿目蕭條を極む。空は高く澄みて、日の光、夏よりも明かなり。

裏庭は博士逍遙の場なり。抱以上に餘る欅の樹中央より左手へかけて三四本立ならび、その前に秋草の花壇、盆栽棚、ベンチなど態好くしつらひあるが、何れも夜前の風雨に傷ましく荒廢し、既に伸びつくせる秋草は風に折れ泥に伏し、木柵盆栽の破損も少なからず。特に雷氣に中りて、眞中なる欅の大枝のむごく枝裂せるが、まだその儘幹に掛れり。樹間を透して前に展開するは郊外の平原にて、低き森、雜木林、草野など遠く連續す。立樹の後に低き木柵がありて、直ちに懸崖に續く心持を示す。

右の方斜めに西洋館の側面を見る。所々塗色の剝離せる、質素なる木造、二階建。階上は博士の書齋にて、半開きの窓には萌黄色のカーテンを掛く。階下の眞中に兩開きのドアあり。石段を下つて中央の裏庭に通ず。ドアの左右は硝子窓。石段の下、少し右手寄りにやゝ大形にして岩疊なる塔形の犬小屋あり、博士の愛犬ユウラカを飼ふところ。

幕明く。

老婢ろく…六十二、白髮、眇目、竹箒を持ちて犬小屋の前に立つ、落葉を掃除し居たるところ。博士の妹娘、俊子、二十二、色白く

豐かなる肉置き。長き袂を膝にして、石段の上にしやがむ。

俊子。(屈託さうに)何うせうね、爺や、私困つて了ふわ。

ろく。何うせうたつて、外に爲方はありません。

俊子。何うてもお父様へ然う申上げるのかね。

ろく。然うですとも、これが何時まで知れずに居るものぢや御座いません。

俊子。私にや云へない。

ろく。何故な。

俊子。お父様がまアどんなにガッカリなさるだらう。病氣を爲さるかも知れないわ。

ろく。高々犬一匹位な事て。

俊子。犬一匹だつて、お父様はあんなに大事にして被在つたんだもの。

ろく。だから貴方はお氣が弱すぎる。これが廣島のお姉様て御覧なさい、何でもない事です。幾ら旦那様が癇癪を起したと云つて、逼げて居ないものは爲方がありますまい。全體貴方はふだんから物事に臆病過ぎます、自分で自分の身體をつぼめ出しては際限のないもの。油賣が地獄、何所までも墜ちて行きます。

俊子。全く私は弱いのね。

ろく。弱い事が何の見得になります。些と廣島のお姉様でも見習つて、氣を濶達にお持なさい。人間弱い事を

賣物にしては最う仕舞です。貴方は今が大事のお體ですよ。

倹子。廣島の姉樣と私では違ふもの。

ろく。だつて、同じ血統の御姉妹ぢやありませんか。

倹子。姉妹でも心は別々、みな違ふわ。

ろく。それ、そのお心だから、畢竟、今度のやうな目にもお遇ひなさる。貴方、口惜しいとは思召さないか、なんぼ親御だつて無理は無理、無理に從ふ理窟はない。

倹子。口惜しいなんて、そんな事。お父樣の爲さる事だもの、何とも思はないわ。

ろく。心の、心の底から?

倹子。あゝ。(と俯向く)

ろく。また、それだもの。何うして然う意地がないんでせう、婢やは腹が立つてなりません。

倹子。けども、お父樣だつてお可哀さうよ。

ろく。私は又旦那樣の爲さる事が恐ろしい。以前はあんな方ぢや無つたが、近頃はまるで最う魔です。

倹子。そりや、賢吉の事があるから然う思ふのよ。

ろく。賢吉? 賢吉の事はもう過去つた昔です。私が旦那樣が恐しいのは、今も將來も、何時までも〳〵續いて行く事です。

倹子。全くお父樣は不運な方ね。考へると私、お氣の毒でならない。

ろく。何故そんな事を被仰る。

倭子。媼やにはそれが解らない？　あゝして長い間、生命も財産も放り出して、やつと為遂げた事業を世間が認めてくれないんだもの。御當人の身になつたら、まあどんなに口惜しいだらう。まア、この頃のお窶れなすつた事を御覧。まるでもとのお父様ぢやない。お食は減る、夜だつてオチ〳〵おやすみにならない、些いとした物音にも驚いて指先をピク〳〵動かしてお在になる。一日〳〵お痩せになるのが見えるやうだ。私それを見る度に、涙が零れるわ。これが一身の身欲に喰はれたとか何とか云ふてはなし、みんな、學問の爲めにお盡しなさるんだもの。（と優しき涙にくれる）

ろく。なんぼ學問の爲めだと云つて、人間には道と云ふものがあります。女房兒を泣かせて置いて、それで學問が何んでせう。

倭子。だから媼やには解つて居ないんだよ。學問は一人二人の爲めぢやない、廣い世界中の人の爲めに盡すんだもの。（と、氣を換えて）そして、あの、ユウヲは何うしたらうね、何所へ行つたらう。

ろく。（忌々しげに首を振りて）何所へ行きませう、あんな、狂犬。

倭子。殺されやしまいか、可哀さうに、早く歸つてくれば好いにね。犬つてものは一生飼はれた家を忘れないと云ふから。今に疲れて歸つて來るかも知れない。（と、庭へ下りて犬小屋などのぞき見る）

ろく。飼はれた家ですつて？　此家をですか、何んの、そんな事。繋れて居た家です。鎖が切れて自由な身體になつて、今頃はさぞ暢氣に飛廻つて居ませう、人に嚙付いたかも知れない、狂犬！

俊子。でもお父樣にだけは馴れて居てよ。

ろく。爲方なしに、従つては居ました。鎖があるもの、犬だつて何うする事も出來ません。

俊子。嫗やは何故然う頑固だらうね。お父樣の事と云ふと、仇敵のやうに憎むんだもの。――けど、無理もないわ。一人ッ兒の賢吉を亡したのも、云はゞお父樣の爲めだものね。あの時、お父樣のお供さへ爲なければ、嫗やも今頃は樂に賢吉の世話になつて居られるんだのに。嫗やには全く濟まない事をしたのね。

ろく。賢吉は賢吉、私は私。あれの死んだのは心柄で、何も旦那樣に關つた事ぢやありません。私は決して旦那樣を恨みはしませぬ。旦那樣が無くとも、あいつは何うせろくな死態をする奴では無い。(と、急に其邊を掃き集めながら)私には子ぢやもの。あれの氣性は好く飲込んで居ます。小兒の時から、妙に意地ッ張の強い、空騒ぎな、浮々した奴で、沈着いた考は微塵無い、調子に乘ると火水の中へでも飛込む馬鹿者でした。旦那樣なら學問の爲めと云ふ事もありませう。テンで學問した事のない賢吉が、何んでそんな考へがありませう。北極とやら、人の行かない所へ行くのが、唯見得に嬉しかつた馬鹿者です。あれの親父と云ふが矢張りそれでな、賴まれもせぬ尻馬に乘つて、到頭生命まで棄てゝ了ひました。

俊子。まア然うなの、西南の戰に死んだとは聞いて居るが――

ろく。あゝあ、血の筋は七代とやら、親子共に好く似た氣分でした。薩摩の戰の時、高が兵糧方の人夫の僻に要らざる忠義立てをして、誰も行手の無い田原坂のお使者を、自分から望んで出たと云ひまする。怜悧な人は賴まれても御免を蒙ります。それをな、親父は度胸とか膽玉とか、それは下らぬ馬鹿〳〵しい見得を張り

たいばかりに、己れから進んで死に行きました。その心は何も、お國の爲めとか、大將のためとか、そんな深い考のあつたのではない。調子に乘つて何でも他の出來ない事をして威張りたいのが疾ひ。かげて他に笑はれるのも知らない、お先ッ走りです。——好く度胸〳〵と云ふのが口癖でな、貴方。賢吉も矢張りそれです。唯もう我性氣に喰はれて、前後の考も分別も無く、益體もない空騷ぎに生命を棄てた馬鹿者です。

倭子。それとは違ふ、賢吉は學問の爲めに死んだのだもの。人間が續く限り賢吉の名は消えない。

ろく。體が死んで名が何になります。親父の死んだ時でも、皆様は然う云つて慰めて下さいました。それから五年經ち……七年經ち……十年經ち……あゝ。

倭子。賢吉は幾つだつたらうね。

ろく。東京を發つた時は二十六でした。でも、死んだ時も所も、旦那様にさへ分らない位ですもの、幾つて死んだか誰れが知りませう。

倭子。元氣の好い、賑かな人だつたがね。

ろく。(聞えぬさまにて)あゝ、馬鹿な奴、馬鹿な奴。大事な一生を火事場騷ぎに過した馬鹿な奴。(とつぶやき居る)

倭子。考へると嫗やも氣の毒な身の上ね。

ろく。泣かせる人は結構我慢も出來ます、泣かせられる身は何うでせう。やれ、世界のため、學問のためと掲

られて、それて諦が付きませうか。奥様――お母様を御覧なさい。矢張私と同樣、何も解らない、何も知らない組の方で、世界のための、學問のためのと云ふ、そんな難かしい事は考へる閑も無く、たゞ御自分の一生を苦に疾んで被在つた。貴方々御姉妹の事ばかり心配してお出になつた。旦那樣が遠い向岸を見て被在るのなら、奥様は直ぐ足許ばかり見詰めてお出なさる。どちらも一役。遠い處を見ないと云つて、足許を見る人を咎めると云ふ法は無い。そして、あの通り一生苦しみ通し、ついぞ一日あけしいと思ふ日も無く、旦那樣のお身を思ひ死にお亡りなされました。奥様のお心になつたら何うでせう、心の中では乾度旦那樣を恨んで〳〵恨み拔いて被在つた事と見て居ります。

倹子。（暗然として）全くお母樣の事を考へるとね、私――

ろく。奥様は貴方です。奥様は五年の間お苦しみなさいましたが、お孃様はこれからの一生です。

倹子。私は最う何も考ひない事に決めてるの、考いたつて何うにも爲やうがないもの。

ろく。それ、そんな心で被在るもの、嫗やは心配で夜も眠られません。

倹子。學者の妻子は何うて不幸よ、何所でも皆然うなんだから、お母様も學者と結婚などなすつたのが惡るかつた、初めから間違だつたわ。

ろく。いゝえ、私は然う見ない。皆旦那樣がお惡るいのです。若い、世間見ずの娘樣に、何の深い考があります。娘がお嫁になるのは、たゞ今までより好く活きたいばかりの慾です、體を貰ふとも呉れるとも思つては居りません。みな銘々の慾です。誰がお嫁に行つてまて苦しみたがりませう。それほど大事な學問なら、

寧ろ奥樣などお持なさらなければ好い。

倭子。眞逆そんな事、それが世間の慣習と云ふものだもの。

ろく。それならば、と、私は云ひたくなります、貰つた後にも慣習と云ふものがあります。ゝゝゝあんなに生涯苦しめ通さないが好い。私は今度、ツクゞ旦那樣のお心を見破りました。恐しい方だ、人情も何も無い、全るで石のやうな方だ。西洋からお歸りになつて、初めて奥樣のお位牌にお會ひになつた時、——貴方も側に聞いてお出でゞす、お父樣は何んと被仰つた。「喜んで貰ひたい、私や辛つと目的を達して、北極を探檢して今歸つた。」と斯うてした。嬉しさうなお聲てした。

倭子。「それも皆お前逹のお陰であつた。」とも心底から私共へ被仰つたわ。

ろく。それが何てす。云はゞ、御自分が殺して置いて、そして較べも無いもんだ。その人の生き膽を取つて喰べて、それて病氣が癒つた、喜んでくれと死骸に禮を云ふやうなもの。私はあの時から、實に恐ろしい人と顫え上りました。

倭子。もう好いわ、媼や。

ろく。いゝえ、好か御座いません。貴方のなさりやうが何うにも餘り手緩いから、私は默つて見ては居られません。

倭子。それは私より姉樣に申上るが好い、丁度今日お出になるんだから、都合が好いぢやないか、私には何うしてもそんな強い口は利けないもの。それよか、私差當つてユウラの事が心配、お父樣が若しお聞だつたら

何う申上げやうね。

ろく。犬なんか何うでも——犬より人間が大事でせう。

倭子。だからさ、それで心配してるのよ。

ろく。あの犬は魔ものです、何れ業の惡るい四ッ足です。あれが居るから、段々旦那様も氣が興ぶります。あの犬と凝と睨合つて、何か話して被在る時の様子を御覧なさい。あの目、あの凄い目付、兩方で——人と犬と、その眼を凝つて睨合つて居ます。あゝ思出してもゾッとする——あゝ、狂犬。狂犬。ペッ、ペッ。（其邊に唾を吐く）

倭子。でもお父様にはそのユウラが唯一の慰藉者なんだもの。お友達にも味方にもあの犬だけよ。

ろく。（冷かに嘲笑つて）世間に棄てられて、病犬がお友達—それもまア好ろしからう。

倭子。お父様の眞實を知つてるのはあの犬だけよ。

ろく。然うでせうさ、何うて人間には解りません。

倭子。然う云つて了ひば爲方が無い。媼や何故然うだらうね。

ろく。私は旦那様と性が合ひません、大嫌ひです。戊の我慢を何所までも貫かうとなさる。貴方がお最惜しいからこそ、斯うして辛棒をしますものゝ、旦那様だけなら疾くにお暇を頂いて居ます。

倭子。思込んだら一徹だからね。

ろく。（獨語のやうに）あゝ、奥様はお怜悧な方だつた、お亡りになる際まで、ツイぞ一言、恨がましい事を曲

の外へお出し爲さらぬ。よく辛棒なすつた。お心の中はまアどんなでしたらう。

倭子。(打委れて)また、そんな事。もうもうその話は舍さうよ。お母様の話になると、私はもう……(と吐息を洩して)それにね、媼や、姉様が被來つても、決してそんな事を云出さないやうにね。氣性の烈しい姉様の事だから、又どんな事をお父様へ云ふかも知れない、私それが心配だわ。あんなに苦勞して被在るお父様のお壽命を削るやうなものよ。

ろく。でも、何方道一騷ぎはありますまい、また、無くては噓です。態々廣島からお出なさつた甲斐がありません。

倭子。(大息を吐いて)困るのね。

ろく。それだから貴方は苦勞性過ぎる。

倭子。だつて、媼や、お父様だつてお氣の毒だものね。

ろく。(偶と心付いて空を見上げ)あ、日が射して來た、この分なら落付くかも知れない、お座敷の掃除でも爲ませう、お世話になる間は御主人の家だ。(と立かける)

倭子。あれ、媼や、ユウラの方は何うするの、私一人に押付けて了ふのね。

ろく。さつきもお話しました通り——

倭子。おや斯う爲やう、姉様が被來るまでは默つて居て、姉様から折を見て話して頂く事にしやう。ね、それが好いわ、姉様にはまた好い工夫があるかも知れないから。

ろ　は、それも好しう御座いませう。

俊子。あれ、だつて爺やがその氣で居ないては、私一人何うする事も出來ない。

ろく。私は何方でも好しい。（と入る）

引違ひて楢崎博士、扉を開いて出づ。六十四、長髯、白　、憔悴のさま著しく、顔容枯槁、烈しく目を瞬く癖あり。裾長き暗褐色の寛服を着け、杖にすがり蹌踉として歩む。眼底炎にかゝりて視力衰ひ、口も吃して多く云ふ能はず、間々聞取れぬ所もあり。

博士。（扉に倚りて）ユウラが何うぞしたかね。

俊子。（ビックリして振仰向き）あら、もうお目覺めでしたの、私些つとも知らずに居りました。

博士。昨夜の暴れは何うだ。（と犬には何の氣も付かず、不隨の足を引擦りてヨボ〳〵庭へ下りんとする）

俊子。あれ、危ない。（と身敏く駈寄り、親切に介抱して樹下の籐椅子へと導く）

博士。何有、大丈夫〳〵。（と椅子に重くかけて）俊、喜んでくれ、やつと原稿が出來上つた。

俊子。まあ、それは——全部で御座いますか。

博士。思ひの外大部になつてな、千頁近くもあるだらう。

俊子。では、昨晩も徹宵起きて被在つたのですか。

博士。あれが神來と云ふものかな、昨夜は恐しいほど興が乘つての、や、書ける〳〵、自分ながら不思議に思ふ位だつた。

俊子。まあ、あんな恐しい中で？

博士。　外の暴れなど、トンと耳にも入らん。持つて居るペンに雷氣が傳つて、中の指がビリ〳〵痺れる。その爽快さがよ――まるで魂が蘇へる心持ぢや。その中に丁度拂曉。三時頃だ――それ、暴風雨が絶頂と云ふ時分、私は獨り出廊の上に突立つて居たが、何しろあの雨だ、暴風だ、雷鳴だ。見る限り一面は、たゞ焔と闇の戰、力と響の大なる鬪ぢや。燃立つ時は空も土も總て燃える、滅する時はたゞ無限の闇。焔と闇――世界を支配するのは、唯この二つぢや、それが總てだ、外には何も無い、何も無い。人間の感觸と云ふもの、まア眼も口も耳も、こんな場合は何の益體も無いもの、まるで無覺性だ。一つ一つには何の働きは無い、たゞ總體に働く或る偉大なる力――大自然の威嚇と云ふものか、それを感ずるに過ぎない。私は物の如く無言で突立つて居た。たゞ豪壯で、壯嚴で、私はあの時以來こんな絶大な光景に接した記憶が無いと思つた。顳顬の血がクル〳〵と鳴る。

俊子。　私はまた媼やと二人、寢床の上に顫えて居ました。

博士。　その中に雷は益々烈しくなる。世界はたゞ焔ぢや、力ぢや、響ぢや、四五度も落ちた。それ、その欅に落ちた時なぞ、私は血の焔の中に突立つて居たと思つた。

俊子。　まあ――

博士。　その時ぢや、私、偶と氣が付いて、耳を澄してな、ドンと強く床を蹴つて見た。（と大地を蹴つて）一……は聞えなかつた、二度……三度……然うするとな、俊子、聞える〳〵、ドンと蹈む我の足音が聞える、何度でも聞える。嬉しかつたよ、俊、て、私は斯う思つた、如何に自然が大威力を振ふても、此所に、此所に

立つてる私の足音を奪ふ事が出來ぬぢやないか。音も聲も婚も私の領分を侵す事が出來ぬ。外は外、我は我別々の世界だ。自分の耳に自分の足音を聞く間は、吾茲にあり、茲にあり、と然う叫ぶ權威を持つて居る。何人も拒み妨ぐる事の出來ぬ力を持つて居ると、然う思つた。(と、情激するまゝに、切りに拳もて胸を打ちつ)

俊子氣を揉みて、先程より「お父樣〳〵。」と、話を他に紛らさんとつとむ。

博士。(氣が付きて)何んだ。

俊子。あの、姉樣はもうお着きになる位てせうね。

博士。二時に新橋へ着くと云ふから、最う追付だらう、徹太郎も來ると聞いたら、妙に待たれるわ。

俊子。さう〳〵お父樣は徹ちやんに初めてゞすね。

博士。昨年來た時は道一人てあつたから、ツイまだ孫の顏も見ない。

俊子。それはもう可愛い兒よ。

今年八つになる譯か。

俊子。いゝえ、九つ、腕白盛りですわ。

博士。妙なものぢや、自分でも年寄つたと思ふよ。去年までは何ともなかつた徹太郎が切りと戀しくつて夢に見た事さへある。私は全く老込んて了つたの。

俊子。御苦勞が絶え無いからです。(と溜息を吐く)

博士。然うかも知れないの。

俊子。世間は世間で何うせ爲方がありません、然う餘り氣をお揉なさらないで、いつそ、打遣つた氣で被在つた方が好いでせう。

博士。さあ、私も時々はそれ思はんぢやない。然し如何にも心外でな、何うも我慢が出來ん。如何に盲目な世間と云つても、事實を見せて尚ほ信ぜられんと云ふ事が何所にある。事實は事實だらう、最後の證據だ、私を信ぜぬは好いとしても、事實まで疑るのは無法極まる、心外だ、

俊子。全く運の無いのですね。

處へ、ろく、一枚の名刺を持ちて出來る。

ろく。旦那樣、この方が被來いました。(と名刺を差出す)

博士。(それを俊子に渡して)眼鏡を忘れて來た、お前讀んで見てくれ。

俊子。第三銀行員、岡本淳吉としてあつてよ。

ろく。外に人夫らしい男が二三人も參りましたらうか。

博士。大方屋敷を測量に來たのだらう、御隨意に、と、然う云つてくれ。

ろく。(ヂロリと博士を見て)何ですか器械のやうなものを持込んで參りました。

博士。坪數でも檢べるのだらう、差支は無い。

ろく。ぢや、お屋敷を檢めさせるんですか、旦那樣。

博士。まあ好い、お前達の知つた事ではない。

ろく。は。（と不平げに退く）

博士。（俊子に向ひ）今の話だがな、私は然う思ふ。何事にも犧牲者はある、大きい事業ほどそれが多い。その場合、犧牲者即ち功績者ぢや、光榮の座に坐る人ぢや……お前にはお母様だがの、都賀ぢや、そりや無論犧牲者だつたに相違ない。私も好く知つて居る……私の事を苦に疾んで、その爲めに死んだと云はれても仕方が無い。然し、今日となれば犧牲はもう償はれて居る筈だ、立派に酬られて居る。私の極地探檢が世界に證認されて、八百年來の學者冒險家が企てゝ遂げ得なかつた、眞の北極探檢者たる名譽を擔得るとしてもそれは何も私一人のものぢやない、一家一族總ての榮譽ぢや。私の名と共に千古に消えない榮譽ぢや、妻として子として、皆その名譽を名譽とする資格がある筈ぢや。

俊子。お父様、何故急にそんな事を被仰るの。

博士。何故と云ふ事はないが、今日些と考へた事があるてな。

俊子。考へた事と被仰ると？　矢張りお母様の事で？

博士。さあ、それもある、その他――

俊子。その他つて？　お父様。

博士。詰らぬ事ぢや、何でもない事だ、まるで夢のやうな――いや、夢だ、夢を見たのだ。私は今朝方妙な夢を見た。

俊子。それ伺ひますわ。

博士。（急に笑出して）まあ止さう〳〵。白晝夢を說くほどの愚でもあるまい。

俊子。だつて氣になりますもの。

と話し居る所へ、下男多作、六十恰好、正直さうな人物。汗を拭き〳〵出來り。

多作。旦那樣、唯今お着(つ)きて御座います。

俊子。あら姉樣が？然う！（と急に浮上るやうに）そして何所に被在るの、玄關？お坐敷？

多作。お坐敷で休んで御出になります。

俊子。然(さ)う！（と父に向ひ）では、些(ちよ)いと御免蒙ります。（と小走りに入る）

多作も後につゞいて入る。

後に一人、博士物思ひに沈む。

會社員、岡本淳吉、鳥打帽、背廣服。ノートを手にして出て來る。つゞいて人夫三人、測竿(ポオル)、測鎖(チエイン)など携ひて、測量しながら出づ。一人はポオルを立て、二人はチエインを地に置りて、「B側點まで六チエイン三リンク。」「BよりC點へ三チエイン九リンク。」など呼ぶを、岡本は記手(ノオトマン)となりて　それ〳〵に書き付け居る。岡本、博士の居るに心付きて、側に來寄りて時宜の挨拶をなす。博士はたゞ懶げに應答するのみ。

徹太郎、九ッ半ヅボン獨逸服、眼のくり〳〵せる利發さうな少年。俊子に手を引かれて入り來る。

俊子。（博士を指して）あれ、あすこに被在います、御挨拶を申上げるんですよ。

徹太。（博士の膝近く寄り）お祖父様、御機嫌好しう。
俊子。（傍より口を添へて）お父様、徹ちやんが參りました。
博士。おゝ、徹太か、どれ此方へ來た〳〵。（と引寄せて、頭を撫でながら）好く來たの、初めて會ひました、お前のお祖父様だよ。お母様は何うした。
俊子。今那方で媼やとお話して被在います。
博士。また餘計な智慧をつけ居る。（と不快さうに眉をしがめしが、徹太郎に心付きて）何うだ東京は賑やかだらう。今に御祖父様が案内して、上野だの日比谷だの、方々面白い所を見せますよ。
徹太。僕、電車に乘りたいな、廣島に電車は無いもの――電氣燈はあるけども。
博士。自働車と云つて、獨りで走る車もある。
徹太。僕、水族館も見るの。
博士。然うか、好い〳〵。そして、お父様は矢張り毎日會社の方へ御出勤か。
徹太。え、それから植木を造つたり謡をうたつたり。僕も謡を知つてるの、七騎落なら。
博士。さうか、偉い〳〵。
道子ろく〳〵と共に出づ。二十七、年には甚と派手なる裝、眼大きく、背高く、言葉切れも正しく、何れと云はゝ先づ威高さうな面持。
道子。（博士の前に來りて）お父様（と會釋す）
博士。好く來なすつた。大層早やかつたの。

道子。多作が迎に出て居てくれたので、大變都合がよろしう御座いました。
博士。皆樣も變る事がないさうで、誠に結構ぢや。
道子。難有う御座います。(徹太郎が博士の膝にもたれ居るを見て)何ですね、徹さん直ぐそれだもの、お祖父樣が御苦しいぢやありませんか。
徹太。僕、お祖父樣と上野へ行くの。——それから、あの、水族館へも。
道子。それは好いのね、でも、御行儀が好くないと、連れて行つて頂けませんよ。此方へ御出なさい。
博士。まあ好い／＼。なア、徹太郎、お前のお祖父樣だもの、關はないな。——そして、龍橋さんは相變らず元氣だらうの。
道子。はい——お蔭樣で——。
博士。それは結構ぢや、お母さん——御隱居は。
道子。皆、達者で御座います。
博士。何か春中からリウマチのやうに聞いたが、昨今は何うだの。
道子。何ですかもう、唯氣難しいので困り切ります。
博士。そして直行かの、汽車は。廣島から乘詰ぢや無くたぶれたらう。ユックリ休むが好い。
道子。は、難有う、好く眠りましたから、それほどでも御座いません。——そして、お父樣こそ御不快のやうに伺ひましたがどんな御樣子で被在います。

博士。難有う！何有、大した事は無い。この頃中からあの本――それ、探檢記ぢや。あれを書く爲めに些と無理をして、不規則な生活をやつたて、それが身體に利いたものと見える。然しその方も辛つと昨晩限りで脱稿したから、もう安心ぢや、心配しないてくれ、然し、何を云つても年だね。爭はれないものだ、高々八百や九百枚の本だが、スッカリ精力を消耗して了つた。若い時分なら何ても無い事だが、體量もズット減つたやうだ。

道子。ては愈々御出版の御決心てすか。

博士。然う、可成なら來年までには本に爲上げて、世間を驚かしたいと思つて居る。それに、この十二月はお前達お母樣の七回忌だから、些と俗な考だが、その靈前にも供へてやりたいしな――無論、本は仁鳳院と書いて、お母樣にデヂケイトする積りて居る。斯うして出來上つた本を見るにつけ、あれの苦勞も一層氣の毒てな。

道子。然やうて御座いますとも。

博士。それに龍橘君にもぢや、何か酬ゆる道を講じなければなるまい。私を厚く信ずればこそ、こんな見當違いな、云はゞまア冒險な事業にも莫大の資金を供給してくれた。財産の半ばも傾けたと聞いてはその儘にもならん。私には恩人ぢや、後援者ぢや。てな私は斯う思付いた。丁度、ナンセンの極地から西へ北へ、百〇六七哩の所に非常に高い方錐形の氷山がある。四方は廣茫一面の氷原ぢや、トンと埃及のピラミットと云ふ心持よ。私はそれを龍橘の山とラテン語て名付けた。千年萬年、北極の氷山は世界と共に消えぬ生命を持

つて居る。斯うして私は龍橘君の徳に酬ゆる積りだ。

道子。然やうて御座いますかね、——そして矢張り何んてすか、その御本は御自分て出版なさるのですか。

博士。無論、自費出版ぢや。

道子。何故本屋て出版を引受けないのでせう。

博士。本屋て引受ない？（不快さうに）假令引受けても私は本屋などに委すものか。あいらに何が解る。あいらは本を商品として見る外に能の無い奴等だ。私の探檢記は商品ぢや無い。鹽や油を秤る同じ天秤にかけられて耐るものか。

道子。然し、もし被仰る通り價値のありますものならば、本屋にしました所て。

博士。何と云ふ、道！價値のあるものなら、と然う云ふのか。

道子。はい、私にはこれ程數多い本屋のうちて、お父樣の御本を出版しやうと云ふもの丶一人も無いと云ふ譯が、何うしても解りません。

博士。私には好く解つてる。賣れないからさ。商人としてのこの判斷以上に何があらう。

道子。何うして賣れないでせう、八百枚や九百枚なら然う大して大部の本でもありませんのに。私は又別のやうに伺つて居ます。

博士。別のやうとは何う？それ聞かう。

道子。はい、何れ申上ます。それを申上るために態々參つたのですから。

博士。今聞から。

道子。それはお話しても差支は御座いません。

　俊子はさき程より氣を揉みて、「姉様」「貴方」など度々姉の袖を引いて止むれども、聞入れる模様なければ、詮方つきて、

俊子。ては徹ちやん、あちらへ行きませうね。そして伯母さんがピアノを弾きますから、徹ちやんは歌ふんですよ。

　と徹太郎を連れて座を外さんとして、

俊子。さあ、媼やも行きませう。（とろくも共に促し立つ）

　ろく聞かず、素知らぬさまにて樹下に佇立す。俊子心を殘して去る。博士は沈思、道子は凝つと父の顔を見詰めてあり。

　この時がや〳〵と人聲して、さきの會社員人夫等と共にまた出て來る。

岡本。さあ、今度は立木だ、目通りの直徑と枝下の尺度だけ量らう。それも大凡で好いのだから、一々當つて見るにも及ぶまい。（とポケットより巻尺を出して一人の人夫へ渡す）

　人夫共それを受取り、中央の巨木を順々に巻尺に合せて、「一尺二寸――枝下八尺。」「二尺四寸――一丈四五尺」など呼ぶ。

　ノオトマンそれを書付く。

　ピアノ聞ゆ。

　道子は何氣なくそれを眺め居たりしが、偶と心付く所あるもの〻如く、不安さうに突とろくの傍に立寄り、

道子。媼や、お前知つてるだらう、あれ。（と測量夫の方を指す）

ろく。旦那樣が御存知て被在いませう。
道子。お前何も知らないの？
ろく。旦那樣のなさる事、私などへ御相談あつた例はありません。
道子は又博士の前に來り。
道子。(氣忙しなく)お父樣、お父樣！
博士。ん？(と首を俯したるまゝなり)
道子。(鋭く)お父樣！
博士やうやく頭を擡ぐ
道子。あれは何んてす、お父樣、あれは何んて御座います。
博士。屋敷を測量して居る。
道子。それは解つて居ります。ては愈々、屋敷を他にお讓りなさるお心なんてすね。……然うはなりません、なりません。
博士。お前は激して居る。些と落着いて話しなさい。
道子。(氣をいら〱させて)私は好く存じて居ります。貴方はあの御本の自費出版の費用――三千圓とか、それを龍橋に御相談なすつても出來ません所から、今度は屋敷を他に讓渡す御心になつたのに相違ありません。

博士。でも、他に財産はなし、屋敷でも賣拂ふより外に資金の出所が無いものな。

道子。龍橋だ所で、何所からその金を持つて參りませう。有つて出さないのぢやありません。

博士。それは私も知つてる。お前を嫁つた緣ばかりで、何萬と云ふ金を出してくれた。そのお蔭で私は、政府の補助も仰がず、この大事業を爲遂げる事が出來たのだ。

道子。龍橋は何とも申しませんが、姑や何かの手前、私は何の位肩身をせまくして居ると思召ます。

博士。然し、それも最少しの辛棒だ。

道子。お父樣！貴方は何所まで家族を犧牲になさるお考です。お母さんや私を苦しめ拔いたゞけでは足りないて、今度は又、あんな氣弱い、力の無い俊子さんまで犧牲になさるのですか。何んと云ふ恐ろしいお考でせう。この屋敷は俊子の財産、嫁入りの仕度金にお母さんが決めて置いたものです。これまで手放して了つては、あれの身體が何うなります。假令何と被仰つても、この事だけはお止め申さずに居られません。

人夫の聲にて、「二尺一寸——枝下九尺。」など呼ぶ聲又聞ゆ。

道子。(氣をあせりて)何れお話申します、何うか先づあの人達を歸して下さい。私はあんな聲を聞くと身を切られるやうに思ひます。

博士。然し然うも行くまい。私の方から賴んだのぢや。

道子。何故行きません。私嫌ひですから何うか歸して下さい。

博士。測量だけは差支あるまい。今賣拂ふと云ふては無い、談の上て後から何うもなる。

道子。いゝえ〳〵不可ません。何うしても歸して下さい。假令貴方が歸さないと被仰つても私は歸します。媥や、お前あの人達に然う云つて歸つて貰つておくれ。屋敷を讓渡すなんて、飛んでも無い事だ。ろく。承知致しました。(と入る)

ピアノの聲聞ゆ

博士。道！云つてくれ。探検記の出版は私の死活に關する問題ぢや。自ら救ふも仆れるにも、總てあの本にある。今日斯うして世に埋れ、嘲罵の的となつて居る苦痛も、總て雪がれる。家も立つ、名も立つ。總ゆる犧牲はあの本に償れると私は信じて居る。それでもお前は飽迄私の出版を拒むと云ふのか。

道子。本の事は問題ぢやありません。私の心配はたゞ屋敷だけです。

博士。然し本の出版には金が要る。

道子。それは承知して居ります。でも、ある所から龍橋へ手紙がありました。お父樣は何う思召してお書きになつたか知れませんが、その探検記は誰が讀んでも解らない、まるで取纒の無い、夢のやうな——まるで謎のやうだと申します。それでは本屋が出版を承知しないのも當前ぢやありませんか。

博士。何？私の書いたものが謎だ？

道子。は。

博士。謎ぢやない、事實さ、確實なる事實さ。

道子。貴方には事實でも、他のものには謎としか見えません。引受ける本屋の無いのが何より證據です。讀ん

て見た人の話には、何をお書きになつたのか、一行も一句も、殆ど意味をなさないとさへ申します。

博士。誰がそんな事を云つた。――上田だらう、大須賀だらう。

道子。それは存じません。

博士。然うだ、乾度然うだ。聞かないでも解つてる。渠等より外にそんな中傷する者は無い筈だ。卑怯極る、それが學者たる者の態度か、恥を知らない、愚かな態ぢや。

道子。でもお父様、私は上田さんとも大須賀さんとも、それは申しは致しませんよ。それに、お二人とも、兎に角、博士です、大學教授です。眞逆そんな御卑怯な事を爲さりもしますまい。

博士。(咽低く嘲み笑つて)それだ、それだお前達の目は。博士も教授も矢張同じ人間だと云ふ事を忘れて居る。欲もあれば野心もあるよ、又、強い虚榮心もある。たゞ一つ普通人と違ふ點は、書物と實驗を綜合して得た智識と云ふものを持つて居るその一つぢや。丁度女の中から指環を嵌めてる女を區別するやうなものぢや。他に何があらう。それを愛し、それを矜とする事も矢張女と同じぢや。指環一つて死もしやう、活もする。

道子。ですけど――

博士。まア聞け、私に云はしてくれ。そして、多くの女は富める隣人の指を羨む、な、咀ふものぢや。他人の手にある寶は胸に劒ぢや、恐しい毒ぢや。自分のもの、と云ふたゞ一言を聞きたい爲めにはどんな事も爲兼ねない。

道子。お父様は一人てそう決めて被在いますけど、私は外の方から聞いたのです。何の關係も無い他の人から

聞いたのです。

博士。他の人？まア好い、他の人なら他の人として置け。然し私の言ひたいだけは云ふ。九年間の辛酸と十幾人の貴い犧牲を拂つて、辛つと爲遂げた北極の探檢ぢや。それを何故獨逸の學者達は非定した。見たと云ふ、爲たと云ふ、事實まで奪はうとしたのは何故だ。ナンセンが爲遂げなかつた事だから、極東の一學者に爲遂らるゝ筈がないと云ふ、それが理由となるか。有を有ると云ふほど強い意味が世にあるまい。渠等は信じないのぢやない、信じまいとするんだ。それも好い。好いが、私を攫いて虛僞だ、騙りだと云ふ。私を海賊ガアダアと一緒にして、大法螺だと云ふ。或る學者なぞは勿體らしく私の健康を檢べて、椨原は多年の心配と努力の結果、ひどく健康を害して居る。一種の精神病――妄想症に罹つたとまで、誠しやかに報告したではないか。狂者ぢやとよ、狂者ぢやとよ。狂者とまでして、私を殺さないでは、私の事實を奪ふ事が出來ないのだ。學術を尊重すると云ふ獨逸すらその通りぢや。況して日本――學派と學閥の闘爭以外に何の能も無い日本の學者達だ。私の功績を嫉む、咀ふ、中傷する、もとより當り前だ。如何なる手段を竭しても、私の探檢を虛僞に騙りにするのだ。

道子。好く解りました。それならば其のやうに信じられるやうに爲たら好いぢやありませんか。

博士。だから、私は事實を事實のまゝ報告した。

道子。それでは、證據がありません。

博士。證據？事實に證據は無い。

道子。證據が無ければ、誰にしても信じやうがないぢやありませんか。

博士。然し事實だ。

道子。設令事實でも致方ありません。

博士。我は飽迄言張る。

道子。それはお父樣の御勝手です。でも、他にまでそれを強いる權利はありますまい。

博士。權利が無い？權利が無いとは何んだ。事實の外に何の權利？――事實の外に證據まで出せと迫るのが權利か。總て反對だ、顚倒ぢや。闇が光を消すとは此事だ、闇が光を消すのだ。（と、髮を掻捗り、帽子を投付ける。）

道子。でも、僞方はありません。

博士。ぢや、お前も信じないな、信じないと云ふな。

道子。私は何方とも申しません。

博士。何故云はれない、疑にこそ二岐はある、信ずるに迷はない筈だ。

道子。てすけれど、何方にしても私は智識を持ちません。

博士。智識で信ずるものぢやない。

道子。お父樣の人格だけならば私信じて居ります。

博士。私の人格を信じて、そしてこの事實を信じないと云ふのか。

道子。でも、私には解りませんもの。それ程の事實なら第一世間が信ずべき筈です。私共は兎に角、世間には學者もあります、然う〳〵盲目ばかりでは――

博士。それは、今私が話した――

道子。それは解りました。でも十人が十人皆然うとばかりは――

博士。(突如として立上り)道！お前、この顏が見えるか。(と顏を突出す)

道子。はい、見えます。

博士。この聲が聞えるか。

道子。はい。

博士。この顏が見える。この聲が聞える。それて、何故この言葉を信ずる事が出來ないんだ。お前の父ぢやないか、父だぞ。(と道子の前をグル〳〵廻る)

道子。俊子は何と申します。

博士。いゝ、あれは何とも云つた事がない、然し、お前のやうに否定はしない。

道子。それは出來ないからです。心を聲に出し得るほど力ある人ぢやありませんもの。だから私可哀さうでなりません。お父樣、貴方然うは思召しませんか。

博士。では、俊も私を信じないと云ふんだな。

道子。信じて居るかも知れません。

博士。(いら〳〵して)ハッキリ云つてくれ、お前に、お前に遠慮は無い筈だ。

道子。俊さんの心は俊さんの心、私に解らう筈は御座いません。

博士。俊も矢張り信じて居ないんだ、信じて居ないんだ。あゝ、父が半生の苦心も子は信じない……二人が二人まで信じない。そして、虚僞だと云ふ、騙りだと云ふ。(と大跨に其邊を歩み廻る。)

道子。私だとて信じたいのは山々です。楢原家の名譽、私の名譽、これが信じられる事なら、それはどんなに嬉しいでせう。

博士。(耳にも入らぬ態)私は見た……この目で見た……あの時、あの時……慥かに見た……第一の人だ……第一の人だ……

道子。(凝つとその後姿を戌りながら)お父様! 貴方、餘程健康を損ねて被在いますよ、お父様。

博士。あゝ、私は第一人者だ、第一人者だ、誰が信じなくとも好い、自分が自分を信ずる、目が目を信ずる、耳が耳を信ずる。

道子。お父樣。(高く)

博士。……(立停る)

道子。お父樣、貴方。(と父の手を堅く握りて)お父樣!

博士。(振ほどく元氣も無く)何んだ!

道子。貴方、お憔悴なさいましたよ。

博士。う。（と娘を見下ろすのみ）

道子。何うかお身體を厭つて下さいまし、……髪もまアこんなに白く、瘦せて……元のお姿は些つともありません。學問も學問ですけど、お身體は尙大事で御座いますよ。

博士。好し、分つた。（と手を振放つ）

道子。せめてお母樣でも被在ればですけど、俊さん一人では何うする事も出來まいし、今御病氣でもなすつてはそれこそ大變ですよ。

博士。取越苦勞ぢや、今病氣なぞして居られるものか、私には今重大なる任務がある。

道子。まだ何か御研究でもあるんですか。

博士。研究も研究だが第一、私は飽迄世間と戰ふ積りだ。今に屹度、信じさせて見せる、世間を信じさせなきア措かぬ。

道子。では、何うでも御出版をなさるんですか。

博士。無論行る。あれが私の生命ぢや。

道子。それで、世間は信じてくれませうか。

博士。信ずるよりは先づ跪づく。驚いて私の前に跪づく。年代を云へば九世紀、エリック以來、多大の犧牲を拂つて、尙ほ、極める事の出來なかつた北極を、初めて探檢し得た私だ。私は名譽ある第一人者ぢや。私によつて過去幾十幾百の犧牲者は初めて甦つたのだ。

道子。でも、もし頑固に抵抗しましたら。

博士。誰が？世間がか。それでも關はん、私は最後の最も大なる犧牲者として滿足する。

道子。でも、家族は可哀想です。價の無い犧牲は不滿足です。

博士。未だ云ふか。

道子。云ひます、云ひます。それを云ふ爲めに態々廣島から參つたのです。家の爲め、俊子のため、出版だけは何うしても思切つて頂かねばなりません。

博士。お前は私を苦めるんだ。

道子。私こそ、好んでこんな事申すのではありません。

博士。あゝ、何故お前は私の心になれないかな。（と倒るゝやうに椅子へ）

徹太郎來りて道子へ云ふ。

徹太。お母樣、お召換なさいつて、伯母樣が。

道子。はい、唯今參りますと然う云つてね。

徹太。お祖父樣。（と博士の膝によりて）お祖父樣のお部屋には色んなものがあるのね。

博士。…………

徹太。妙な形の鎗だの、象の牙だの、それから、白熊の皮だの。（母に向ひては）そしてね、お母さん、大きな人の骸骨もあるの。

道子。然うですか、お惡戯をしちや行けませんよ。(博士に向ひては)では、お父樣、何うか好うくお考ひを願ひます。お母樣の例もあります、倭子まで同じ運命に陷したくは御座いませんから。(と行かゝる)

博士。(顏を上げて)道子!

道子。はい(立停る)

博士。考える迄も無い、私は何あつても斷念はせんよ。

道子。(もとの位置に戻りて)お父樣、貴方は未だこの上家族を犧牲になさらうと被仰るんですか。

博士。でも、私の活きる路はその他に無い。道!無理だらうが貫かしてくれ。何うも私はこのまゝ死んで居られない。

道子。ですけど、この事だけは爲方が御座いません、私飽まで反對を致します。

博士。この儘に終れば、お前の父は狂者になる。

道子。狂者でも。

博士。狂者でも?

道子。はい、私は固く決心して居ます。

博士。あゝお前は何故然う無情な事を云ふ、父だ、父だよ。その父が學問のために苦んで、八年の間と云ふものを氷山の中に活て來たんだ。

道子。貴方は氷の中に八年、私は又牢屋の中に八年、苦んでく苦み拔きました。お母さんも倭も私も皆です

お父樣一人では御座いません。

博士。あゝ、私は歸るんぢやなかつた。歸るんぢや無つた。寧そ他の十二人と同樣、北極の苔原に餓死すれば好かつた。なう、道、私は誤つて歸つて來たよ。

道子。(言葉なく俯向き居る)

徹太。お祖父樣、北極つてどんな所。遠いの、近いの。

博士。遠い〱所よ。

徹太。汽車で行くの。

博士。私は橇で行つた。

徹太。橇つてどんなもの、え、お祖父樣。(と膝を搖ぶる)

道子。徹さん、煩さくするものぢやありません。お祖父樣は今お考事して被在います。

徹太。だつて。(と鼻を鳴す)

道子。何です。

博士。まあ好い〱。然う叱るほどの事でも無い。

道子。でも、何でも珍しがりで困ります。

博士。小兒は皆然うしたものぢや。珍らしがると云ふ事が智慧の原因ぢや。のう、徹太、その内に北極の面白い話をしやう。世界中で誰も見た事の無い。誰も知らない北極の模樣を知つてるのはお前のお祖父樣一人お

やぞ、外には誰も無い。
徹太。何故他(ほか)の人が行かないの。その橇と云ふもので行つたら好いでせうに。
博士。行かないのぢやないが、行けないのだ。昔から何十何百と云ふ人が、幾百萬と云ふ金を費つて行きかけたが、皆好う行かん、途中で凍え死んだり、餓死したり一人も滿足に行つた例は無い。
徹太。おや、鬼が島のやうなとこ。
博士。ま、ま、そこらぢや。
徹太。寒い〳〵所てすつてね、世界中て一番寒い所だつて、本當なの。
博士。然う、草も無く木も無く、四方は唯氷の山、氷の原、何萬年の昔から何萬年の後まて、何時も同じ姿で風も吹かぬ、雲も無い、雪も滅多に降らない所だ。總じて動くものゝ無い所だ。
徹太。そんな寒い所へ、お祖父樣何を着て行つたの。
博士。毛皮の外套を何枚も何枚も着た。寫眞がある筈だ、後に見せやう。鎗を持つて、犬の橇に乘つてな。
徹太。犬の橇!
博士。まア、云つて見れば輪の無い車だ。それを犬に引かせて、氷の中を滑つて行く。
徹太。馬は居ないの。
博士。居ない。
徹太。連れて行けば好いのに。

博士。連れて行けば死ぬ。
徹太。ぢや、犬が一等强いの。
博士。然うぢやとも、犬の外は何の役にも立たない。
徹太。大きな犬？
博士。然う、形も大きい。
徹太。愉快だなく。僕もそんな所へ行つて見たいな。
博士。行つて見たい、徹太。その代り苦しいよ。食べるものはなし、臥る所はなし、白熊や麝香牛を捕つて食べる内は好いが、終には苦まで取つて食べなきァならない。容易な我慢ぢやないぞ。
徹太。苦しくつたて好いな、面白いな、僕行つて見たいな。
博士。行きたければ行かれる、行かれると然う思つてさへ居れば屹度行かれる。お前行くか。
徹太。僕行く。
博士。お祖父樣は行つて來た、お前も行つて、然してお祖父樣の云ふ事の僞りでないのを確めてくれ。

俊子入來り、話を聞き居る姉道子の耳に何事をか囁き、博士の前に出てゝ。

俊子。お父樣、電氣を用意致しました。もう四時で御座います。
博士。電氣、それは後にしやう。今徹太と面白い話をして居る。なァ徹太。
徹太。伯母樣、僕北極へ行くよ。

俊子。（徹太の頭を撫てゝ）それは好いね、面白い話をして頂いて、徹さんは好い事ね。
道子。（突如として）お父樣、貴方當地を御出發なさいましたのは何月てしたらう。
博士。五月、九年前の五月ぢや。
俊子。お庭の辛夷が眞盛りの時でしたね、私それは覺えて居ります。
道子。あの時、お父樣は北極へ、私よ廣島へ出發する朝、あの時のお母さんのお顏色と云つたら無つた。まるて病人てした。私を離屋へお呼びになつて、お父樣が何うしても被行ると云ふなら爲方がない、戊生れの御氣象だ、お止りもなさるまい。けれども、偶然にもしろ、十三人と云ふ同勢の數が惡るい。何かの前兆かも知れないからと被仰つて、唇を眞蒼にして俯向いてお出てした。
博士。今になつて、何を下らない。現にお前も龍橋も、それを笑つて、元氣好く神戸まて送つて來たぢやないか。
道子。てすから、尙、濟まないと思つて居ります。お母さんはそれから後も、十三の數ばかり心配なすつて、眼は上吊る、聲は掠れる、始終それを言續けてした。そして到頭三年目に、お父樣が行衞不明の電報があると一所にドッと床にお就きてした。
博士。（目を瞑りて）愚痴ぢや、今更ら愚痴ぢや。
道子。愚痴でも何ても、私はその時の事を思ふと悲しくなります。（と目を拭ふ）
徹太。（怪訝さうに目をクル〳〵さして）僕いやだな、そんな話。（と靴にて地をトントン）

博士。もう止さう、な、徹太郎。そんな話より今の面白い話の續きでも爲やう。

妹は姉をなだめて、小聲に何やら話しながら、博士と木陰のベンチに後向に掛けて、しめやかに話合ふ風。

徹太。そして、お祖父樣、北極ッてどんな所。早くそれ話して下さい。

博士。然うな、第一、夜と晝の區別がない、一年の半分は晝で半分は夜ぢや。長い晝と長い夜と、たゞこれだけぢや。そして、太陽はこの世界のやうに、東から出て西へ入るのぢやない。世間の周圍をグルぐと廻つて居る、それが半年の間續くのぢや。

徹太。ぢや、困るでせう。そんなに夜が長くては。

博士。その代り、北極には北極の太陽がある。北光(オーロラ)と云ふ、遠い氷の原から眞紅の光が空に燃えて、そして閃く。昔の人はこれを夜中の太陽と名づけた。その上、北極の空には雲が無い、何時も快晴た、蒼い磨(と)いだやうな月が何時も周圍を靜かに廻つてるわ。

徹太。愉快だな、そして。

博士。磁石は反對ぢや。南を指すべき針が北を指す。あゝ、お前に見せたいな。北極の夜! 偉大、壯嚴、崇高總ゆる人間の言葉を以てしても、あの大なる天地を説明する事は到底出來ない。どんな大詩人でも出來まいたゞ心から心へ響なく傳へるだけぢや。

話の間に道子、時々父の話に聞惚れては耳を澄ます事あり。

徹太。そして、お祖父樣はそれを見たのね。

博士。　見たよ。この目で見た、それ、晩になるとこゝからは向ふの銀杏の樹の眞上に見える　　れは　斗星と云ふ、それが自分の眞上に當る。私その直下に立つた。世界創つて何万年の間、嘗て何人も踏んだ事のない地の上に立つた。

徹太。　一人？

博士。　たゞ一人ぢや。尤ゝ出發する時は十二人の仲間があつた。私ともに十三人ぢや。それが向ふへ行く途中氷山に圍まれて、船は粉微塵、一人も助つたものが無い。媽やの息子もその内に居た。……あゝ、その内せめて一人でも生殘つて居てくれたら、私はこんな苦痛はせんのぢや。皆死んだ〳〵。他に見たものも知つたものも無い。だもんだから、私が歸つて來ても、誰一人私の言葉を信ずるものがないのだ。

徹太。　僕行く。屹度、その北極へ行く。

博士。　行くか、徹太郎。

徹太。　行きます。

博士。　行つてくれ、屹度行てくれ。そして、そこへ殘して置いたお祖父樣の名前を見て來て、世間へ話せ、威張れ、笑つてやれ。楢崎元城と云ふ私の名は立派に北極星の直下に殘して置いた。

徹太。　何う殘つてるの。

博士。　氷の中に斜めに埋つてある流木へ、——北極にも流木はある私はその木の表面を削つて、楢原の北極とラテン語で刻み付けて置いた。それを見て來てくれ、そして他に語つてくれ。

徹太。何方の方なの。

博士。少し東の方‥‥いや、北極には東はない、北もない、西もない、あるのは唯南ばかりぢや。

徹太。北極つて方角のない所なの。

博士。無い、無い、吾々人間の定めた規則や掟が北極の天地に當嵌るものか。方角は人間の住む世界の外には無いものぢや。

徹太。妙だな、方角が無い所つて、何う云ふ所だらう、廣島でも、大阪でも、東京でも皆東もあるし北もあるのに。

博士。お前には些と解り難い事かも知れんが、名のあるのは人間の世界、絶對の世界には名と云ふ、そんな小さなもの丶必要を認めない。

徹太。そして、お祖父様はその北極にどんな風をして立つたの、足を蹈んで見た？叫んで見た？

博士。足は蹈んで見た、然し、聲は立てなかつた。

徹太。何故、僕なら君が代でも歌ふ。

博士。私は唇を固く嚙締めて、息も好らせんかつた。永劫に亘るその壯嚴な永久の沈默を破る事が出來なかつたのだ。連れて居た犬でさへ、頭を垂れて、吠えもしなかつた。

徹太。犬が居たの、お祖父様。

博士。然う〱忘れて居た、犬が居た、ユウラカと云ふラブランド種の犬が居た。

徹太。そして、その犬今居るの？

博士。居るよ、今に見せてやるぞ、その犬一匹ぢや、今となつて私の味方は。例令世界が擧つて私を嘘吐き、騙りと云つても好い、ユウラが知つてる、私と共に北極に立つたその時の心を持つて今にこの世に活きて居る。

徹太。そして、何うして歸つて來たの。

博士。たゞ歩いた、南へ南へと歩いた。そしてフランス、ヨセフスと云ふ島へ着いた、こゝにはの、エスキモ人と云ふ土人の流されたのが居て、氷の中に小屋を建てゝ活きて居たぢや。その土人に救はれての、六年の間同じ氷に接んで居た。今斯うして目も見えず、口も不自由なのは六年の長い間、空にも大地にも光りばかり見通したからぢや。緑も赤も黒も無い、たゞ光る白く、光るものばかりの世界ぢや。所へ六年目の去年、幸ひの便船があつて氷島（アイスランド）へ歸る事が出來たのぢや。

徹太。犬も歸つて來たの。

博士。歸つて來た。

徹太。何所に居るの。

博士。その小屋に寢て居る。長く北極の荒びた風色の中に活て居た所以（せい）か、可哀さうに些と氣が觸れての、人を見ると嚙付いてならんから、鎖に繫いてある。

徹太。お祖父樣、僕にだつた乾度行けるわね。

博士。行けるとも、たゞ、乾度行けるものと信じて居ろ。信じさへすれば乾度行ける。

徹太。僕行けると思ふ。

博士。その心持ぢや、その心を固く持つて動かぬ人が行けるのだ。昔から偉い人――第一の人は皆その心を持つて居たんだ。大發見も大發明も皆その信念から生れたのだ。

徹太。然うすると、北極へ行つた人は、お祖父樣と僕と、世界にたゞ二人だけになるね。

博士。然うだ、私は第一の人、お前は第二の人。然し徹太郎、お前はお祖父樣の話を信ずるかの。

徹太。信ずるつて何うするの。

博士。嘘とは思はないか、僞を云ふとは思はんか。

徹太。だつて、本當の事でせう。

博士。無論、本當だ。

徹太。本當の話は嘘ぢやないもの。

博士。今一度、徹太郎、今一度聞かしてくれ。(と徹太郎を引寄せて視力衰ひたる目に凝つと見詰る)

徹太。(不審さうに)何故なの、本當の話は嘘てないもの。

博士。あゝ、お前だけだ〳〵。私を信じて呉れたのはお前だけだ。(と孫を抱締めて涙をハラ〳〵零す)

徹太。ぢや皆は嘘だつて云ふの。

博士。あゝ、伯母樣も、お母さんも、媼やも。

徹太。みんな女だもの、だから解らないんだ。

博士。然うだ、女だ。世界の人は皆女の心だ。みな耳に蓋して居る、心を開いて他の語を聞く事が出來ないんだ。淺間しいものだ、昔から耶蘇でもマホメットでも、その他科學者でも思想家でも大なる人は皆同じ苦痛を嘗めた。初めてと云ふ事は全然別種なものに見える。馴れたと云ふ事か渠等唯一の便（たより）なのぢや。だから始めて見、始めて聞いた人の言葉を信ずる事は出來ないんだ。

徹太。お祖父樣、犬は？

博士。おゝ、今見せるぞ。（と立上る）

木陰に閑居たる道子急ぎ出來る。倭子は氣遣はしげにそこに佇立するのみ。

道子。お父樣、ユウラですか。（と前に立塞がる）

博士。徹太が見たいと云ふぢや。がな、道子、矢張り私の言葉を信ずるものもあつたよ。

道子。小兒ですもの、分別がありません。

博士。（立停つて）分別と云ふのは、見馴れたものに或物を較べて似寄を見付ける事ぢや。始めてのものに似寄は無い。小兒の世界は總て始めてぢや、それが生命ぢや、自由ぢや。あゝ世に小なる者最も力ありぢや。（と犬小屋の方に行かんとす）

道子。（遮るやうに又前に立ち）お父樣犬は居ません。

博士。何？

道子。犬は居りません。鎖を切つて遁げました。

「博士無言にて犬小屋の前に行、「ユウラ」〳〵と呼びながら鎖を引く、鎖のみスラ〳〵と抜け來る。

博士。ユウラ〳〵。

道子。お父樣、ユウラは居りませんよ。

博士。ユウラ〳〵〳〵。(と地に俯して犬小屋を覗見る)

俊子。(恐る〳〵出來りて、憂慮さうに)お父樣。

博士立上つて俊子の手をグと掴む

博士。俊!ユウラは?

俊子。(顫ゑながら)昨晩の暴風で……

博士。昨晩の、暴風で、そして。

俊子。遁げたに相違御座いません。

博士。隱したな!貴樣は隱したな。(と急込む)

俊子。全く、遁げて了ひました。

博士。ろくを呼べ、ろくを呼べ、あいつがあいつの所業に決つた。

俊子。いゝえ、婢やも知つた事では御座いません。

博士。呼んで來い。あいつ、あいつ、〳〵ユウラを邪魔にして居つた。そして、こんな氣違犬は殺して了へと、度々私に

云つて居た。

道子。全く誰も知りません事です、今朝餌をやらうと思つて參つて見ますと最う居りませんてした。

博士。ユウラは私の生命ぢやよ。あれ、あればこそ幾らか慰られても居た。あれ、が居ないでは、私は全くの孤立になる。あゝ、敵の十人の中に居ても、私はユウラの目を見詰める度に新しい勇氣を得た。ユウラは物を云はぬ、然し、あの目、あの目ぢや。總ゆるものか凝つて動かぬ北極の地、空も山も水も總て靜止、總て沈默、動くもの活きたるものと云へば唯二つ、私と犬ぢや。二つの魂ぢや、二つのゴストぢや。犬の目にも私だけ私の目にもユウラだけ。姿を見るのぢやない、互の目に彫り付けた魂ぢや。そのユウラが居ない、ユウラが居ない。

倭子はたゞ顫ひ居るのみ

徹太。（失望らしく）お祖父樣、犬は遁げたの。

博士。居たんだ、昨日までは慥かに居たんだ、誰にても聞いて見ろ、聞いて見ろ。（と其邊を歩き廻る）

道子。お父樣、お氣を鎭めて下さいまし、倭さんや媼やが何んで遁がしませう。昨晩の暴で鎖を嚙切つて遁けたのに相違ありません。

博士。お前は何も云つてくれるな。私はお前の勿體らしい、落着拂つた理屈を聞くと腹が立つてならん。身が顫える。

道子。ですけど、遁げたものは――

博士。ユウラ！ユウラ！（と口笛を吹きながら其邊をウロ／＼す）

道子。（心配さうに後に隨きながら）お父樣……お父樣……

博士。ユウラ！ユウラ！（と呼びながら下手樹立の中に入る）

道子も隨ひ行きしが、やがて戻り來りて。

道子。徹さん、お祖父樣はあつちの方へお出になつた。お前さん、後から喰付いてお出なさい。目が御不自由だから、好く氣を付けて上げるんですよ。

徹太郎駈入る

俊子。（家の入口に立て）嬶や／＼。（と呼ぶ）

ろく出來る。

ろく。何んぞ御用て。

俊子。今お父樣がユウラを探しに、外の方へ出てお出だから、多作に然う云つて、一緒に探さしておくれ。

ろく。犬は遁げたのてす、近所にマゴ／＼して居る筈はありません。

俊子。それに、お父樣は目が御不自由なのだから。

ろく不精／＼に入る。

俊子。（改つた調子）姉さん。

道子。何てす。

子。姉さんの目にお父様は何う見えます。

道子。さアね。(と溜息を吐きながら、塵を拂つて博士の腕倚子にかける)

俊子蹙む

俊子。私は好らく考へべき事だと思ひますわ。(と思入つて云ふ)

道子無言

俊子。財産も栴原家もそれは大切でせうけど、お父様の身もお可哀さうぢやありませんか。私などは何うなつても好いから、何うかお父様の心が安まるやうにして上げて下さる譯には行きませんか。

道子。俊さん、貴方それて惜しいとは思はないの?

俊子。私諦めて居ますわ。

道子。お父様もお父様だけれど、自分を殺してまで他の犠牲になると云ふ事は無い、犠牲と云ふのは弱者のする事です。

俊子。私何うて弱者よ。

道子。貴方は本當に仕合せね。それて滿足して居られるんだもの。眠つて居るのです。昔からの人が眠つて來たやうに眠つて居るのです。

俊子。これが眠つて居るのなら、私、一生を眠つたまゝて通したい。

道子。目が覺めたら、最う二度と眠られませんよ。

倭子。目は覺ましますまい。

道子。一生？

倭子。は、一生？

二人は又無言、所へろくノッソリと入り來る。

ろく。奧樣、お召し換をなさい。

道子。まア好いわ、大儀だから今少し斯うして置いておくれ。

ろく。それが不可ません。大儀でも爲るだけの事は爲さらなければなりますまい。

道子。相變らず几張面ね、嫗やは。

ろく。死ぬまではこれでせう。

道子。あゝ、死ぬまで〳〵。（と家に入る）

ろく藤がけして、そこらの落葉を搔き集め初む。倭子は同じ姿なり。

ろく。（暫くして）お孃樣。

倭子。なアに？

ろく。シッカリ爲さらなくては不可ませんよ。

倭子。え。

ろく。親子も夫婦も兄弟も、詰りは皆戰（いくさ）です。

俊子。私はもう戰する力がないもの。

二人無言。道子平常着に改めて髮を搔上げながら出來る。

道子。お父樣は未アだ……

俊子。え、何うなさいましたらう。

道子。多作が行つたから大丈夫だらうね。

俊子。姉さん、娓いやうですが、今一度考直して見て、何とか好い方法を取つて下さい。

道子。さア、考ひて見ませうね。

ろく搔集めたる落葉を一所に集めて火を燃し付くる。

道子。媼や、焚火と云ふ節でもあるまいに。

ろく。斯うしないと片付か付きません。

道子。小兒の時好く當つたものだつけね。お母樣が又お掃除好きて、始終落葉焚きをなさる。大勢集つて四方山の話。ほんとにあの頃が一番戀しいわね。(と立つて火に寄り、枯枝を拾つて投げくべなどする)

ろく。坊樣が被在ると好いに。

道子。今歸るだらう。俊さん、貴方もあたつては何う?

俊子。え、だけとね姉さん。

道子。(手を振つて)最う〳〵その話は舍す事、あとてユックリ出來ませう。然うクヨ〳〵しないてこゝへ來て

面白い話でもしませう。私は着くと早々この話で、氣がクサ〳〵して了つた。
俊子。ほんとに姉様は羨ましい、私何うして斯う意氣地がないんでせう。
道子。被來いよ。
俊子。は。(と來寄る)
道子。ねえ媼や、私幾つの年かしら、丁度この木の下で、矢張りこんな風にして焚火にあたりながら、お母さんに大變叱られた事があつた。小刀をひとに與つたと云つて。
ろく。そんな事が御座いましたかね。
道子。媼やが大變にお謝してやつと許されたけど、私あんなにお母さんを畏いと思つた事が無い。最う眞蒼になつて、唇なんか血の色は無んだもの、思詰めると唯一心におなりなさる方でね、本當に畏かつた。
ろく。然うでしたらうかね。平常は最う誠にお優しい方でした。
道子。何でも桑の木の夢を三晩續けて御覧なつたとかで、最う〳〵そればかり氣にしてお出なすつた時さ。
ろく。桑の木の夢は子縁が切れるとさへ申します。
道子。然うだつたね。それに刀を他に與ると云ふ事も大變惡るいんだつてね。
ろく。惡い段では御在いません、私が添合に別れます時なぞは、二晩續いて刀を人に與る夢を見たもので御在います。
道子。然う〳〵、夢で思出した。私は今日來る途中、汽車の中で妙な夢を見てね、そりや餘程不思議な夢よ。

俊さんがお嫁に行く、御婚禮の夢さ。

俊子。まア厭な。

道子。何が厭なもので。それは嬉しさうな顔をしてお出だよ。

俊子。私が？

道子。お婿様は誰方(どなた)と思召す。

俊子。私に分りますものか。

道子。處が直ぐ分る人なの。

俊子。誰でせう。

道子。さア、誰でせう。背の高い、眼元の優しい、そして、大層親切らしい方よ。

俊子。私には分らない。

道子。然うかね、分らないものか知ら。

ろく。隈本様で被在いますか。

道子。そうら、媼やでさへ分つてる。

俊子。私はお嫁に行く氣なぞ無いから、テンでそんな事考いた事もないわ。

道子。然う云ふものだらうか、私なぞ俊さんの年にはもう徹太郎のお母さんでした。全く俊さんは氣樂なのね
自分つて事考ひないで一日の日を送れると云ふのが不思議さね。

俊子。餘程馬鹿なんてせうよ。
道子。ねえ媼や、私は然う思ふね。自分の事を思ふからこそ人は活きて居られると。
ろく。然うですとも、だから私は歯痒くつて〳〵なりません。同じ御兄弟でも、何うすりやこうお心行が違ふんてせうね。

徹太郎は慌しく出て來り

徹太。お母樣。
道子。お祖父樣は何うなすつて。
徹太。あすこの木の下に立つて被在つて、何時までも〳〵動かないんだもの、僕弱つちやつた。
俊子。何か考ひ事でもして被在るの。
徹太。何だか知らないけど、向ふの方、そら夕日が美しいてせう、あれを凝つと眺めて居るの。
道子。犬は居ないだらう。
徹太。居るもんか、遁げたんだもの。そしてね、僕弱つた。お祖父樣は幾度も〳〵轉んだり、水ッ溜へ落ちたり身體中まるて泥ぼつけよ。目が見いないのに、ユウラ〳〵つて狂者のやうに其邊を駈廻るんだもの。一度なんか、コロ〳〵と岸から轉んて、危なかつたの。
俊子。多作は付いて居ないの。
徹太。僕と唯二人、誰も來やしない。

博士來る。寛服(ガウン)は所々鉤裂(かぎざけ)して、泥濘一面。髪は亂れ、顔色は蒼白、疲れ果てたる風體にて、杖を力によろめきながら出て來る。

子。まアお父樣。

博士。俊か――犬は居ない。

道子。一體まア何うなさいましたのです。

博士。う。(と仆れるやうに倚子にかける)

俊子。お父樣、まア、何うなすッたのです、お父樣、手から何からまアこんなに。(と泥まぶれの手を取る)

博士。私は好い。心配するな。休まして呉れ、私は疲れた。まアお前方そこで話すが好い。

俊子。ですけどね。お父樣。

博士。好い〳〵。

俊子心配ながらも元の場へ歸る。暫く沈。

ろく。然して奥樣、その夢のお話は何うなりました。

道子。なアに大した事でもないの、俊さんがね、糸縫のある鳩羽色の振袖を着て、お座敷の眞中に座つてるの。そして、悲しい顔をして、些い〳〵と私を見るの。兩方とも口はきかないのよ。そしちや、ちよいと袖で顔を隠すの、それが顔は見えないけれど何でも袖の陰では笑つてても居るやうに私にや思えるのよ。夢だね。それに、そのお座敷が變なの、斯う離室か何かのやうな所でね、四方の襖も天井も長押も、皆銀張りなの。そ

の銀張りへ櫻の花を一面に畫いてある、そして、それが妙なの、その畫いた櫻がヒラ〳〵〳〵と散つて來て眞中へ座つてるお孃樣へ散つて來るの、その奇麗な事と云つたら、全るで袷の模樣よ。

ろく。(凝つと聞居りしが)そして奧樣、どんな帶を締めてお出てした。

道子。さア、それは分らない。

ろく。私は存じて居ります、板琥珀暈染、流れに籬菊の模樣て御座います。

道子。何うしてそれが分るの。

ろく。私が締めて上げたのてすもの、間違は御座いあせん。御容色はよし、お扮裝がそんなてすから、まるて繪に書いたやうて未だに目に浮んて見えます。

道子。何がさ。

ろく。奧樣。そのお嫁樣はお孃樣ぢや御座いません。お亡りになつた奧樣てす。貴方の御母樣て御在います。

道子。妙ね、婆や。

ろく。いゝえ、妙ぢや御座いません。然う四月の中頃てすから、お築山の花は眞盛り、それも好く適て居ります。

道子。お母樣なの。

ろく。それ、それ、それに相違御座いません。貴方々は御存んじありますまいが、今のこの西洋造の建ッて居る邊にお離屋が御座いまして、その四方は櫻の植込、春先きの景色と云つたら御座いませんてした。今のこんな眞四ッ角な背ばかり高い西洋館は、その後になつて旦那樣がお建てなさいましたのてす。

道子。　でも、私は何うも俊さんのやうに――

ろく。　いゝえ、先の奥樣てす。その晩の奥樣のお姿にそつくりて御座いますもの。あゝ、奥樣はお優しい方だつた、何時になつても全るで娘の時のやうな氣分の方だつた。

博士。　（突然）ろく！（と呼ぶ）

ろく。　はい。（と驚く）

博士。　お前は夢を信ずるか。

ろく。　押されないものは押しませぬ。

博士。　お前達は仕合せだな、私はお前達から夢や空想やを奪はふとした惡人だよ。あゝ自然には堅い防禦かあるな。

ろく。　私には分りませぬ。

博士。　私には分つた。而かも唯の今然う分つた。私は全く謬つて居た。

ろく。　何て御座います。

博士。　最う〳〵、敵意を持つてくれるな、私は自分の非を悟つて、お前達にあやまるのぢや。仲間に入れてくれ。その樂しい仲間に入れてくれ。あゝ自然が深山を作り幽谷を作つて、秘密を世界に設けた事は決して偶然ぢやない。千萬年來人の足を許さぬ北極は自然の大秘密だ、秘密や神秘があるからこそ、人生に歌もある夢もある。又空想もある。その自然から秘密を取去らうとする科學者は人生を乾燥に枯淡にしやうとす

ぢや、惡人ぢや、敵對者ぢや。昔の譚に、神の封じた寳殿を覗いた者は、生きながら石になつたとある、こゝぢや、極意は。あゝ十二人の皆死んだのも、私の世間に信じられぬのも、目の惡いのも、口の不自由なのも決して偶然ぢやない、偶然ぢやない。天は一楷崎が侵した自由の大秘密を人間の耳へ聞かせまいとするのかとも取れる。私の書いた探檢記が他人の目に謎であつた譯も、辛つと今わかつた。(と咽び入る)

運子。お父樣何うなさいました。

博士。昔から、第一人者は仆れべき運命がある。

運子。何んて急に然う弱い事を被在います。

博士。人間は自然に忠實なる間、そこに初めて眞の人生を見るのぢや。私は慥かに謬つて居たよ。

運子。何うしたか知りませんけれど、大變激昂なすつてお出でのやうです。お氣をお鎭め下さいまし。

博士。心配するな、私は甦つた。あの、壯大なそして美しい夕日を見ろ。

俊子。お父樣。(と犇と父の手にすがる)

博士。(それを握り締めて)あゝ惡るかつた、私は……私は……小さい自分を活す爲めにお前達を殺さうとした惡人ぢや。お母さんの敵ぢや。惡い〳〵敵ぢや。

俊子。お父樣、何うかお氣を沈めて下さい、私共お父樣の心に逆らつたのが惡るいので御座います。姉樣にもあやまらせます、何うかもうそんな事を被仰のは含して、ね、お父樣。

博士。然うぢやない、私こそあやまる、私が惡い。

俊子。あれ、そんな事。

博士。私が悪い〳〵。ろく、堪忍してくれ私はお前の伜を殺した敵だ、堪忍してくれ。

ろく。伜は獨りで死にました。

博士。云ふな〳〵。敵は敵として憎んでくれ、責めてくれ、そして、その後ち赦してくれ、私はもうお前方の味方ぢや、味方ぢや。

ろく。御氣性ぢや、若い時から然うした方でした、極端（ひつぱし）へ飛ばなければ我慢出來ない御氣性です。

博士。あゝ私は今日まで空に活きて居た。

道子。私共には未だ飲込めません、何うか有の儘被仰つて下さいまし。

博士。有の儘？それは零（ナッシング）だ。

道子。でも――

博士。ナッシング！ナッシング

下男多作出づ。

下男。旦那様、辛つと犬の居所をつきとめて參りました。

博士。何所に居た。

下男。人に噛付いたとかで撲殺されて了ひました。

俊子。え、まア可哀さうに。

下男。警察から今に來ませう、菰をかけて置いたのを見て來ました、はい。
博士。それで好い、萬事片付いた。
下男。屍骸を貰ひ下げて參りませうか。
博士。好い、もう好い。(と手を振る)
下男入る。
道子。お父樣、私どもには分りかねます。何うして急に然う云ふお心になつたか、それを聞かして下さいまし私共心配でなりません。
博士。何うしてと云ふ事はない、私は今夕日を見た、その壯大なる光景を見て然う思つた。落込む光は美しい、登る光は勇ましい。犧牲者の美しさは夕日の色ぢや。光ぢや。輝ぢや。
道子。では、御自分を犧牲者となさいますか。
博士。第一人者は何時も美しい犧牲者ぢや、耶蘇を見い、十字架がある、ゴルゴタの十字架がある。十字架が無ければ長く活きられる人ぢやない。
道子。でも、使徒がありました。
博士。恐らくは私にもある、第二人、第三人は自然と世に出る。
道子。(唇を噛んで)私は家族を悲しみました。財產を惜しみました、然しお父樣の功績まで沒しやうとは思ひも爲ませんかつた。それに——

博士。愚痴ぢや、みな愚痴ぢや。

道子。でも餘り思切りが好過ぎます。

博士。思切るぢやない、悟つたのぢや。

道子。私にはまだ悟れません。

博士。悟る事は要らない、悟りと迷の間に多くの人間は活き得るものぢや。

道子。然しそれは情ない人生です。

博士。決して然うぢやない。一生悟る事なく死に得る人は幸福だ。

道子。お母様は迷の中に死にました。

博士。然し、あれも又不幸な人てあつた。

道子。氣の毒に思召しますか。

博士。あゝみな人々の天分ぢや。

道子。あゝ。

博士。俊！何を嘆いて居る、私のこの心の喜びがお前達の目には見えないか。

俊子。お父様、私は恐しくなりました。

博士。何が。

俊子。世の中と云ふものが。

博士。恐れるな、進め、目を瞑つて進め。
俊子。でも、山もありませう、川もありませう。
博士。山があつたら止れ、川があらば淺瀨を擇んで渡れ。のう、ろく、然うだらう。
ろく。然やうで御座ます。
博士。お前は今まで然うして活きて來たのだな。
ろく。はい。
博士。決して悔恨はあるまい。振返つて見て悲しいの殘念のと云ふものがあるまい。
ろく。何も御座いません。
博士。そこだ〳〵。私の今日までは總て反對ぢや、五十幾年の間苦心して努力して來た後を振返つて見ても、功績は何ヶ殘らん、空だ、空の空だ。たゞ殘るものは悔恨のみぢや、少年、靑春、壯年、總て悔恨だけぢや、智識と云ふ空虛を逐ふて、今日まで幽靈のやうに活きて來たゞけだ。

徹太郞何時の間にか二階なる博士の書齋へ入り。そこより顏を出して。

徹太。お祖父樣。
博士。おゝ、徹太郞。
徹太。お祖父樣のお部屋には色んなものあるね。
博士。あゝ。

道子。あゝ、おいたを爲ては不可ません。
徹太。この皮、白熊？
博士。あゝ。
徹太。この犬を連れてる寫眞はお祖父様なの。
博士。あゝ。
徹太。まるで別の人のやうね、今よりか痩せて髯が生いて恐いやうだ。
博士。怖い筈だ、私は然し怖い事を知らなかつたのぢや、馬鹿ぢや。
徹太。そしてこんな槍を下げて行たの。
博士。あゝ。
徹太。こつちにある大勢の寫眞は。
博士。その寫眞は皆死んだ。
徹太。でもお祖父は居るもの。
博士。そのお祖父様も死んで了つた。今こゝに居るのはその寫眞の人ぢやない。
徹太。あ、こゝに（と叫ぶ）
博士。徹太郎！その机の上に卷繪の箱へ入つた本がある筈ぢや、それをこゝへ投げてくれ。
徹太。表に英語を書いた？

博士。あ、それ〳〵。投げてくれ。

徹太。はい。(と草稿を投出す、綴切れて千紙落葉の如く落散る)

道子。まア亂暴な。

俊子。あら原稿です。(と走寄る)

姉妹二人して掻集めて原稿を博士へ渡す。博士默つてそを火中に投す、燃上る。

道子。あら、お父樣!

俊子。お父樣!

博士。心配するな燃したゝけぢや。

俊子。何んて〳〵。

博士。私の仕事は言葉て殘すべきでない。心から心へ。

徹太。お祖父樣、あれ夕日があんなに奇麗!

博士。おゝ。

俊子。まア奇麗!

徹太。まるて燃えてるやうね。

博士。あゝ夕日。あゝ夕日。(と又倚子に仆ゝる)

(幕)

鳥の腸

生田葵山



小町が浮世を味氣よく思つて死なうと覚悟したのは、二ヶ月程も前であるが、奈何も程よい機會が

來なかつた。何も死ぬのに機會も何も無く、雪隱の梁に細紐を懸けて其れに垂下つても濟む事だし、人の寢靜まつたのを覗つて中庭の井戸へ身を投げても濟む事だのが、其れでは心に足りない。何時奈何して胸の中に起つたかは知らないが、ならうなら情死をと希ふと、何ても然して死ぬのが、派手てもあり、賑かてもあるやうな氣がして長い間對手の男を振して居た。

對手嫌はず男と乳繰り合つた母親の胎から月足らずに產れた行爲て、元來が纖弱な身體に出來て、氣が從つて陰氣て話をしてもつひしか彈んだ事がなく、いつも俯向き勝ちて、言葉尻りが消える樣な者の云ひ振りをする女てあつた。其れても容貌ても善ければ少しは全盛てあつたかも知れないが、額が莫伽に廣くて少し凸の氣味、眼の下て、骨が突起して、下頰の肉がげつそり殺げて、其の割合に口が大きく、隨分と思ひ切つた醜女て、奈何して遊女にならうなどゝの大膽な自信があつたらうと愕かれるが、もとより自分から進んで成つたのてはなく、酒飲漢の父親に今から四年前の拾八歲の時に六年々期て百五拾圓の前借金て賣られたのてある。眼が二重瞼て些と可愛いゝ、女らしい處があつて、鼻の恰好が比較的善かつたので、まあ厚化粧て誤間化しを附けて今日迄商賣を續けて來たのてある。死なうと思ひ立つた原因は云ふ迄もなくいつも御茶曳き勝ちて、抱主には小言の云はれ續け、遣手婆さんに辛められ、朋輩の娼妓には蔑視れるのみか、酒飲漢の父親に附纒はれて、借金は加えて行くばかり、其れに客取りするのが如何にも辛く、女に餓え切つた獸性の强い骨組の逞ましい若い男が登樓る時など、一思ひに締め殺しても遣りたいと思ふ程、憎惡の念に胸を躍らすのてあつた。

今迄に梅毒病院に這入つた事は七度もあつて、小町自身では近頃腰の蝶番ひの痛み出して來たのは、然うした恐ろしい病毒が骨に搦んで來たのだと思ひ、此の儘で往つたなら早晩鼻も落ちるやうな事にならうし、頸の周圍に吹き出物の濃を流す事になるんだと信じて居る。心から人を愛した事もなければ、愛せられた事もなかつた。朋輩の遊女が、來る客の噂して。やれ誰さんは優しいの、色が白いの。姿がいゝの、金放れが奇麗だのと云つては鼠鳴きして、嬉れしさうに相好を崩すのを見ては、

『奈何して、毎日私等を玩弄にしに來る……賤しい目的の爲めに來る下等な手合をあんなに大騷ぎするんだらう?。』

と冷に見て、心の中では嘲笑つて見たりする。不思議に妙な堅苦しい、義理堅いやうな點があつて、人間は教育すれば立派になれるもんだ位ゐの理屈は心得て居るんだ。然うして親には孝行をせねばならないもの、主には忠義を盡し、朋輩とは和して往かなければならない位の事も心得て居る。然し奈何かすると心の底に或る足らぬものを覺えて。

『私も男に惚れて見やう、惚れられて見たい。』

との心願を起して、朋輩の惚氣組の中に交づつて見るが、朋輩が口から出任せに云ふ事が洒落にあたつたり、諧謔になつたりするやうな甘い藝當は何としても演じられぬ、矢張り傍へ退いて、他人のする事を、見たり、聞いたりする方が相當だと、詫しく自覺して口を噤む。で、此の樓でお職を務めて居る白縫と云ふ女が、

『小町さんは、他家の女中か、其れとも工場の職工にでもなりや。其れこそ品のいゝ忠義な女だらうよ。』

と評したのを聞いて、

『シト誰が、一生職工なんぞして暮すもんか……。』

職工よりも遊女の方が上等と思ふのが可笑しい。無論口に出して云ふ勇氣は無く、自己一人胸の中で反抗する丈けの氣位の高い點を持つて居た。父親の妹が尼になつて居て、小町の小供の時分。行末は遊女などに賣られる運命を持つて居るとは思はず、其の手に抱いて種々と世間の理屈を云つたのが染み込んだものと見える。小町は拾貳歳の時惡い男に曳懸つて斬られて死んだ母親よりも、拾五歳の時に別れた此の叔母の尼さんを今でも時々思出して、念佛を唱へたりするのである、這麽性質が他人から好かれる道理がないので、小町は樓中の者から意地惡る者に取扱はれて自分の身始末のみして、他人の事は少しだつても念頭に置かない、恐ろしい冷淡な人間だと憎まれて居る。實際小町は今迄にだつて、紙一枚小女郎に遣つた事がない。御茶挽き勝ちて貧乏な行爲てあらうが、頭て與らうと云ふ氣がないんだ。

秋も闌けて白粉の襟垢が頸筋に冷たい十月中旬の夜、小町は毎時の通り天井から釣り下つた眩しい電燈に照らされながら張店に姿を晒して居る。夏の夜の樣な涼みがてらに來る素見客の賑ひは無いが、其れでも廓の中に漲る女の臭氣や媚めいた物音や聲色を、嗅ぎに來たり、聞きに來たりする輩合は尠なくない人數てある。高く欄干の上に點火し連ねた燈火に照らされて影を地上に落しながら、號いたり、騒いだり、手拍子打ちなどして、張店の女郎に調戯ふ。遊女の方でも其れを時間潰しの對手にして、笑つて

見たり、怒つて見たり、煙草を吸附けて遣つて見たりして居る。

『何と云ふ憐な態だらう。足に鐵の鎖を結び附けられんばかりに格子の中に閉ぢ込められて、汚い、鼻持のならぬ身體をけばくしい色彩の衣服で隱して、人の玩弄物になつて居る。豚よりも劣つた生活だ。然し其方から己の自由にならうと云ひ込んで來て、小使錢を貢いで呉るやうだつたら、いつても可愛い小鳥、然うでなくば大家の御孃さんとも高貴な御姫さんとも思つて遣らう。』

這麼のが素見客の心持であらう。

『何だい意久地なしの錢無し野良、女に餓えて遠い處から態々女の臭氣を嗅ぎに來るんだらう。廣い世界に女の數は恁して、有り餘つて居るのに、一人の女房も持てずに、日が暮るゝと蝙蝠か何ぞのやうに出て來て、自分達の顏を見て氣を澄して居る。吝嗇な奴、顏を見るのは無代價なんだから思ふ存知穴の明く程見て置いて、家に歸つて一人寢の床に想出して樂むがいゝ。恁う思はれて腹が立つのなら、一番男らしく財布の底を拂たて私等を買ふがいゝ。』

之が娼妓の方の心持であらう。然し恁う思ふ中にも、一人でも早く客を呼び込んで、寢床の數を增さうと、娼妓の方では必死となつて格子の側に近寄つて來る男を登樓るやうに挑む。格子越しに顏をひたと男の頰に押附けて、優しい言葉の數限りを盡して居るものなれば、自分の肌の香ひを嗅すやうに仕向けながらも、猶其の上の眼元や口元の媚で誘はうと爲懸つて居るのもある。烈しい婦人になると態と立膝して緋縮緬の腰卷の間から柔さうな内股の白い肉を見せて、美醜を判斷する男の心を失はさうと謀むの

もあるのを、小町は一向關係り合ひの無い人間の樣に整然と座つて、一枚の白紙を膝の上で折つたり、疊んだりして居る限り、一向に客を呼ばうとはせぬ。その癖身體の容子に潑溂とした所があつて眼など平生よりは遙に輝いて見える。時折思ひ出したやうに溜息を洩らすが、其れを朋輩が勘附きはすまいかと愕いて密つと眸すのが一度や二度ぢや無かつた。格子の側へ此方から呼びもせないのに前方から近寄つて來る男がある度毎に、眼を瞪つて瞶る。いや無理もないので小町は兼ての心願が屆いて、此の世に生命の不用ない男を發見し、今宵廿一歳を一期に果てやうと、今しも約束した對手の男の來るのを只管待ち焦れて居るのである。

苦しいと思つた務めも今宵一夜限り、悲しいと想つた我が世も後七八時間で終りだと思ふと寂びしい氣がして、派手な裲襠姿の我身が回顧られ、四邊の猥雜な光景をも注意して瞶つたが、胸の中には其れよりも對手の男が果して來るであらうか、否やの問題で惑亂して居る。約束した時間は九時であるのに、今は拾一時近く、二時間も過ぎて居るのに未だ顏さへ見せぬ。若しや死ぬが恐ろしく中途になつて急に變心したのではなからうか。其れとも其れとはなしに爲る友達の暇乞や、書置きの手紙――男は書き置きの手紙を外て書くと云つて居たのである――に手間取つて來やうが遲いのであらうか。其れてあつたなら氣を揉まずに濟むんだがと思つて又しても背後の時計を見上げる。

其の中に拾一時が鳴つた。男は未た顏を見せない。小町は氣が氣ぢやない。今宵の二時間が一年程の間の樣にも思はれる。萬一男が來なかつたら、自分は奈何したらよからう。恁う云ふ時の準備に刃物は一

振でもあれば咽喉を一突きして事は足りるのであるにと烈しく焦れた擧句、其れては折角の企が水の泡となつて如何にも物足りなく第一書置の文面から書直さねばならないと思ひ回す。一通は樓主當てに、一通は酒飲漢の父親に、一通は叔母が尼になつて居た尼寺へ、今一通警察へ當てゝ遺書を作くるのに何の位ゐ苦心したか知れやしないと其の苦心を思ふ。

『男は乾度來るに違ひ無い。あれ程泪を流して堅く約束したんだもの……。』

と思ひ回して、男が自分に惚れ込んで居る事から、浮世を果敢なんで居る容子などを思ひ浮べて居ると。

『小町さん。直さんが來て居るぢやないか……。』

隣りに座つて居る朋輩に氣附けられて、ヒョイと顏を上げると、如何にも待ちに待つて居る直さんが格子にピッタリ喰附いて、不景氣さうな顏して此方を覗き込んで居るのが眼に附く。態と聲は懸けずに突と立ち上つて側に行き、朋輩の手前怪まれぬ要愼に、聞えよがしに二言三言痴話めいた事を云つた後。

『登樓るんだらう?。』 聲を大きくする。男は頷いて格子の側を離れ、入り口の方へ廻ると直ぐ。

『被入い。御客樣……。』 妓夫の威勢のいゝ聲は懸つて、直さんは上り鼻の敷臺で紅鼻緒の草履を穿いて、張店の後ろの段梯子をとん／＼と踏み鳴らして上つて行く、御馴染なので直ぐ小町の部屋へ通されたが、直さんの茶色の古ぼけた帽子を手にして後に從ふ小町はまあ宜かつたと少しく胸を落ち附かす、御定りの臺の物の外に二品ばかり注文して、酒は正宗をとの注文を受けて小母さんは引下つて了ひ、貳人初めて周圍に氣を置く事なしに顏を見合したが、小町は今迄に無い輝いた眼をして、火鉢の横で男

の手を緊と握り。

「遲かつたのねえ。」　と恨みがましく云ふ。

「うむ。つひ其方此方歩いて居たもんで遲くなつて濟まなかつた。心配したかい？。」

今迄外の冷たい空氣に晒されて居た行爲であらう、顏の色は土氣色して居て、浮かない心の態が眼元に顯はれて居る。

「然うでもないが‥‥。」

と言葉を濁らしてから。

「其れでも能く來て吳れたのねえ。」

「莫伽な。一所に死のうと云ふんぢやないか、能く來て吳たのねえもないもんだ。串戲ぢやない。御前又俺等が來ないかしらとでも思つて居たのかい？。」

「あらッ然うぢやないんだよ‥‥てもねえ今日の長さが一年程にも思はれてね、どんなに心配したか御前さんには解らないだらうよ。」

「俺等だづて隨分心配してらあね。金の工面もしなきやならないし‥‥其れに。」

と云つて意味ありげに小町の顏を瞶る。

「藥は手に這入つて？。」　女が聲を潜めると。

「あゝ。」

〵頷いてから袂から小さい硝子瓶を取出すと、小町は受取ると直ぐ立ち上つて其處の簞笥の曳出しに納つたが、其の手は流石に顫えて居た。瓶の中は鹽酸なので、貳人は之を飲んで死なうと謀んで居るのである。

『飲む分量も解つて？。』

座に歸つてから小町が問ふ。

『あゝ、あれをみんな飲むんだ。』

力強く云ひ切つて男は點頭いて火鉢の灰をかき坦らす。

横鬢に貳錢銅貨大の禿があるので、頭髪を鯔背に四角苅して居るが。奈何も引立たない。面長の色白で、引締らない口元は直ぐたるみのある人間だと誰の眼にも解る。鼻は少さくて眦は下り、薄い毛虫眉は一段容貌を醜くして居るが、言云ふ度毎に上唇を舌で甜る癖があるのみか、妙に口を窄める許に些と女の好きさうな愛嬌が顯はれる。幾度も洗張したと思はれる唐棧縞の双子の袷羽織に、同じ柄の着物を着て、縮緬擬ひの縮みの兵兒帶を締めて居るが、自分では一ぱしの裝飾方と心得て居るらしい。幾度も自分が胸の邊や、袖袂を小町に見て呉と云はぬばかりに見回して居る。小町の所へ初めて客になつて來たのは、今から二月前のお盆の拾五日の晩、宵から雨催ひてあつたのが拾時頃から大雨となり、電光は閃き渡つて大雷の鳴る最中、不意に馳け込んで來て、奈何した緣の廻り合せか小町を買つたのである。一目見て氣位ゐの高い小町は好かない奴と思つたのであるが、二日ばかりお茶の曳通しだつたので、先は

大事に扱ひ、後朝の別れを男に惜ませたが其の時にもう男は本名は戸田直吉。年齢は廿四歳と名乘つて居たのである。

再會は夫れから一月も經つたお月夜の晩で、小町は少しばかし月琴が彈けるので、開け放した障子に靠れて彈いて聞かして遣ると男は酷く感心して、お前え見たいな優しい、心懸けのいゝ女を這麼商賈さして置くのは惜しいと云ひ出し、自分が儘になるなら根曳して宿の女房に爲るんだのにと、前の來た時は桶屋の主人て金持の樣に云つたのが、其の夜は實は桶屋に傭はれて居る身分だと實を明した上、產れは下谷の廣德寺前で荒物商だつたが火事で燒けた後、間も無く父親は病死し、母親は自分と、田舍の方に奉公して居る姉を置去りに、何處かの男と喰附いて遠くの方へ行つて了つたと身の上を話す容子が莫伽に憐れつぽくて、小町にしては珍らしく心を動かしたのであつた。

三度四度と急に足繁くなつて會ふのが重なると、男の方は漸次に夢中になつて來る。何も初めて女を知つたのではなく、子守や下女を追廻して、偶に僥倖な情を貪つたが、いつの間にか前方から逃げられて了つて口惜しい思いを爲るのが落ちて、色男がつては居るが內心は頗る女に怯えて居るのである。其れが產れて初めて女から優しい情を運ばれたと思つたので、夢中になるのは敢て無理ではない。自分の月給は一ケ月四圓なので、親方から貰ふたけては奈何したつて足りず。四度目に來る頃からは借金爲出して、今てはもう七所がり、八所がりて着物は着のみ着のまゝ、朋輩には惡口云はれ、親方には不首尾、かと云つて小町を思諦める事は出來ず。奈何しやうか知らんと思つて居る矢先に、一昨日の夜もう時分

はよしと見計つて、小町が其れとはなしに、浮世に居る事が嫌になつた事を微かすと、男も自分が借金て苦しんで居る事を打明す。其れては情死をと切出すと、直吉は二つ返事で承知して、

『俺故にお前に苦勞を懸けて、情死迄して呉れるなんて濟まないねえ、男冥利に俺等は嬉しくて涙が零れる。』

拳て頰に流るゝ涙を拂ひながら、嬉しさうな顏して禿のある頭を振る。小町は内心で。

『とう〳〵情死の對手が出來た。お蔭で淋しくない。屹度何だらう、自分が若し廓を出てから添う男があつたなら這麽男に違ひ無い。若し然うだつたら甚麽に悲しいか知れないが、貳人の御婚禮は死に行くんだから、二三日經てば直ぐ墓場、墓場の中では働く事も、口を吸はす事も、手を握り合はす事もないんだからまあいゝ。云はゞ此の人は私も死に行く御供見たような人。氣の毒だが然うとしか思はれないんだから爲方がない。併まあ二三日でも自分の良人とするんだし、其れに生命を呉るんだから大切にしやう。』

凭う思ひながらも、ぽと〳〵と涙を流して、

『其れぢや貳人は一所に死ぬの、何て云ふ因果な身の上なんだらう……。』

云つて男の手を握つて其處へ突伏して了ふ。之れて滯りなく情死の相談は纒つて了つたのである。實際直吉は情死するのを男冥利と思つて居るので、女が自分に惚れて、生命迄呉るなんて、日本第一の色男て、然う云はれた丈けて死んで遣つてもいゝと思ひ込んで居るのである。其處で小町は手薄な仲から都

合して金を調へ、直吉に二日流連させて遣つた上、今朝早く歸らして今夜逢ふたのである。
男の灰掻きならして居る姿をつく〴〵瞻つてから小町は、一つ肩で溜息を吐いて。
『直さん、私や何だか濟まないやうな氣がするわ。』
『何故？。』　と男は顏を上げる。
『お前さんを這麼羽目に陷してさ……。』
『不滿ねえ事を云つてなしにしやうぜ。』
一ぱし俠氣らしい事を云つた心算で、直さんは得意さうな笑を頰に浮べる。定めし心の中では女と云ふ者に對して斯うした口調を用ひらるゝのを嬉しく思ふんだらう。
『全く？。』
横目遣ひして小町が何か云ひ出さうとした時、廊下の外に足音がしておばさんが十能に火を盛つて這入つて來たので、何かしらおほゝゝゝと座を紛らす笑聲を立てる。
『何か可笑しい事があるの？。』
髮を櫛卷に結つた。眼の緣の黑い、皺のある顏を氣味惡い程てら〴〵さして薄い脣に酸漿を弄ぶ小母さんは態とらしい笑を浮べながら、輕薄な口調で問ふ。
『おほゝゝゝ。』　と小町は未だ笑つて居る。
『可笑しな人だねえ……。』

眼を直さんの上に轉じて。
『直さんは何だね然うして羽織を着た方が能く似合ふよ。全く羽織は人品を上げるからね。』
と油を懸ける。
『然うかね。』　と直さんは腭を撫て眼を妙に瞬きさしてから。
『ぢや俺等之から始終羽織を着るとしやうや。』
『あゝ、其れがいゝよ。小町さんだつて其の方が好きだらうぢやないか。だが羽織は人を擇り好みするから、お品の悪い者が着ると似合はなくつてね。本統に直さんには能く似合うよ。』
見惚れるような目附をして見せる。
『小母さんは今夜莫伽に直さんを譽めるのね……怪しいわ。』　後の茶箪笥から茶道具を降しながら小町は云ふ。
『もう貳拾年も若かつたら放擲さや爲ないが、恍うなつちや空駄目、小町さん何だよ先刻もねこゝんとこの齒が一本ぽつくら抜けちやつた。齒が抜けるやうになつちや人間も往生。色氣なんか疾つくに何處かへ往つちまつて食氣一方さ。』
『其の食氣も齒が抜けちや嚙めねえと云ふ仕合て……。』　直さんが輕く云ふと。
『御氣の毒様見たやうな譯さね。』
と小母さんは立ち上つて笑ひながら出て行く。後見送つて、直さんは忌々しさうに舌打ち一つして。

『現金な嫌な婆つたら。昨夜御前えが俺からつて御祝義を張込んで遣つたもんだから、今夜も貰ふと思ひやがつて、いやに御世辭遣ひやがらあ、面白くもねえ。』と憤る。

『人と云ふ者は然うしたものさ、御怒りでないよ。明日の朝になつて私等の死んだのを見て一番に膽を潰すのは彼の人なんだからね……。』

『吃驚りしやがるだらうね。』直さんは半間な遽々した體で云ふ。

『吃驚りするとも。吃度腰を拔かすに違ひないよ。』

『周章てもんだからね。』

『口でこそ威らさうな事を云つて居るが、臆病もんてないんだから。』淋しく小町は笑つて見せる。

『此の家の奴も驚くだらうね。』

心細げに頸を縮め、小町の顔に己が顔を寄せ附ける。

『些いとお待ち、誰かゞ來たやうだから。』

足音は若い衆が臺を運んで來たのである。

『小町さん、お誂へ。』

明けて塗物の臺の上に誂への寄せ鍋を乘せたのを置いて行くと、直ぐ後から德利を提げた御婆さんは小女郎を連れて這入つて來て、酒盛の支度をする。軈て疊の古ぼけた、天井の低い、陰氣な部屋は急に陽氣になつて、酒の香は滿ち、盃の觸れる音がして、直さん初め小町も口を動かしながら樂しげにさんさ

めく、凭うなると部屋の中の簞笥も、火鉢も、茶棚子も、鏡臺も活々として來て、人が生きて居るのを助けて居る樣に見える。人の生命の中に更に新らしい生命を注ぎ込みたいと希つて居る樣に見える。障子に映る影法師鮮に、人生の快樂が盡される樣に見えたが、直さんにしても、小町にしても、之が己が世の酒盛の終りとの心持は充分ある。藝者こそ呼ばなかつたが、毎時よりは餘計に騒ぎ、直さんが工面して來た金て、小母さんにも祝義を餘計にはづんて、拾貳時も餘程過ぎて御ひけの床となつた。すると暴風雨の後の野面が急に寂とするやうに、四邊の氣勢が宵よりも一層陰鬱に寂しさが身體に浸み込むやうに感ぜられる。表の通りを哀れつぽい聲て賣つて歩く辻占の呼聲も、新内の流しも、搔き消えて行く聲の落附く先は此の部屋の樣に思はれて、氣の行爲か、小母さんが點して往つた行燈の燈が、恰度ものゝ生命が盡きて往くかのやう、次第に微暗くなつて往くかのやうに感ぜられる。と、直さんは苦しさうに顏を蹙めて、しつかりと握つて居る小町の手を放し、床から少し外へ滑り出て、何かしら太い溜息を洩らして、行燈の灯の微暗いのを凝て矙つて居る。

『奈何したの?』

床の中から小町が聲を懸ける。

『うむ。』

と云つた切り、汗て濡れた額を手に撫て、矢つ張り行燈の灯を矙つた限り、小町の方を見やうともせぬ。

消えんとする燈火が最期に強い光りを放つて四邊を照らす樣に、直さんも生命の終りに、強い反撥力が

起つて、今迄經て來た世間を見やうとしたのかも知れぬ。

『何を見て居るの？』

小町はもう氣遣ひてならぬ容子を眼には見せたが、身體は飽迄も愛する男を待遇す媚びた容體をして、男の肩にと手を懸けた。

『何だか寂しいぢやないか。』

呟くやうに直さんは云つて、互に顔を見合したが、生慾に滿足して、疲勞した男の顔には、女を蔑る色が動いて約束を悔いて居ると小町は見た。

『夜が更けたからさ。』

些つと反抗的に云つて見る。

『もう、何時頃だらう。』

と世間の容子に耳を貸す。

『壹時頃だらうよ。』

『御前、もう一遍階下へ往くんだらう？。』

と冷淡を極める。

『あゝ、其れが奈何したの。』

いよ〳〵氣遣しさうな眼色を爲る。

『奈何もしないさ。些いと聞いて見たんぢやないか。』

『聞いて奈何するの？解り切つた事ぢやないか。御前さん。何ぢやないかい…急に死ぬのが怖ろしくなつたんぢやなくつて？。』

云つて小町は涙を男の膝の上にはら〳〵と零した。

『莫伽な……莫伽な那麽事があるものか、俺等男だよ。』

黑い節くれ立つた腕を延ばして直さんはしつかり小町を胸に抱えて遣つたが、其の腕には眞實の力が籠

つて居なかつた。小町は眞から悲しさうに其の儘男の胸に靠れて、啼噓りする。

『奈何して御前は那麼事を云ふんだい。俺等が御前と死ぬのが怖ろしいんだつたら、何も今迄にだつて苦勞も爲ずに濟むし、恁うした約束も爲ないだらうぢやないか。今考へて居たのは、俺等は奈何して恁う意久地が無いんだらう。若し俺に腕があつたら、何も情死なんぞ爲なくつても、御前を請出して、天下晴れて添はれうものと、其れを考へて居たんだよ。』

『然う？　全く……。』　涙の眼を擧げて微笑む。

『然うでなくて奈何するもんか。』　強く云ひ切る。

『あゝ、嬉しい。』

其の儘男に縋り附いて嬉しさに堪えない情を見せると、直さんの眼は見る〳〵恍乎として了つて、些つと閃いた理性の影は何處へやら、もう可愛くて〳〵ならない情に輝き渡る。

『疑つて濟まなかつたわね。』　小町は少し顏を放し、頸を傾げて、甘つたれる。

『濟まないとも。』

と直さんは笑つて居る。

『あゝ、之で宜つた。』　獨言つやうに云つてから。

『ねえ直さん、私些いと階下へ往つて來てよ。未だ御退けにならないんだから。でも誰か張店に居るやうだつたら、小母さんに程よく云つて直ぐ上つて來るわ。今晩は閑隙らしいから直ぐ來られるだらうと

思ふの。』
威勢よく云つて直ぐ立ち上り、帶を締め直して部屋を出て行く。取り殘された直さんは小町の足音が廊下の外れへ往つて、階子段を下へばたん／＼と音立て消えて了つたのを聞き定めると、今迄暗闇に居た者が急に明るい場所に出たやうに、眼をぱちくりさして部屋の中を盻したが、其の顏には明に恐怖の色が見えた。盜賊でもするやうな落附かない容子を見せて四邊の氣勢を覗つてから突と立ち上つて先刻小町が藥を納つた簞笥の側へ往き行き。開けやうと環に手を懸けると、生憎ばたん／＼と廊下を上草履の音が近附いて來る。見附けられたら大變と思つたらしく急いで以前の寢床の方へ引返し、何と思つてか中へ潛り込んで了つた。
足音は小町の朋輩女郎で櫻木と云ふ直さんも知己の仲である。障子をスウーと明けて、
『小町さん。』　と聲を懸ける。屏風を立て廻した床の中では、直さんはぶる／＼顫へながら寢た態をして居ると、櫻木はもう一度聲を懸けたが、返辭が無いので眞實眠て居ると思つたものらしく障子を閉めて往つて了ふ。直さんは未だ暫時は眠た態して、何と感念したものか、もう起上らなかつた。奈何やら頭腦の中では、死に就いての恐ろしい考えと、小町に死ぬ程愛せられて居るとの嬉しさとが紛亂らかつて種々思ひ惱むで居るらしい。
部屋を出た小町は二階を下りて、先づ便所へと這入つたが、便所の臭氣と、アルボースの臭氣が混同して強烈に鼻を刺激するので、頭腦は妙に澄み、煽られた感情は少し靜まつて、先刻直さんの決心があや

ふやてあると感じた事が更に考へられて來た。

『可愛想に臆病者、死ぬのを恐怖がつて居る……。』

嘲笑ふやうに思つて見たが、不圖思考が轉じて自分も一所に死ぬんだと思ふと、堪え難い恐怖が覺えられて、自分が死んだ後の姿——曾て何處かで見た人の死んだ醜い青膨れの冷たい姿が思ひ出されて來て、其れが便所の暗い中に見えると思はず竦然としたが、次の瞬間。

『何てもない事ぢやないか。』

呟かれて。

誰だつて一度は死ぬんだもの。這麼辛い生活するよりは、何にも知らない境界に往く方が何れ丈け増しだか知れやしない。』

と思はれて、涙が曳切りなしに、流れ出した。

『死ぬのなら、自分一人て……あの男は放して遣らうかしら？死なれる藥は持つて來て呉たんだから……。』

と、優しい了見になつたが、何だか其れては如何にも物足りないやうな。然うして便りないやうな。今迄此の事に就いては種々に考えた、若し情死だとすれば、世間が華やかに見て呉るのみか優しい情けを懸けて呉るんだとの思考に謀反するやうに思はれるので直ぐと取消して了つた。

『矢張り直さんを一所に連れて往かう。何としても其の方が死ぬにも死榮えがする。あの人だつて之の

末生きて居て何事か出來やう。資本は無し、便れる人は無し、其れにあゝした、怠惰者なんだもの、生きて居ちや私と同じやうに苦勞するばかり、死ぬのが惜しい生命ぢや決して無い。私と一所に死ぬのが却てあの人の幸福かも知れないんだ。』

恁う心に辨解して氣強くなると。

『今迄さん〳〵苦しい目をしたんだもの、死しなに人の一人位ゐ連れて行つたつて係ふものか……。』

と云つた大膽な氣になる。

鳥はお尻を突時かれ、其處から毒を注されて、腸迄も腐つて了たのである。

便所を出て、手水鉢で手を洗つて居ると、階子段をミシリ〳〵と音さして降りて來た人があるとは知つたが、別段氣にも止めず、手を拭つて、行きに懸らうとすると、不意にヒヨツコリ眼の前に立つた人影は直さんである。見るから悄氣て居る態が知れて、微暗い洋燈の行爲でもあつたらうが、顏色は此の世の人とも思はれぬ靑さて、肩口が窄んで、今から幽靈にでもなつたやう、物凄く憐れに見えた。

『直さん。奈何したの？。』

小町は思はず頓狂な聲を出したが、直ぐ對手の機嫌を損ぜぬやうと注意して。

『便所？。』　と優しく問ふ。

『あゝ。』

と直さんは頷いてさつさと土間へ降りて駒下駄を穿いて用達しに行く。秋とは云へ更けた夜の空氣は冷

たく、肌を粟立たすのを堪えて小町は、臭い便所の臭氣を嗅ぎながら直さんの出て來るのを手水鉢の側に待つて、其の手に灌ぎ水を懸けて遣る。

『御前成可く都合して早く御出でな。』

直さんは寒さに顫へるやうな語調で云つてから二階へ歸つて行く。

『直く行くわ、もう御退けの時分だらうよ。』

云つてから小町は上草履の足音を立てゝ表の方へ往くと、今宵は近頃にない不入で、張店には未た客の無い朋輩が七八人ばかり燈火のみ煌々として輝く淋しい街を眠さうな眼で瞶つて居た。小町が這入つて來た姿を見ると、一同、倦怠んだ心から蘇生つて眼を回して瞶つたのが何だか意味あるやうに小町には感ぜられて。

『なあに？。』　と薄氣味惡く訊く。

『なあにつて、なにさ？。』

と、一番此方の端に座した花扇と云ふ小町には別して意地惡る者に感じられる、眦の釣上つた狐見たいな顔したのが云ふ。

『小町さん、御樂み。』

聲を懸けたのは容貌が好いのを鼻に懸けて、隨分高慢な言云ひをする綾衣と云ふのである。

『有難う。』

小町は何かしら憤つとして反抗の語氣を吐く。

『隨分だわねえ。』

四番目に座つて居る少將と云ふのが、小癪なとばかり上目遣ひに睨めて云ふ。名古屋産れて薄情の通り者、廿五歳でありながら小柄なのを一德に十九歳だなど丶云つて御客を綾なし、新宿から品川と渡つて、漸く河岸店の此の小樓に落附き、破落戸を情人にして居る阿婆擢れ女、何が隨分だいと思ひながらも、小町は己が席へ落附き、

『だつて御返辭の爲樣が爲いからさ。』

と、謝罪る樣に云つて、前の煙草盆から朱羅宇の煙管を取上げてすぱ〳〵と煙を吐き、上座から順々に眺して、

『いくらでも意地惡るの出來る丈は爲なさい、明朝になつたら一時に仕返しを爲て遣るんだから。其の時になつて乾驚りせぬがい丶。』

心弱く思つて、灰壺へと吹売をとんとはたき落すと、眼が潤んで來たので、こほん〳〵と咽せ入つた體して紛らはした。

『小町さん。先刻ね辻占屋が通つたのよ。知らして上げやうかしらと思つたが、大儀うだつたから止したのよ、御免なさい。』

之れは稼ぎに出てから漸つと三月しかならない菊江と云ふ若い妓て、小町は今迄他の者から酷い扱ひさ

れる憤りを僅に柔順な此の妓にのみ當り散らして念拂し爲て居たのである。て、菊江にのみは其れとは爲しに別離を惜もうと思ふと、急に胸が迫つて來て涙が流れ出すので、急いで鼻紙を拔き、氣附かれぬやうに注意して拭つた。並居る朋輩は血の冷たい小町の眼から那麽温い涙が流出るとは思附き樣がないので誰も氣附かなかつた。

其れから十分程經つと、店を閉ぢる時間となつたので、一同張店を立つて、客あるのは二階へ、客の無いのは主人に俯甲斐なかつた一夜を謝して寄せ場へと眠りに往く。小町も時の札を帳場へ懸けに行くと、帳場格子の中には、大雛の遣手から、妓夫と喰附いて此處迄爲上げた女主人は、四斗樽の樣な肥太つた身體の胸を拔け、行儀惡く片足投出しながらも、薄脣の賤しげな顏を此方へ向け、眼鏡越しに白眼と瞶つて居る。一種の壓迫を感じて、妙に身體が縮んだが、飽迄何氣ない態を裝ひ、些いと頭を下げて行過ぎやうとすると。

『小町。此夜の客は大丈夫なのかい?。』

『はい。大丈夫て御座います。』

云つて引回したが、胸は烈しく浪立つた。二階への階子段を中途迄上ると、漸つと胸は落附いて。

『明朝になつたら吃驚しやがるだらう。氣味がいゝ。』

と思つたが、『あの冷酷な氣象て自分の死んだ姿を見たら甚麽に腹を立てるだらう。生きて居てさへ恁うだもの。』

と思つて、自分の死んだ姿を女主人が睨むで居る光景を心に思ふと、何かなしに氣味惡く、ばた〳〵と駈出して、己が部屋へ飛込むと、直さんは考え込むで居る態で、忙然床の上に起き直つて居る。小町が息をせい〳〵云はして居るのを見ると。

『奈何したの？。』　と優しく問ふ。

『別に奈何も爲ないんだが、今女主人さんを睨めて來て遣つたの、隨分お辛めなさいましたね。併しもう之から御叱りになる御世話もないてしやうよと、餘つ程云つて遣りたかつたけれど、默言つて居たの……。』

『云つたら奈何するだらう。』　直さんは笑顏を見せた。

『さあ……。』

と小町も微笑んで、

『直さん、しつかり抱えて御くれ、何だか心細くつて……。』

『爲樣がないね。』

と、女の云ふ儘に腕に抱えて遣るのてあつたが、見ると小町は潸々泣き入つて居る。

『悲しいかい？。』　滅入つた聲て聞く。小町は頷いて見せた限り何とも返辭をせなんだ。直さんも思ひ迫つたのてあらう。悲しみに顫ふ可愛い女の横顏を瞶つて之も涙をぽとり〳〵落した。

廓の夜も次第〳〵に更けて、外には何等の騒聲も聞えず、家の中は寢靜つて了つて、雨戸に訪づるゝ風

の音は、不吉の事を呼いて居るやうに感ぜらるゝ。部屋の中の燈火は人の末期を照らすのには相應しい微暗さて、朧ろに顯はれる部屋の中の道具は、軈て地の底に葬らるゝものゝ樣に見える。泣き入る小町の頭腦の中には、生きるが爲めに必用な張詰めた感情は了然消えて了つて、素直な女らしい感情で一杯になる。悲哀さは涙を促し、涙は反抗的に感情を溶して行くのである。幼い頃のあどけなかつた心態や、母に死別れた時の容子やら、大切な叔母の尼の臨終の模樣などが胸に浮んで來る。然して死んだら叔母の側に行かれるのではないであらうかと云つた樣な思ひも湧く。

直さんにしても然うで、泣かじとすれど妙に悲哀しく、思ひは胸に溢れて只泣きたい。泣く涙に連れて、浮世は不滿ない所だと感じられ、其れから方々の芝居などで見た情死の模樣が思ひ浮べられ、自分達は今其れを演じて居るんだと心附き、眞實の情死は、あんなに面白いもので無いと思はれたのみならず、苦しいものだと考へられて寧そ小町に云つて止さうかしらと思つたが。然う云つては小町に愛情を盡かされやしまいかとの恐れと、もう一つは止したにしたつて奈如なる。今夜の爲めに工面した金も云はゞ朋輩を欺して手に入れたやうなもの、四方八方の借金を奈何して埋めて行くと、其の苦患を思ふと矢つ張り可哀い女と一所に死んだ方が何れ丈け幸福だか知れやしない、朋友にしたつて情死したと云へば景氣よく噂して、自分を色男だと羨むかも知らないと、唾を呑んで漸く決心する。

『貴方、藥を出して頂戴な。』

稍ゝあつて小町は涙の顏を上げて云ふ。

『あゝ。』

絲に操られる人形の樣に直さんは立ち上つて簞笥の曳出しを拔き、中から取出して持つて來る。

『洋盃は此處にあるのよ。』

と小町は延び上つて片側の茶簞笥から洋盃を二つ取る。

『もう直ぐ飮むの？。』　直さんは胸を惑々して問ふ。奈何やら咽喉は干乾びて了つて居るらしい。聲は皺枯れて居る。

『あゝ。もう直きに。時なんだから、其れに往つて歸つて來たら直ぐにね。』

話して居る時、階下から若い衆が拍子木を鳴らしながら上つて來て、廊下を通つて彼方へ通つて往つて了ふ。

『ぢや些つと往つて來るから。』

小町は勢よく身を起して出て往つたが直ぐと歸つて來た。溫い夢を呼び醒されて其處の部屋此處の部屋から札を懸變へに行く足音で些いと騷がしかつたが、其れも靜まつて了ふと、いよ〳〵末期の時が來た。小町は深い決心の眼をして直さんを見ると、直さんは意を領して藥の瓶を手元に近寄せ、栓を拔いて黑く見ゆる液を二つの洋盃に分けて注いだ。咽つぽい强烈な藥の匂ひは部屋の中に滿ちたが、關はず小町は手を取り上げる。直さんは何か云はうとしたが、もう云ふ隙はなく遽てゝ手に取り上げ、明いた手と手を緊と握り合し眼と眼を見合して、一息に飮み乾すと直ぐ夢中になつて抱き合つたが、恐ろしい

苦痛は少しの猶豫もなく押し寄せて來た。貳人は最初抱き合つたまゝ出來る丈け聲を忍んで呻いて居たが、いつの間にか放れ〳〵になつて堪え性なく呻く聲を擧げた。

隣室にも向側の部屋にも生憎寢て居る者がなかつたので此の騷ぎが階下へ知れたのは、貳人が藥を飲んでから四拾分も經つた後の事であつた。未だ息があるので醫者を呼びに遣る、應急手當を行ふと云ふ態に樓中は騷いたが、夜のしら〳〵明けに、貳人は釣臺に乘せられて、朋輩や家の者の嘲罵の中に病院へ送られた。もとより貳人共夢中で知るやうはなかつたが、小町は不圖眼を開くと、自分は白い柔い床の上に寢させられて居るのが解つた。

「自分は死なゝかつたんだ。」

氣が附くと、何とも云ひやうのない不快な念がして、よし治癒つても一生眼を開けまいと直ぐ眼を閉ぢた。すると枕元で話聲が聞える。

「もう大丈夫らしいですね。乾度助かると御有るんでしやう。」　知らない男の聲がする。

「えい。此の方は手當が早く行屆いたもんですから助かるらしいんです。ほんとに人騷がせな。此奴には隨分金が懸つて居るんですよ……。」　間違ひもなく、肥大の女主人の聲である。小町は慄然としたが奈何ても係はないと云つた氣になる。然うして再び忌な稼ぎを爲ねばならないかと、烈しい悶えを覺える。

「男の方は奈何しました。」　知らぬ男の聲である。

『駄目でした。藥を餘計に飮んだらしいんですよ。惡い奴つて金の懸つてある女を這麼態にするなんて、まあ盜賊でさあ、生きて居たつて惡な事を仕出かさないてしやうから、死ぬ方が世間の厄介拂ひてしやうよ。』

『あゝ直さんは死んだか……。』

と思つて氣の毒な氣がした。

『貴方の方は奈何てした？。』　女主人が問ふのである。

『私許は客の方が蘇生つて、肝要の玉が駄目てした。』

『やれ〳〵、其りや御損てしたね。昨夜は情死の流行る晩と見えて、新玉屋さんにも出來損ひがあつたさうてすね。』

女主人の聲を聞いて小町は、何處の樓の妓が情死したんだらうと、男の聲する方を見やうと眼を開けると、片側の窓から日光が前方の壁へと射して、四邊は華やかに、活々として居て、白い衣着た看護婦や、醫師の行通ふ姿と、人が活きて働く態が眼に映ると、もう何を考へる元氣もなく、再び苦しい務めをせねばならないかと、直さんの事などは思はずに只其れのみを夢の樣に思ひ續けるのであつた。（完）



犠牲

徳田秋声

一

四月八日—散らかつてゐる弟（おとうと）や妹が、幾年振かでドカドカと一緒に集まつて来た

のは、つい此の三四日前の事です。何時も寂しい宇野糺の家は、盆と正月が一時に來たやうに、急に賑つて來た。

弟妹は都合四人、中二人が女、上と下とが男で、一番の年嵩が三十六、下が廿七歳である。一番の弟は、養子に行つたから、名を小林敬三と云つて、地方で可也の病院長をしてゐる。其の次の妹はきん子と云つて、糺の舊友某氏の夫人で、良人は、中央の教育界で錚々の一人物である。次の妹は此も或地方の檢事の夫人で、名を周子と云ふのだが、一番末の弟が當時東京で盛名を馳せてゐる西洋畫家で、其の名を淑夫と云ふのである。糺の直ぐ下に今一人弟があつたが、軍人に成かけて餘程以前に夭折したとは、唯今の如く人々の胸に新な記憶である。それで糺はと云ふと、此の土地で二十年近くも小學校に教師をして、其年四十二、頭の天邊が大分禿げかゝつて、活氣も血の氣もない顏に夥多皺が寄つてゐる。つい此七八年前までは獨身で、まだなか〳〵弟に劣けぬ意で、始終何か目論んでゐたが、結婚してからは頓と其樣氣もなくなり、職務の餘暇に少許の鷄など飼つて、病身な妻と二人、約やかな生活を續けてゐる。

しかし糺の胸には一つの大滿足がある。其は恁までの名譽を荷つてゐる弟妹を自分の力で世間へ押出した事、少くとも今日の地位に登るまでの其の階段の第一歩を手を取つて導いてやつた事、語を換へて言へば、財産も門地もない高が百石ばかりの小士族の嫡男に產れて、而も父は生涯酒と謠と、人を惠むこと、橫柄なこと、潔泊なことの外、何の能も技倆もない人間であつたから、自分の學事盛を却つて一

家の經營に當らねばならず、其の生活難の中心に立つて、五人の弟妹を提げて、夫々に普通敎育（中には、尋中以上まで進ませたのもある）を授けてやつた事、而して其が皆な左に右社會の表面に立働いてゐることを思へば、彼の心も餘りに貧しくはなかつた。否大得意であつた。殊に父の十七回忌を機として、弟妹四人、女の方は双方で子供が三人、女中が一人あつたから、總てゞ八人の賓客が、己がじゝ時様の服裝を着飾つて、華々しく此の城下の町へ歸省したのは、紀に取つては、恐く自分が縣知事になつたよりも愉快なのである。

宇野の家は深い栗林の中にある。町續ではあるが、周は田圃で、其處此處にチラホラ人家が見える。俸祿捧還の折、此へ引越して來たので、其栗の木を見ても、裏の流を見ても、菌の多い前の山を見ても、若くば二階の壁の樂書、昔も今も變らず咲いてゐる垣根一面の萩を見ても、同胞六人が、盛んに界隈を馳驅してゐた生育當時の事が、直に頭に浮んで來る。

其の家は手狹でもあるし、汚くもあると云ふので、法要は寺で營むことにした。寺へは六七丁に足らぬ道であるが、其日は特に腕車を七臺誂えて、一行十人賑かに家を出た。敬三は醫者だけに取澄したもので、薄出の駱駝メルトンのフロックの繻子の裏をかへして、輕く車に乘ると、金鎖と、眼鏡の金緣とを閃かせながら、香氣の高い葉捲を燻らせて悠々と曳かせる。色は白く、鼻は高く、濃い口髯に屹と結んだ口、氣の小い紀の妻が、始終怯氣づいて、碌々親しい口一つ利けぬのも無理はない。淑夫は羽織袴で、兄のドクトルから見ると、ずッと風采は下るが、自然な擧動のうちに、何處か沈着いた、氣品の高いと

ころが見えて、其の綺麗な大きい目も平凡でない。きん子は一番貴族的の風をしてゐる。白茶の紋付の二枚袷で、帶も酷く高雅な繻珍を締め、金鎖に指環のダイヤなどを光せて、獨逸服を着た男の子を一人膝に抱かへ、額の長い顔に始終ニコ／＼と笑を含んでゐる。周子は姉よりは沈んだ方だが、標致は却つて此の方が好く、四歳になる女の子に、縮緬ぞッきの華美な姿をさせて、自分も廿三四位にしか見えぬ若裝飾である。

糺夫婦は其次に車を曳せた。いづれも質素な打扮で、糺の縁を取つた舊式のフロックなどは、もう釦の被せ絲が取れて、色も赤茶け、肩に大な皺が出來て、クシャ／＼のホワイトの手首を氣にしながら、ヌッポリと古山高を冠つて前屈みに車に乘つた後姿は、後から續くきん子の女中が、クス／＼笑ひ續けてあつた位だが、髮の薄い痩細つた其の頸を眺めながら行く妻の目には何と映つたらう。けれど恁して、綺羅美やかに着飾つた弟や妹と一緒に町を通つて行く糺は、自分の事などは、少しも氣にならぬくらゐ、感謝の情が、胸一杯になつてゐた。

十月の初旬で、空は薄曇り、町屋町屋の軒に寂しい日光が早や傾きかけてゐた。鐵道が敷けてから、年々寂れて行く此の町に、恁も盛裝した紳士淑女を載せた車の續くのは、近頃些と不思議な事なのである。

二

寺から歸つたのは、雜木林に早や夕靄の立罩める頃であつた。薄ら寒い夕風に、搖れ重りのする門

田の稻、畑の畔に長髪を振亂したやうな蜀黍が、ざわ〳〵と幽かな葉擦の音を立てゝ、黄ばんだ榛の木の梢ばかり見える空に、渡鳥が忙しさうに飛んでゆく。幽暗い栗林のなかへ入ると、其處は濕氣を持つた空氣が急に重く、落葉の輕い匂が、冷たく鼻に通ふのてある。

腕車を降りた時は、皆な一樣に疲勞の色が顏に現れてゐた。中にもドクトルなどは、蒼い頬を兩手て擦つて、

「ヤア寒い〳〵、名古屋とは餘程陽氣が違ふ」と呟きながら靴を脫ぐ。

「あのお寺の坊さんが又た大の話ずきて、私眞實に痺を切らして了つた。」と妹のちか子が不平たらたらて座敷へ通る。

「あのお上人さんも、滅切年を取りましたね。」と姉も言ふ。

ドクトルは床柱に首を凭せて、長い脚をずいと伸し、大な欠をしながら、「もう耄碌してゐるさ。あゝ同じヿを繰返し〳〵言ふのは、確に先が長くない證據だ。アヽ、他も親父の酒飲相手てあツたんだが……」

「眞實にね。加之私達よりか能く私達の家の事を知つてゐるんですもの。」

「アヽ、昔から記臆の好い坊師て、御維新前後から、今日までの町の歴史なら、あの凸凹の頭に不殘藏ひ込んてある。我々の顏を見ると、直に其の蟲干をやるんだから堪らない。」とドクトルは鼻の先で嗤つて、

「さう言や、父が酷く困つた時に、己をあの坊主の弟子にすると言つて、相談に行つた事があつたつけ

が、己は費忌々しくて、到頭じやく張つて、行かずに了つた。父は餘程己を持餘したと見える。」と笑ひ出した。
「兄さんが坊さんになつてゐたら如何でせう。」と妹も笑ひ出す。
「爾さな、其の方が或は好かつたかも知れん。何でもミッチリ學問をさせると言つてゐたから。然し、坊主も醫者も大概似たやうなものだ。」
苦蟲を嚙潰したやうな顏をして、兩手を組んで熟と聽いてゐた兄の紀は、濃い眉をピクッと動かして、小聲で、「あの時は、私が大きに困つた。親父は、唯一人でも口を減すことを考へてゐるので、少しも當人の利害得失と云ふものを究めんのぢやつたから……。」
「あの時分から、衆が此方の兄さんに御苦勞かけたわね。」と姉がしみく言ふ
「あの時分てしたね、兄さんが始終夜晩くまで二階で本を讀んで在して、赤毛氈一枚で轉寢なんかなすつて……私覺えてるわ。」
「それが丁度、町の家を賣つて、此方へ引越した時分だ。」とドクトルは少し前へ出て、今嫂が汲んでくれた茶を啜る。
「阿母さんが泣いて在したとを覺えてゐるわ。」と姉が曇んだやうな目色をして言出した。
ドクトルは快活に「さうだな、もう二十幾年と云ふ昔だ。我々も年を取つたが、周の栗の木も隨分大くなつたね。今時分圍爐裏で栗を燒いて食つた樂みは忘られんな。」

と感慨の深さうな調子に、一同は齊しく庭の方を見遣る。
「栗はもう何斗と云ふ收穫でせう。」
糺は重い口で、「さやう、二斗ぐらゐ取れるぢやらうか」と妻の方を向く。
「其位はありませう」と妻は淋しい顔に笑を浮べて、此も屈んで奥の方から檐の垠れに繋つた、一株の栗を見あげながら、
「今年は出來が惡くて未だ何方へも差上げませんが、明日は皆さんへ御馳走に栗の御飯でも拵えませうか。」
「お美いてせうね。」と妹は愛相らしく嫂の方へ首を傾げて、
「栗を送つて頂く度に、家の事を憶出しますんてすよ。菌狩なんぞは、まあ何樣なに樂しみてしたらう。」
「其の癖今行つて見ると、其樣でもないのさ。」とドクトルは香水の匂の高いハンケチを取出して鼻から口を拭き、
「栗拾ひに限らず、川狩に限らず、總てあの時代の事が、今から思ふと唯面白いので、お互に世帶の苦勞でもするやうになつちや、迚も彼樣な心持にやなれないのさ。」
「姉は子供と一緒に椽側の方へ出て、「栗も然てすが、あの萩も相渝らず咲きますね。」
「萩は淋しくて私何だか嫌よ」と、妹も椽側へ出て、「それよりか、家に澤山鳳仙花があつたが如何なつたてせう。」

「鳳仙花、ありや俗な花だ。お前も裁判官の細君相當な事を言ふ」とドクトルは嗤ふ。
「可いわ。何せ林は權利義務で固めた、殺風景な頭ですから。」
「さう憤慨せんでも可いよ。」と傲笑して、
「林さんも、宇都の宮ぢや大分評判が好いやうだから、其うちには榮轉だらう。」
「何ですか、自分ぢやもう、官吏は可厭だからと云つて、事によつたら、東京で辯護士になるかも解りませんわ。」
「それも可からう。然し失禮ながら、林君は辯護士と云ふ柄ぢやないな。加之今休すのは惜い。尤も己なぞも、政府に傭はれてゐるのは、熟々可厭になつて、如何かして一つ、獨力で病院を經營して見たいと思つてゐる。
きん子は部屋へ入つて來て、「そんな事を言へば、此方の御兄さんなぞは如何するのです。二十年の餘も、一つ職業を續けて、少しも不平を被仰らないぢやありませんか。」
「然でもないさ。」とドクトルは打消して、「今でこそ慿して村學究でゐられるが、元はなか〳〵野心のあつたものです。八九年前に一度事業熱に浮されて、手を燒いたのをお前は知るまい。二十二三時代に、衆を置いてき堀にして、東京へ飛出した騷なぞも記憶してゐるさ。」
「そりや若い時分は、誰しも一度や二度は其樣な事もありませうよ」ときん子は至つて夷かな、然し何處か確りした調子で、故意としからず反抗を試みる。

「ですけれど、御兄イさんは、概して大人しい方ですわ。大澤なぞは、始終讃めてゐますわ。」

「そんなら、もつと取立てゝ、切めて文部省へでも使つてくれたら可いぢやないか。」とドクトルは少し冷し氣味て、

「兄さんなぞは、實に割の悪い人なんだ。」とツケ〳〵言ふ。

きん子は少し顔を赧めて、「ですけれど、大澤は其様主義ぢやないんですもの。」

「ぢや、何様主義か。身贔負を爲ないと云ふ主義か。」

「いゝえ、然ぢやないんです。畢竟教育家が、一身上の都合で、色々の野心を抱くのは可けないと云ふんです。小學校の教師が、中學の教師に昇進するなぞと云ふとは、些と名譽のやうに聞えますけれど………。」

「解つた」とドクトルは氣捷く頷いて、「そりや畢竟教育家の杓子定規と云ふものなんだ。其杓子定規で隅から隅まで推して行つた日にや、社會が宛然お重箱のカンテンのやうに凝結して了ふ。」

「秩序と云ふものは、一體然云ふものぢやないんですか。」

「秩序の形式は然云ふものか知らんが、此の活動の劇しい社會は然うは行かん。殊に、いくら教育家だつても、一箇の活きた人間である以上は、全然教育の道具として使はれてる譯にも行くまい。」

「兄さんは、それぢや教育家の天職を侮蔑して在しやるのですもの。」

「いや、侮蔑せんから……。」

「まあ宜しい。」と糺は些と身動ぎをして、「私はまあ此て、何等の不滿も不安もないから、其で可いとしおかうではないか。何だか私のとから、議論に花が咲いたやうぢやから。」

先刻から見えなかつた淑夫の姿が、此の時ひよッこり緣先へ現れる。淑夫は手に一と束の草花を持つてゐたが、何れも野生の、色も香もない草ばかりであるが、大事さうに、莖のところを紙に裹んで、ステッキと一緒に提げて來た。

ちか子は胡散くさい目色をして、「何てす其樣なもの！」

「ハヽヽ、畫師にも植物採收の必要はあるものと見えるな。」とドクトルも聲をかける。

「何に、其樣な譯でもないですが……」と淑夫は洗手鉢て手を洗つて、上へ上つて來る。

蒼い濛靄は、もう重苦しく檐端まて迫つて來て、奥の方にゐる人の影は、次第に薄くなつてゐた。ランプの來るまて、部屋は唯森としたものて。

糺は忘れてゐた鷄の始末を爲に、裏へ立つて行く。

三

其晩は十時過まて酒を飲んてゐた。靜な栗林の奥から何時までも笑聲が洩れて、灯影は殆ど徹宵射してゐた。糺は行けもせぬ口を、妄に弟に勸められて、もう滅茶々々に醉つてしまつた。無論自分にも不思議なくらゐ酒が美かつた。美いといふよりか、寧ろ興に乘つて飲んだ。

初めはチビリヽヽ、氣味無さうに猪口を嘗めるやうにして、口數も利かず、面白いてもなく、面白

なくてもない顔をして、時々ニヤゝゝ笑ふばかりてあつたが、旋て弟達が酒杯を擧げて、熱心に自分の健康を祝してくれた時分には、感究まつて漫に涙が出た。

彼は目を耀かして、何時にない慨然とした聲で、

「此の場に、唯一人亡つた丈作が居てくれたらばと私は思ふ。」と叫んて顏を背向けた。

此の熱心な一言て、座が些と沈んて來る。

ドクトルは又兄に注いてやつて、「爾うゝゝ、丈作兄さんは、なかゝゝ無責任な男て、今でも想出すが、父の葬式が濟んてから、一同額を鳩めて、一家の善後策を相談したとがある。其の時あの兄さんばかりは、一向平氣なもので、今にも自分一人て、一家六人を引背負つて立つやうな大言を吐いたものさ、然し或は大いにやつたかも知れん。今頃は大佐ぐらゐになつて威張つてゐるかも知れん。鰯を抄ふの名人て、性質は父に酷肖だつた。」

「眞實に、あの兄さんは、可怕いくらゐ度胸の坐つた人てしたよ。」

糺はグイゝゝ飲はじめながら、

「左に右來て大いに遣つてくれ、兄二人分もやつてくれ。私はもう年も取つたし、子供もないし、何の希望もない體ぢや。唯お前達の益す發展して行くのを見てゐるのが、何よりの樂みだて……」と云ふやうな意味の語を繰返し〳〵駢べてゐた。

細君も同じやうな事を言ふ。

きん子は姆に一つ猪口を差して、「てすけれど姉さん、衆が左に右一人前になつたのも、畢竟大御兄さんのお蔭なんてすよ。」

「爾うてもございますまいけれど……」と姆は榮えない顔をして、

「私共は根ッから滿りませんてすよ。皆さんは何樣なに面白くてお在なさるてせう。お話を伺つたばかりても、もう氣が浮々するくらゐてすもの。」

「まあ、其樣な下らんとを言ふな。」と糺は意氣軒昂の形で、「私は何にも出來ん人間で、其の無能な處が亡つた親父に酷く似てゐる。けど、恁う運命に服從するまでには、私も相應に悶踠きも脚掻きもしたものだ。私に少しても功があるとすれば、自分に打克つたと云ふとぢやらうと考へてゐる。自分に打克つて、左に右宅に粘着いてゐたと云ふとが、今となつて見ると、大變に可かつたかも知れん。」と言つて又飲む。

細君は呆れて其顔を見てゐた。

「兄さんに、あの時分家を飛出された日には、其こそ法返がつかなかつたてせうよ。」

「爾さな」とドクトルは大酒家だけに、相渝らず落著いたもので、「己達は年が若くて、氣がつかなかつたけれど、今から思ふと、那の年頃て、じッと引籠つてゐると云ふとは、左に右非常な苦痛だ。餘程の辛抱人か、意氣地なしてなけれや到底出來ん業だ。處が兄さんは其の辛抱人てあつたのだ。だから。我々は感謝しなけれやならんぢやないか。」

「あゝ云ふとを言つて燗てゝゐます。醫者なんてものは人が悪い。」
先刻から熱い息を吹いて、横になつて何か冥想に沈んでゐた淑夫が、咽喉を擽ぐるやうな笑聲を洩す。
而して、「ところて、誰が一等幸福だらう」と藪から棒に訊いた。
「知れたこッちやないか。此方の兄さんが一等幸福さ。」
「然てすかね」と淑夫は笑つて、「そんな平凡な事なら、僕でも考へる。僕は時々然云ふとは考へて見るけれど、如何云ふものか、矢張其の氣になれない。而して相變らず洋行でもしやうかと云ふ野心を起す。奇體てすな。」とノコノコ起きて來て、
「左に右、も一度大兄さんの健康を祝さう。」
と言つて、コップを差出しながら、姉に盈々と注す。
三人は齊しくコップを擧げた。
紀は其ビールを三口ばかりに飲干して、「ヤア、有難う。」と膝に兩手を支いて、ガックリ首を垂れ、「私や、こんな愉快な事はない。もう慥なりや幾許ても飲むて、……如何だ、這度は一つ皆の成功を祝さう。」と顫へる手にコップを差出す。
細君は兢々して、「それぢや、もう其限て……附でないと、明日またお勤めに障ります。」
紀は妙に口を歪めて、見當違ひに白眼を見据え、「何を莫迦いふ？今日は一體何ぢやと思ふ。」と叱つけるやうに言つて、

「みんな是は私の弟ぢや。私は寔に滿らん生涯を送つたけれど、弟や妹は幸にして不殘からして社會の要部に地歩を占めてゐてくれる。私はと云ふと、二十年一日の如く、此の栗林のなかに蹈つて、何一つ仕出來したともなく……」と語尾に力を入れて、勢のない笑聲を洩す。

ドクトルは少か興味索然とした面持て、蒼い顏に苦笑を浮べ「まあ、其樣なとは如何でも可いぢやありませんか。それぢや、も一つプロヂツトをやつて、其から寢ると云ふとにしませう。」と底に殘つてゐたビールを一息に呷つて、「兄さんは、其樣なに弱かつたかな。」と首を傾げる。

「まま可い、左に右愉快だ。大いに飲まう。」

三人は又一齊にコツプを擧げて、カチヤリと音をさしたが、其の響が何となく寂しく、閴とした四下が、妙に靜り返る。

四

今朝、紉は誰よりも先に目を覺した。板戸の節穴から覗くと、漸く幽白い曉の色が見え、蟲の音が疎に啼細つてゐる。横を向くと、妻はアングリ口を開いて其の癖呼吸遣弱々しく、肉の落ちた目蓋と鼻のあたりを脂に光せて、狹くて長い額が土氣色に有明の薄い光を浴びてゐる。昨夜敬三と淑夫とを二階へあげて寢してから、自分も臥床に就いたのであるが、其から又一時、女連だけ後に殘つて、夜明近くまでペチヤクチヤ長話をしてゐた事は、朧に覺えてゐる。妻の顏には、確かに其の疲勞の迹が見えて、思做か何處かに不安の色さへある。

自分はと云ふと、酒の醉も殘つてゐないらしく、頭の心はケッソリして、何だか物忘をしたやうな氣持だ。非常に酒を呻つたやうに思ふが、何のために呻つたのか判然してゐない。酷く興奮してゐたやうな形勢もあるが、如何云ふ動機で興奮したのか、其も薩張解らぬ。酒と云ふものを、昨夜初めて、思斷つて多量に飮んで見たが、自分にも面白いくらゐ行けた事だけは覺えてゐる。又恬も死んでゐた人間が、活復つたやうになるものなら、今まで可怕がつてゐたのは、些と愚に過ぎた沙汰だと云ふ感の起つたとも覺えてゐる。

けれど酒の興味も、自分に取つては眞の一刹那に過ぎぬ。眞實に酒に醉へる人間は、始終醉つた時の心持でゐるとしか見えぬ。敬三などは恐く其の部類で、酒を飮んでゐる時も、飮まぬ時も、一樣に自箇が活きて働いてゐる。傍で見て居ても、何か強い生存の力に觸れてゐるやうに思はれる。

糺は茫然こんな事を考へて、我と我が寂しさに厭はれるやうに、急に氣が細つて來た。

それて起出る勇氣もなく、一日缺勤した昨日の今日であるとも、氣に懸つてゐながら、何時か其まゝ枕に就いたが、矢張寢てもゐられぬので、少時すると、妻を呼起して、自分も潔く床離をしてしまふ。外へ出て見ると、朝朦靄は未だ深い。何時もの日課で、寢衣のまゝ物置の隣の鷄舍から鷄を出してやると、餌をやつて、其から落葉の掃除にかゝる。其が濟むと、今度は井戸側で冷水摩擦を行るので、其の時分にはもう、閑りした栗林の奥にも、チロ／＼日影が射して來る。

栗林の露を潜り脱けると、押開いた野良には、うづ堆い黃金色の稻田が、冷かな旭にキラ／＼してゐ

て、淡い雲の布置を見ても、森の色を見ても、秋の氣が天地に充ちてゐる。

ふと靜な栗林の奥から、咳拂の聲が聞える。振顧つて見ると、敬三がネルの單衣の寢衣を着て、楊枝を遣ひながら、ブラ〳〵やつて來る。

其の目蓋は未だ重さうだが、聲は爽然したもので、「今日は如何ですな、お天氣は……。」

「快い。非常に快い、今日は菌狩にでも出かけては如何かね。何なら銃獵も好い。」

敬三は胸にかゝつた粉を彈きながら、「いや、然もしてゐられません。今日はもう八日ですから、豫定よりか一日延びた勘定です。」

「そりや爾ぢやらうが、又と云つては、なか〳〵出にくい。」

「いや、然し今日はお暇にしませう。二番で立ちませう。また寛り伺ふ機會もあるでせうから。」

「それは又如何したものだ。今度は常時とは違つて、稀しく四人一緒に逢つたのぢやから……。」

「ですから、私も充分頂戴しまして……此上もう話もありませんから。」

「然かな、そりや田舍は滿らん。第一一向食物がないので……。」

「いや、其どころぢや有ません。非常に御迷惑かけて……。」

糺は其上止める手もなかつた。て本意なげに口を噤むと、旋て急いで家の方へ行出す。

「それではな、私は左に右一二時間休んで……其事を些と斷つて來るとするから……。」

家へ入ると、糺は細君に其事を告げて、倉皇外へ出て行く。

三四十分ばかりて歸つて來ると、もう皆な起揃つた處で、座敷に集つて朝茶を飲んでゐたが、更に糺の失望したのは、歸ると云ふのは敬三ばかりでなく、妹のちか子も、急に家が氣懸になつたと云ふので、一緒に立たうと言出した。と淑夫までが、歸りに日光へ立寄る豫定なのだから、是非一緒に汽車に乘らうと言出す。

一時間ばかり、其の捫着で囂々してゐたが、一度吹いた風は妙に人々の心をそはつかせて、到頭きん子母子に侍女の四人を遺して、左に右午後一時の汽車で、一同兄に別を告げる事となつた。

晝飯が濟むと、三人は糺夫婦ときん子とに送られて、ドヤ／＼と家を出た。

糺は何となく、敬三が一同を率ゐて、此を引揚げるかのやうに感じた。其理由は、無論自分にも明かには言へぬ。が、唯何となく然う感じた。否、敬三に、何處か然した力の具つてゐるのが、糺には妙に一種の不快を感ぜしめるので。糺は今、きん子母子と妻と、四人打連立つて、ステーションから田圃道へと出て來た、汽車の音は次第に遠いて、半哩も先の樺色の森から、蒼い煙が、ムク／＼と噴出されてゐた。

午後の日影は薄り曇つてゐる。二町ばかり、糺は默つて遲々と歩いてゐたが、昨夜酒の席上で、敬三の三男を養子にくれる話が持あがつてゐたやうだつたが、無論くれる意志はなかつたらしく、今日は其事は叺に出さず倉皇立つて了つたとを考へて、急に思出したやうに、妹の手から、今年二歳になる男の子を受取ると、さも危つかしい手樣で抱かゝへて見る。

「おゝ好いこと、伯父さんに抱こして……」と妹が横から愛すと、妻も後から顔を差寄せて、

「何て好い兒でせう。默つて抱こして……こんな子が一人あつたら、まア何様に樂みでせうね。」と妻はシミ〳〵言ふ。

私も熟々同感であつた。而して不圖、二十年かゝつて積んだ三百圓某の貯金のことを憶出した。同時に、其金が、或日あの栗の林で、寂しく目を眠る時の用意だと云ふ事をも思ひ浮べて、急に可恐しい暗い影に胸を封された。（をはり）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

戰果亦この名花あり

森林太郎氏新著

（出版界空前の美裝）

うた日記

こは著者が卅七八年役の間ひた土に青柳の技折り敷きし夜の月の下木がらしに波立天幕の焚火の、ほとりに鉛版して手帳の端にかいつけられし長詩、十七字詩、三十一字詩の趣をばこれを見て知り給へ

久保田米齋・寺崎廣業・芦原綠子 三氏畫

◎木版極彩色 ◎石版彩色刷 ◎寫眞版色刷 ◎木版色刷

挿畫四十餘枚
本文四九〇頁
實價壹圓八十錢
小包料八錢

東京市日本橋通

春陽堂發兌

振替壹六壹七

東京春陽堂新刊

文壇の一大奇書

矢野龍溪氏新著

鰭崎英明氏 口繪及表裝

小説 不必要

洋裝優雅
紙數二四四頁
實價金八十錢
郵税金八錢

著者曰く

なぜ「不必要」と云ふ、私の如き、まづい小説は殆んど無用の長物ではないかと考へる、因て不必要と云ふことを思ひ付た、それから「不必要」と云ふことで、一の小説を搆へやうと考へたのです、すつかり楽屋を白状して置きます

必要か、不必要か、敢て讀者の精讀を望む

本號に限り定價金參拾六錢（外に郵稅金二錢）

冊數	定價	郵稅	合計
一冊	金拾八錢	內國金一錢	金拾九錢
		外國金六錢	金廿四錢
六冊	金壹圓	內國金六錢	金壹圓六錢
		外國金卅六錢	金壹圓卅六錢
十二冊	金壹圓九拾五錢	內國金十二錢	金二圓七錢
		外國金七十二錢	金貳圓六拾七錢

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名并に社名を記し拂渡局所を東京駒込と指定せられたし
一弊社は振替貯金三十四番に加入いたし居り候此規則により御送金の方は登記料貳錢を必ず加えられべく候
一郵劵代用の場合は必ず壹割増のこと
一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然されは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治四十年九月廿八日印刷
明治四十年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一 七圓五十錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一 金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一 金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一 金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味六十五匁付
一 金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一 金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一 金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一 金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一 金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一 金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百八十匁付
一 金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目方正味二百卅匁付

一（定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢）
一（文字彫刻　一字　金拾錢）
　（大字彫刻　一字　金七拾錢）

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商 玉寶堂

（電話下谷特九六五 一二四四）